明治四十三年八月八日印刷納本（毎月一回廿五日印刷納本）明治三十七年十二月九日第三種郵便物認可



女子文壇

地方の婦人

第三増刊　第六年第十一號

口に言へないことは筆にお書きなさい

女子文壇第四増刊

今の婦人

報酬贈呈寄稿歡迎

今の婦人は今の婦人の書いた優れた文章を載せます、何んな文章を望むかと言ひますと、先づ諸孃の周圍をお書きなさい、告白をお書きなさい、經驗をお書きなさい、苦痛や不平をお訴へなさい、何處まで自由を欲するか、何處まで解放を欲するかお書きなさい、心の動搖をありのまゝにお書きなさい、空想をお書きない、欺かざる日記をお書きなさい、結婚の前後をお書きなさい、家庭の現在をお書きなさい、職業と生活の實際をお書きなさい、記者は何等の制肘を加へませんから、思ひくに善く書いて下さい、**女子文壇**獨得の現代婦人の代表的雜誌を編輯しようと思ひます、此外に創作として小品文、それを材料として、詩、和歌、俳句を募ります

投稿規則

▲文章一篇の長さは二十四字詰百行以上二百行以内とす▲文章には總振假名をつけること▲紙上の匿名は自由なれど原稿には必ず姓名を明かに記し置くこと▲創作は小品文二十行以内、詩は隨意、和歌俳句は各十首以内とす▲原稿及び封筒には必ず『今の婦人原稿』と記すこと。

報酬

▲一等金拾五圓（正金）一人

▲二等金七圓（同）二人

▲三等金五圓（物品）三人

▲四等金參圓（物品）五人

▲五等金壹圓（同）廿人

各種とも天賞金二圓。地賞金一圓。人賞金五十錢の價格に相當する物品を呈す

創作は小品文△詩△和歌△俳句

▲興味ある交換

『今の婦人』には特に記者の案出したる新方法に依り興味ある交換を紹介いたしませう、つまり例號の誌友くらぶを一層進歩させ、記者の監督の下に責任ある交換を實行して頂くのです、詳しい方法は、女子文壇九月號に發表いたしますから、熟覽の上誠實なる諸孃の加入を願ます

◉投稿締切 九月廿五日最終便 ◉發表 十一月十日の第四増刊號として

◉投稿募集 發行所 女子文壇社 東京市京橋 大鋸町 ◉

女子文壇第三増刊

地方の婦人

目次

◎地方婦人の自重を望む……文學士 下田次郎

◎女が中心になつて働く……農學博士 横井時敬

◎行ける處まで行き得ない……田山花袋

◎女性の自然の觀かた……小島烏水

◎天然の美と婦人の美……大下藤次郎

◎私の故郷……文學士 尾上柴舟

◎海豹島の婦人生活……岩野泡鳴

◎下京の女……兒玉花外

◎杉坂峠……文學士 澤村胡夷

◎雲雀鳴く野より……横瀬夜雨

◎煽風器（名流婦人談）

△富士登山は宜い經驗……目賀田逸子

△鳥の啼く廣尾の奥……仲小路八重子

△田舎では讀書より仕事……遠山稻子

△周防の德山……武田貢

△氣が利かぬ代り人情に厚い……中村若子

△幼い時は山へ、成長すれば海へ……岸すみ子

△信飛境上の深山旅行……辻村靖子

△暑い方に向ふ……中野仙子

△嫁して後忍耐強い京都婦人……松岡いと子

◎（小説）漁父の母……小栗籌子

◎（小説）賣り桑……水野仙子

◎海岸……河井醉茗

◎琵琶湖……しのぶ

◎雨（旅より友へ）……川路柳虹

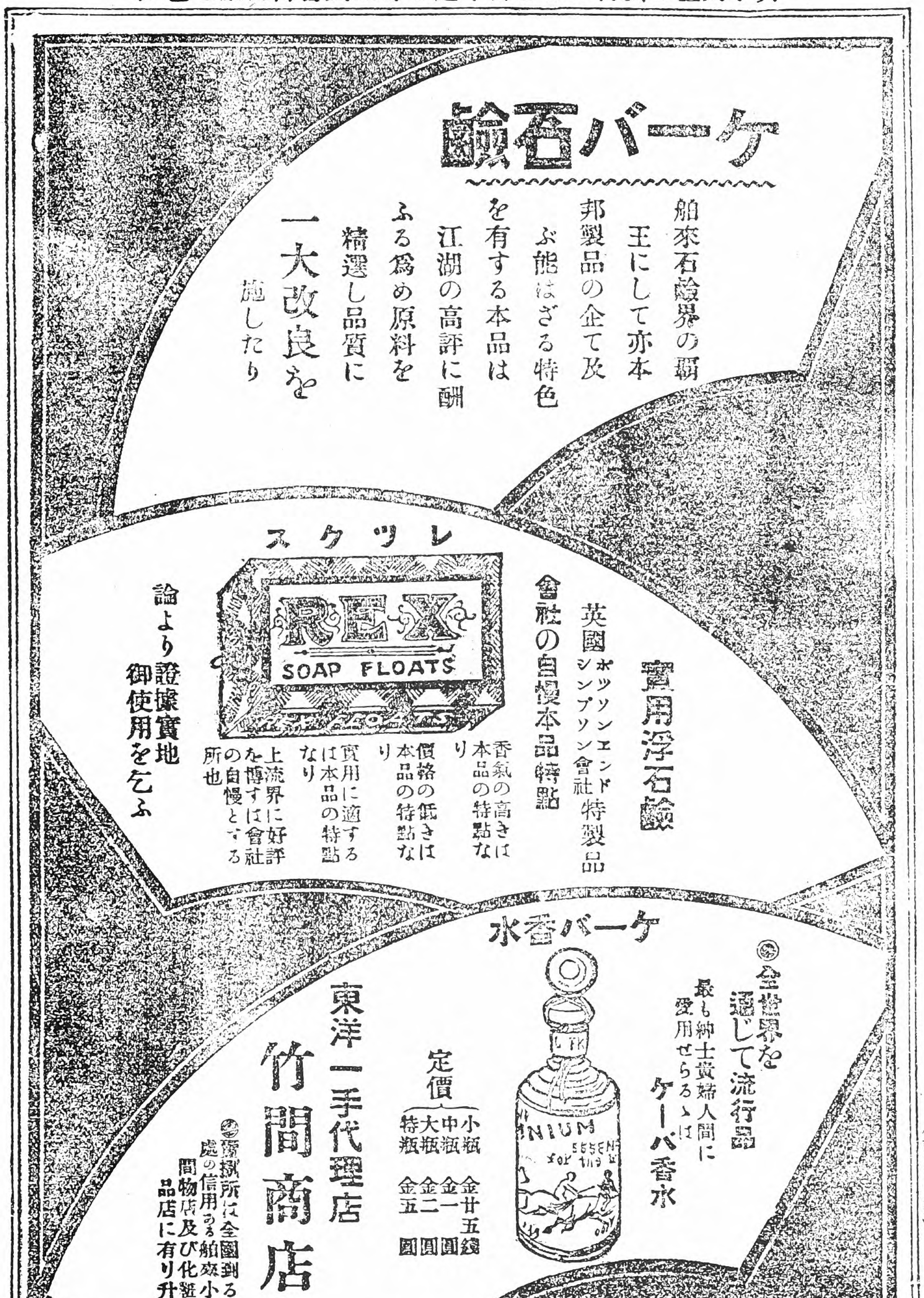
◎伊豆の海岸より……文學士 中村枯林

◎淡路の生活……一色醒川

◎驛鈴……香爐峰

◎色彩的に区分したる大阪市の婦人……みどり女
◎神戸……羅漢柏
◎東京近縣の女の特色……遊蝶花
◎都會より地方へ……長曾我部菊子
◎五年以前……山田くに子
◎富山と岡山の女……下枝子
◎農村の處女が最も活動する田植時
△伊豆 △伯耆 △近江
◎本州の南北兩端より
△薩摩の村落より △北見の漁村より
◎橇の旅日記……町田靜江
◎諸國通信
△肥前松浦より △××町より △備中より
△和泉の南より △伊豫の松山より △常陸下館より
△駿州小山より
◉山岳と海岸
△熱海……木村章子
△房州の渚……平塚白百合
△越後の海……前島優梨子
△秩父……三ヶ島葭子
△高尾……加藤筆子

◉活動と静寂と地方の現在
△石油の噴出……蒲原早蕨
△楊梅の里の樹上生活……吉田紫花
△善光寺……ゆり子
△越後甚句……木村みしき
△鳥取より……安木はる子
△丹波大江山の麓より……野の花
△伊勢女……露木雅子
△山形地方……霞子
△岐阜……葛の葉
△裏日本の一漁村……文子
△積んだ荷物は米と酒……眞野園葉
△浪花節語り……馥子
△山城富士の北の麓……木の花
◉都會に憧憬れつゝある若き女の叫び
△私の淋しい心を察して下さい……北斗星
△行きたい〱と思ふ一念……桃の花
△摺鉢の底のやうな土地より……上田けん子
△嚴格に過ぎたる家庭……白露子
△船中より身を投んとしたる其後の私……汀女
◎創作 △和歌 △小品文
◎雜報（編輯通信其他）
▲表紙……太田三郎
▲夕なぎ（口繪彩色石刷）……宮崎與平
▲地方婦人の活動 ▲清らかなる水と空氣
▲海岸 ▲溫泉と海水浴……寫眞版

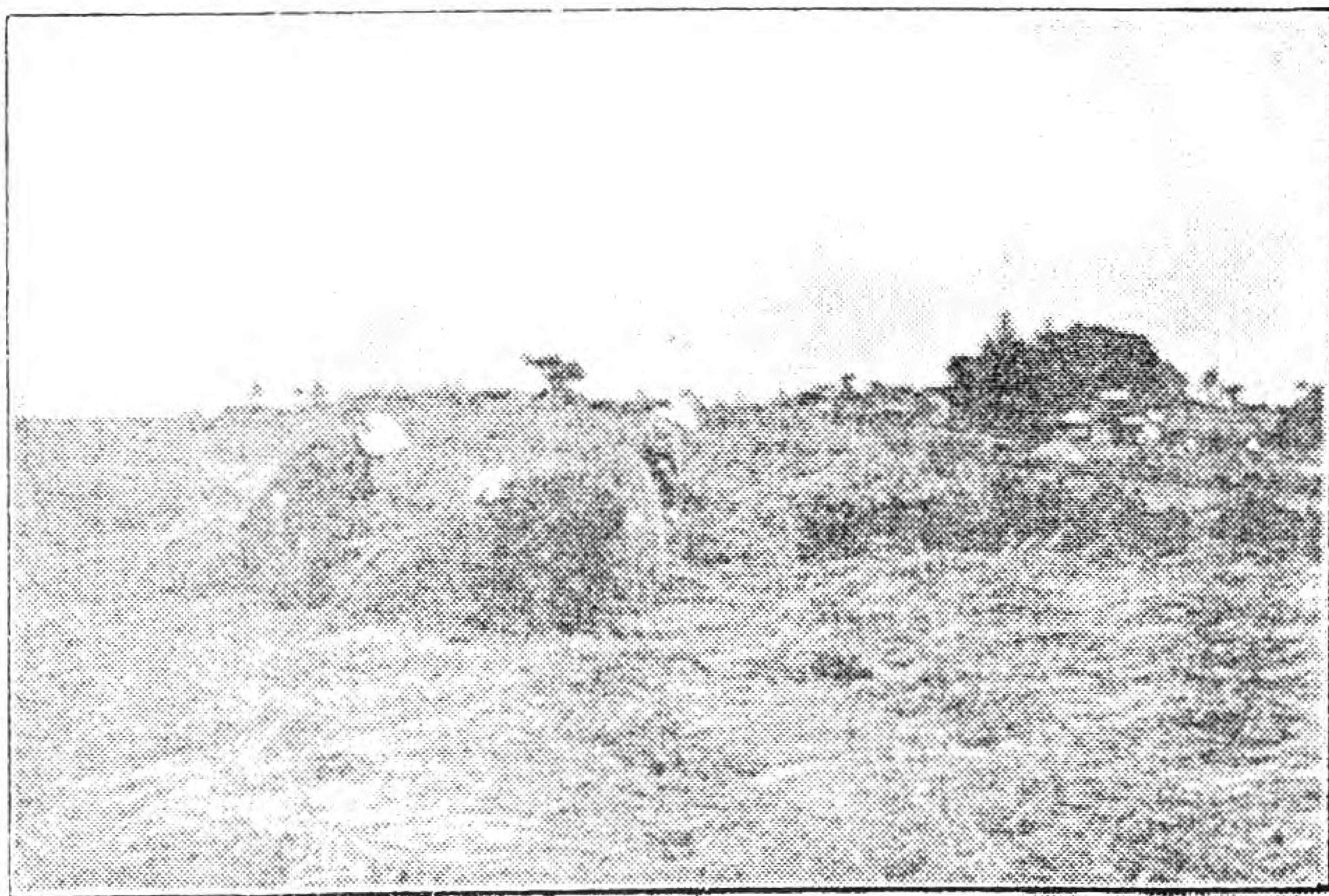

ケーバー石鹸
舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
實用浮石鹸
英國ボツソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
◎全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
◎賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

夕なぎ

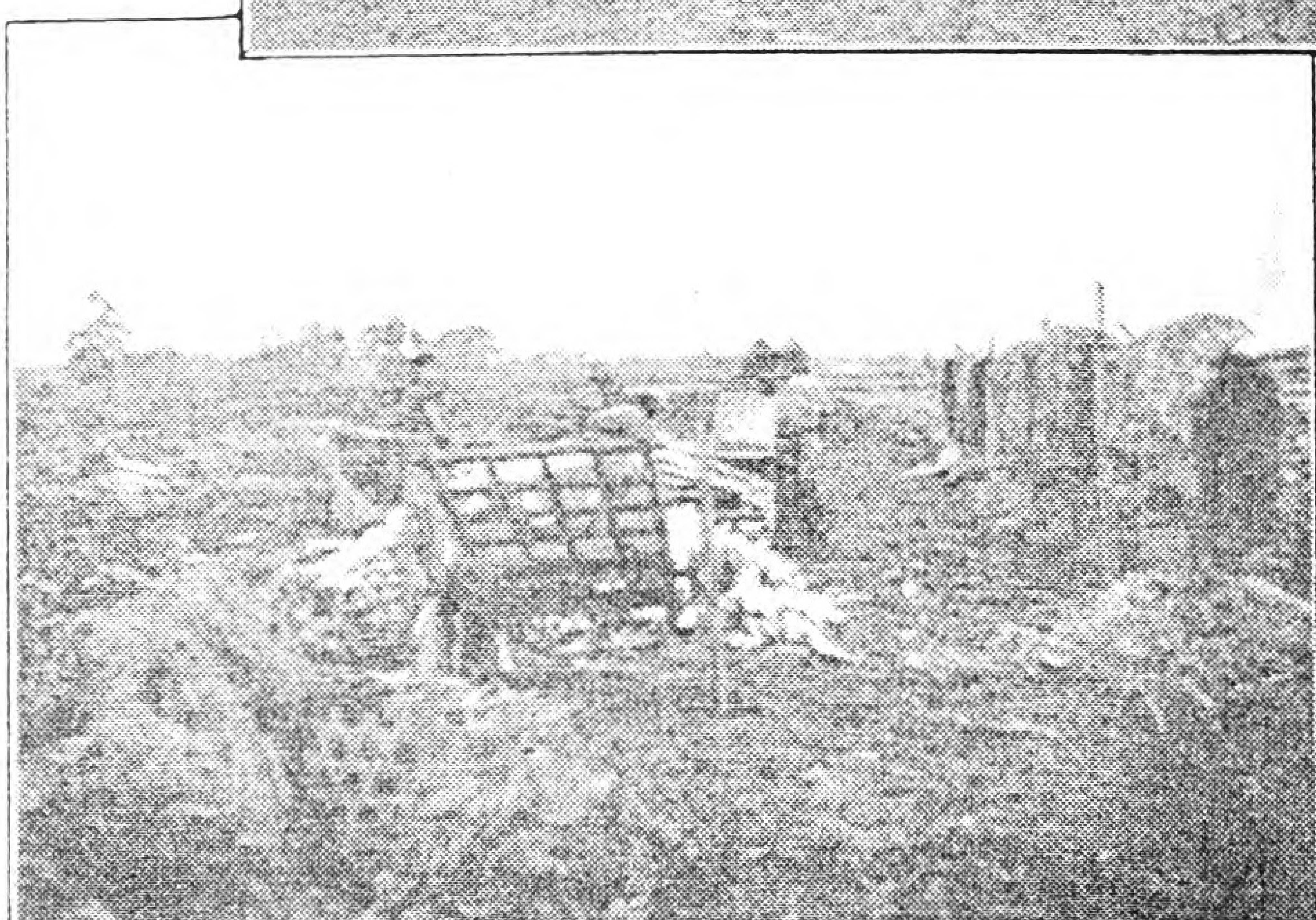


東京錦石堂石印

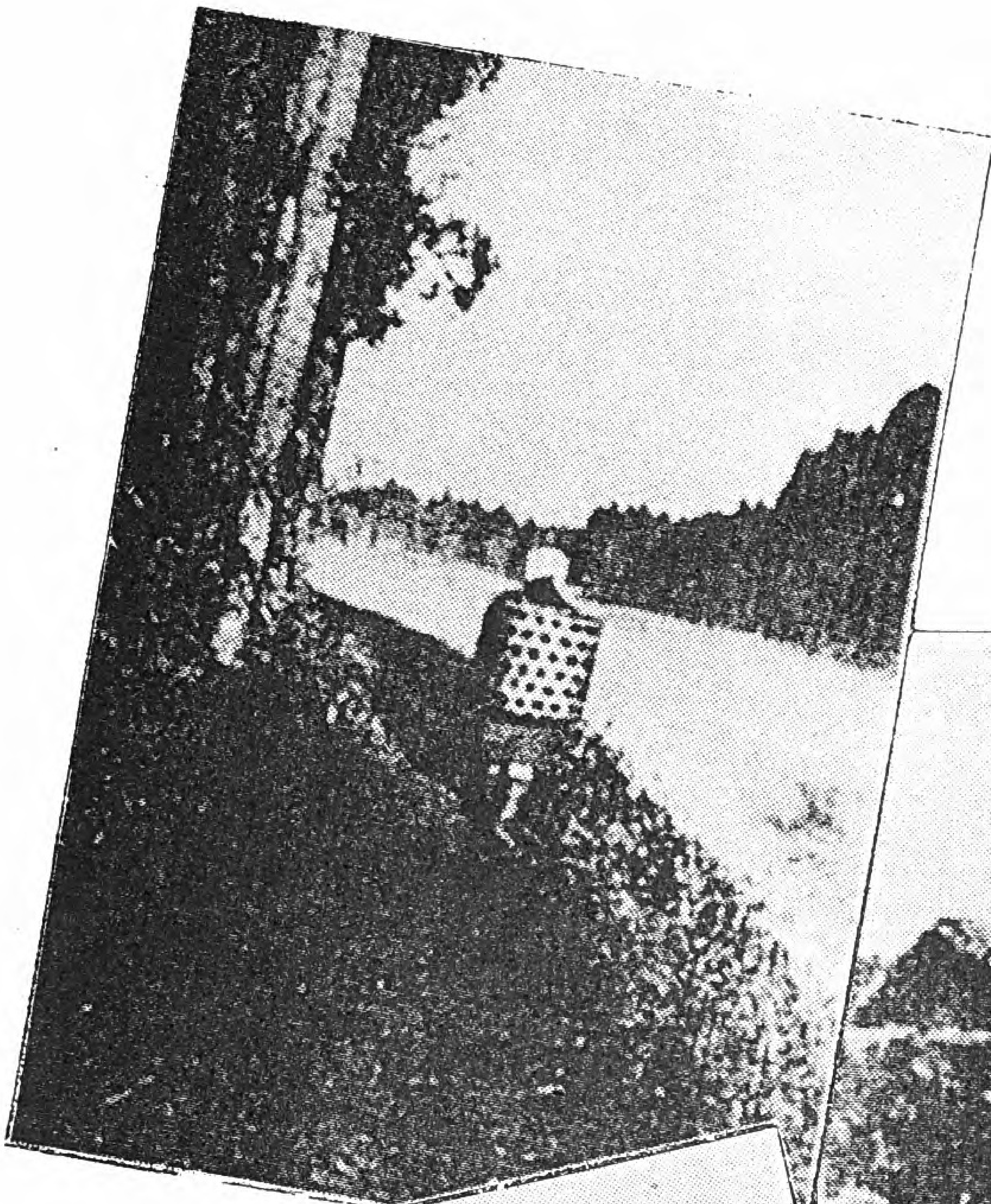
地方婦人の活動

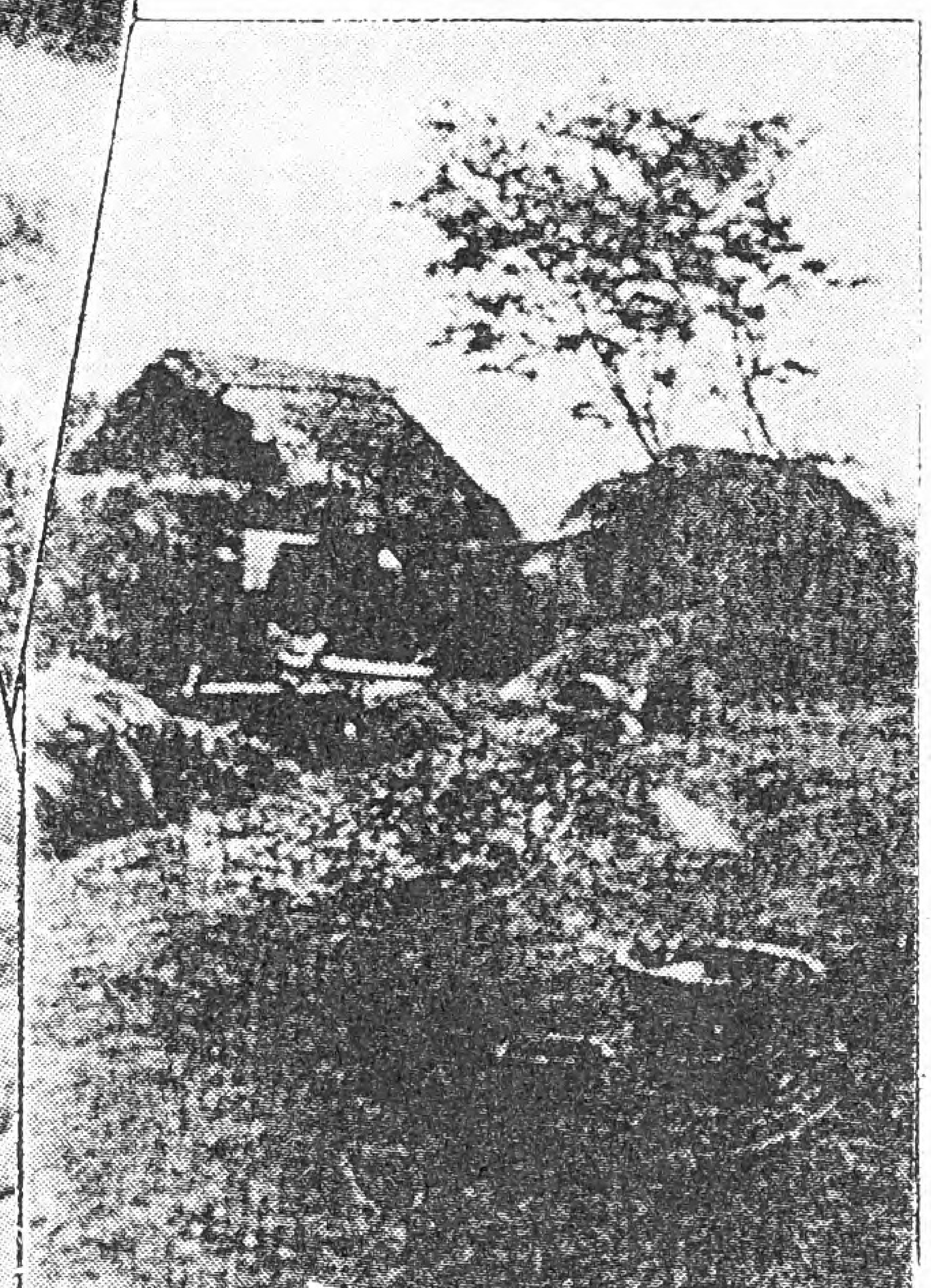


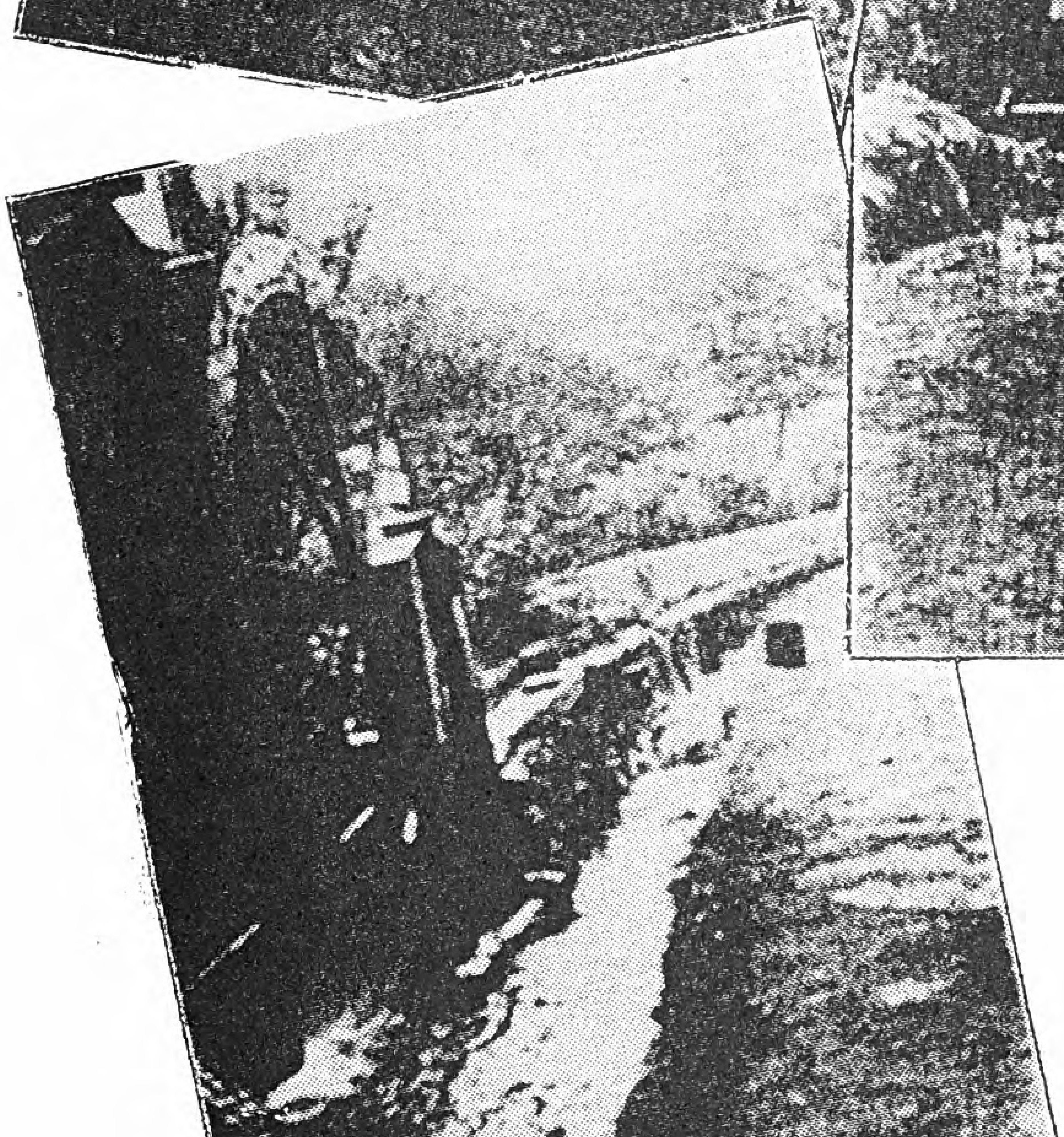




清らかなる水と空氣







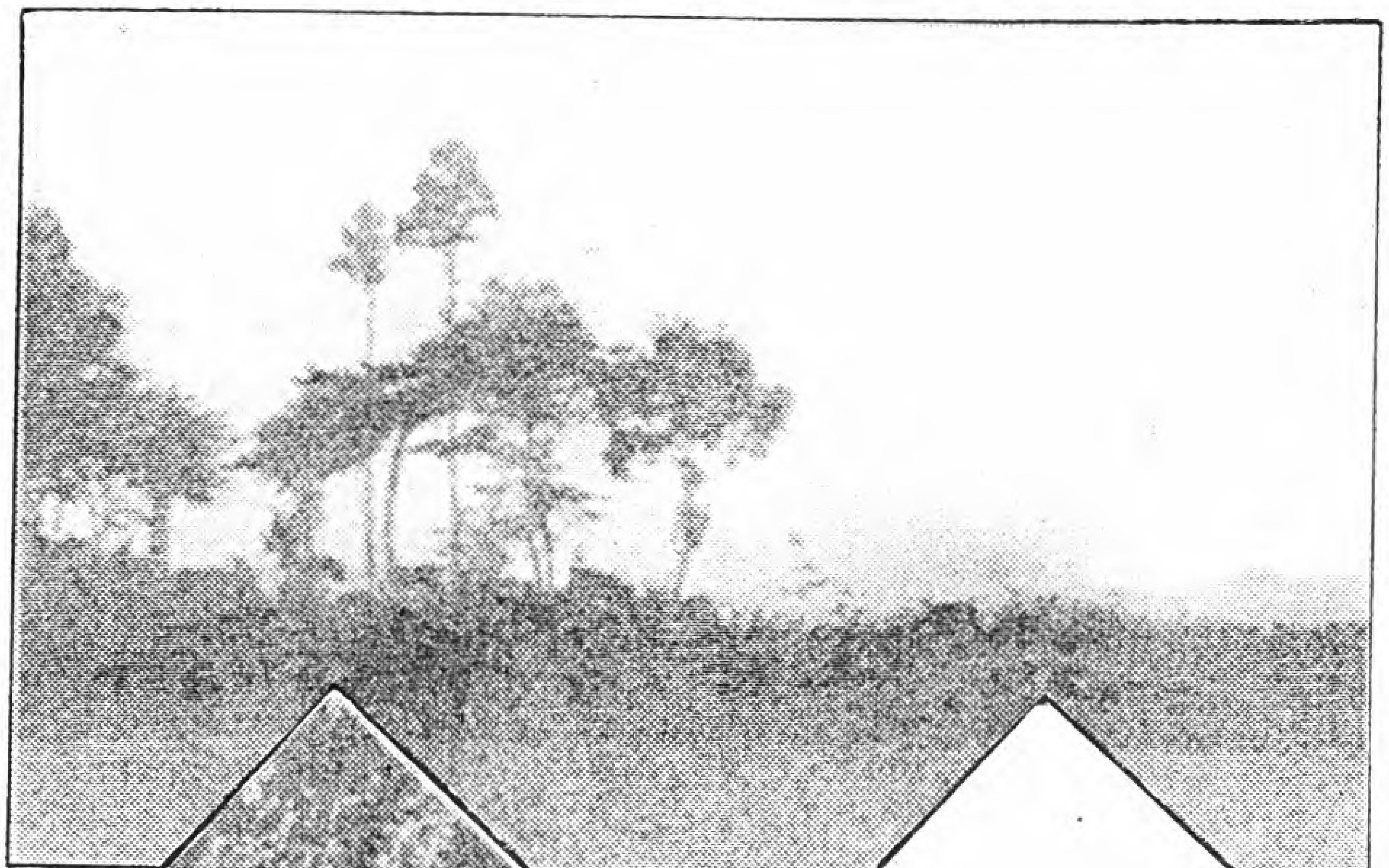
海岸



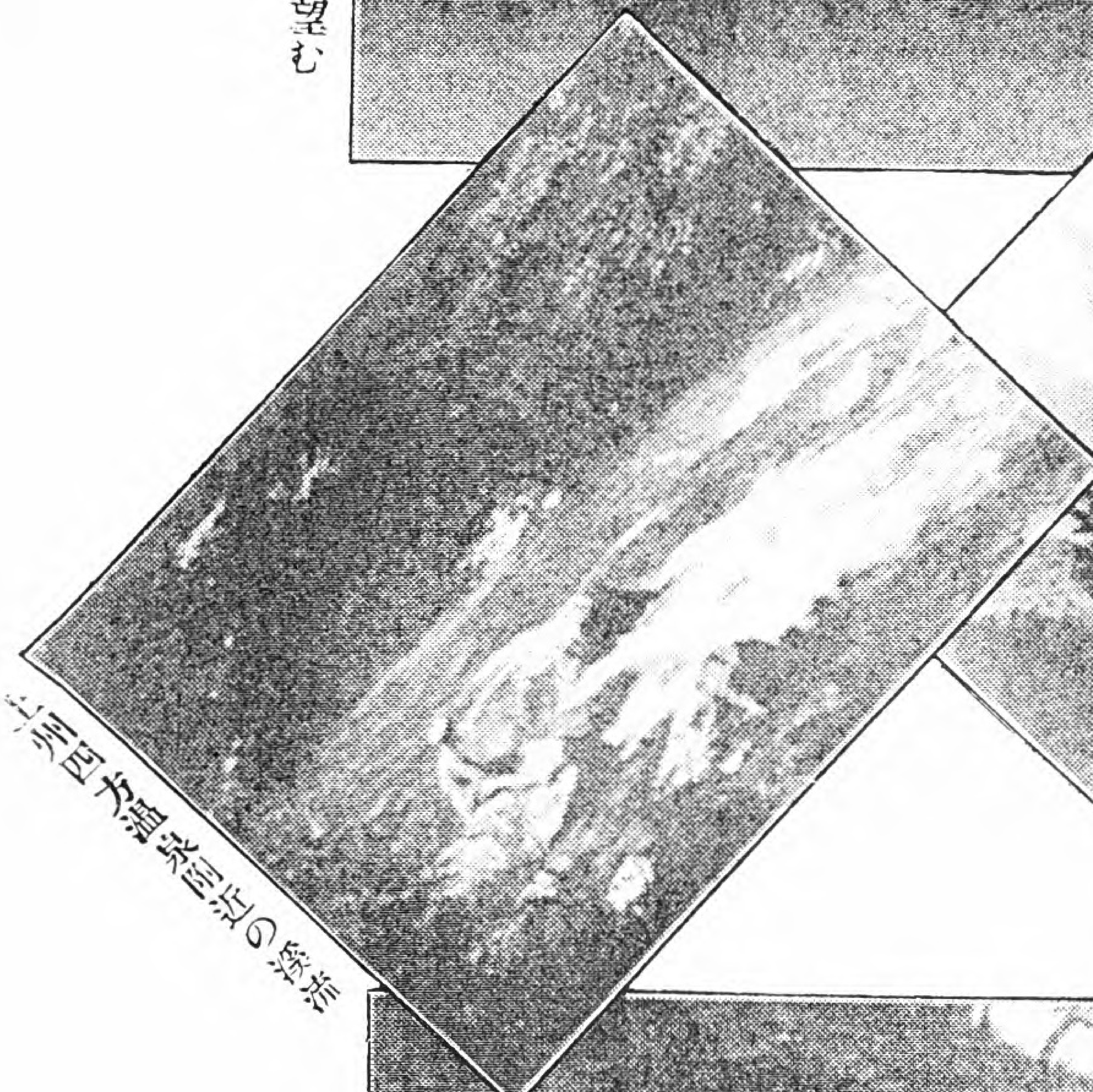




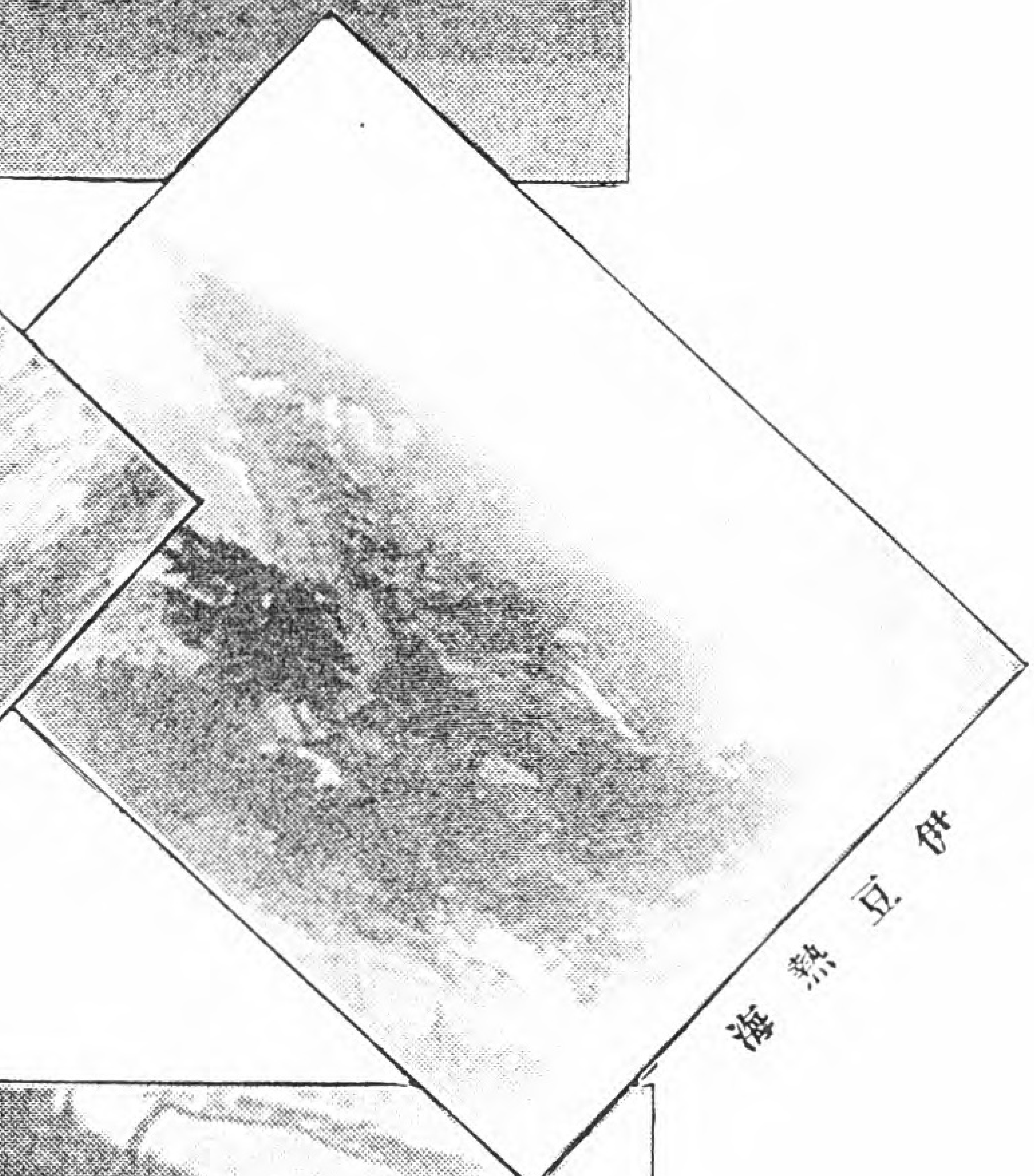
温泉と海水浴



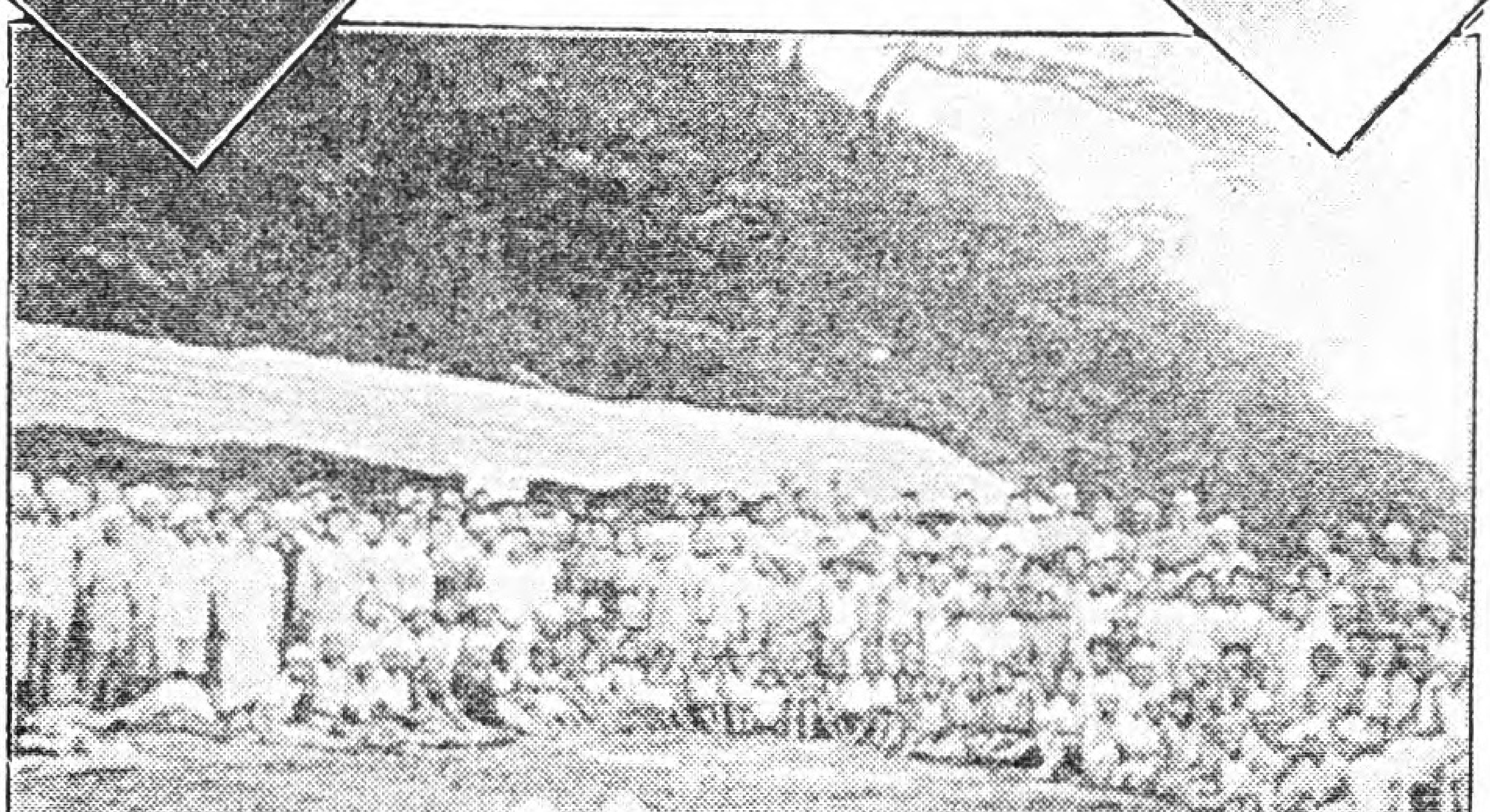
上州磯部温泉より淺間山を望む



上州四万温泉附近の溪流



伊豆熱海



肥前長崎の女子海水浴

腦神經衰弱症とヒステリー（婦人血の道）及生殖器障害等の疾病は如何に治療すべきか

陸軍々醫　久保光藏　識

近頃此の種の病人が非常に多く成り、從つて其の治療法を研究する專門家も多く、又新聞雑誌其の他に顯る腦病、神經衰弱症及ヒステリー症（婦人血の道）並に生殖器障害等の特効藥なりと稱する賣藥も亦續出せり玆に於て神經過敏なる本病者は心迷ひ迷ひて、醫者廻り、病院廻りを仕事となし、其の上他人や素人の好いと云ふ藥は申すに及ばず所有る療法を試み、長くの間何の効をも奏せざる治療を續行し、莫大の費用を投じて尚全治せざるのみか却て自身の將來を苦慮し、愈々煩悶に煩悶を重ね倍々病勢は加はり●頭痛●眩暈●耳鳴●不眠●視覺、嗅覺、味覺の障害●脊髓の鈍痛又は激痛●手足冷へ●動悸●息切れ●食慾減退●陰萎●遺精●早漏●交接不能●便秘等の容態が烈しく成り●見聞して快感なく●小事を苦慮し●求めて心配苦勞を成し●思考力と判斷力なく●自分の位地、職業、家庭、居宅等常に不滿●自分の不幸に陷る可き事のみ思想に浮び●讀書力なく●記憶力なく●驚き易く●悲み易く●感じ易く●倦み易く●不活潑にして不機嫌●常に悲觀と苦悶とにて終日病症を案じ自分の不幸不運を嘆き、甚だしきは不治の難症と早や合點をなし、哀むべき厭世家となり、遂に自殺を遂ぐる者も往々あり實に憎む可き厭ふ可き此の病魔！

諸子にして現に若し此の苦境に陷つて我が身の不運を嘆きつゝある不幸あらば送料二錢切手を添へ東京市東兩國小泉町救世堂藥院へ申込みあらば余が多年間直接患者に接し其の患ふ所を診斷し其の訴ふる所を採り實驗に實驗を重ねたる結果遂に成功したる余獨特の治療法を詳細に記述せる珍書卽ち▲腦神經病新論▲一冊を同病者に限り無代施本す、同病者は必ず病床に一本を供へ以て完全なる治療法を實行せられよ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

青年雜誌
秀才文壇

定價　一冊郵税共金十四錢五厘○三ヶ月分增刊共四冊金六十三錢○
半年分增刊二同共金一圓廿五錢○一年分增刊四同二圓卅五錢

（口繪）十二階下の家（木版色刷）富士登山（原色寫眞外數葉入）

背中合せ（創作）……岩野泡鳴

新らしく職に就かんとする青年の覺悟……法學博士 高田早苗

青年の自殺と肥厚性鼻炎……醫學士 高橋光三

目白臺の寄宿舍より（現代的女性の手紙公開）……白百合

青年觀二題……文學士 下田次郎

余の樂天的生活……文學士 木川又吉郎

拾卷第拾五號發行　每月一回一日發行

文學上の象徴……松原至文

生活の歌……前田夕暮

雨のあとさき……北原白秋

音樂の世界……高濱長江

モーパッサン作『ピエールとジャン』の梗慨……XYZ

文壇月旦……青頭巾外二名

君は住む……豐

諸家三十二句

怪談二題……世羅花香

發兌元　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　（振替口座一九五五）

大賣捌　東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○上田屋○良明堂○勉强堂外書店

好機逸す可らず……………特賣提供

大好評　紀念保存の價値あり　殘本僅少

女子文壇 紀念號 満五週年

一月一日發行 ● 例號二倍三百廿頁 ● 定價金三拾錢 **特賣提供 金拾五錢** 外に郵税二錢五厘

● 松の葉……………泉鏡花
● 敵地……………中村星湖
● 市街を散歩する人の心持……………木下杢太郎
● 脚本 落潮……………河井醉茗

● 額繪附錄 温室（石川寅治筆）（石版極彩色）妙齡の一美人、温室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艷と色彩の鮮美とは一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾。

● 光澤紙刷 口繪 ◎名畫雪みち（原色版）外◎山階宮、東伏見宮兩妃殿下◎鷹司公爵松平伯爵兩夫人◎德川家達公三令孃◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男家庭◎金子子爵令孃◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の室外和樂◎盛裝の六孃◎誌友面影◎鳥海山外二景の十四頁（寫眞）

● 釣……………森鷗外
● 演劇の種類……………坪内逍遙
● 女性の文藝……………片上天弦
● T氏とK氏……………眞山青果
● 月のたまもの……………蒲原有明
● 響動……………吉江孤鴈
● 三味線林……………小島烏水
● 赤色……………兒玉花外
● 金ほうけ……………與謝野晶子
● 落葉林……………若山牧水
● 憂愁の庭……………三木露風
● 薄暮の瞳……………川路柳虹
● 黄落葉……………前田夕暮
● 女學生と小説……………柳川春葉
● 御題と御歌所……………松原至文
● 弱者……………溝口白羊
● 歐米の若き婦人……………寺木定芳
● 婦人の寂清生活……………木下尚江

● 文士と家庭……………佐野天聲
……………國木田治子
● 花束の用ゐ方……………水野葉舟
● 男性の爲に與へられたる刺戟……………五人女
● 露西亜婦人の過激なる活動……………エリミヤ、バルト、バザン
● 名流婦人の日記 ○跡見花蹊○山脇房子○加藤照麿夫人○石川博士夫人○嘉悦孝子○羽仁もと子○佐々木雪子○長谷川千代子○北川美那子○加納國子○谷内せい子○木下辰子○吉田賢子○たけ子○千鳥○棚橋絢子
● 形式的の艶書……………マツクスオレール
● 表情體操……………白井規矩郎
● 女性と色彩の觀念……………澤村胡夷
● お琴の先生と其流派……………きく
● 英文……………星野久成
投稿傑作 百四十頁 満載……………

女子文壇社發行　東京京橋大鋸町　振替口座東京七壹九貳　賣捌 全國雜誌書店　若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評殘部僅少

女子文壇 二月十五日 第一增刊

若き婦人

二十才の聲……
時代に覺まされたる一人……
ひとりごと……
樂に受けたる文部省檢定試驗……
富士裾野に於ける外國人一家の夏季生活……
成るは嫌なり想ふは成らず……
若き夫と共に味ふ生活の苦痛……
子爵家に乳母を世話した事……
級友の行衛……

晴着の見立……
破りし栅……
迷ひすぎて婚期を逸したる政治家のお孃さん……
兄を氣遣ふ……
夢……
秘密の夏……
憐れなる女中の身上話……
繫がれた女……

夕の星の冷たき笑ひ……
女學生と新聞紙……
夜の淺草公園……
デヤレスト……
お才さん……
暗中の文字……
若き憂ひ……
男の世……
快樂……

家事實習會……
伊豆の溫泉……
桃太郎の感化……
土佐の女學校の現在……
鬱黃のはちまき……
わが決心を姉樣へ……
心あかせし友の許に……
卒業後の悔……
綠の沈默……

手枕……
結婚後に發揮すべき女性の權威……
戀を捨てゝ運命に服從せんとする心の渦捲……
若い女……
女學生氣質……
肺病に罹りし實驗談……
獨身の私が媒酌したる記……
新築……
靜かなる霜月のひとゝき……

春の家……
春曙抄……
隣の人……
繼母……
汽車の音……
歸途……
若き婦人の後に……

紙數二百卅頁
美麗口繪數葉
定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 (振替口座東京第壹七貳九番) 賣捌全國雜誌書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

好評　女子文壇第二增刊　製本發賣

都會の婦人

表紙口繪插畫　竹久夢二氏筆

▶五月十五日發行◀

定價金貳拾錢　郵税壹錢五厘

女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名

▲日比谷▲上野▲不忍▲神田▲神樂坂▲芝公園▲西片町▲根津▲洲崎▲谷中▲銀座▲魚河岸▲深川其他

都會の渦に漂ふ若き女の眞情……婦人執筆

▲濁つた室に輝く電燈▲入京記▲鬪ひ疲れて▲熱涙冷涙▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したのでせう▲心の活動寫眞

都會の實際的生活

▲生活の階級▲卒業式の前▲バザーの當日▲某子爵邸に遊ぶ▲お嬢樣のお供

東京の地と東京の女……諸大家談

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士

▲詩に表はれたる都會……河井醉茗

▲婦人席にて……さわらび女

▲東海道線……一色醒川

▲西の郊外より……水野千枝子

▲南の郊外より……荒川澄子

▲上野より(對話)……うす雪

▲湯屋の三助に不快を感ず▲開放されたのか落伍したのか▲欺かれたる工女の懺悔▲東京、大阪、京都

創作

小說。散文。詩。和歌。俳句。

都會を歩める女の印象

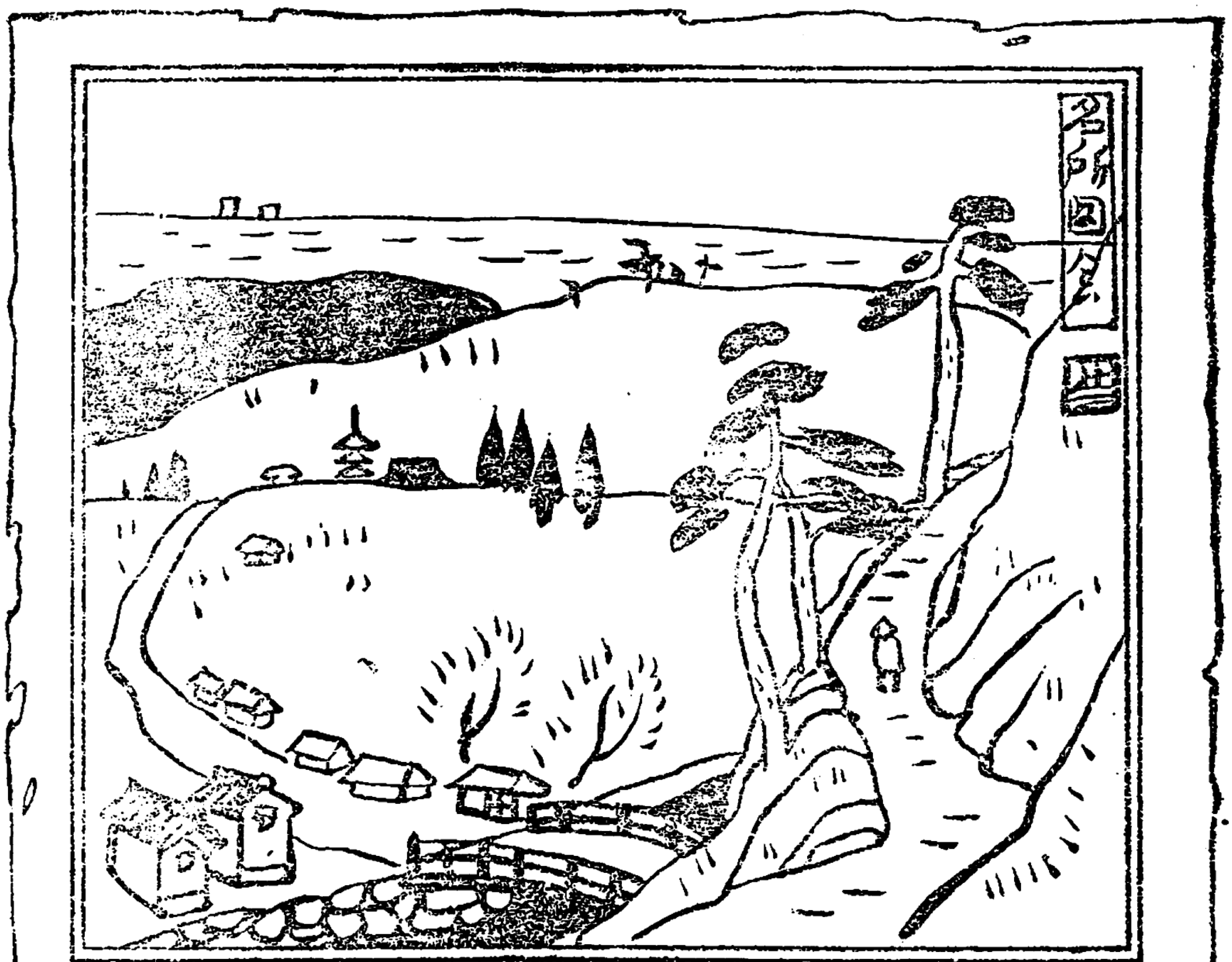
▲植物園で逢つた女(北原白秋)▲僅に殘れる印象(水野葉舟)▲街の夕月(森川葵村)▲三人の女(吉井勇)▲油繪に入る女(木下杢太郎)

日比谷大神宮結婚式の記事……

▶東京市京橋大鋸町　女子文壇社發行　(振替口座東京壹七貳九)　最寄雜誌書店品切ならば發行所へ申込を乞ふ◀

地方の婦人

女子文壇
第三増刊





地方婦人の自重を望む

女子高等師範學校教授　下田次郎

都會は物を消費する所、地方は其消費に當てるべき物を生産する所であるから、從つて婦人にも此方面に於て、都會と地方との相違を見る事が出來る。

私は此間信州の方を旅行した。其時彼の地の上諏訪の高等女學校を參觀して非常に感ずる所があつた。と言ふのは其學校の生徒が體操の時間に皆裸足になつて砂をふみ汗を流して體操して居つた。私は此時晴天の日に於てすら、ゴム輪の俥等で通學する人の有る都會の婦人と比べて見て、精神的にも大なる相違を思つた。

丁度五月の田植ゑ時で有つたので、其目を轉じて周圍を見れば、青々と晴れ渡つた野や、山や、田に、男子に交つて婦人の姿の見え無い所はない、目の前に裸足で體操して居る女生徒と、之等野山に働いて居る婦人との間に、動かすべからざる一貫した精神を見出す事が出來たのであつた。「妻の贅澤を滿たす爲に夫は生れ來りしや」とまで、極端な言を發せしめた西洋の一思想は今日東京の大勢に徐々として入り來りつゝあるゴム輪の俥で通學する婦人等の精神は、頓ておめかし

さへすれば、我が能事終れりとの樣に、家事や育兒は人手に與けて、夫をせびり親にねだつて、三越や白木屋に馬車を馳せたり、芝居や寄席に夢中に成つて、ひそかに汗を流す程の心使ひは、流行に後れまいとする空なる努力と、一歩でも其先驅をして、人を驚かせやうとする、はかない苦心とにうき身をやつして居る婦人の精神に通うて居る。勿論私は一人なしどちからもこちからも極端に別れて居ると言ふのではないが其大勢と言ふものを比べたら、此兩極端に向つて行くやうに思ふ。

美しく飾るのを惡い事だと言ふのではない、文學的方面から見ても、亦他の方面から見ても、美しいものを見て嫌やだと言ふ感を起す人は無からうと思ふ。そして歷史的方面から言つても、女は矢張り美しかるべきもの、身だしなみを忘れてはならないものであるから、此點から言つたら、都會の婦人はたしかに地方の婦人に優つて居る、又其交際ぶりなども、捌が好くてちやき〱と氣がきいて居るから、唯接して居るには誠に快よいと言ふたやすく眞似の出來ない特點を持つては居るが、其れも程度問題で身だしなみが通りこして、華奢に成つて夫の心を喜ばせる反對に、肩にかゝつて苦しませる樣であつたり、氣が利き過ぎて輕薄に流れたりしては、其折角の特點をも我れから破壞して墮落してゆく樣なものである。かうなつて來ると、夫としては着實にして身體も強健に、丈夫な子を生んで確かりと家を納めてゆく精神の養はれてある地方の婦人を選ぶであらう。

現今の東京に住んで居る人のうちで純なる東京人は稀で有らう、東京は住むべき所と言ふより、人物の活躍べき舞臺である。東京には住んで居るのでは無くて活躍つて居るのである。そして其活動に消費すべき材料を供給して來る地方と言ふ根はやがて、第二の活動に當るべき第二の人物を造りつゝあらねばならぬ。で地方の婦人は其點に思ひ至つて、徒らに華美に流れて居る都會の婦人を羨んだり、其生活に憧憬たりするよりも、國家百年の後の根を肥すべき強健なる精神を養ふ事に勤められる樣に、都會の人も都會の人で自分もやはりさう言ふ地方の婦人が生んでくれたのであると言ふ事と、同性の婦人の中にも、此樣に苦勞して働いて居る地方の婦人ある事を忘れない樣に、始終動いてばかり居ないで、其精神をも少し確かりと持つべきであらうと思ふ。

女が中心になつて働く

農學博士　横井時敬

地方の農業と地方の婦人と言ふものは深い關係を持つて居る、何故となれば地方の農業は、殆んど女が中心に成つて働いて居る、勿論女の手に出來ない大業などで有つて見れば、何と思つたつて出來やうは無いが種蒔きとか、田植ゑとか云ふ事は概して男より女の方が綿密である爲か優れて居るやうであるし、よし又優れて居ないまでも男の人と同樣に出來る。男の人の手を借りなくても結構運んで行く事であるから同じ仕事をして賃錢の安い女の方が經濟の點から言つても都合が宜いから、自然女を多く用ふ樣になつたのである。で是等下流社會の婦人の仕事と言へば、此農業家の雇はれ人になつて、種まき、草とり、田植ゑと時に從ひ順を追うて汗を流して働いて居る所、是等が都の方では、煉瓦積みをしたり、荷車の後押しをしたりする婦人と同一種類に屬するものである。

是れが上流——と言つて富豪の家の婦人となつても仕事こそかはれ、其農業に關係のある事は、下流の婦人と違はない。都會の女は上流となれば、決してこんな事は夢にもないのであるが、地方の女は如何に家に財産が有つても、其家の婦人は機を織る、蠶を飼ふ、絲をとる、身體を用ふと言ふ點に於ては下流社會の婦人と大した相違は無い位に、春夏秋冬それ相應にする仕事をひまなく持つて居る。此所は都の上流婦人と全く相異つた所であらう。然し經濟の點から言ふと、地方の婦人は都會の婦人に遠く及ばない、下町あたりの勝手元を切り廻して居る婦人などは、表向きは至つてはでに、其實きはどい所で、巧みに經濟を調へてゆくが、地方の婦人は其點に於ては頗る寬で、氣が付かな

い。用も無いのに爐の下には日がな一日火を焚いて有つて見たり、大きな藥罐等へ入用もしない湯をカラカラ煮えくり返させて置いて見たり、機なんか止めても此火の始末丈もすれば好からうにと思つても、本人はそれを普通の事として、平氣でやつて居る。

地方のうちでも、畿内等は經濟にかけては節約い所と名に立つて居るが、其所ですら竈の五つ六つも並べて置いて、あちこちの竈で火を焚いて居る、實に都から行つて見る者の目には、不經濟きはまる事をして居るが、地方は生活が寛かであるから、それがさしたるさはりにも成らないと見えて、竈が多く有れば有る程其家の誇りとして居る樣である。

それから地方の婦人に付いて、いつも心をわづらはす事は、彼の此頃流行する工場稼ぎをさせる事である。

御存知の如く工場に使はれて居る職工（女も加ふ）などは、人間として遇はれて居ると言ふよりは、寧ろ機械として遇はれて居るので、誠に人情紙の如き中に一定の仕事をして日を送つて居る。生活の爲と言へば或はさうであるかも知れないが、女は家庭に入つて家を治むべきものであるのに、彼のあはれむべき女工等殊に妙齡な娘たちが、習ふべき裁縫も料理法もわきまへず、朝から晩まで、機械的に働いて、而も敎育ない者等であるから、少し位は性質の溫和な方の娘でも、大勢には動かされやすく終に引張られて人ずれのした賤しい心となりはて、覺えるものは他の惡口と、聞くに堪へない樣な俗惡の唄位なものであらう、而して之を國家百年の後に思ひ至れば實に寒心に堪へないものである。それで私はどうかして地方の上流婦人が、も少し經濟思想を養ふと言ふ事と、此下流社會の女工等にせめては、時間を定めて普通敎育と裁縫位は敎へる樣な、さう言ふ制度に改良せられん事を深く望むものである。

要するに、地方の婦人は能く働く、それが皆、農業なり工業なりに深い關係を持つてゐるから、指導を忽にしてはなるまいと思ふ。

行く處まで行き得ない

田山花袋

地方の婦人と言つて別に話す樣な事が無くて困る、旅行はしてもさう言ふ時に接するのは、旅館の女中等ばかりだから、純粹な地方の婦人として、話をする譯にもゆかないし……地方と都會の話でもして居るうちには少しは書く樣な事が出て來るかもしれない。

全體地方の生活は、共同的な生活であるから、其生活を中心として皆動いて居る、相互に狹い所はゆづり合ひ、廣い所は貸したり借りたりして持ちあひ、よけあひ、助け合ひ、引き合つて暮してゆくので、婦人などは殊に控え目に〳〵と、人の氣を兼ねて、行く所まで行き得ないかたちがある。これが都會であつて見ると、生活は各孤立的な生活であつて、お隣り同志名を知らないと言ふ樣な離れ〳〵の、其間に烈しい生存競爭を續けて居るのであるから、自然婦人なども、ぐづぐづしては居られない。僅かなものに感じても、其感じを其時其場で言つて了ふ、胸に藏めてしみ〴〵と味つて居ると言ふ樣な、さう言ふ事はして居られないのである。で田舍の人が茶碗一個、衣服一枚でも何年になるとか、何十年たつたものだとか言つて、過去を追ひ、趣味を愛でて、其間に自分等のライフを續けてゆくのにひきかへて、都會の人等は、茶碗なり、衣服なり、未だ傷付きも、古くなりもしないけれど、もう何と無く飽きたからと言つて、新らしい物を買つて來る古いものを捨てては用捨なく新らしいもの〳〵と追窮して止まない、忙しいライフを續けて行く、から言ふ所を地方から突然出て來た人が見て居たなら、自分等のクラシックな、しんみりした生活に比べて、或は淺薄だ輕卒だと思ふかも知れないが、私は其所に生きた

る人生の深い味ひが有ると思ふ。と言つて、然し今の都會の婦人の態度が新らしい意味から言つて、上々なものと思つて居るのではない。今の都會の婦人の態度は、一方から言つて、全く無意義に動いてゆく態度であるから、そこに飽き足らぬ所が多い事は勿論の事である。然し此無意義に新らしいものを追つて居る婦人等が、或る時機に達して、自覺した上で、新らしくと進んで行つたなら、今の樣に徒らにおてんばばかりでなく、優しいうるほひが加はつて、眞實な意味から言ふ新らしい婦人が生れて來ようと思ふ。そして其れがやがては地方の婦人に廣まつて行つて、地方の婦人等もおひ／＼は後れ乍らも、彼等自ら人生の意義を覺つて、都會の婦人の如くなつてゆくだらうと思ふ。

女性と自然の觀かた

小島烏水

日本の女子に對する一大缺點として、世間から擧げられた諸點の中で、最も痛酷で、最も首肯されるのは「女子に人格が無い」といふ一語である、一部の所謂近代的女性、或は解放せられたる女性の中には、餘程進歩した（それと同時に又突飛した）人もゐるらしいが全國の日本婦人から概論して、今日日本の女子に、人格が無いと言はれても、仕方が無いかと思ふ。それに女子開眼の方便（假にさういふ語を用ゆる）として、イプセン張の飜譯的作物を注入しようとする、ドラマチストも見えるやうだが、それ等の問題は暫く本論以外として、私は女性に開眼の一道として、自然に對する觀かたを、啓發したらば、どうかと思ふ。

人間を改造するのは、要するに智識であつて、一國文野の標準も、智識が土臺になつてゐる、日本の文明

といふ戸は、醫學といふ節穴から、注ぐ光線から、開かれたことは、言ふまでもなく、近頃支那の大官連中が、日本に心底から感心し初めたのも、醫學からだといふ側面觀もある程だが、醫學は直接に、人間の肉體に及ぼされる必須の學問ではあるが、觀るもの、聽くもの、感ずるものの中で、我々が最も多く包圍されてゐるのは、自然の物體、成語を借りて言へば、森羅萬象である、森羅萬象に對する眼を開ける、物を正しく視る、考へるといふ工夫をしたり、筋道をつける問題が、私の言ふ「自然に對する觀かた」である、これが發達するのは、卽ち自意識が發達して來るので、近頃の語で言へば、内的生活を豐富にすることが出來る、そこに立派な人格があるのである。

私は自然物體の中でも、山嶽が最も好きである、が、これは今から十年前、ウオルタア、ウエストンといふ牧師(英國人)の感化を受けたことが、大である、今でも憶ひ出すのは、或夕、橫濱の山手に同氏の宅を訪ねると、氏の夫人が出て來られて、挨拶が濟んで導かれて廊緣を廻らうとするとき、夫人は空の方を振向いて私の名を呼ばれた、あれを御覽なさいと言ふから、仰ぐと天空に美くしい夕燒がある――一體歐米人は日本人が日の出を愛づるとは反對に、日沒を賞する癖がある、現に米國では「日沒」と題する雜誌さへあるほどだ――夫人は日沒に就いて、美くしいではありませんか、と言はれて、それから二人の間に、雲の色彩に就いて、二三の小談話が交換せられた、私はそのとき外國の婦人が、自然に對して、微細な觀察眼を有してゐられるのに感心した。

米國の加那陀山嶽會では、婦人が名譽圖書館員の役を引き受けて、會に所藏の圖書(主として自然科學に關するもの)を整理して、時にはチンダルや、ステツフエンたちの登山記事に對する、描寫上の批評などを會の雜誌に寄書してゐるのを讀むと、この好みは頓て一方に於て、文藝美術音樂に、鋭敏な耳目を有することになる所以であると思はれる。

試に日本婦人の作品を見ると、繪畫にしろ、小說脚

本にしろ、みんな、人眞似、適切に言へば男の眞似をしてゐる、明治の作家でも、やゝ古いところは西鶴を眞似たり、鏡花を眞似たり、新らしいところで、漱石花袋に擬するの類を、算へたらば、いくらもある、此頃の展覽會では、春草氏や大觀氏を眞似た、婦人の繪を見たが、自然から學ばないで、他人から模倣をしてゐる間は、藝術家の假面を被つても、特立した人格などは、どこに見出されよう、否、それより現代の婦人の作品に出てゐる、自然といふものは、繪畫にしろ、文藝にしろ、稀に模倣から來ない特自の製作にしろ、實にプーアなもので、自然の色彩と音樂とは、殆んどどこにも、見當らないほどである、これぢやあ、觀察も何もあつたものぢやあない。

よくいふことだが、素より人間を離れて、自然特自に儼存した性格といふものは、ある筈が無いから、自然の客觀と、人間の主觀とが、一致したところに、自然觀が成り立ち、同時に人格も成り立つのである、女性の觀た自然といふことは、女性自身を敎へると共に男性をも敎ゆるものである、前の例に就いて言へば、雜誌「ホトヽギス」などに見える女性の、或短篇小說の中では、男性の氣がつかないところへ、觸れたかと思ふ細微の神經を見たことがあつた、又今月(七月)刊行された大下藤次郎氏の水彩畫專門雜誌『みづゑ』記念號に、三條千代子夫人の、山百合の繪を見たが、上流社會の婦人が、一莖の草花に對しても、あゝいふ自然からの、直接習作をするやうになつたかと思ふと、心強くも感じられる。

自然の色彩が豐富で、動植物に種の變化が多く、天象は美くしく、岩石地質に材料の饒多な、日本では、細心緻密にして、優美なる女性に、研究さるべき萬象の題目は、甚だ多い、又女性の觀かたを以て、見た自然によつて、男性の自然の觀かたにも、影響を及ぼしたことは、紫式部や清少納言の作が、既に先例を作つてゐる、之を言ふのは、性の區別に境界線を引いて、歌合せをやらして見たいといふやうな、卽興趣味から來たのではなく、之あるがために、文藝美術の領土を

大きく擴張したいからである、潛匿したる諸ろの自然が、女性の光明に浴して、その本相の一角を、人間の眼の前にひろげて來ることは、考へても愉快では無いか。

私をして獨斷言を擅にせしめよ、女性の自然觀が發達して來れば、萬有に對する智識が增進し、生活の内容が豐富になつて、自然に女性として、尊敬すべき人格を生じて來ると思ふ。

それから、私は進んで、二三の自然物體に就き、女性の觀察注意すべき例證を、說かうと思つたのであるが、餘り長くなつたから、それは他日、自然を語る時に讓る。

天然の美と婦人の美

大下藤次郎

自分はたゞ斷片的な事を語るに止まる。

自然美の優れて居る所は、婦人美は餘り發達して居らないし、婦人美の發達して居る所の、自然は見るべき所が少い、此點から言つて、槪して地方の婦人殊に山村海濱の婦人に餘り美人は無いやうである。

京都などの樣に風景も、人も美しいと云ふ除外例はある樣なもの丶、我々の目から見れば、京都の風景は作られた風景であつて、自然美として其側から見れば京都の自然美は貧弱なものと言はねばならないと思ふ勿論美と言つても、人々に依つて其美の定義が異つて居るから、以上述べた所も、人に依つては、正反對な事もあらうが、少くも私はかう信じて居るのである

たとへば自然美に於ては、最も優れて居るとも言はれる信濃の山高水淸の地の婦人に、美しい人を見出すのは、困難な事であらうが、越えて越後の茫漠として見るものもない殺風景な國が、昔から美人が出るので

名高いなど、其一例であらうと思ふ。で必ずと言ふのでは無いが、概して山國に美人は少なく、平原の地に多いとも言へようか。然るに男子の美に於ては全く之と反對に、山國には如何にも美男子が多くして、平原には少ない様に思はれる、信濃とか、福島とか言ふ邊の男子の目鼻だち身體の發育等、如何にも男性的美を示して、動かすべからざる所がほの見えて居るが、越後や秋田の男子であると、男性的美を持つて居る男はきはめて少ない様に思はれる。

それと言ふのが考へて見れば、自然美に優れて居る土地では、生活、所謂食ふために、働く事が容易でない、山や谷を開墾いて、其所に食ふべき物を植ゑねばならぬ、仕事は自然荒い事になるで、男子は男性的發達を充分する事が出來る譯であるが、婦人は婦人美の發達とは反對に、男性的方面に發達してゆくから、自然婦人美とは遠く成つてゆくのである。

私など始終旅行ばかりして居るから、それ程にも思はないが、風景を畫く畫家が、山は高く、谷は深く、樹立の鬱々として居る地方の山中などに、時に旅行すると、其自然美と言ふものに魅せられ、其深い印象を抱いて都會へ歸つて來る時に、上野の森の餘りに黑いのに驚くと言ふが、人物畫家に於ては、地方を旅して歸り來つて、都會には餘りに美人の多いのに驚くと言ふ。私は之を誠に面白い對照であると思ふ。

九州の五家莊などに、美人が居ると言ふ事を言ふが代々血族結婚によつて、昔時平家の胤をつゞけて、今日にまで及んだ名殘を、土臭い九州の山奥に見るので言はば九州を旅行して五家莊村へはいつた旅人の目に新しく、少しでも色の白いのや、目鼻だちのとゝのふたのが目にたつので、いざどれ程美人であるかと、京都なり東京なりへ連れて來て、磨きぬいた婦人と並べたら、遠く及ぶ所では無いだらうと思ふ。

以上述べた所を概言して見れば、婦人美、即ち美くしいと言ふ事には、必ずそこに人工的裝飾を要するもの、自然美其ものには人工を加へれば却て、其美を傷

けて了ふと言ふ事になつて、其所に風景と婦人との相反れてゆく面白い現象が存するのである。

私の故郷

文學士　尾上柴舟

私の鄕里は美作津山ですが、私は小學を卒業すると直ぐ東京へ出てもう二十年からになる、一體田舍は何處でも同じ事で私の鄕里なども別段珍らしい事も無い但だ近年歸る度に土地の容子の變つた事、子供の時分にチヨイ〳〵覺えてゐる事が、廢つて了つたりしてゐる事は、自分に取つては多少面白く感ずる事である。

養蠶の盛んなとこで家には大抵飼つたのものだ、又絲を紡くし、機も織る、一軒の家には機臺の高いのと地機と云つて低いのとが無い家は無かつた、で、女はさう云ふ事ばかりしてゐたものだが、それがだん〳〵衰ろへて來たらしく、今度歸つて見ると私の子供の時にはあまり聞かなかつた琴だの三味線だのを弄ぶものを大分見受けた。

元來暢氣な處で、昔しから駈落者や失敗者が遁れて來て暮らすに都合がよいと言はれてゐる、廣島や備中邊から來て町を開いたものは隨分あるやうだ、東京の三河屋と云つた風に廣島屋と云ふものが多く有る。

平常珍らしい事が無いから、何かあると仰々しい、正月などには家々で親戚やら知人やらを呼ぶ、極まつた正月ものの御馳走で酒宴をして、其あとで汁粉を出す、飯は決してつけない　妙な事だとあとから思つた。

其れから東京には無いが、春四五月、魚島と云ふ季には御客を呼んで御馳走をする、魚は備前の方から川舟で上つて來る、で親族共が大一座で盛んな酒宴をする、私など子供心に、親兄弟が何だつてあんな巫山戲

た眞似をするのかと可笑しかつた位だ、何分暢氣なんです、今では其んなお極りの仰々しい事は廢つたさうだ。

毎年二月に會陽と云ふものがあつた、其れは愛染寺と云ふ寺の本堂に、水垢離を取つた大勢の者共が、素裸の儘四つ立つた柱を潜ぐつて、彼方から此方へ、此方から彼方へと幾度も脫ける、溢れるやうな群集だから、芋を洗ふやうに押し合ひ、犇めき合ふのだ、其の中に神木と云ふ香木を投げる、其れを奪ひ合ふので一層騷ぐ、しかし決して怪我はしないと云ふのを以て妙としてゐると云ふ、いつか其の中に女が雜じつて居たと云ふので大騷動があつた、此の行事も今は廢れたさうです、神木の式は備前の西大寺が本元なんで、今でも盛んに行はれてるだらうと思ふ。

其の他千兩役者などが來て芝居をうつと、其れは又騷ぎです、見物は先きを爭うて、まだ夜の明けぬうちから木戸へ押しかける、入ると中は暗いので灯を點すと云ふ位であつた、それから暢氣に幕明きを待つのです。祭禮の壇尻―つまり屋臺――に胸をどらして見た事もあつた。子供だつたから珍らしかつたのと、その頃凡てが幼稚だからと二つでさうだつたのでせう。

牛肉なども舊慣上、公然には食べられなかつた、牛肉とは云はず唯御用と云つて、男女の者が籃をかゝへて來る、すると裏へ廻れと云つてズーッと迂回させ外の門から入れる、切らせた肉を容れる器も、煮る鍋なども別のものを用ゐる、そして襖を障子にはめかへたりして、コッソリ食べたやうな事も覺えてゐる、其後私は今昔物語の、近衛司の侍のところへ出入りする魚賣りが、持つて來る魚の頭も無く尾も無い切身であるが美味いものだつた、處で或る日其の魚賣りが例の籠をかゝへて籔に入るをの後から覗ふと、其邊に居る蛇を叩き殺ろしては籠に投げこんでゐる、そこでいつも持て來る魚と云ふのはあの蛇だつたかと驚いたと云ふ話しを聞て、あゝ自分が子供の時に食はされた牛肉もどうかすると其んなものぢや無かつたかと思つたりした事がありました。

海豹島の婦人生活

岩野泡鳴



樺太の東海岸で、北緯四十八度から四十九度の眞ン中あたりの海中に、一つのちひさい島がある。テルペニヤ岬の南端に近いところで、周圍は僅かに一里にも足りない。露人等はチユレニもしくはロツペンと名づけてゐたが、わが國人は海豹島と云ふ。

この島は、夏に向つては、膃肭臍が群居してゐる。して、禁獵になつてゐる。もし密獵船でも來ると、砲彈によつて退却されるのだ。獸兒の繁殖を計つてゐるからである。

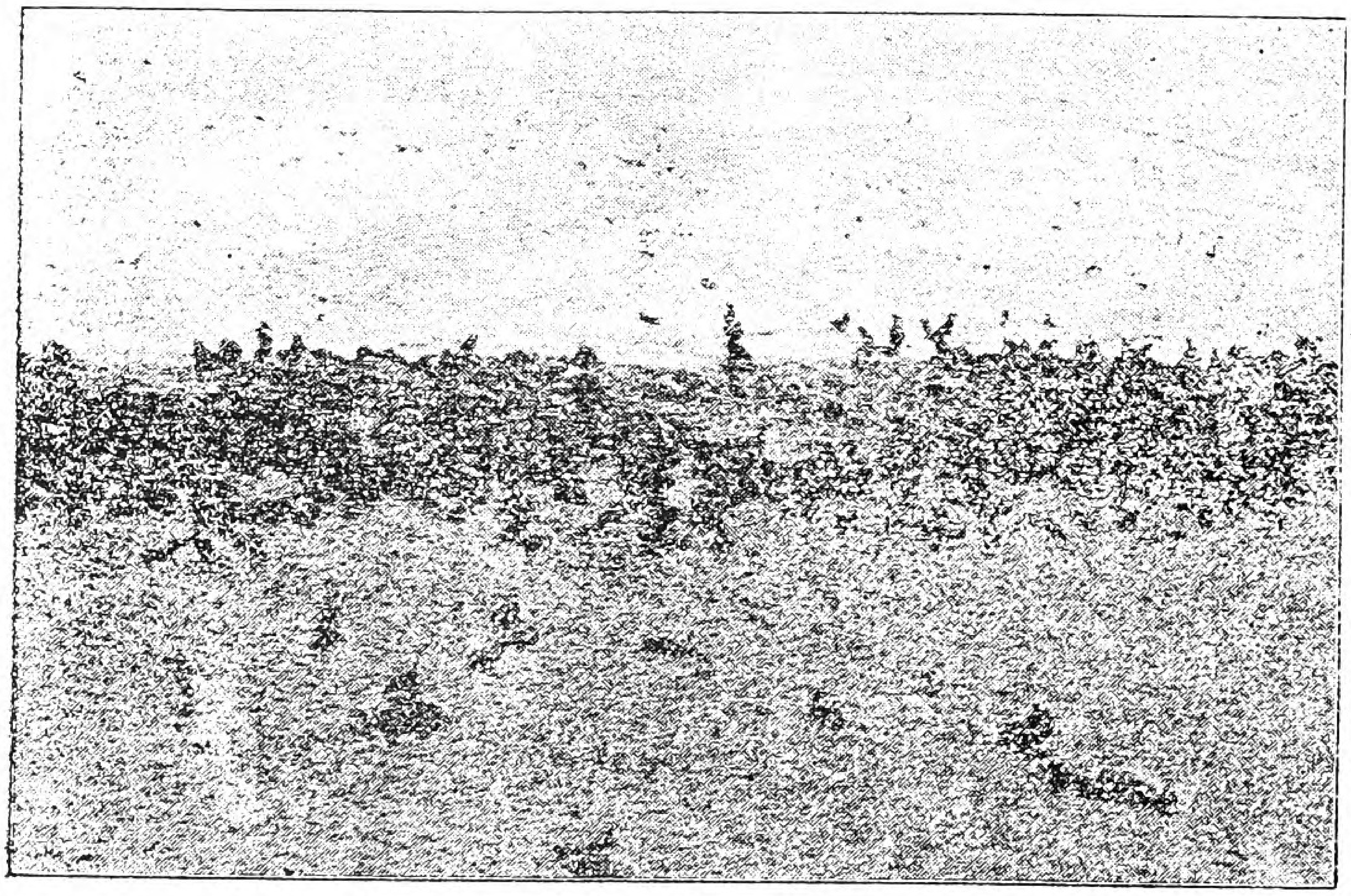
去年などは、雌雄と大小とをかまはず數へて、千八百五十頭ゐた。して、もう、いゝ加減殖えたから、これを一段落として、入札か、何かで請け負はし、捕獲してしまつてもいゝではないかといふ説が盛んであつた。

毎年一定の時期が過ぎれば、どこかへ行つてしまふ。して、また、翌年の同じ時期に集つて來る。然しその集つて來るものがすべて前年のと同じのであるか、どうか、よく分らない。それを試驗する爲め、渠等海獸

の耳の一端を切り落して置いたこともある。然し遠目鏡で見るのでは、實際に、その耳の切れたのが來てゐるのか、どうだか、よく分らない。

旅行かた〴〵時々、そこへ行く人などは、わざ〳〵海獸のゐる一間まぎはまでも近つて見ることもある。五尺も六尺もある獸はうなるのだ。それは、人をこはがつてだが、人はいつ獸に飛びつかれるかも分らないので、ちよつとの間でも、油斷は出來ない。不斷は、決してそんなにそばへ人が行かない。

この海獸の習慣は多妻主義だ。また、共妻主義だ。然しその自分の關係ある牝獸は、他のものには少しでも手をつけさせない。ちやんと決つた勢力範圍がある。してその範圍を擁護するには、牡はその一身を犧牲にして、一生懸命になるのだ。



海豹島膃肭臍の群居

牡一匹で牝を四五頭もしくはそれ以上も引き受けてゐる。また、牝二十頭以上を牡三四頭で共有してゐるのもある。して、牡の勢力範圍に入り來たつて、牝を犯さうとするものがあると、その敵が自分等の子であつても、決して許さない。直ぐ喰ひ殺してしまうほどに神經が過敏になるのだ。

して、面白いことには、人間の社會と同じ樣に、なまけ者もあれば、獨身者もあり。また、どの家族からも相手にされないものもある。そんなものは、すべて、他とはかけ隔つて、自然寂しい日を送らなければならない。考へて見ると、可哀さうで、人ごとではない樣な氣もする。

ところが、その獨身者のうちには、なか〳〵いたづ

らな奴があつて、たゞ寂しい日を送るだけでは滿足せず、出來心を起して、他の細君を横取らうとする。かう云ふいたづら者に限つて、また、なか〳〵賢いもので、牡の強さうなのがゐる範圍へは近寄らないで、必らず、弱さうな、病身らしい、もしくは頓馬らしい牡の家族へ向ふのだ。

それでも、いたづら者がそれと目ざした牝のゐるところへ一たび飛び込むと、一大騷動が初まる。

『何しに來たのだ？』

『一匹おれによこせ。』

『いや、おれの物はおれの物だ。』

『なんだ！そんな朝鮮人見た樣な、意久地なしの風をして――』

『馬鹿にするな！』

『この野郎、力づくで來い！』

まア、かう云つた風のつかみ合ひになる。目的は牝にあるのだから、力の強い方がそれを喰はへて走らうとする。

『さうはさせない。』と、また一方が喰へ返す。情けないことには、兩者とも、手の樣なものはあつても、手だけの働きはないから、口で奪ひ合ひをするのだ。『よこせ。』『やらない。』で、激烈な引ッ張り合になると、その間に、段々齒のさきが牝に喰ひ入つて行つて牝は死んでしまふ。勝ちはどちらにあつたにしろ、勝利品は血みどろの亡き骸に過ぎない。

女性を保護するのは、獸類でも、なか〳〵六箇しいものと見える。不斷でも、さういふ心配をしてゐなければならない上に、八月頃、子をそだてる時になると牝の心配と奔走とは非常なことは非常だが、その牡の熱心と來たら、海に這入つて自分の餌をあさることもしないで、その身が見るかげもなく瘦せて行くのも知らない。たゞ一生懸命に、自分の家族を保護する爲め敵に隙きを見せない樣に努めてゐるのだ。

さういふ家族が、僅か十二丁ばかりの海岸の砂上にいくつにも別れて陣取つてゐるのだが、この島を住所として、また海馬(とど)と云ふ別種類のいたづら者が

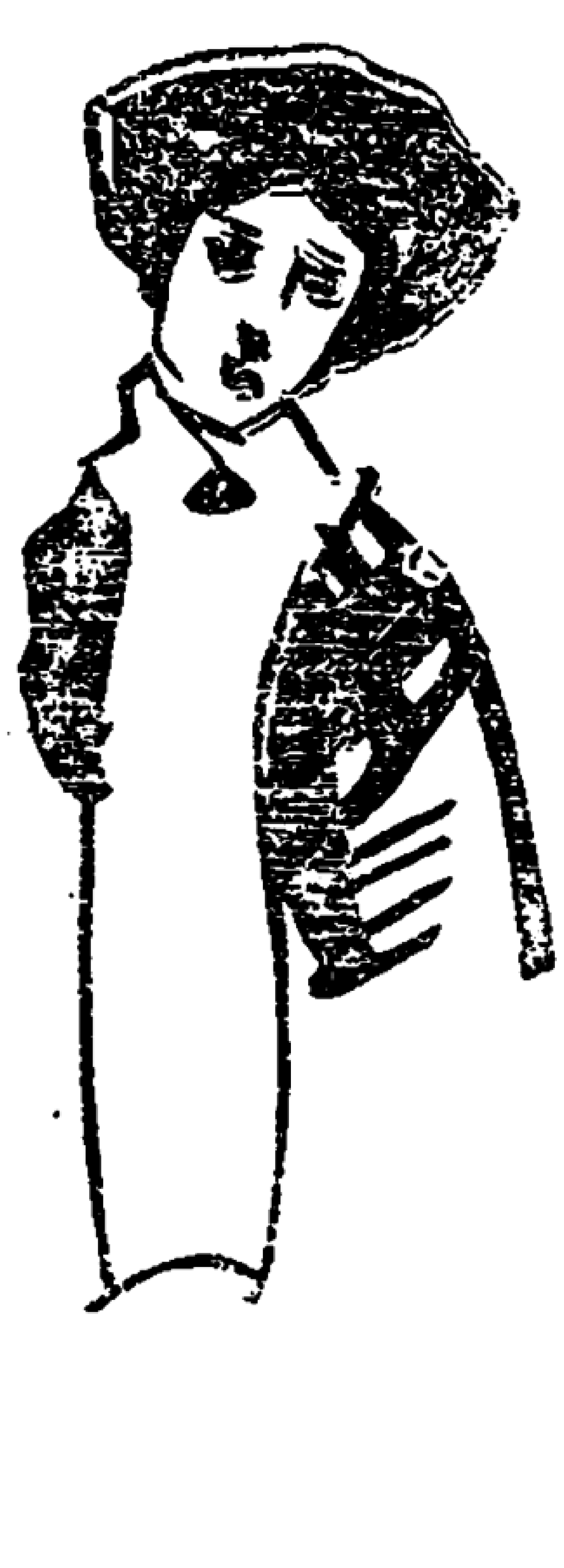
ゐる。膃肭臍よりは、ずう體も餘ほど大きい。去年は五十頭ばかりゐた。それがぼうッ〱とうなり猛つて膃肭臍をいぢめ抜くのだ。監視者は折さへあれば、この大害物を銃殺するのだが、うか〱發砲して、その音の爲めに膃肭臍の方を島から逃がしてしまつては困るので、かけ隔たつた海中にでも首を出してゐる時を見計つて、うち殺すのだ。

砂の上では、膃肭臍どもは海馬を敬して遠ざけてゐる。渠等は、海馬の周圍には、決して寄りつかない。それをいゝしほにして、海馬はまた一島の王族の如く意張り散らし、膃肭臍どもを十間以外にすさらして、自分等はその中央に横たはり、頻りにぼう〱うなるのだ。

海馬も、膃肭臍も、冬分になると、どこかへ行つてしまふ。して、その跡へ、海豹(アザラシ)の群がやつて來て、この島を一時占領する。海豹は寒いのを平氣だが、膃肭臍は冬は暖い方に向ふ。どこへ行くのか分らないので、その跡を汽船で追ひかけて見たこともあるさうだ。すると、すべてが南の方へ向つたが、途中で二手に別れ、一方は直ちに南太平洋に向ひ、一方は宗谷海峽を日本海の北部に入り、津輕海峽からまた太平洋に出で、消えてしまつたさうだ。

それがすべて、少くとも、それと同じ群れのが、毎年、春になれば、再び海豹島に歸つて來て、再び家族的社會を形作るのだらうが、僕が海豹島の婦人生活と云ふのは、必らずしもそんなことを皮肉つたのではない。この島に於て、不斷、膃肭臍を監視してゐるひとりの婦人がある。その婦人が、たとへ所天があるにせよ、またないにもせよ、かういふ寂しい島に於て、かういふ賑やかな膃肭臍の家族的生活を見てゐる心持ちはどういふ心持ちであらう?

これを諸嬢に想像してもらひたいのだ。





下京の女

兒玉花外

西京の市街は整つてはゐるが、綺麗ではあるが、餘りに陰氣くさい。黒や澁でぬつた、あの格子、閉りのい丶戸口から、覗き見する女の顏の白さ、宛で髮を結はせた人形のやうだ。

此地の若い女は、道を必と眞直に歩く。そして定つて兩の袖を胸元、乳を掩ふやうにキチンと重ねて、側目もふらずに通る。可愛い丶、いゝ、しじふ夢をみてゐる瞳は、遠くの美くしい幻ろしを見てゐる。——眞直に歩くのが癖ではあるが、京女の撫肩の曲線美はしい、なくして顫付く程よい。

西京の女は姿は柳のなよやかさで、眼は燕子の可愛い丶黒瞳勝、それで此の眼が中々油斷がならぬ、活きて飛來り、飛うつりては、男の魂を褫ふ。若い男は身を殺す事もある。併し、常には表情の極弱い伏目がちである。

ぞろりと着流した着物の袘は、十四五までは厚くふつくら取つた紅色、それから上娘時代は藤紫の類ひ、駒下駄の艶な鼻緒も、足袋も隱れるくらゐ、極の内輪に音なしく、つゝましやかに、地面にさへ耻かしさうな步振りをする。

一體に、此の處の女は神秘的だ。土地が山の底のやうで陰氣な所爲か、逢魔時から夜出步く事は禁物としてある。晝間一人で通る折にも、紫がゝつた青空から何だか美しい髮を押附けられるやう、道の兩側の格子口から誰かの眼が覗いてはゐまいか。兩頰にポーッと薄赤う染めて常終おづ〳〵して步くいぢらしさ。現代の激しい思潮も山城へは未だ浸込まず、イヤやさしい京娘の頭を刺戟せぬとみえる。

東京に山の手と、下町があるやうに、西京は上京と下京に別つてゐる。で、京女の特色は重に下京にある。三條以南は大抵商人が多いのであるが、出色はこの商家の娘達である。下京の花と唄はれよう。

頭の髮の風は、此節廂髮も追々ふえて來た。けれども、矢張り高島田と蝶々髷が多いし、又た面長な瓜核形の顏には、品のいゝ日本髷の方がよく似合ふ樣だ。上京の町で廂髮の女學生風の若い女、その廂髮のうねつた黑い油氣の無い幾筋にも、はや現代の波の影がうかゞはれる。

京都の女の言葉の調子は實に柔かい。少し重みがあるが、甘みがあつて、やさしい。西京の女の言葉が目白鳥ならば、東京の女の調子は宛で百舌鳥のやうだ。三十女にでも此の柔かい調子を操られると、僕の熱烈な頭腦でもウツトリと睡くなつて了ふ。

圓い東山の小松の上に蔽蓋さつた雲。淸く流れる加茂川には晒す花友禪や、冬は月夜に哀しい千鳥が啼く。古昔から、小督や、松蟲鈴蟲姫や、西京の四方は、歷史的情調と色彩を以て充されてゐる。

現代の思潮が如何にあらうとも、切めて此土地のみは、美のためにも、女は永久に女らしくあらしめ度、私は願うて止まないです。



杉坂峠

文學士　澤村胡夷

夏の日が落かゝると、うら庭のくゞり戸を、そつとぬけ、小屋の脇から梯子をかつぎだして、藏の屋根へ這ひあがる。これは私が少年のころ、一番すきな杉坂の峠をのぞむためであつた。

蜻蛉が赤く染まつた空を舞ひながら、幾つかづゝ、寂れた町を湖の方へ横斷つて行つて、水國の晴れた夏の一日は、このちひさな蟲の羽の光にかざられながらしづ〳〵と暮れて行くのである。

私は屋根の上から、とび〳〵に、多くの棟瓦を見ることが出來たが、是等の不揃ひな屋棟を越えて近江の平野がひろびろと展開してゐるのを望むことが出來たのであつた。私は大きくなるまで此寂しい町に住つてゐたので、町には最も近い湖のひろびろとした眺めは私の頭に深く刻みこまれてゐたのであるが、とりわけ、藏の屋根から……杉坂の峠を、夏の日暮にのぞむことが好だつたので、その頂にかゞやく夕日と、野の極をまろびゆく黄色の雲とは、私の最も活潑な記憶となつて殘つてゐる。

杉坂の峠は平野の東をかこめる山脈を越えて、さらに遠きかなたに見えるのであつた。私はこの峠をこすと伊勢路にはいるのだと老人に敎はつてゐたので、杉坂の彼方には私の見知らぬ野や、山や、河や、岡や、森や……而してひろびろとした、こんな湖があるのだと、かう思つてゐた。しかし、此峠を越えて伊勢路

へ行く旅人はこの小さな市街をよぎらなかつたので、杉坂の峠がどんなであるかは實際私のきゝ知るところではなかつたのである。

勿論また杉坂越えを近江の野へと降つて來た人が、この町には住つてゐなかつたのも確かである。それで私はいつも好奇の眼をこの峠の上にそゝぐのであつたが、夏の日暮にこの頂が夕日をあびて輝くと、一種いふべからざる思がちひさな胸のなかに起つてくる、而して私は一度はこの峠を越してみたいと、こゝろのうちで思つてゐた。

私はこの峠をこえてみようと思つたまゝ、多くの年月を過したが、遂にこの峠を越ゆる機會を得ずに了つた。

その後、私はある古い寺で繪卷物をくりかへし卷きかへし見たことがある。澤山の卷數のなかの何卷目かに、ふと、私の眼にとまつた山があつた。圓味のある幾つかの山竝のおくに、さらに高い嶺がゑがかれて、其頂から所々ちひさな杉の樹立が、とび〳〵に、斜めにゑがかれてゐた。私はこの山が杉坂の峠そつくりだと思つた……而して太陽の溫味がとれぬ瓦屋根のうへを、覺束なげに踏みしめながら、棟瓦を確ととらへてかの峠をのぞんだ少年時代を想出さずに居られなかつた。

私は夕日をあびたかの峠が、蒼くもとのやうになり次第に眼界から失はれてゆくまで、凝とみてゐるのをつねとしたが、昏暗れてゆく平野の端から、湖水が白い光を次第になくして了つても、村の煙と、長くつゞける朝鮮人街道のうねりのみは見失なはずにゐることが出來た。而して足もとに起つてゐる學校の粗雜な建物だけは日がとつぷり暮れて了つても、まだ、私には見ることができたのである。

幾度となく私は屋根へのぼることを禁ぜられた。然し……强情な私は決してそれをきゝいれなかつたので、小屋の脇の梯子が何處へか隱されてゐたことのあるのを覺えてゐる。そのうちのある時には、屋根のうへで無中になつて眺めてゐた隙に、そつと梯子をはづ

して了つて、冷たくなつて行く死の上に私をとり殘して了つたことを知つてゐる。その時には私はおほ聲をあげて、屋根のうへで泣いてゐたが、藏の屋根際に柿の大木があつて、その枝に取ついて下りることも出來ぬではなかつたのだらうけれど、私は樹上りが出來なかつたので、これを傳つて下りてくるだけの才覺がつかなかつた。

泣いてゐた私は、吉どんの親切によつて、恙なく地上におりることができたけれど、……私はひどくその晩に叱られたことを忘れ得ない。

私の遊仲間のうちにその頃、吉田さんといふのがゐた。その人は色が黒くつて、筋肉も太り、頭髪をふりみだしてゐたのと、山といふ山はどこまでも行くといふ山男然とした男だつたので、仲間ではこの人を『熊！』と呼んでゐた。熊とよぶことは本人にはあまり失敬だといふものがあつて、『ベアー』とよぶことになつてゐたが、熊くんは、一度はあの杉坂を越してみる、と言つてゐたが、果して此峠を越したか、どうか、私はまだそれを聞いたことがないのである。……その後、熊くんが工兵中尉といふ軍服すがたで、私の留守宅を訪問してくれたさうであるが、私は、とう〳〵、會はずに了つた。

杉坂峠は餘程險しいといふことだけは聞いてゐた。それはこの市街から見ただけでも推察されようと思ふ。

その後、私は膽吹山へ上つた事がある。勿論、この時には、熊くんが私どもの案內者であつた。夏のことではあり、麓の村落へ夕がたに着いたが、登山宿といふ、だだつ廣い、薄ぎたない一間で、蚊に刺されながら、半夜を過さねばならなかつた。而して眞夜中ごろ、松火を點してのぼり初めたが、さすがに、山氣肌に徹して、不用だと思つた毛布が同行の手から手へと、奪ひ合ひとなつた。

雜木林をいくつか通りぬけて、雲を谷間に瞰おろすやうになつた時分には、山には喬木の影を絕つて、土に固着いたやうな灌木が、道の兩わきに蟠屈まつてゐ

た。そのなかには山百合の花もあつた。草のなかには香のたかい藥草が、石をめぐり、巖をかこんで、あをあをと生えてゐた。そのうへを雲が冷たい滴を落して行く。

頂上へのぼつた時には、夜がほのぼのと明けはなれてゐた。雲は谷をいで、巖をまき、ひた〱と山腹からたちのぼつて來る。

私は巖の一角に倚つて、今、のぼつて來た路をふりかへつてみたが、角張つた岩石がどれもこれも苔をおびて、その間には草が弱々しく延びてゐた。九月の風がこの山に殺到すると、延びた草をむしりとつて、ここには一物をもとゞめぬであらう。のぼつて來た路は脚下を斜めに下つて、直ちに圓々した中腹の草のなかに隱れてゐる。麓の雜木林は、全く見ることが出來ぬほど、ちひさくなつて、唯あをい一帶の曲線を描いてゐた。

日がのぼると、名古屋の城が見えるから、此方へ來いと、熊くんが言つたけれど、私は行かうともせなかつた。

黎明の湖を巖のうへから瞰下ろしながら、私は湖畔に聳えてゐる古い城……と、それを圍んでゐる、ちひさな、荒れはてた市街とを見たく思つた。而して、出來ることなら、粗雜な校舍を認めたいと思つた。けれど湖へつき出てゐる多くの出鼻やら、また湖がゑがいてゐる輕快な曲線が、雲の間から微かに見ゆる許であつた。湖畔の小市街は遂に私には見ることが出來なかつた！

太陽は朝の空氣を透して、最初の光を吾々の背後から浴びせかけた。熊くんは私の袂を引張りながら、『日出だ、日出だ』と叫んで、私を後の方へ連れて行つたが、草が深いので平坦な頂も思ふやうに歩めない。そのうちに熊くんは掌を草の葉で斬つたと云つて、私に見せた。鋭どい薄葉の緣をつかんだのであらう、血が少しにじみ出てゐた。

私は東の端まで行つて、其處に起つてさきの方をながめた。

山が重りあつて、その山々が圓味を帶びて、所々に風に折られ、雪に傷められた立樹が延びあがつてゐた山の窪には草が一體に繁茂して、山續のさきのはうは蜒蜿と、何處まで行つてゐるかわからぬのである。

熊くんは、夫等の山の一つを指さして、あの山の向が寢物語だと云つた。それは美濃と近江との國境で、寢ながら國をへだてた里人が物語をするのだといふ。私はそれよりも此山脈をたどつて、何處へか下る路があるかと尋ねたが、熊君はこの山へは無論この山續を上つて來ることが出來るのだと、云つた。而してあれがその路だと云つて低い山の一角を指さしてくれた。なる程一條の絲のやうな路が、うね〳〵、谷のなかへ隱れて了つてゐる。其兩脇のところに、ちやうど目標のやうに、喬木がすく〳〵と起ちはだかつてゐた。

私はまたしても、杉坂の峠を想起せずにはゐられなかつた。

寂しい山路だと思つた。

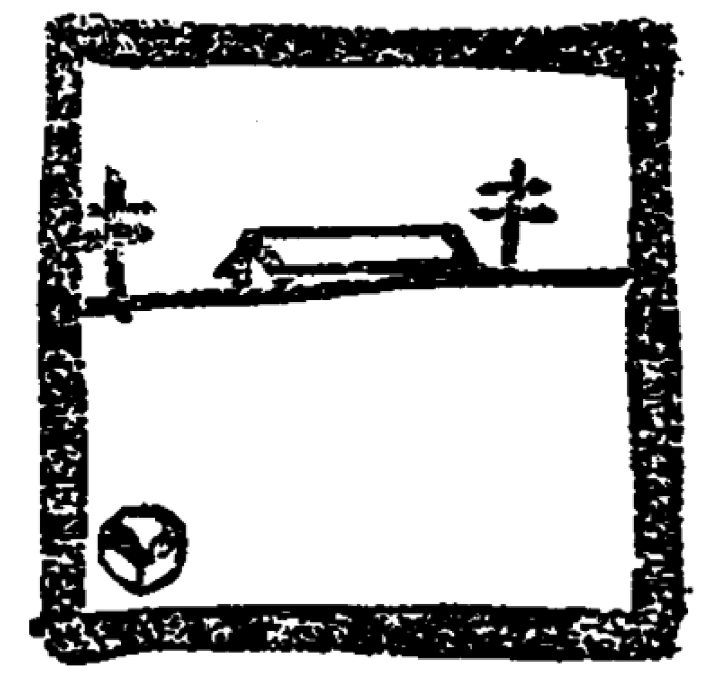
こんな路が杉坂の中腹をめぐつて、山深く、何處までも、何處までも、曲りくねつてゐるに異ひないと想つた。

足もとには藥草が太陽の光を浴びて、高い香を放つてゐた。しつとりぬれた草葉から湯氣がほかほかと起のぼつてゐる。…………太陽がうへへのぼるに隨れて私どもの眼の下に轉びながら折重つてゐた雲が、白く光つてきた。私は熊くんと一所に、廣い此山の頂を一周して、この山を降ることにしたのであつた。

私は麓のところまで下りて來て、雜木林のなかへ入つて行つた。而してそつと膽吹山の頂の方を振返つて見ると、雜木林のすこし窪んだところに路がついてゐたが、其上を若い草苅女が橇のやうなものに草をのせて辷降してゐるのを、ちらと見た。

杉坂の麓にも、こんな、雜木林の路があつて、その路の窪には若い草苅が……眞赤な帶をしめたまゝ……若い旅人を目送するだらうと、私は想つてゐる。

さう思ひながら、私はその後、しば〳〵あの峠を………眺めた事があつた。



雲雀鳴く野より

横瀬夜雨

南天の花が散る。

モチ、サクラ、ザクロの影が明り床一杯にうつゝて、いゝかげん暗いのに雨が止まぬから、石燈籠の笠まで腐りさうにじめ〳〵としてゐる。

硃沙根の下に蛇の小さなのがゐて時々出てあまがへるをねらふがまだ捕れない。

夏蜜柑が喰べたい、買ひにやたつところで下妻には無いし、おとゝしから約束の杏もきし子が贈つてくれないから、梅でしんばうする、黄ばんでもやはり酸つぱいけれど。

ふと、すべての木の實を喰はぬくせに龍眼肉だけはかをる酔茗をおもふ。「葡萄の味を知らぬ吾の」と歌うた野ばん時代に比べるとずゐぶんハイカラになつたものだ。（十七日）

朝のうち、雨が降つたやうでもあり、霽れて日光をおとしたやうにも。

高才の百太、あげ物を手土産に、無沙汰詑に來る。あられを皿へ分けても箸をつけないから、掌へ撒けてやる、大きなたこだらけだ。また秋になつたら先生こと負つて筑波へ行ンべつて、彌一さんだの周さんだのと相談しやしたといふ。あげ物はお手の物の隱元茄子さつま芋紫蘇の葉等。鰑も少々まじつてゐた。濱へ行くと鰑を干した簾の上に、金蠅銀蠅が渦を巻いてよく

飛んでるの、わたしあれを見てから錫はきらひになつたと邦子がいつてゐたつけ。

來信葉書二通。

試驗豫定のごとく落第。勇氣回復の一策として日光へ行くから旅費をとうちへ申やり候ところ、親爺大目玉に候。

華嚴助

かういふいひなづけの君ではおみつさんの少しは泣くのも同情にあたひされる。

『土』の茨城言葉は、他地方の人に分つても分らなくても、茨城のしかも純粹の百姓を書く以上、止むを得不申候。それよりも何よりも小生は病氣になつて、只今下館に來て居り、『土』の稿を繼ぐ爲には大打擊に候。病氣は一歩あやまれば萬事休むとのことに候。

以前、兄より趣向を與へられたる『腕』のヒロインとも見べきもの此地に候由、花貌絶倫、年十六些の邪氣を止めずと申候。

長塚節

『土』が『朝日』に出はじめてからモデルになつて勘次を言はぬ人も無いが、おつぎももう二十を越してゐる。『源次郎さん(縣會議長)のむすこもえらくなつた』と親類の年寄手合は言つてゐる。

從弟のゐた福岡大學病院に疽を病んで入院した、十五歳の女があつた星眸愁を含んでじつと人を見るのがたまらなく美いのに、殘酷のやうだけれど、どうしても片手は切らなければなるまいと、博士達は囁き合ふた。ある日從弟が手術室を横切つて廊下へ出ようとするとき、武井君、武井君と後から呼ぶのでふりかへると白い事業服を上つ張にしたX氏が卓上の一物を指して、君は畫を描るといふぢやないか、一つこれを畫いて見ないかといふ。はと答へながら立ちよるとそれは錫の淺い盤に盛られた人の腕、五指輕く内にかゞみて落ち來るたまを受けんとするが如く、くれなゐなりしかひ爪ははやくも色あせて復輝くリングを見ず、上に一塵をとゞめず、たゞ滑らかに淸らかに盤上に横たへられた腕であつた。『行つて見たまへまだ醒めずにゐるから。かう〳〵しい顏をしてゐるよ、と博士はいつ

た。お母さんらしいつき添の女の人も背のすらりとして顔の輪廓の正しい美人で、唇をきつと結んでベットのまはりを靜に歩いてゐた。娘の顔は殆正視しがたきまで瑞麗に見えた。……………まあちやん、まあちやんは詩人だ。この竺志少女をおもふと共にメロのヴナスをおもふだらう、涙濕春風鬢脚垂低徊顧影無顔色、コロロホルムからさめた時のいぢらしさを一篇の詩に作つて見てくれ』と手を握つてふり動かした從弟は今肺を病んで日向にゐる。知らず、竺志少女と常陸小萩といづれか涙多き生涯をたどる？

この夜、一日卵ばかり喰はされたせいか、朝鮮皇帝となつて統監曾根荒助の首を斬ると夢見た。（十八日）

せうことなしに瞼をふさぐと、せうことなしに目もねむる。かうして、終日おとなしく蚊帳に籠城す。納戸の緣側に蛇がのたつてゐるとかでたゝきだ箒だと母とおよねが騒いでゐる。あまがへるは逃げたらうか、それとも呑まれたらうかと心配しながらまた睡る。

吉田より、しとつていまにも溶けようとするドロップスを貰ふ。病氣御見舞とある、姉の書だ。赤ちやんが產れたのにまだ祝の手紙すらやらないでゐる弟に…………と思ふとまづい菓子の不平を陳べる譯にいかない。けれど、何だつて女なんぞ產んだらう、水戸の四郎のも七月には滿つるといふからこれは男にしたい女ぢやくだらない。とヒトの子に大きなお世話などを考へる。

夜、あついのと苦しいのとで寢てゐられず、母にさとられぬやうこつそり蚊帳を脱けて西の雨戸を繰つて冷々とした緣側にすわる。月代がさすのであらう塀のわきの樫の木が晝見るよりずつと高く聳えて、南に蛙の聲も聞える。

しばらくは、風無く雨無く一村闃たる天地間にあたまを淸まして戸はそれなりまた母のそばへ横になる。

（十九日）

『もとの身に歸りて自由の歌がうたひたいけれど、家をのがれ出ることはもう不可能なのでございます。妻

となり母となつてはしまひに並の町の女となつてしまうのが落でせう。すべての希望も輝きも結婚と共に滅びました。苦しうでございます。辛いの。母はあるけれど、きのふの愛に接することはできません。あふひ』

『二十七日に猿島へかへります。詩を忘れたる教へ子をふかくはとがめないで下さい。今は安價の地に甘んじて終らうと思ふのでございます。この二三日はいひ知らぬ離愁に襲はれて外出もしませぬ。はま』

才ある妻の眉はつねにひそめり。と詩人はうたふ、新婚を誇りて、纏綿たる情緒を人に語る愚劣の女さへ有る世の中に、葬られたる命を惜んでいにし日の自由處女の光、處女の望、處女の詩を戀ふる悲みもさることながら、戀に敗れて心荒み放縦不羈ほとんど狂せんとしてわづかに蘇り、慰安を萬一に求めて近く茨城の野に歸らんとする敗殘の子！よく其「改革」をなしをほすべき乎「まくらがの滸我の姫桃ふふめるをいまだ見ねども我れ戀ひにけり」故里には君を泣ける濃情の人もあり、かへれたゞ。

『白い白い高根の雪を見ると泣きたくなります、青空にくつきりとまつ白な額のやうな形して日に向つてゐる姿は、じつにきれいなのでございます。高根の雪に日の沈むを見てよく泣いたのは十五六のころでした、不思議な國があの雲の下あの山の向うに在ると思つて「この命とるとはいはで落日はいくつとなるやわれ二十越ゆ」きし子』白馬ヶ嶽の繪はがきだ。

如月の風柔かに、野を低く草に亂るゝ。くぬぎの木丘をめぐりて、青むぎの芽はまだのびず。
なげけども聲なき愁は、いく月か胸に秘めけむ、
あゝ今ぞ沈默破れて、たぎり落つ人戀ふ涙。
人を送り姉を送りて、わが友は少なくなりぬ、夜な夜なの曉かけて、新しき夢は抱けど。
一筋の道蜿蜒と、麥畑の中につゞけり、其日君語りしことの、なほ胸のおくに住ふに。
あな寂し孤獨の思ひ。去にし日をまたも見せずや
天つ日よ、輝く雲よ夜の星よあゝわが神よ。
神奈川の久良岐の小野よ今日よりの後の幾年、面

ざしはよし變るとも、わが戀は永久に籠らむ。
師走の風ふく夕ぐれをあてもなく山や野を彷徨した時分わたくしの悲みは絶頂に達してゐたのでございます。若き命は若き日に長からしめよ。詩を作りてまづ御許にまゐらすることは忘れねど、十七にして人妻となりし教へ子の悲みはおん胸にとほり候べきや。いつみ子』

噫、若きいのちは若き日に於て長からしめよ、君みつからいはずや。この日も一日ねてしまつた。

夜到來のうどんを喰ふ、おした地のしよつぱいのに驚いて一口でよす。（二十日）

起きる。

門を通る人は大概簑を着てゐる、多くは雨を衝いてしと〳〵、ぬかるみを田圃へ行く。細長い篠竹を手綱の代に轡につけて馬を走らしながら、馬鍬は肩にかけて行くのもある。

呆れもせずに雨はふる。あきれもせずに簑も行く。

「腰の痛さよ、此田の長さよ、五月さ中の日の長さよ」

通るのも通るのも簑と笠だ。はなよめでもなければ簑の下から褶つた裾を出しとくものは無いから、簑は男女一切不明なり。現に袖垣の脇から門内を覗きこんで、あわてて笠ごと頭を下げた人が勘ちやんのやうでもあり、浦こが細君のやうでもある。泥へちぼになつて晝田を掻き廻すかはり、あちでもこちでも夜早苗振がある、めつたに買はぬ魚も添はるし、酒も一升位づつおごるから樂でないこともあるまい。

つひに雨のふらぬ年もないので見に出たことはなかつたが昔時はいよ〳〵植ゑじまひといふ日には、餘つた苗の投げつけつこから泥喧嘩が初まつて、女たちにうらまれてる男などは、手とり足どり泥の中へおんのめされたものだといふ。今の若い衆は野良着の袖口にまで萌黄のきれをくつつける位だから、女をおこらせはしない。女が利巧になつたのか、男が弱くなつたのか。

どうもよく降りますね、郵便まで沾れつちやいやしたと濡れてテカ〳〵光るカバンを肩から外して三つばかり出す。お茶までが出る、馬鈴薯もあるといふと、さうけ、ぢや御馳走になつべかなと合羽をぬいで腰をかける。

「今日あ、鷄のやつていのは宜うがんすか」貞さんだ、傘で高足駄で尻はしをりで岡持を提げて庭に立つてる。おい三道地のたいしやう、鷄なざあ賣れなくともいゝやな、お茶が入つたとこだ、まあ招ばれろと郵便や。はあさうかねとこれは傘をひらいたなり戸ぼくちに仰に伏せたあついのを一杯のんでからおめえ道草ばかり喰つてゝ猪瀨の旦那に知れたら免職だつぺと喰らはす。なあに、五月さ中めつたに代がめつからないのは局長さんが承知してらあ、どれ其積りでせつせと油を賣んべとそれでもさすがに長くはゐない。いつでも堅いのを持つてるからとは思つたが保證かしわの雌だといふので一斤だけ買ふ、代金二十三錢、貞さんは歸りしなに刺身にして召し上つてもうまうがんすと敎へて行つた、冗談ではあるまいけれど。(二十一日)

勞れてるのでよく夢を見る。いろ〳〵の人の顔が見えてこんがらがつた聲が聞えて、しまひにはつきりと○○○○○○○○○○○○○あなたはもう貧しい人なのよ、あなたをえらい方と思つてる人はひとりだつて有らしないのに、まだ知らずにゐらつしやるのねと言つたものがある。手を胸に組みてしづかにこの IRONY をおもふ。

零落の人を嘲る聲は、やがて强者の弱者をしへたぐる聲である、親をこらす子の聲である、師をのりはづかしむる敎へ子の聲である。

十時をきいてから起きる。9度の近眼鏡を光らして中の間に蛹の出る繭を選つてる母と、挽割(麥)を借りに來て緣側にねそべつて子供をあやしてるお源とゐるばかり、うち中がしんとして靜かだ。

頭が痛いので何する氣にもなれず、母に手傳うつもりで繭をかき廻すと蛆の蛹があつた、焦げたやうな皮

をしてる、蠶を喰ひ殺して繭にまで穴を明けるくせに自分では裸のまゝ蛹となる無性ものだ、頭と尾とを引つぱつて裂いて見ると生々した色だつた。

上段からたま〳〵繭が緣側へころがりおちた。母の膝には三が鬚を動かして睨んでゐる。と頭だけ脱けた蛾は小さな鋸のやうな眉とひつかけるものなき肢とを空に延べて蠢々と出て來る、繭はまたころ〳〵と動いたのでちよつかい好きの猫は跳りかゝつて雨の中へ遠く庭へ飛ばしてしまつた。こら馬鹿野郞拾つて來いと耳をはじいてやる。

塀ぎはの石榴の蕾十三見つかる。

燕がよく飛ぶ。前倉の家根の上に七つ八つ九つ集つてぬれ瓦の上を跳ねてゐる。一匹、白い小さなおち羽を咋へて口から離しては咋へ、咋へてははなし、圓をゑがいて飛んでる、あとを追うて、羽をとらうとでもするやうに蹤いてまはつて飛ぶのがある。

ありや子どもにどんぼ(蜻蛉)や、ちよちよつぺ(蝶々)を捕ることををせえてるのだねとお源が感心する。お源ら今日はゆつくりだな、股引も穿かねいで、もう田うゑはをへたのか、絲とりには明日から來るのかと聞くと、どうしてそれどころか、たね屋へ苗代を掻いて貰つたもやひがへしに行かなくちやなんねい。どらもう行ンべ、さいならと行つてしまふ。片手に庄公をかかへて片手には割麥を入れた笊と傘とを持つてる。

喧々啄々、倉のやねにはあひもかはらず燕が啼いてゐる。

毎年やつて來て子を生む古巣は釜場の天井から吊つてある、雨に風に苦勞してはぐくめる子はやうやく巣立つてか今朝は三匹だけ、巣のふちに白い胸を並べて外をうかゞつてゐる。窓の間から障子のガラスからちらと差す友の影を見たのであらう、ちちと啼きながらつと巣をはなれた。

二匹はまつすぐに戸口より、一匹は廣間の欄間から中の間にうつり、疊の上一尺ばかりの處を南へはすかひに、へんぺんとして雨の中へ飛び去つた。

艶ある黒き羽よ、千里萬里雲に翔り浪に觸るゝ長き翼よ、空飛ぶ神の子にさいはひあれ。

母が久しく髪を結はぬからとお角を呼びにやつたり繭からてふが出るので絲にとつてしまはねばならぬし、それに浪公が嫁とぶつかりてして簞笥を庭の中へほろき投げたとか何とかでたくもあつて來られぬといふ、およねに手つかねに上げさせることにした。

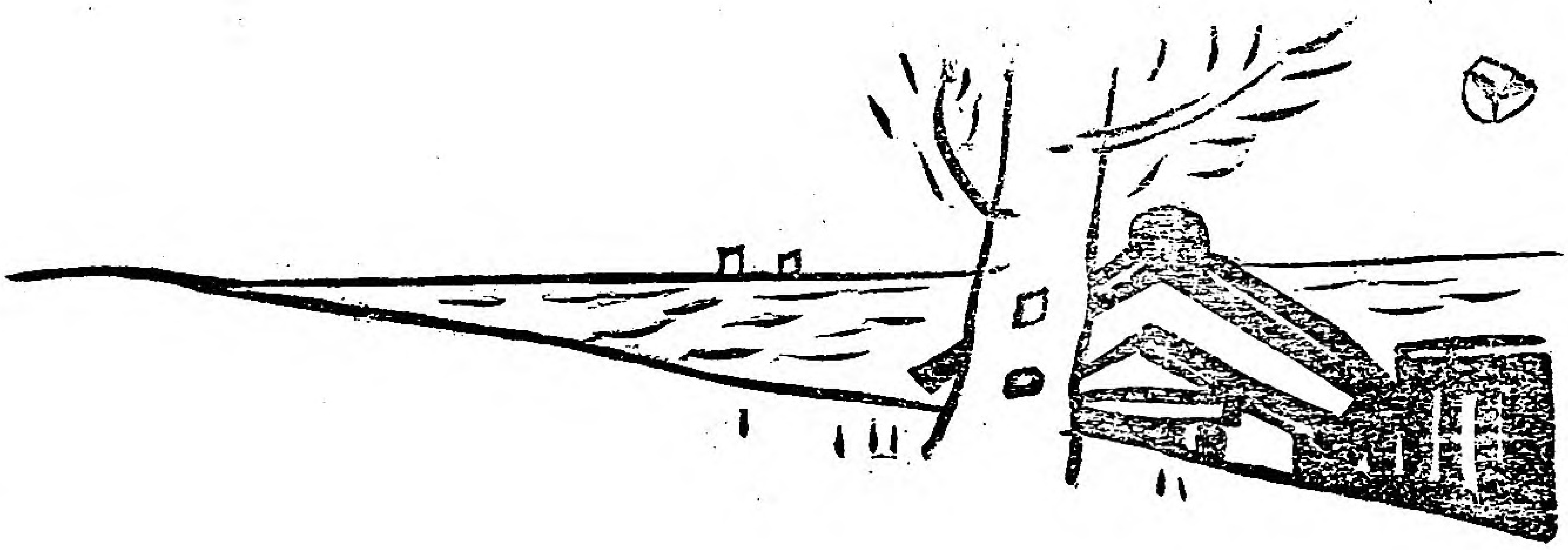
青磁の鉢へとつた金蓮華を前にして、母の口うつしのまゝ嫂さんにおくる手紙を書く。髪を上げながらおよねが見てゐてあの私、七ちやんに書いたのがありますからどうぞ中へ入れてと鉛筆がきの半紙を室から持つて來た。拜啓さきごろはかひこをてつだい下されまして誠有難く存じ候、蠶は二十七貫ばかりとりましたがおくれましたので三圓八十五錢づゝでした北海道へ行くとちゆ如何もなくをつきなされて候由時候はいかゞに御座候やをしらせ下されたく候田ういもおはつさんと太郎さんとをたのみまして四日ばかりあとにをわりました淸作さんは一日雨の降る日に致しましただけでちぢまつてしまひましたから私とおはつさんとで田ぬしとういをり候、父母樣もじようぶでありますから御安心くださるべく候。うめ七さまおもと、よね子。中々名文だ、七ちやんもたまげるだらう。が田ぬしとういをり候はよめないと言うと、だつて淸作さんは他が西つちいへば東、行ンべつちいへば行がねえ、爲るなち仕事はやる、田螺のケツマガリなんだから、お初さんとそいつて命けた名めへなんだから、だから書きましたと意氣昂然としていふ。

雲ちぎれ飛んで日あきらかに見る。

霖雨やうやく霽る。雲雀も鳴け、水鷄も鳴け、常陸平は草長し。（二十二日）

早稻を刈るとて手甲はめて
七つ下りに田で鎌磨げば
顔へはねむし、うるさや
手へは藪蚊が吸ひついて
あのや小路に馬やらふ
いとし殿御は芒だらけ

――花守日記より――



煽風器

富士登山は宜い經驗

男爵目賀田種太郎氏夫人　目賀田逸子

都會の婦人と地方の婦人と比べれば、無論都會の婦人の方が幸福だらうと思ひます。私は地方へ行つて、地方の婦人がたの生活を見ますと、よくあれで日を送つて居られると思ひます。勿論都會の婦人が好いとは限りませんが、それでも都會に住めば、自然見聞も廣くなりますし、從つて智識を增す事が多く御座いますけれど、地方では其點からして既にちがつて居ます。けれども又飜つて考へて見ますれば、よく西洋のたとへにある田舍の鼠と都の鼠、田舍の鼠がはる〴〵と都へ來て見たが、矢つ張り田舍の生活の方が好いと言つて、又はる〴〵と退去して行く話の通り、地方の方々はあれであそこに相應な滿足もあり、樂しみもありして、やつて居る事だらうと思ひます、けれど、どんなにしても、都に住むものは何彼につけ幸福だらうと思ひます。

旅行は好きの方ですから、年々方々に出かけます、景色はどこと定めて言はれません、自然はどうしても地方に限るのですから、見る目はどこも新しく、どこも美しく映じます。昨年は富士に行きましたが此話はもう方々の新聞や雜誌に載つて古い話になつて終ひました。

石室の內へ宿りましたが、一寸位な薄ぺらな蒲團がしきつめてありまして、其所へ壽しづめの樣に寢るんですから、其窮屈な事はお話になりません。それに蒲團が薄いので、お腹が夜中に冷えて來て、困つたり、夜が明けても思ふ樣に水が無いので、顏を洗ふ事も出來ず、と言つて口もそゝがずに居る事は氣持が惡くて忍耐出來ないものですから、口だけ茶碗二杯の水でそそいで、それで耐へて了ひました。が私は今も然う思ひます、人間が富士山へ登る時位に、艱難に耐へ得たら、どんな事にでも耐へられるだらうと。それで皆樣にもさう言ふ事です、一度は富士へ登つてごらんなさい、艱難に對しては好い經驗になりますつて。御飯なんかも滿足なものは頂けません。火が上に立ちませんから、まア麓に居ては一口だつて咽喉へは通らない樣なものです。でも赤々とした太陽が、白い雲霧の間から玉子の黃味の樣に見えた時は、何とも言れぬ好い心地です。これ又麓では味はれない心持だと思ました。

おはちめぐりも致ようと思ひましたが、丁度雨が降つて來ましたから、やめました、それで金明水は飮まれませんでしたが、銀明水の方は飮みました、小さい茶碗一杯が一錢です、それからスタンプを押して貰ふにも、何をするにも、お金がかゝります。一足ふみ出せばお金の世の中です、然し其お金もたゞ湧いて來るものではない、皆それ相當の苦勞をして始めて得られるのですから、それを思ひ、之を思へば、決して無駄づかひは出來ません。

降にはもう一望砂より外に何にもない、殆んど直立の所を降るのですから、早い事は目のまはる樣です、一つ足をふみすべらさうものなら、容易には起きなほれません、けれども砂より外に何んにも有りませんから、負傷はしたくても出來ませんです、登るに二日、降るに半日、それから汽車で東京へ歸つたのは三日目の夜の十一時頃でした。勞れる事は勞れましたが、自分の好きで歩いたのですから、そんな事は言はずに、其翌日から平常の通りに致しましたが、私には大さう宜い經驗を得た旅行でした。

梟の啼く廣尾の奧

遞信次官仲小路廉氏夫人　仲小路八重子

旅行のお話と申しましても、私どもでは餘り旅行もいたしませぬので、面白いお話もございませぬ。それに斯う云ふ廣尾の奧に住むで居りますので、買物などには不便ではございますが、その代り庭が可なり廣うございまして、御覽の通り人樣の庭も見えず、家も見えず只夜になりまして青葉がくれにちら〳〵と遠くの燈の見える位でございます、それで少しも氣のつかへる樣なことはございません。

昨今のやうに木の葉が繁りますと、夜中には梟が鳴きます、斯う云ふ所に住むで居りますから、夏になりましても、別に避暑などいたさなくとも暑さに苦しむ樣なこともございませぬ。

然し子供達には一年に一度の暑中休暇でございますし、平常は學校がありますので、旅行いたす譯にも參りませぬから、せめて斯う云ふ時にでも旅行をと存じまして、海岸などに連れて行きましたが、今年は主人が渡歐して居りますので、どちらへも參りません。

おかげ樣で子供は皆壯健でございます、と申しますのは、生活を規則正しくして居りますのと、勉めて運動して居ります賜であらうかと思ひます、日中は避暑に參つて居りましても暑うございます。夜は蚊が出て思ふ樣に仕事は出來ませんから、仕事などしようと思へば、どうしても朝早くでなくてはなりません、日中の座り仕事は、餘計に暑さを感じ、その上に眠氣が襲して、仕事も捗取りませんですから、成る丈立ち仕事で身を動かすやうにしてます。

日中に身體を動かして働いては、それこそ暑くて、女中が困るだらうと思ふ方もあるかも知りませんが、

それは大違ひでございます、夏は遊んでゴロ〳〵して居れば却つて暑さをひどく感じます。

日中の立仕事としては、緣側から、柱、鴨居に至るまで、拭き掃除をさせます位でございますが、女中たちもその方がよいと申して居ります。

それに避暑に參りましても、あの宿屋に泊るのがいやなものですから、あまり永くも居りません、平常斯う云ふ廣尾の奥に住むで氣儘に暮して居るものでございますから、宿屋の雜沓がいやで仕方ないのでございます。

旅行いたしまして、景色の好いところや、珍らしい所を見るのは好きでございますが、宿屋に着きますと直ぐ隣の室には知らない他人が居るのでございますし、それに夏のことですから、隔の襖も開け放しになつて居るので、他人樣の座敷もよく見え、自分の座敷も又外より自由に見られますゆゑ、樂々と氣まゝにして居ることが出來ません。

座敷も西洋風になつて居りますれば、隣室同志の話し聲も聞えず、一室〳〵別天地をなして居りますので居心もよろしうございますが、

日本風の座敷では、自分の座敷か、他樣の座敷か、分らない樣に、つゝぬけになつて居りますので、好い心持のしないのは當り前でございます。

それに宅では、まあどちらかと申しますと、少しもかまはない方で、金錢の出入から、子供のことに至るまで、みんな私が致すのでございます。一體如何でも良いと云ふ方でございますから、此間出立いたす時でも、前々から持參品や、又使用品などをと申ましても、何に金を持つて行けばあちらで買へるからと申して、一寸も頓着しないのでございます、それでも持つてさへ參りましたら、二重に求める必要もありませんから自分で使用品なども考へたり、又宅に聞いたりして、一室へ大行李を出して置きまして、毎日一つでも考へては、一つ入れる樣にして、まあ漸く出立いたしましたが、それでも立ちました後で膝掛を忘れましたので直に敦賀へ送ましたが、間に合ましたので喜んで居ます。

田舍では讀書よりも仕事です

遠山文學士夫人　遠山稻子

旅行は好きの方ですから、年々子供をつれては出かけますが、餘り遠くへはまゐりません、まあ近くの海岸などに、夏分出かけます位ですが、それが大さう樂で御座います。

大抵夏に出かけるのですが、是も夏と限つた譯ではなく、夏が一番お休みが長いから、夏出かける樣なわけで出來れば春なども却つて結構だと思ひます。夏の暑さに耐へられなくて、逃げ出すと言ふのでは御座いません、たゞ一年に一度位は土地や空氣の新しい所に住むのは大そう身體に効がある樣で御座います。其年の家族の健康は目に立つて見えまして、病むなどと云ふ事は殆んど御座いません。

鎌倉へも大磯へもまゐりましたが、あの樣に混雜する所よりも、少し閑靜な所をと思ひまして、葉山の方へ參つて見ました、あそこは極靜かで、質素純朴な氣風らしう御座いますから、それからは年々葉山の方へ參ります。

一昨年までは、宿をとつて居ましたが、宿では窮屈な事が多う御座いまして、思ふ樣にゆきませんので昨年は心安い漁師の家を借りまして、自炊して見ました。丁度十三になります娘に家事の見習をさすにはよろしい都合と思ひまして、下女を省いて、娘に御飯炊きと水汲みを除くの外は、何んでも致させて見ました。東京に居りますと、周圍が周圍ですから、買ひ物になどは餘りやられませんし、學校の方も有りますから、用もなるたけ省いてやつて居ますが、葉山などではどんな姿をして買ひ物をしても、周圍の人があやしみませんし、學校の方も休みですから、一日に一二時間勉

強させれば、それで宜いのですから其方も安心して、買つて來たお瓜やお茄子の新しいのを手づから料理して、頂く事を非常な樂みにして、面白く夏をすごして來ました。

地方の人と都會の人とは、其所に非常な差があると思ひます。

智識を廣く得ますには、それは都會の方が萬事機關も整うて居りますし、從つて適當な師を選ぶ事も出來ますから、田舍に比べて宜い事は、幾倍して居るかわかりませんけれど、實着な根本精神を養ふと言ふ點から申しますと、私は田舍の方が都會に優つて居ると思ひます。

只今の東京は、自由と言ふ言葉が一般に行き渡つて居まして、子を敎育するのに、親自身が餘程寬大に爲つて居ります。然し此が田舍ですと、其家の親と言ふものは、殆んど絶對の權をにぎつて居まして、一も二も親と言ふものに、子が全身を捧げて居る所、眞に美しい精神がうかゞはれます。私の知つて居る田舍の或る家の娘、私がまゐつた時、丁度十三位でしたが、其娘がもう朝は誰よりもさきに起されて、朝の用意をさせられますし、學校から歸つて來れば、本の復習どころでは無く、直ぐに本は机の上に置いて、家の用事を手傳はされます。小さい弟等が田舍の事ですから、そこらを裸足で走り廻つて、塵埃まびれに爲つて歸つて來ますと、それを一人〱足を洗つてやつたり、顏を拭いてやつたり、夜分は夜分で、弟等の寢床に行くまで、世話をしてやつて、其後始めて本を出して來て、其れを少し讀んで寢て了ひましたが、私は側に見て居て、よくまああの世話が出來る、と感心して了ひました。然し其親も其子も御自身は一向平氣で、之があたりまへの事として、やつたり、やらせたりして居るので御座います、田舍では本よりも、仕事です、學問よりも實行であります。が其實行と言ふ根本精神が堅く養はれてさへ居れば、たとへ學問の方は三年や五年後れても、其れは直ちに追ひ付く事が出來ます。然し根

本精神が堅固に養れて居ませんと、どんなに學問が廣く高くても、實行の場合に當つて倒れて了ひます、頭腦ばかり發達して、實行が伴なはない樣では何んにもなりません。

それで私は、小供の時代には田舍で育てて、多少精神が固まつてから、都會へ出して學ばせたなら、立派な人物が出來ようかと考へます。又是は身體の健康の上から言つても、たしかに幼時は田舍に置た方がよろしい樣で御座います。人情は敦厚で、空氣は清澄ですから、宜しいに相違でざいません。

周防の德山

海軍機關少將武田秀雄氏夫人　武田貢

德山は山陽線の馬關に通ずる途中の大なる驛にて、元は毛利家支藩の城下であつて、昨今急に新開した處ではありません。私も兩三年夏季の間、參つて居りましたが、誠に景色の好い處で、海岸に沿つて幾里も續いて千代の松原は何時も變らぬ千代の榮を示し、海上に幾多の小島もありて、穩に打寄する小波は、過去をさゝやくやうで、實に去り難い好景でございます。殊に一きは老松の繁りたる處を、那智森公園と申します。此の樣に土地は宜し、景色は好し、其上氣候に於ても申分のない健康地でございます。北に山を負ひ南に海を控へ、夏は海水に調和されて餘程凌ぎよく、空氣もまことに清潔でございます。併し海岸は何れの土地も夕なぎと申して、風が夕方なくなるのと、德山の名物として蚊の多いのには困りました。

交通も水陸共に便利でありますから、東京の新聞なども、今朝の分を翌日夕方に配達されます。明治三十七年秋、海軍煉炭製造所を此地に新設せられましてから、其係りの人々も多く入り込み、土地も次第に發展

いたしつゝあるやうでございます。

敎育も行きとゞいて居ります、小學校も中學校もあり、又西本願寺派の赤松氏經營の女學校などもありまして、熱心に女子敎育をして居られます、學生もかなり多いさうでございます。

今少しお話も申上たうございますが、何分長く其土地に滯在致しませんから、女子敎育の事などにつき、充分調査を致しませんゆゑ、若し誤りを世に傳へてはと恐れますから、これで御免を願ひます。

序ながら御話を申しますが、此煉炭製造所と申しますは我國に產する各種の石炭を混合し、一度粉末とし、ピッチにて固め、これを煉炭と申しまして、我軍艦に供給する軍用炭を製造する海軍の役所であります。澤山の人が掛つて爲て居ります。

氣が利かぬ代り人情に厚い

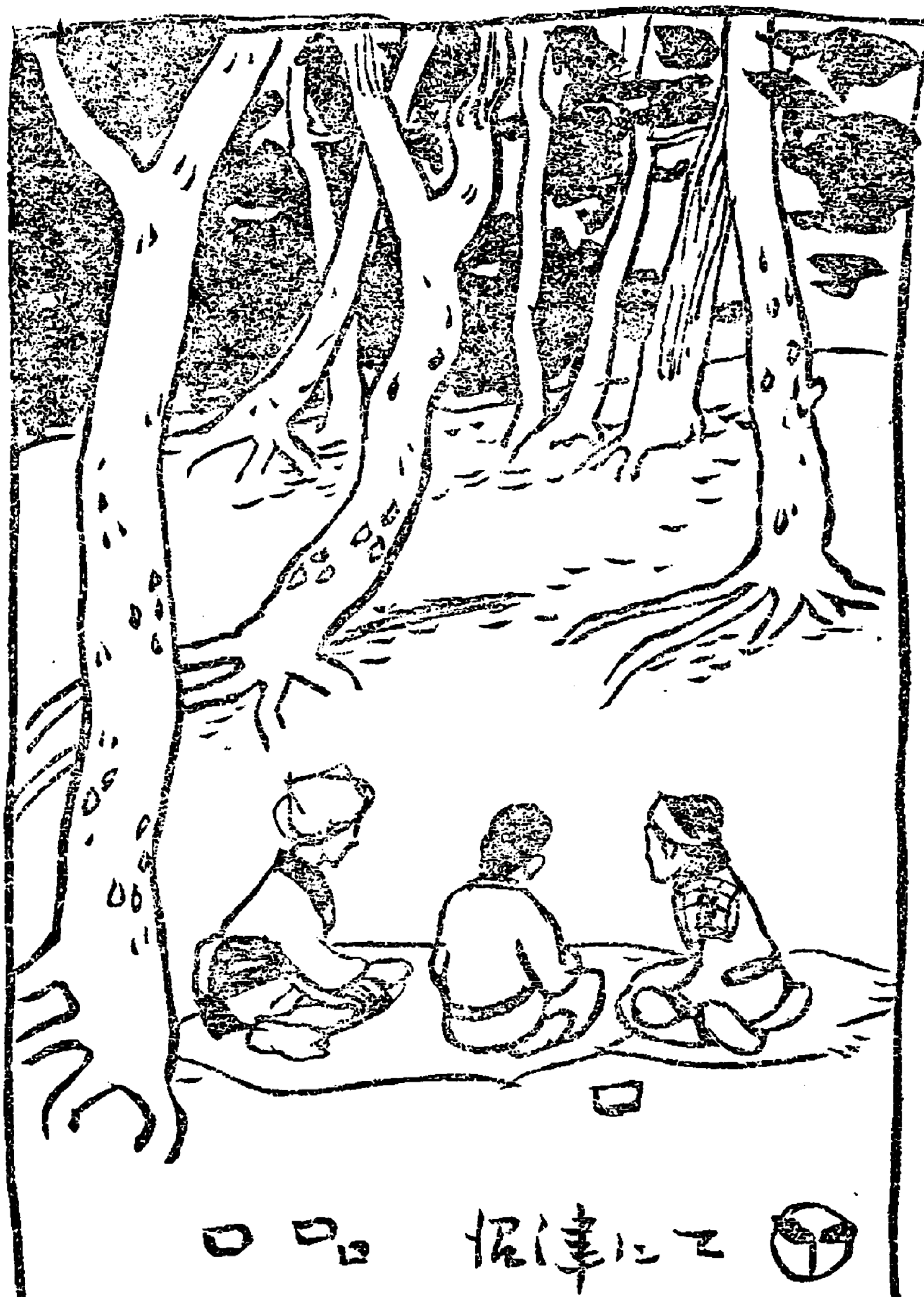
太平生命保險會社々長中村靜嘉氏夫人　中村若子

何も彼も氣の付くといふ婦人は、割合に少いものでございますが、殊に地方の方は然うなやうでございます。めはしの届く者であると思つたのでさへ、東京に連れて來て見ますと、矢張何處か間の抜けた處があるやうでございます。一般に東京の方は、眼の働きが違ひます。地方の方は、或る一事にハッと早く氣が付いても、逸早く形の上に表はすと云ふことが出來ないのです、つまり表情の力が足りないのでございますね。

此の間、鄉里の金澤から親類の婦人が參りました時國の名物だとか申しまして、子供に菓子を下さいました、それもいろ〳〵お話をして歸りがけに出されたのでありました。それから其婦人が歸つてから、菓子を出して見ましたが、子供等が何だか酒の香がすると云つて食べません、よく〳〵見ますと黴が來てゐるので

でざいます。思ひ合して見ますと、それも尤もなんです、右の婦人が東京へ參られたのは、もう二十日も以前で、來ると氣分が勝れなかつた爲め、早々に伺ひかねたと云ふお話でしたから、それでつまりお菓子も二十日以上貯へてあつた譯です、此節柄何んなものでも二十日以上も其ままにして置いたら不良なるのは當然でございます。

一體田舍の人は義理堅いとでも申すのでございませうか、能く此んな事がございます、其お菓子でも上京された時に、御自分の體が不快ければ、使ひに依賴しても宜いのですのに、自分で持つて來なければ義理が濟まぬと思つたものでせう。



其通り人情には厚いのですけれど、氣が利きません其代り都會の人は一般に薄情であると思ひます、それは外でもありません、都會の方は地方の方と違つて一ヶ所に永住することが少ない、地方であつてみれば祖先傳來の家に住んで、祖先傳來の家業を營んで、其生れ故郷を離れるなど云ふことは容易にありません。從つて一旦交誼を

結んだ間柄は、生涯を通じて渝りがありません、東京に參りましても、同鄕人と云へば兄弟か親戚のやうに親しい感がいたします。都會の人は一定の場所に住んでゐることは極めて少いのです、それは故意に然うするのでなく、職業の都合なり、商業の都合なり、已むを得ず然うなるのであります、昨日まで隣に居た方が今日は他區他國の人となると云ふ有樣でありますから隣近所の方でもろく〳〵顏も知らず、偶ま對ひ合ひましても、路傍の人と同じやうに見るので、自然人情も薄くなるものかと思ひます。

幼い時は山へ、成長すれば海へ

衆議院議員岸清一氏夫人　岸すみ子

私は旅行好きと名を取つて居ます通り、旅行なれば方々致しました、然し之は自然の風景に接して、其れを愛でると云ふことが、第一の目的では有りませんのです私はいつも子供の爲の旅行を致すに過ぎません。

ですから子供の生理上小さいうちは山の方に連れて行きましたし、大きく成つてからは海の方へ連れて行く樣になりました。つまり、かうして子供に見學を廣くさせ、實地に付いて少しでも硏究の助けにする樣にから言ふ方法を取りましたのです。ですが煤煙の都會に居て、時に田舍の靜かな自然に接しますと、實に心がゆつくりと澄み渡る樣に思はれます。で私など東京から地方へ出てまゐりますと、何所も彼所も閑靜で好く見えます。別に此所がと取りたつてお話する所のない代り、惡いと思つた所も御座いません、殊に目に付くのは田舍の水の澄んで居る事です。東京では隅田川とか、江戸川とか、隨分名高い河が有りますが、之等の河水は、皆濁りかへつて居ります。然し田舍にゆきますと、野に流れてゐる水でも、町や村を通つてゐ

る水でも、谷間にせかれてゐる水でも、どんな水でも皆水晶の樣に透徹つて居ますので、見ても大そう心地よう御座います。

餘り雜沓するからいけませんが、あれがもし閑靜で有つたら、箱根なども、實に好い所と思ひます。箱根で見る野百合の美しさは、今も忘れられぬ程であります。樹々の綠も、水の色もいかにも冴え冴えとしてのびやかな心持になりました。蘆の湖にもまゐりましたが、あの樣な山中で見る湖の水の色は、いかにも澄み渡つた靜かなもので御座います。

海の方へは、子供が皆大きく成りましてから連て參りますが、海も亦山と異つた趣があつて面白う御座います、私共では以前大磯や、鎌倉の方へ參りましたがどうも大磯や鎌倉の海邊は雜沓しまして、子供の教育上、よろしくないと思ひます、してつひ近頃では葉山の方へまゐりますが、あそこは海も割合に遠淺ですし人も餘り入りこまず、まだ田舍の村ですから、子供が勉强するには、實に好い所であります。

輕井澤は、大層夏に好い所ださうですが、私は未だまゐりません、一度はまゐらうと思つて居ります。

私は極のお話下手でして、何んにも取りとめてお話も出來ずほんとに御氣の毒で御座います。

信飛境上の深山旅行

女子英學塾講師　辻村靖子

女子英學塾の辻村先生にお話を伺ひました處、差當りお話はなさいませんでしたけれど、前年信濃から飛驒に越えられた時の紀行をお示し下さいました。當時十日に渡つた旅行記ですから、全文は長うございますけれど、今、お話の代りに其中の一節を左に掲げます。信濃飛驒の境は、所謂日本アルプスの南の一角とも云ふべき深山ですから、女子で旅行を果されたのは珍しい事であらうと思ひます。

（訪問記者、T、Y女）

上高知溫泉。

西は飛驒境の山連り、東は霞澤山、軒端に聳ゆ。源

を鎗が岳常念か岳に發する梓川は、こゝに遠しろき峽谷を成し、河の右岸に靈泉あり。
河を夾みて林あり、水と草と潤澤なる所、牛馬四五百頭を放牧す。
今日は逗留なれば、山と水との美觀に飽かむと、足は重けれど草履をはきていづ。栂樅の林を左に、梓の寒流を右にせる、一筋道、生茂れる熊笹の中に車百合の濃紅うつぼ草、虎尾などの薄紫の短き夏に咲き誇れるを摘みながら、橋の下の巨石に腰かけて逝く水の面に見恍るゝこと多時、底は花崗の碎片と粘板岩の黒きとを交へて澄みきりたる河水は、たゞ淡藍を解きて流すかとばかり思はる。「瞬きしは夕づゝか、光りたるは夕の螢か」とはよく想ひやりしよ。
南、燒岳の噴煙と、遠き乘鞍の白雪とを望みつゝ、白樺の並木の中を、元來し途に還る。向岸の川柳の樹陰に、小馬あり二三頭、逆に水に影浸すなり。
信濃より飛驒に越ゆる路二つあり。一は燒岳の北を超えて、蒲田の溫泉に至る者、一は南をこえて平湯の溫泉に出づる者、我等は後者を選ばむとす。
上り框に腰かけて、草鞋をつけつゝふとみれば、土間に盥を伏せたるがあり。「鷄か」ととへば「あらず」と云ひつゝあけてみするは、小やかなる鼠色の毛鞠ほどの小兎なり、今朝早く畑へ行きしに蕪の根に二羽潜りたりしを、一羽は嘉門次の獵犬に咬へられしと云ふ、呉れぬかと云へば宿の人快く諾ひたり、袂に入れていでたつ。
栂林の青嵐に衣を吹かせ、朝暾の光を浴びつゝその樂しさ云ふばかりなし、東に梓の峽流を數百尺の脚下にきき、穹蒼たゞこれ碧婆娑たる、落葉濶葉樹帶を過ぐ、綠濃なる山毛欅の樹、銀白色せるみねばりの巨幹、大楢の葉の掌の如き、楓の葉の錢の如く圓き、薄き青地の錦の帖を引きはえたるやうなり。秋の美觀は抑いかばかりなるべき。
何と云ふ鳥か玉を轉す如き好音にてさへづれば、小猫の如き奇異なる鳴聲して叫ぶあり。所々地辷りして土石崩れ落ちし崖道を傳うて、やがて白骨より平湯に

通ずる道に着す。
右折して細池の上に水を得たれば、狗賓餅に似たる團飯を食ふ。仰ぎみる目睫の間には、頂上の黒烟、巨柱の如く熾にたちて、中腹の偃松は蕉茶色の氈を布きたらむが如く、見るめ無慘に枯渇し盡しぬ。鬱葱たる麓の密林も、逃避るゝ途なき運命を、座ながら待つに似たる哉、慘、凄絶。信濃の地を離れて、白檜帶の美觀はこゝに盡く。蒼白色せるしらびの老樹稚樹の、參差と立てる林徑を行きて、小川を渉り阪路を降るとき漸く夏の暑さを感じ、緑穰々たる稗田、石を載せたる白屋、脚下にみゆ、蕞爾たる小村落は卽ち、

飛騨の吉城郡平湯、岡田榮太郎方に投宿す。疊青く木口の香失せぬ新建築の、欄間の透し彫、障子の骨の臘色塗なるをみしとき、人里に近くなりしが、嬉しくも惜しくも感じたり。

可惜、溫泉の外湯なるは如何にと云ふに、氣候極めて寒ければ、溫泉を田に引かねば、稗實らざるが故とぞ、さもあるべし。浴室は山下の緑樹の陰重なる所、小岳の上に建ちたる、四間四面のかまなりもみえ、浴客の貸下駄はきて、石坂路を往來するもみえ、窓口よりは溫げに、濃なる湯氣の立昇るみゆ。

「夕食を早く」と云へば、客の前にも手拭かぶりて、雪袴つけたるまゝの宿の女房が、「何ぢやな夕飯かいな早うして上げますわいな。」愛嬌ある語音の、山一つ隔てし信州とは、著しき違ひに、大方ならず驚かされたり。

夜に入りて人の居ぬころに入浴に行く。螢とぶこと頻也。案の定薄着の一騷ぎは已みて、たゞ二人ばかり土地の婦らしきが入り居れり。浴槽は溫きと熱きと二槽にわけ、元樋よりは滾々と、小熱き溫泉が絶えず注ぐ。

思ふに深雪ふり埋みて幾月消えぬ冬の日に、二月の陽春をとこしへに籠むるは蓋この靈泉か、蒼々たる天の恩み、偏に都人に厚からんや。

食膳は黒き椀に、焚きたての飯をすこし盛り、今摘みいでしやうなる菜の羹汁、この心盡しは浴客の爲の

みにて、土地の人は稗を常食とし、蕪を副食物とす。外には葱なども無し。「其稗の飯すこし」と云へば、給仕の女微笑みながら持て來たる、之も焚き立なれば、女郎花の露に霑ひたる如くなれど、二箸と下すべくもなし。

蓋ての國になき物三つ、汽車無く、海無く、縣廳なし、土地瘠せ、氣候寒き山中の民の、宛然原始の民の如く、粗食に甘んじ勤勞にたへ、男女共に骨骼の逞ましげにて、長壽無病と云ふ方よりすれば、日本全國に比なしと聞く、妙ならずや、名物はとゝへば「笹巻團子と云ふがあり」と云ふ。

「夫は妙なり、すぐに買はせむ」と云へば「今直ぐにと云うてはござりませぬ、注文をきいて、夫から碓くぢや」と眞顔にて對へくれしよ。

「では殘念ながら止めます、是から淅いで蒸して搗ねて、夫を待つも退屈なり。まさかお團子に引かれて逗留もできぬ」と、此方が笑へば彼方も笑ふ。

（信飛紀行の一節）

暑い方に向ふ

東京商業會議所會頭中野武營氏夫人　中野仙子

私は御覽の通り昔もので、どちらかと云へば、女大學流の教育を受けて大きくなつたものですが、私共のあなた位の時分には、夏どんなに熱からうと云うて特別に避暑になんていふことは、トントございませんでした。避暑避寒などといふやうなことは、なんでも極近頃になつて、西洋風俗の影響をうけて、新らしく出來た一つの風習でありまして、それが時代の虚榮心と結びついて、驚くべき急潮な勢力を以て、社會の上下に流行を來たし、今日では中流以上の家庭で、夏になつて家にでも引籠つて居ようものなら、格別づれの吝

齋家が、時代遅れの偏人のやうに思はれる位でありま
す。一體私は避暑などにてそ出かけたことはございませんが、只子供の休暇などを利用して、家内全體で松山に歸鄕いたして居ます。昨年は主人が不在中と私が病氣したものですから、參らずに終ひました、本年は參る考へで居ります、皆さんから見ると態々暑い方へ向つて行くのですから追暑です。

汽車中長いものですから、孫などが飽きまして、困る時などもございます。一家族と申しましても、他の方と違ひまして、多勢なものですから、それはそれはまた賑やかで面白うございます。

此一家族で歸鄕して墓參するのと、親類を訪問するのが、私の何よりの慰安の一つでございます。

都會のせゝこましさから離れて、瀨戸內海を見ると生きかへつたやうな氣持ちになります、景色の好い波の靜かな、そして、古跡に富んだ所でございますから朝に安藝の嚴島に參詣して、昔清盛が全盛を思ひ、陶晴賢が一敗地にまみれたる古戰場を偲び、夕には道後の溫泉に浴して、一日の勞を醫し、船に歸つて甲板上に涼を納れ、波間にゆるぎ出づる月を眺めるなど、それはよい處でございます。わざ〳〵遊びに來る方も多うございます。

嫁して後、忍耐強い京都婦人

東京寶石會社支配人松岡順吉氏夫人　松岡いと子

私は京都生れでございますから其所には一番長く、其他各地方にも參つて居りました。京都は土地柄の所爲か、婦人方の動作などが、誠に優しくて、女らしいのですが、東京の婦人方に比べて見ますと、煮え切らぬと申すやうな處があります。けれども、一度嫁にでも參りますれば、よしや、行く先の家より、快から

ぬ待遇は受けましても、非常な困難の事に出合ひました時にでも、我慢する點に於ては、屹度東京の婦人よりは强いと思ひます、全く辛棒强いのであります、こんなに云ふと我田引水の樣に御思ひになるでせうが、何誰でも一度京都に住まれた方は、然うお思ひだらうと考へます。京都では日常表付の下駄を穿いて居られる方は殆んどないと申してよい位でありますが、それが東京に參りますと、女學生の方は靴で、他の婦人方などは重ね草履や、ゴム草履やら、又表付の下駄で、山桐の絹天の緒をすげたやうなのを穿いて居られるのも少なくありませず。一事が萬事で、衣服其他の調度に至る迄、總じて東京が奢侈に流れてゐるやうに見受けます。

東京の方は一般から申すと、交際も中々上手で、僅の內に心安くなるやうでございます、永く其交際が續くか何うか、其邊は或は地方の方が優るかも知れませんが、東京の婦人方の交際上手には一吞みに吞まれさうでございます。

奈良へも一寸參つて居りましたが、委しいことは申上られませんが、奈良は古來の歷史的土地で直ぐ藤原氏や何かの事を思ひ出させます、それから自然の感化かも知れませんが、婦人方全體を通じて、何となく優美の點が多いやうに感じました。

岐阜は、名古屋の近くで、萬事が名古屋を中心といたして居るやうな處ですから、婦人方の氣風とは申されませんが、何うも世間で申す名古屋風と云ふ處がありはしないか、一寸交際のしよい、其代り深入りのしがたいと申したやうな事であります、何うも言行が一致せぬのが缺點ではないかと思はれます、また年も若い無邪氣であるべき娘さん達でも、心に表裏があるかと存じます。

輕井澤より

去る十一日此地に參り申し候、日中は隨分暑き事も御座候共、朝夕は稍寒さを覺え申候程に御座候殊に夕も八時頃に相成候へば、俄に山より嵐吹下し淋しき秋を思ひ申候、小川の水も冷たきに過ぎ申候、野には淸き桔梗、百合、名知らぬ白き花一面に御座候、殊に鶯ロゼン、クク一などの小鳥は、野徑を緣とる叢、藪などに頻りに聞かれ申候、雨は多く候、併し美しき雨に候、月も淸く候、其他淺間の紅き焰、日沒、横雲、鳴動など皆吾が心を惹き申候。

（八雲女）

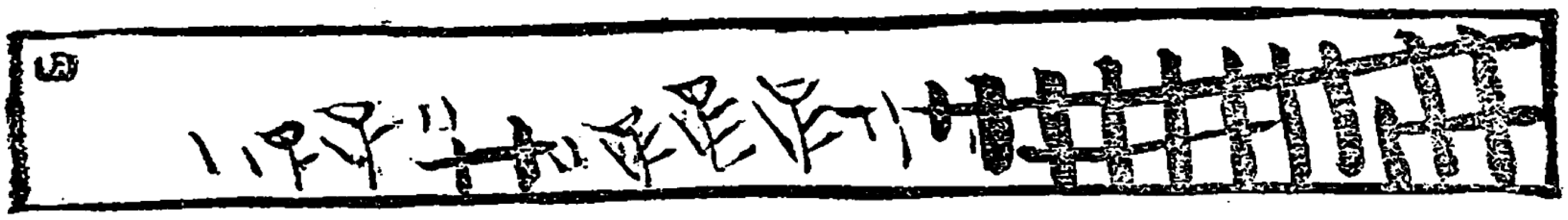
漁夫の母

小栗籌子

以前私共は、或る海邊の禪宗寺に間借をして、其處の侘住居に寂しい一冬を暮した事があつた。

私はよく自分に手籠など提げて、魚や野菜を買ひに出掛けた。山門前の汐入橋といふ小さな石橋を渡ると、直ぐ村の家つゞきになつた。村の戸數は三百足らずで、其三分の二は此禪寺の檀家であつた村民の九分以上は殆ど漁師と云つても可い。其殘りの一分足らずが、此地へ世間から入込む病人や保養者相手の小商人である。又漁師の家族が留守居ながらの內職に、駄菓子や煙草位を並べてゐるのもある。けれども、漁師の家といへばまづ仕舞屋が多い。嫁や婆さんが子供の守を爲ながら、一日網の手入れ位を仕事にして居る。町通り——といつても誠に狹苦しい穢い——其を通ると、何時でも何處かの家から、往來の眞中に絲縒機械を持出して、がら〳〵網絲を綯つて居ない事は無い。通行人の迷惑は言ふまでもないが、其絲がやがて彼等の世渡りの綱であるといふので、誰も何ともいふ者は無い。「邪魔になつたら避けて通らつしやい。」といふやうな顏をして、平氣で鼻唄なぞ唄つて機械をまはして居る。

「世間のお客を相手に爲るやうになつてから、此地の者も大分狡くなつて油斷がならん。お前さん達も氣を付けんと、馬鹿な目に遭ふぞな。」と寺の和尚さんは能く注意してくれた。なる程、然う思つて見れば、私など買物をしても、土地の者より幾らか見掛取を爲るやうにも思はれる。しかし、風俗は概して敦朴であつた。殊に恁ういふ暖い海邊の漁師町に有勝な、淫靡の風の無いのが、何より私には



嬉しかつた。

一箇月許りも住む中に、私は或る漁師の婆さんと顔馴染になつた。白髪といひ皺といひ、もう七十の上らしく思はれるが、其達者な事は大抵の若い者に負けない。毎朝少しばかりの魚を擔いで來ては、私どもの間借をしてゐる窓の下から、

「今日はお客さん、お魚はどうだな」。と決つて聲を掛ける。元氣な婆さんで、名はおりようといつた。窓の下に荷籠をおろして、一服しながら世間話をして行く事もつあた。直き隣村の百姓家から此地の漁師へ嫁入つて來て、配偶に死なれてからといふもの、今の此棒手商ひを始めて、息子達をそれぞれ一人前の漁師に育て上げた。今は嫁も孫も有る。こんな商賣なぞ何うでも可いのだが、これも性分と見えて、自分で止められないと云つて話した。

「豪いわねえ、毎日……」

「これも慾と二人がゝりでなも。」と鐵漿の脫げた疎な歯を出して笑つた。

「お客さん方知んなれまいが、漁師はそりや面白い家業だぞな。爺さ達あ暗い中から沖へ出て了ふし、後は一日嬶さの天下で、まあ磯へ行つて遊び半分に貝でも拾ふ位が仕事だがな。爺さ達あ爺さ達で、板子一枚下地獄だいふ代りにや、陸ぢや分らん樂しみが有るだな。まあ三人なり五人なり何處の家で男といふ男は、十二三の小供まで皆一緒に舟へ乘込んでな、是から最つと先きになると、朝西風がソヨ〳〵吹いとる中にズッと沖へのして了ふ。舟の中にはお飯櫃も焜爐も何も彼もちやあんと用意がしてあつて、午飯は漁り立てのピチ〳〵したのでやらかす。日によつちやお前さん、五兩と六兩は譯無しだにな。晩にや帆を張つて放といつても、ちやあんと好い工合に南風が吹いて、濱まで直きに來

て了ふしな、皆仰向きにドテンと舟の中へデングリ返つて、鼻唄唄つたり、祭文語つたり、そりや暢氣なもんで。漁のあつた時にや、頭の禿げた可い爺さままでが騒いで歸るでな、濱へ迎ひに出てる媽さや子供にも直ぐ分るがな。それから皆がゝりで船を上げて置いて、一風呂入つてから家中が一緒に晩飯を食べる。そんな時にや本當に漁師ほど仕合な者は無いと思ふがな。」と目を細くして語つた。

「何處の家でも皆然うで……本當に樂しみだにな、漁師は。」と婆さんは附加へた。

「此土地の人は大方皆然うした淡い樂しい生活を送つてゐるのである。

すると、其れから四五日目であつた。午過から俄に眞西の風が吹募つて、冬の海は眞白な浪を揚げた。まだ一月の末といふに、時ならぬ雷鳴さへして、物凄い空模樣となつた。

「海邊ではようこんな氣狂ひ日和があるもんだて。」と和尚さんは庫裡の大火鉢に倚掛りながら外を眺めて言つた。

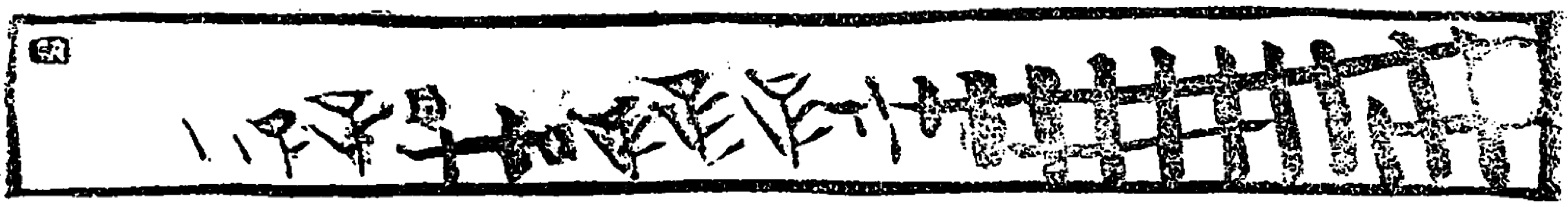
其晩から翌日一日空は荒れて〳〵荒れ通した。何所の船が破れたの、流されたの、行方が知れぬのと、村中は煮返るやうに騒いだ。

「豪い事ぢや無いか。」と和尚さんは私共の所へ話しに來て、

「大分船も破れた樣子だが、生憎と又村の者は遠稼ぎに出たのが多いげなで、何家でも心配し切つとる。どうかな、皆が皆無事で歸りや可いが……」と言つた。

それでも夕方からは風も凪いだ。九時頃にはケロリと晴れて了つて、海も里も水のやうな雨後の月に美しく照された。

毎も宵寢の和尚さんが一寢入して、ふと目を覺ました十一時頃、慌しく庫裡の小門を叩く音がし



た。和尚さんは寢入端の小僧を起すのも可哀さうに思つて、自分で起きた。村の者が五六人、提燈を點けてドヤ〳〵詰めかけた、「何だえ今頃………」と和尚さんは、其たゞならぬ樣子に驚いて尋ねた。村の漁船は一同〇〇港へ避難、乘組も皆無事、只其中の一艘だけが行方不明といふ電報が今入つた其一艘の安否が氣掛りであるから、聖天樣のお鬮を頂きたいと言ふのであつた。和尚さんは直ぐ寢衣の上へ法服をはおつて、眞暗な本堂の横のお厨子に燈明を供へると、毎ものよく通る聲で理趣分を高らかに誦した。誦經の節に連れて早目に刻む太皷の音は、シンとした霜夜の村に殷々と響き渡つた。私は未だ火の氣の殘つた自分の所の火鉢に炭を注いで、庫裡へ持つて行つた、誦經が濟むと鬮を引いて、和尚さんは皆を連れて庫裡へ歸つて來た。

「始め凶にして後吉、枯木春光を待つとある、な、枯木は枯れ木だ、春光は春の光、枯れ木が春の光を待つて生きかへるといふ意味合だ、此お鬮の表で見ると、十中八九は助かるものと見て可いの。今に乾度何とか知らせがあらうで、まあ安心さつしやい。」

和尚さんの聲は重く底力が有つて、深く信ずるもののあるやうに賴もしく聞えた。

「然うだらあかなん……」と、皆の背後から心配さうに顫聲で言つたのはおりよう婆さんであつた。

私は強く胸を打たれた。婆さんも其不安な家族の一人であるらしかつた。

「まあ〳〵心配さつしやるな、大丈夫だに。」と、和尚さんは重ねて言つた。

皆は最う八分通り安心をして、口々に禮を述べてゾロ〳〵歸つて行く、婆さんも力無げにトボ〳〵と其後に續いた。私は、一刻も早く吉い報らせがあつて、明日の朝は又、例もの元氣なおりよう婆さんに會ひたいものだと心から念じた。

賣り桑

水野仙子

「今日は」とそろ〳〵軒の日除けに當つて居た夕日の色が褪めかけて來た頃、泉屋と暖簾の出た店からづつと勝手の方へはいつて來た男があつた。一體此邊の屋造りは皆、表から裏へつき抜けられるやうに細い庭が出來て居る。だから大抵店と臺所の間にこゝらの人が一般に勝手と言つて居る茶の間があつて、一寸した用事の人は大抵其上り框に腰をかけて話をする。S町と言つて東北も餘程南の方へ傾いて居り、試に地圖を廣げて見ると、青森線の沿道に當つてぽつちりとした其名の町を見出すことが出來る。殆ど商家から成立つて居る町で、何屋々々、何屋の旦那何屋の娘と屋號ばかりで通つて居て、ふとした時に何屋は何ていふ苗字でしたつけね、などと聞き合ふことが珍らしくない。學校へ行く子供でも、何屋の子とわかつて居ないのは、裏店の子として蔑れる連中か、若しくは地方から入り込んだ官員の子供に決つて居る。借家住居の勞働人は別として、格子でも控へて金貸しをやつて居るといふ家の外は、小さかれ大きかれ皆店を持つて居る。近いところに半里と離れずに、此町を圍んで居る村々が對手なのだ。

さて今、泉やの奥にはいつて來た男は、

「よく續きやすなア」とお天氣の挨拶をして、上り框に腰を下して股引の足を組んだ。長火鉢の前に坐つて居た盲目の隱居は聞き耳をたてゝお母は見馴れぬ村人なので一寸怪訝な顏をして居ると、

「あー堺屋さんから聞いて來やしたがな、お宅にや夏桑の賣るのがあるつて話ですが……」

はあ」と長く返事を引いて、お母は今年もいよ〱時節が來たと思つた。

つひ六七年の昔まで、商業の見習ひに出て息子が家に居なかつた頃は、無人ではあるしするので店は出さずに置いた。その代り年々人頼みをしては蠶を飼つて、幾許か纏つた金を拵へて居たが、息子が目出度奉公をすまして歸つて、嫁も取り店も出し、何かと用も殖えたので、昔のやうに大仕掛けの養蠶が出來なくなつた。けれども猶お母は自分の手一つで出來る位の蠶を飼つて、それで絹を織つては末娘の晴着を染めたりして居たが、それも一通り揃つてからは、よる年ではあるしするので二三年この方はふつつりそれをやめて、その代りに桑を仕立てて年々それを賣るのを樂しみにして居る。

胡瓜や玉蜀黍のやうなものを少し作つて、汁の實なども大方は八百屋の手を借りずにすんだ。桑の葉の芽ぐむ頃から老人夫婦はよくそれを樂しみにして語り合つた。かうして買ひ手がちら〱見え出す頃になると、仲買ひの二三人も必ずやつて來る。一貫目幾許といふのと、畑ならば幾許といふのがあつて、貫目は日に〱値の上り下りはあれ、相場が決つて居るから大抵間違ひがないけれども、畑となると賣り手買ひ手の見積りが違つて、お互に高く賣りたい安く買ひたいでなか〱相談が纏らない。やう〱折れ合つて手を打つたところで、仲買ひにしろ直接買ひにしろ、手金の幾許かを置いていそ〱と歸つて行く。蠶の精がよくて桑がぽん〱賣れる時には、午前と午後で一貫目で二三錢も違つて來る。さうして畑の隅に風除けに置かれた立て通しの硬い葉までが飛ぶやうに賣れてしまふ。また濕氣續きで蠶の成長が思はしくなく、遣り切れなくなつて彼處でも捨てた此處でも捨てたといふ聲を聞くと、約束濟みの桑までが手金流れとなつて、いつまでも繁り合つた葉が畑に殘されることも珍らしくない。泉屋に限らず店のある家で桑畑を持つて居るのが可なりあるので、何屋はもう何處と

約束が濟んだ、何屋の桑は全部賣れてしまつたなどと、仲買ひの常として方々へ行つては其家の氣を揉ませて安く買はうとする。尤も殘つたら最後一年中の手入れがふいになつてしまふのだから、賣り手の方でもうつかりしては居られないのだ。盆前ではあり町中がなんとなく活氣がたつのは此頃である。

泉屋ハ末娘のお豐は此節お針をやすんで居る。何や彼やと忙しく、手金の請取を書いたり貫目の計算やらをやらせられて、また小僧が店の用で忙しくて手が離せない時なぞ、お母と一緒に畑に出て桑摘む女を見たりした。

明日の朝七時までに幾々貫目を摘んでくれと宵のうちに仲買のところから通知があると、小僧はいつも提灯をつけて裏長屋の女達を賴みにやられた。土方や日雇人の嬶達が、絣を取る前の朝仕事に、子供を連れ籠を背負つて喜んでやつて來る。

僅かばかりの手間を爭つて、女どもはたわいのない話をして蓮葉に笑ひながら、淫らな唄をうたつたり、泣き出す子供を叱りつけたり、わさくくと綠の葉を動かしては繁りに繁つた畝の中にはいつて行く。

お豐は其間に、叢を分けて苺の赤い實を尋ねたり、畑の隅に丹波酸漿を見出して喜んだりして居る莚の上に赤兒の守をしながらお握飯を喰べて居た子供が、やがて赤兒を放つたらかして遊びに出かけるのを、此奴め！と追ひかけて行つて、いきなり頭を叩いて泣かせる母親や、口から泡を飛ばしながら隣りの夫婦の惡口を語つて聞かせる女、むしくくと葉を摘む音が暫く續くと、玉蜀黍畑の方を見廻りに行つたお母が戻つて來て、

「もう大概出來たかも知れないから、貴女達、そろ〱やめてもよからうぞい」と聲をかける。それから猶二三分はむし〱する音が聞えて居るが、そのうちに買ひ主の姿も見え、お母が大秤衡を持ち出すと、それ〴〵畝の間に置いた自分の籠を抱へ出して來る。

「さア片つぱしから」と買ひ主の男が急きたてると、

「さア〱」とお母も錘を持つて立つて居る。

「五貫八百？」と最初の聲が起ると、

「五貫八百」

「五貫八百」と順々に聲がうつつて行く。

「お末さんかい、五貫八百……隨分摘んだない貴女」

「五貫五百！」

「五貫二百！」

「そら次々！」

「六貫――六貫一百！」

「ほう！誰れだい〱」

「隣りの小母さア、貴女も早く衡けて貰ひなんしょよ」

「五貫！」

「五貫七百五十？」

お豐は頻りに鉛筆を嘗めて呼びあげる貫目を一々手帳に記す。各々が摘んだ貫目を附木に書きつけ



たのを貰つて、摘子達は畑のあちこちに散れて居た、子供を呼び集めて歸つて行く。空籠に赤兒を入れて背負つて行く女もあつた。畑の隅に草を折り敷いて算盤を彈いて居た仲買ひと村人が、勢ひよく手を打つたと思ふとやをら起ちあがつて、漆の樹につないで置いた馬を曳きよせる。まだ露の乾き切らぬ葉を莚に締めて兩の背に積みあげると、馬は心得てとつ〳〵と歩き出すのを、どう〳〵と止めて置いて、

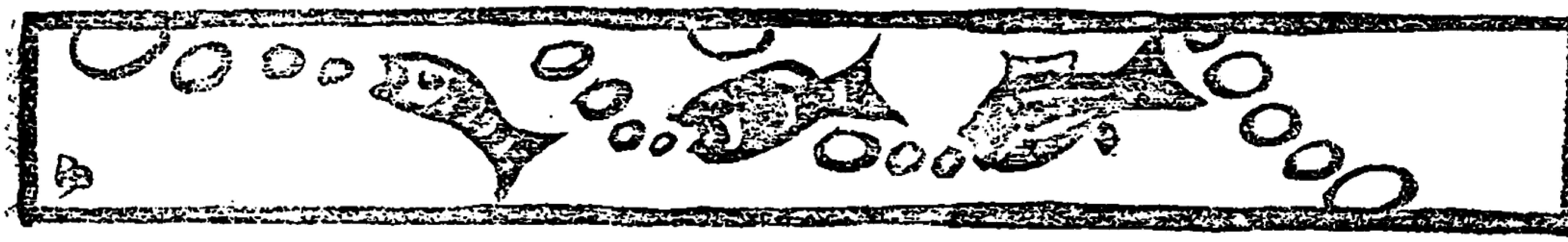
「それぢやア半金だけ茲であげて置きやす、殘金は全部受渡しが濟んでからのことゝ、ね、ようでせう、多分明後日の朝までに取りに來ようと思ひやすから」と赤く燒けた胸元をはだけて、首から掛けた財布の紐をくる〳〵と解き、皺くちやの紙幣の幾枚かを渡してから、叢の中に投げて置いた笠を拾ひあげて手綱を取る。仲買ひが猶殘りの畑の相談をお母に持ちかけて居るところへ、

「お天氣!」とぎし〳〵通りかけたのは、近くの農家から桃を買ひ出して來る棒手振りである。二つの籠に滿ちた其鮮かな色を見ると、無情に欲しくなつてお豐はいつも桃賣りの男を草の道に擁した。

とかくして日はおひ〳〵にぢり〳〵と光りの强さを增して來るのである。

凋れるのを恐れて大抵桑摘みは朝のうちか夕方かに決つて居た。摘み賃を渡さなければならないので、泉屋の夕方は小錢を數へる音と我先に爭ふ女達の聲が喧しかつた。此時はお豐が小學校で習つた筆算がよく役に立つた。

お母とお豐の間に其樣な忙しい日が續くうちに、町のうちは日に〳〵ぞよめいて來て、荒物店の軒には靑や赤で彩つた盆提灯が下がる。生靈棚に供へる爲めの、若布や眞菰や燈蓋燈心、そのやうな細かなものまで揃へられると、佛を祭る用意を整へるために出て來る村人が、十時時分から三時頃まで



の間は殆ど町に一ぱいとなる。負けろと値切る聲、負からぬといふ小僧、慾深く客を呼び込む聲や、出て行く客を負けるからと大聲で呼びかへす主人もある。値切るものは掛け値をするものと定つて居る弊害で、僅かばかりの賣り買ひにも甚だしく骨が折れた。

年の暮と盆前とは商家にとつては最も忙しい時である。勝手では中元の贈り物の取り遣り、お寺への勤めもあれば、お墓に燈籠をたてて花も挿さなければならず、召使ひどもに仕着せの浴衣も縫はなければならぬ。

お豊は畑に出て歸つてはせつせとよく針を運ばした。座敷まで手に取るやうに聞える町の動搖に耳を貸しながら、つひうつら／＼となりかけてははつとして針を持ち直した。人の日か自分の日かわからぬやうな日が二三日續く。

併し間違ひもなく盂蘭盆は來た。先祖へのお參りもすましてから、まづ一息とほつとした時に、お豊は母から纏つた小使ひと、賣り桑の利益のうちからとて日頃望んで居た羽二重の帶皮を買ふことを許された。

糊の硬い浴衣を出して、心靜に風呂につかつて居ると、いづくともなく人の心をそゝるやうな盆踊りの太皷が響く。



海岸

河井酔茗



ちぬの浦

ちぬの浦は泉州堺の濱と云ふ、私の故郷であるから最も印象が深い、けれども特記するほど景色が變つてゐるのではない、山遠く、浪平かに、眠つてゐるやうな内海の一部である、印象の深いのは、私が其處に生て、其處に育つたからであらう、少年の時に萬葉集を讀んで、知努男や、菟日男が、津の國の蘆屋未通女を戀したと云ふ夢のやうな歌語りが甚く私の心を動かし、見ない昔に憧

憬れて、自らちぬ男と名乘つた時代もあつた。ちぬの浦の景色よりも、矢張り傳説とか、詩歌とか云ふものに結びつけて、印象を深く遺したのである。

高師の濱

かけしや袖の濡れもこそすれと讀まれた歌の高師の濱、今は濱寺公園となつて、夏は人間で埋まるやうになつた。私は堺の濱よりも、景色としては濱寺の方を愛した、それは云ふまでもなく、松原もあり、海も清く、沙も白いからである、十年以前の濱寺は、まだ高師の濱のまゝその面影があつた、會ふ人は、松葉掻きの女くらゐなもので、殆んど都人士の足跡は無かつた今のやうになつては、一種の遊園地であつて、天然を娛まうとする者には、却つて近づき難いのである、寧ろ遠く吹飯の浦邊りまで足を延ばした方が、和泉の海岸としては宜い眺望であらう。

須磨と舞子

須磨、舞子、垂水、三地とも曾遊の地である、之に明石を加へたら、攝播の海岸を語るに足るのであるが、凡て海岸に淡路といふ島があつて、攝播一帶の海岸に趣を添えてゐる。明石邊からは殊に近いから、相呼應し得るやうな島山の姿と、コバルト色の海の水と、海鳥のやうな白い帆と、ちやんと繪に描いた通りの景致が、當時の私の心を喜ばした。幼稚な繪畫を見て、例も實地を想像して居て　其實景に接した時、繪よりも一層深い感動を與へたのは、最も近い海岸から見る淡路島と、沼津邊から見る富士山である。繪には彼の島の形は表はされてゐるけれど、光線が出て居ない、又富士山の高さは想像出來るが、大きさとか、廣さとか裾を張つた處が想像しにくい、此點で、私は繪よりも實地に就いて翫賞を深めた。

和歌の浦

ちぬの浦を眠つてゐるやうだと云つたが、三井寺の上から見る和歌浦も、全く眠つてゐる、平安朝の美人

が、歌枕安らかに眠つてゐるのは和歌の浦である、海岸と云ふよりは、入江である、蘆邊である、本土の南端に位する暖い國、蜜柑產る國、順禮の廻る國、其國の海岸が、毎も眠つてゐるやうな安らかさにあるのは當然であらう、最も紀州沿岸を一周したら決して眠つてゐないで、覺めたる渚、驚いたる岸もあらうけれど和歌の浦だけは女性に生れたのであらう。

住の江

岸の姫松も、甘藷の蔓這ふ新田になつては、常盤の色も頼みにならぬ、海までは遠く、松は痩せて、僅に古雅な一基の高燈籠が、殆んど自然化して住の江の古を語つてゐる。住の江の浦には面白い行事がある、陰暦六月十四日の夜、紀州熊野の沖より一道の暖い潮が住の江の浦に來る、翌日は熊野へ歸る、だから其夜其潮を浴びたら皮膚の病氣に効驗があると云ふので、老若男女、爭つて海に入る、海と云つても海岸ではない泥の深い入江である、海水を浴ると云ふより、泥を身體に塗抹るのである、海に入らない者は、其日刈り取つた藻を持つて歸り、風呂に沸して入浴する、此等の行事を住吉のお湯と云ふ、恐らく海水浴の元祖であらう、近國近在から相當に人出の多かつたものだが、今は年々にすたれて行つたであらう。

濱名湖

此は汽車の上から見て、好きなだけで、未だ降車て見ないから、詳しいことは分らぬ、上り列車の右は海左は湖水、湖水は渺茫として、遠く山脈を抱いてゐる海と湖水と相通じて、而かも別々の相をしてゐるから面白い。

江の島

初めて行つた時は嬉しかつた、二度目、三度目にはもう面白くなかつた、一度は是非行くべき處であらう二度三度と行くに從つて、自然よりも、人間が煩累くなるのであらう、女や子供に海岸の知識を與へるには

極く都合が宜い、荒い波もあり、砂濱もあり、洞穴もあり、深潭もあり、崖もあり、鮑採もあり、富士もあり、海岸で見るべき現象の凡てが、小さい島の周圍に具はつてゐる。

國府津

格別印象がない、茅ケ崎、平塚、大磯、國府津と續いてゐる湘南一帶の海岸は、何處とも同じやうな氣がする、東京と關係が深い丈け、國府津とか、大磯とか鎌倉とか云ふ地名を聞いても、都會の一部の地名を聞くやうに思ふ。函根を越えて、興津邊の海岸になるともう東京離れがする、兎に角國府津までは、東京の領分に屬するから、活動せる海岸であり、また小說の舞臺などにも最も適當はしいので、天然としての價値よりも、其方に於て意味がある。

鎌倉

古色に於て奈良に及ばず、海の興味に於て江の島に及ばず、只、東京に近いのと、波の高からぬとを以て夏は賑やかな海邊となる、鎌倉の愛せらるゝは、家庭小說の愛せらるゝに同じ、危險はない。

逗子

鎌倉を距ること僅に一歩、逗子は少し浪が高いだけに人が少い、相州特有の低い山岳は左右より海に迫り、海を抱いて、ど、どーと鳴る浪の音は山に反響して、淸い空氣を振動はす、逗子は私の好きな海岸の一つである、古蹟を探るとか、遠足をするとか云ふのではない、只、一日か半日の間、ぶら〳〵と柔かに淸い鹽分のある空氣を吸つてゐるには、逗子などは最も好からう、葉山は又一歩遠くなるだけに、更に靜寂で宜かりさうに思はれるけれど、未だ行つて見ない。

大森

東京に近い割に、田舍臭いのは大森であらう、海の水は泥、浪がないから池のやうで、少しも海らしく感

じない、少し遠く行つて、羽田まで出ると、眺望はあるが、品川沖の遠淺は何處までも、灰色に濁つて、都會に近い海と云ふ印象を得る外に、何にもない、羽田は大阪の住吉に於けるが如く、彼には古色あり、此には新意あり、何れにしよも都會の人の遊び場所である

品川

汽車で品川を通る每に思ふことだが、若し此水が、今五尺高かつたら都會の一端は海に浸る、海面より僅に四五尺高い地上に、永遠の鐵道線路が敷かれてある而かも其海たるや、蒼溟千里、アメリカまで續いてゐる太平洋である、例へ遠淺になつてゐても其間を隔てる大陸はない、人間が自然を信ずる象徵として、其處に品川停車場がある。

稲毛

海は遠淺、水は淸くない、わだつみの神の寵に薄い方である。

海岸に立ちて（詩）

大きい海よ
大きい〱海が、一段、一段、一段と私の方へ押寄せて來る
私の胸が顫ふ
海に吸はれた瞳よ
私は海に囚はれた
もう、もう、あの大きい海が寄せて來るのに、私は何を想ふ暇もない
海よ、海よ、早く寄せて來い
遠い山も
山の上の雲も
皆、動いて來る
單調な浪の反響が
丘と、空と、地と、私の胸とに、絶えず傳はつて
大きい海が
此方へ、此方へと寄せて來る

琵琶湖

しのぶ

▲周廻　琵琶湖の沿岸は五十九里三十二町といふのが最も正しい。

▲南北　湖面の最も長い所、乃ち南北の距離は十六里九町四十五間である。

▲東西　平均二里二十六町餘。

▲面積　四十四方里五で、淡路島より稍廣く對島と殆んど同じ大きさ。

▲水量　琵琶湖の總容積は二万〇九百三十三立方で、之を概算したる富士山の土の量に比べると、琵琶湖の水の量より三十七倍多い。

▲深さ　湖水の西北に偏つた所で、水深三百十八尺と云ふが最も深い。

▲淺さ　堅田の方面は三十町も沖へ出るまでは三十尺乃至百尺以下の遠淺である。

▲水質　殆ど無味、無色、無臭。

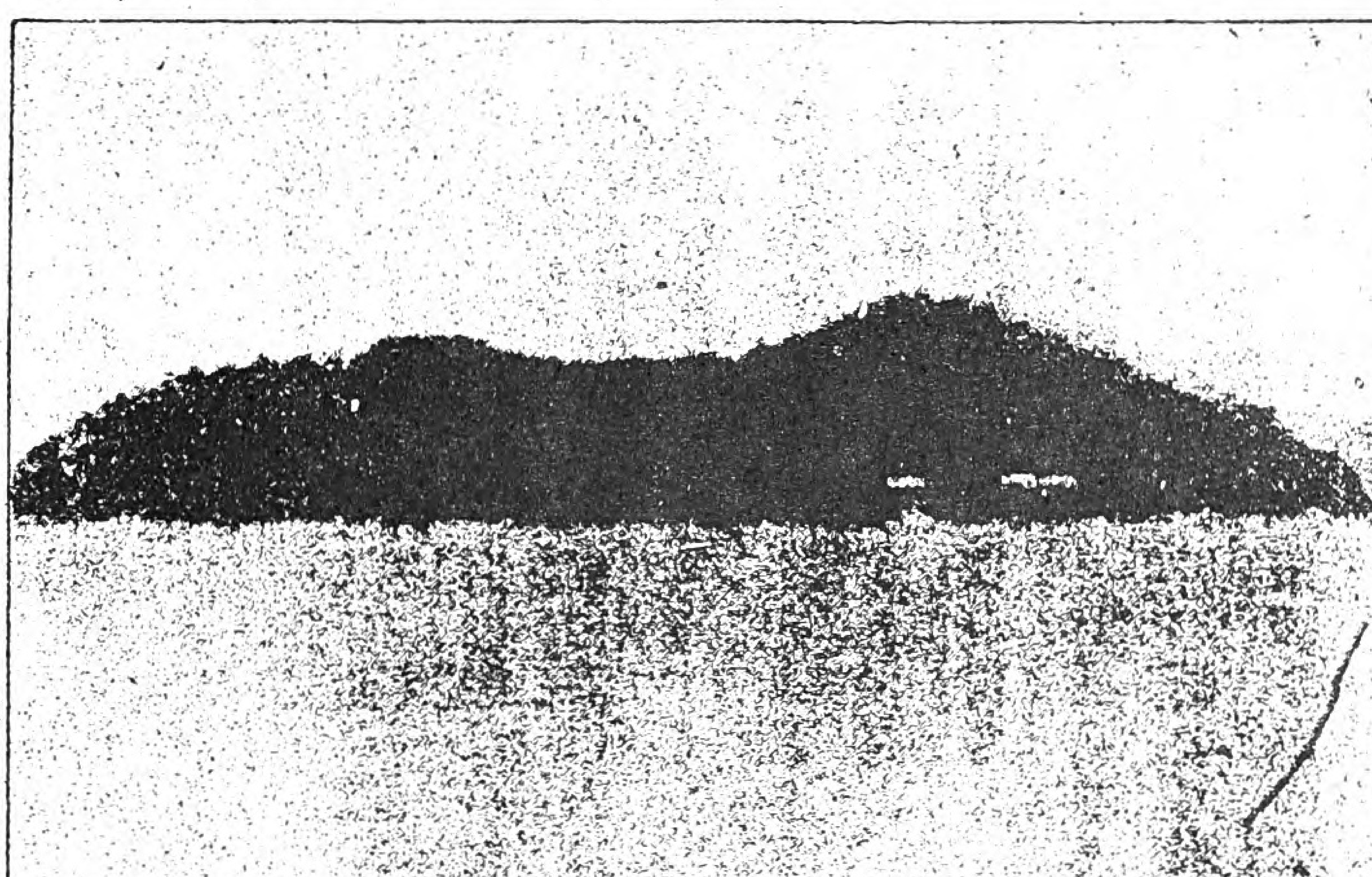
▲水位　水位四尺以上になると、沿岸に浸水する、例年水位の增すは四月から七月までの間水位の最も低くなるのは十一月から二月まで。

▲溫度　夏期、表層水溫が攝氏二十九度位の時は、三百尺の底では七度九を示す、氣候其他種々の關係があつて一定は出來ない。

▲湖岸　湖岸一帶の地の氣候は、冬暖かにして夏は涼しい。

▲風位　湖上には、比良沖から陸に向つて吹く風あり、夜間、陸から沖に向つて吹く風あり。

▲冬期　冬になると比叡颪、または比良颪が吹く。



琵琶湖竹生島の全景

▲魚類　所謂源五郎鮒を初め、鯉、鱒、小鮎、鰻、鯰、海老、貝など合せて七十種ばかりを產する。

▲旅客　湖上を往來する旅客、一ケ年八九十万人。

▲島嶼　沖の島は周圍一里十五町、人も五六百人住んでゐる、竹生島は周圍十八町住人二十人、白石島は殆んど岩石から成つてゐる。

▲古昔　琵琶湖は太古に於て、今日よりも幾層倍か大きな湖水であつたに相違ない。

▲地圖　琵琶湖を中心として、北に若狹灣西に大阪灣、東に伊勢灣がある、地圖を展げて此關係を考へると、昔の事が思はれる。

▲地震　此邊の地震帶と、琵琶湖とは密接の關係があるらしい。

▲老衰　地質學上、琵琶湖の青春時代は旣に過ぎて、はや老衰期に近付て居らしい。

▲傳說　琵琶湖が一夜にして出來富士山も一夜にして出來たといふ傳說がある傳說としては面白いが事實だとは信じられない。

雨（旅から、友へ）

川路柳虹

東京を出た日は有樂町の電車が開通した翌日であつた、厭な雨がしと〳〵と降つてゐた。車臺の上で睡るともなく居眠り乍ら幌におちる雨の滴をきいてゐた。

新橋へついたのは午後の三時であつたかと思ふ。白晝の雨が暗く降りそゝぐ。プラットフオムも暗かつた。汽車も暗かつた。私の心は猶更暗かつた。

陰鬱な雲間が透けて溫火のやうな梅雨晴れの日が射したかと思ふと、またすぐ消えた。人の擾しい跫音と雑音が敷石に響く、華やかな蝶のやうな少女も居た、カーキー服の軍人も居た。私の暗い伏し眼のうちには色々の色彩が動いて居た。併しみんな單調な心のうちに只暗く白く、ほのかに點ずる不愉快な一色に過ぎなかつた。

雨は降る、ふる。

* * * * *

私は君に話さなくてはならない事がある。夫れはこの發車前に偶然にも會つた一人の舊友の事だ。〇〇と云ふ、——君は確かに一度は見覺えのある男だ。なんでも君が中學を出る時二年級に居たかと思ふ、その男はその年に落第したのだ。私はそれ以來の消息は知らない、たゞ國の友だちからの通知に異つた男だと丈はかいてあつた。

向ふでは私をよく知つてるのだ。私はもうすつかり忘れて終つた中にどつか印象の殘つた輪廓が記憶の底に動く、が「ヤア」と云つたきり一寸何も出なかつた

「どちらへ？」

と問ふから簡單に

「旅へ」

と言つてやると、

「お國へは」と言ふ。

「七月の半ばになつたら歸らうと思ふんですがね、……

……君はこの頃何處においでです……矢張りこちらに……………本所？」

意外な處にゐると思ふ。友は「今何時ですか」ときくので懷の時計を出してみると發車までにまだ二十分ある。

「ではこの邊を少し歩きましよう」

「併しもう發車にも間がないのですから……」

「さうですね……」

と言ひ乍ら不性不精な顏をする、二人は只わけもなくプラットフオームを歩いた。

話しをきくと友は實は社會主義の仲間に入つて居るのだと云ふ。

友は熱狂の人である。以前は熱心な基督教徒であつた。友の頰の燃えた色、眼の底光りする顏、反抗と激昂に人生を戰つてゆく心——私は暗い濕つた今の心に妙な響をえた。「戰へるものよ、戰ふものよ」と云ふ樣な悲壯な喇叭をきく思ひがした。

別れ際に「君は人生の勇士なんだ、戰ひ玉へ」と言つて握手した。

雨が降る、雨が降る。

夕暮がたに汽車は箱根にかゝる。足柄の山中を流れる川音が鐵橋を通るごとに響く激しい車輪の Cadence と、隧道へ入つたときの叫喚と共鳴しても怖しい Symphonei を奏する。

雨の滴に濡れた窓硝子から暗く煙つた緑りの野と丘が夢のやうに浮ぶ。靄と雲とが山から裾を包んでゆる〱流れてゆく。淋しい暗愁の心の上に流れてくる。

私は鬱々として外を眺めてゐた。電燈の光が赤くうす暗く車内の人に濺れる。薄暮の外光が冷い絹のやうにほの白く迫る。

人も鬱々と眠つてゐる。

私は旅へ立つた私の身を考へてみた。ふと Baudelaire

か「旅」と題した詩の所々の句が胸に浮ぶ。

――心は輕氣球のやうに輕く
　惡運の手からはなれ…………
　たゞ常に行かんかな、行かんかなと叫ぶ。

と言ふやうな句であつた。

私は巣を立つた小鳥が碧い麗らかな春の空へ舞ひ上るやうに、飛び立つて旅へは出て來なかつた。あらゆる債疫から逃れてホッと一息した刹那は長い旅の日を幸する安心であるとは思はれなかつた。重い鎖のやうな心が街から汽車へ移されたのだ。私には新しい期待も希望もない。まあどうして斯うなつたかと思ふ――たゞ旅は私の逃れ場所だ。惡運の手からはなれて、常に行かんかな、行かんかなと勇み立つ心こそ、樂しい誠の幸福を敎へて居るのだ。

私は過去と云ふ「時」の棺に、すべての悔恨の情を葬りたい。失敗のあと、失意のあと、すべてを葬りたい。時はいつもこれらの死骸を再び還らぬものにしてくれる。願はくば忘却と云ふ魔藥がこれらの厭ふべき心を傾してくれ、私は私の日をなすがまゝに生きて喜びたい。

人生を旅と思ふ事が出來たら、これほど愉快な事はない。――事實うつりゆく旅、うつりゆく旅人の心であるのだ。然し私らの日常生活はいつも停滯した行き様のない一色の生活なのだ。不安や恐怖を抱いて矢張り不安や恐怖の中に噛りついて生きてゐるのだ。夫れを拔け出す勇氣はあまりに私らと離れて居るやうな思ひがする。私らは若くして早や期待に疲れ、若くして夢から捨てられた。

もつと醉ひたい夢があるのに、私の手を夫れに出しては指の慄くのを覺える。

私の旅はうら若い綠りの林をぬけ出でて、只廣い一色の徑に出た思ひがする。私は息のするやうな綠りの草葉に一つ一つ接吻けた夢が、あまりに早く私を捨てたのを驚いてゐる。そして苦しい「人」の「債疫」が思はぬ處から、私を導き思はぬ迄に、私を陷れたのを驚いてゐる。

伊豆海岸より

文學士　中村枯林

夕暮の事です。

山の方をみると、氣むづかしい、頭をおさへつける樣な雲がむらがつて、陰氣さは一通でありません。若し晴れた日だつたら、同じこの雲でも、赤や朱や紫や黄や黄金色に染つて、さぞまァ美しい事であらうと思ひ乍ら、濱邊にたどりつきました。

沖より寄せくる高波は、岸近くに鞺鞳とよせては碎け、寄せては碎けて、絶えず白い雪の花を散らしてゐます。私はこれを見つめてゐる内に、何だか波から或物を敎へらるゝ樣です。「あなた方はよい事と見たら、私の樣に倦まず屈せず、何遍でも御試みなさい、同じ事を繰返す樣でも、その内には結果が顯はれませうし思を遂げる機會もありませう」とさゝやく樣です。「働け、ぶら〳〵遊ぶな」と波が告げると思ふと、私は私の今の境遇に思ひ及んで、もう波うち際に立つてゐる氣が出ません。今に私も働く……と私は道を左にとつて松原の方へと進みました。

左の畔には麥が植ゑてある。針の多い穗も大層のびてゐます。五六歳の折、私の家の裏畑に麥がありました。その畑に入ると、私の頭が隱れてしまふのだ、從兄と隱れんぼをした事をふと思ひだしました。殆んど三十年の昔です。

祖父父母從兄兄姉たちの姿が可なりはつきりと頭に浮びました、そのうちで兩親が一番明瞭でした。あゝそれらの方々は、皆あの世に逝つてしまひ、當年の腕白小兒が、今は我家の主人公となつたと、私は殊に父母に對する追懷の情を増して、沁々とその限りのない慈恩を感ずるのでした。そして道ばたの芝生に腰かけ

て、子として充分の責務を盡くしたかしらと、いろいろ考へましたが、子としての孝行はむしろ今後の事と私はつくゞ感ずるのでした。

と觀ると前にはさゝやかな漁師小屋、風でも吹けば吹き飛ばされ相ですが、五六人の眷族が打寄つて樂しげに夕飯をしたゝめてゐました。私も早く京に歸つてこの孤獨の生活に止めをさしたいと、しきりに歸京したくなりました。が、しかし、まだ歸れぬと、何處かで云ふ人がある樣です病院に居た時を考へると、又囁く樣です。ほんとに病院の時の事を思へばてんな我儘は云へない筈と思ひかへしました。

後をふり反つてみると、山の高い處で炭燒く煙が立ち上つてゐます。はかなく消える煙の行方を見てゐると、種々の場所が走馬燈の樣に目に寫つてくる……赤城山や、男體山や、御嶽や、日金や、富士足鷹より飛んで筑波、比叡などの炭燒小屋の事が思ひ浮んで、それにつけ數々の人が飛だして來る。から何事につけても忽ちに感動するのは、慥かに神經衰弱のせいとむりにそれらの幻影をうち拂つて宿にかへりました。

部屋には入つてみると、食膳は既に片附けられて、主人を待ち顏に電燈が輝いて居ます鐵瓶は松風の音をたてゝゐます。枕を戸棚から出して横になると、打くだくる波の音は、絶えず高く響いてゐます。働け倦まず働けとすゝむる樣に。

あゝ、私は早くかへりませう。かへらなければなりません。



淡路の生活

一色醒川

私の淡路に於ける生活の中で、いろ〳〵樂しく思つた事のうち、とりわけ忘れ得ないのは鳴門蜜柑の花咲く頃である。淡路に遊びに行くには、海水浴も宜からうし、舊三月大潮の鳴門見物も面白いが、私は其れよりも此の五月の末方、花橘の咲き香る頃の島渡りを勸めたいと思ふ、其の頃は巡禮追者なども多く出掛けるし、島全體の趣味が深く味はへるからである。

船は午後のが宜い、三時半兵庫港を出ると、大抵油を流したやうな凪の海が日に輝いて、船は疊の上を辷べつて行くやうである、何しろ日の永い絶頂であるから、洲本の棧橋にかゝるのは薄暮の頃であらう。事によれば淡路富士と稱せらるゝ、先山の肩あたりに、まだ褪め切らない夕燒の色が港に映つてゐるかも知れぬ岸には上る客を待つ人々が、ギッシリ立つてゐる、其顏が蝋細工の如く美しく黄昏の空氣に浮き出したやうに見える、宿引だの車夫だのがポーと灯の入つた提灯をつき出して客を呼ぶ、いづれ何れかの手に鞄や提袋が落ちて、導かるゝまゝ一歩二歩行くと、案外立派な建物が竝んで、何々樓など書いた行燈が出てゐる、成程あの群集の中にも何だか變な化粧の者が雜つてゐたと氣が附くであらう、兎に角こんな入口に遊廓が出しや張つて居るなどは珍らしい事である。

そんな事はどうでも宜いとして、其の時屹度何か一種の强烈な佳い香が鼻を撲つ、何だらうこの香ひはと氣が附いて、不思議がるうち宿に着くであらう。湯にでも入つて浴衣がけで寛ろぐうち夕飯が出る、暴風雨で無ければ多分新鮮な魚が膳に上るであらう、都志の鰆、鯵の酢のものに青蘇の薬味を添えたのなど

があらば甚だ妙である、其の時吸物に注意して御覽なさい、お椀の蓋に口取として何か柑橘の花の蕾が載せてある、それを嗅ぐと上陸早々何だらうと訝つたものの本體が成程と分る、給仕の女に是れは何だと聞いて御覽、乾度待つてゐましたで自慢らしく、其れは鳴門と申しましてなと、滔々所以因緣を辯じる事であらう實際自慢しても宜い、其の頃は實も成熟して甘い、が、更に花の香ひに至ては佳い、獰猛に佳い、私は島にゐる頃、よく小雨そぼふる暗い晩など、傘に雨を彈かせ提灯を點けて、何の用も無いのに此の柑子の園のぐるりを唯步るき廻つたものだつた、其の情懷は今も猶ほ夢に入つて忘られない事がある。

其の頃雛風と云つて、南國特有の一種蒸し暑い風が猛烈に吹く、しかし別に其の爲めに浪が立ち騷ぐわけでも無く海は却つて靜かである。夕方大濱の松原を出ると網曳きの群を見るであらう、サクリ〳〵と軟い砂地を踏んで、何處となく夕燒の名殘りに明るい磯に出ると其處に隨分人が居る、中には非常にハイカラな若い女なども居る、まア淡路の女は美くしいと早合點をしてはいけない、其れらは大抵土地の人から他國の者と云はるゝ、若い奧樣や令孃である。

そのうち海は暮れかけて、歸つて來る灰紅の帆が、暗紫の潮光に沒して、遂には沖より立ちこむる潮煙にまぎれて了ふ、後れて歸る漁船がギイ〳〵と夕靄の中に聞える、遠くの方では夜釣りの漁火が時々チラつく事もある。例の橘の香ひは此處までも蒸すやうにする何だか陽氣の替り目でゝもあるかの樣で輕き眩暈を感ずる、掌などは油滲んでチク〳〵してゐよう。

淡路は絕海の孤島であるが、其れでも海邊と、野と山中と生活が分れてゐる、又海邊であつてもいろ〳〵湊口があつて、南の由良は和歌山を受け、東部洲本志筑は大阪及び神戶を受け、北岩屋は明石を受け、西福良は德島を受けてゐて、皆多少其の氣風が異つてゐるやうである、他國の者には分らないけれど、內輪の人の話しでは言語でさへ多少相違があるさうだから、案外複雜で一口には言へない處がある。しかし總體から

見て島國根生と云ふ丈けの事は確かで、攘夷的氣風は隨分甚しい。其れから又『淡路のにじり嘘』と俚諺にもある位で、老幼男女通じて神色自若として嘘を云ふ事驚くべきものがある、彼れは正直だ佛性だなどと云はるゝ者でも、嘘丈けは平氣で云つて別に苦にもならぬらしい、勿論其れは他國の者に對する時の態度で、内輪同志には少いのであらう。其れと共に空惚ける事もなか〳〵うまいものだ、凡べて何事も用心深く滅多に言はぬ、そして『一向知りません』と云ふ、この『一向』と云ふ副詞必らず附けねばならぬものに心得てゐる、多分子供の時からの習慣がさうしたのであらう、或は先天的さう云ふ惚け氣味を了解してゐるのかと思はるゝ程である、しかしこんな事は島に居る時は忘れても口外してはならぬ、たゞその美いところ丈けを見て褒めておかねばならぬ。

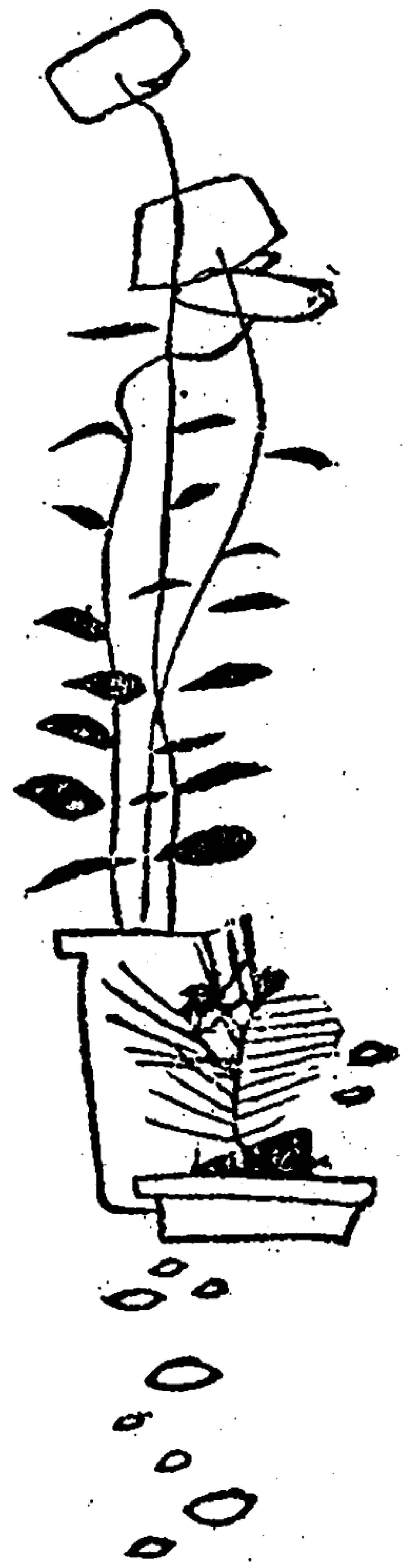
淡路に渡ると、盥を頭に載せて魚を賣りに來る漁師のお神さん達が甚しく旅客の目を惹く、しかしそんな者ばかりが淡路の女ではない。

一體淡路の女はよく云はれてゐない、東京邊では相州か房州かの女と云つた風に見られてゐるやうだ、總じて其の氣肌が柔軟で、當りが宜い、面と向つて喧嘩などする事が一寸出來惡い、其の代り――其の代りは變かも知れないが――脆く、腐敗し易くはないかと思ふ、そして又一寸許るせない處もある、云つて見ると何だか猫の蹠でも觸るやうで、どうかすると爪が出る。浮れ女などの種類がいろ〳〵な風にしてある、處女だの奧樣だのにはあまり是れと云つた特長も無いやうだ、さう云ふのは多く深窓を出ないのである。

言葉はまづ野卑、音が鼻にかゝる處もあるし、自他の尊稱を間違へたりする事もある（是れは上方の通有ではあるが）、しかし又其のうちにも『難有う』など云ふアクセントが東京邊の其れに酷似してゐるやうにも響いたり、『頂戴』と云ふところを『拜領』など云ふのも、仔細に聞けば優しみを含めるやうにも聞えるのである。一概に野卑とも言へない、優雅な分子も殘つて居る。

驛鈴

香爐峰



瓦

瓦と云ふものは澤山にあると、何の注意も惹起しませんけれど、舊いお寺の燒跡とか、大きな邸宅の廢園の土の中とかから、一枚二枚見出したのは、何となく懷古の情の起るものです。考古家の愛翫するのも尤もだと思ひます。

東京は甍の都ですが、田舍へ行きますと、瓦の多少が、其村落の文化の發達の程度を示してゐます、山間の僻地へ行くと瓦葺の家が少い、藁葺だとか、茅葺だとか、なかなか瓦を用ゐません、瓦葺の家は其村での長者です、少し開けた町へ出ると、もう凡てが瓦葺です。

東京も江戸と稱して初めの時代には茅葺であつたのです、後ち屢大火があつたので、幕府で命令して瓦葺に改めさせたのです。

尤も瓦葺は其以前から行はれて居たのです、神社佛

閣とか、宮殿とかには、立派な瓦を用ゐたもので、今日一般に使つてゐる瓦よりは、遙に形も美術的で、又大きな瓦であつたらうと思ひます。

『家屋雑考』其他の書物に據りますと、瓦は聖武天皇の神龜元來以來用ゐられた、併し一般の家屋は大抵檜皮葺で、棟瓦だけ用ゐてゐたのです。今、世間で云ふ丸瓦のことを牡瓦と云ひ、平瓦のことを牝瓦と云つたさうです。瓦の雌雄は面白いぢやありませんか。それからシヤチホコ、オニガハラなど云つてゐるのは、以前鶏尾（和名抄くつかた）と云つたのです、丸瓦に巴の形のあるのは、つゞみ瓦（鼓瓦、又は皷瓦と書く）と云ひ、平瓦の端に紋様のあるものは、あふみ瓦（花瓦と書く）と云ひました。

又、宮殿の瓦の事に就いては『昆陽漫錄』に左の通り記してあります。

先年、志賀の王宮の丸瓦を見しに、甚だ厚くして甚だ重し、其紋秋牡丹の花と見ゆ。我國の古瓦、西土の古瓦、品々をみたれども、志賀の瓦の如く布目なく、古雅なるはなし。しかも石はせありて、志賀の瓦の證あきらかなり。さて甚だ重ければ、今の宮城の如き柱にては、堪ふまじとみゆ、是にて古へ、王宮の盛なることしるべし。

之を見ましても、古瓦を珍重する所以は分りませう奈良東大寺の瓦なども世に有名です。

一里塚

少し離れた田舍道を歩くと、道の傍らに少し高くなつた處があつて、其處に松の古木などの一二本あるのを能く見ます、殊に、東海道とか、中仙道とかには、松原も多いが、此松の木の一二本ある丘も多いのです此等は皆、昔の一里塚の名殘です、中には古墳、古塚の類もありませうが、一里塚も殘つて居るのです。

此一里塚の嚆矢は、天文年間の事らしいが、徳川時代になつて、東海、東山、北陸の諸道へ築いたのは確實です、『鹽尻』に白ふ。

慶長九年二月四日、臺德大相國（德川家忠）東海道

越後路、奥州路等に命じて、各一里ごとに兩塚を築しめ、樹を植しめ給ふ、同年五月下旬に悉く成就せし、今に殘つて行人里程を辨ず、みな公の賜ものなり。

とあるのは事實でせう、又、一里塚には松の外に榎も植ゑたので、其榎を植ゑるに就いて、面白い逸話がありまして、それは『雨窓閑話』と云ふ書物に載つてゐます、左に引きませう。

御三代目將軍家の御時、諸國旱して死する者數を知らず、別して往來の旅人、道を去りあへずして死せり。是に依りて土井大炊頭利勝侯、上意を經給ひ、往還筋道の左右へ松を植ゑしめ給ふ、大に旅行の助となれり。然れども、行く先も／＼皆松原のみにて旅人の退屈せん事を思ひはかり、かさねて大炊頭殿御了簡にて、一里塚と云ふものを築き、一里づゝに拵へ置くならば、然るべからん、されども、松はかの道端並松とまがひもすべき間、如何すべきと、上意を伺ひけるに、大炊頭申す所、尤も至極理にあたれり、一里塚には、餘の木を植ゑさせよと仰せ有りしを、大炊頭殿老年にて、耳遠くおはしければ、餘の木を榎と聞き誤りて、榎を植ゑしめらる、今は一里塚に榎を植ゆるは、此故なりとぞ。

古韻

凡そ田植唄、盆踊唄などいふものは、其時代々々の流行と廢滅とがあつて、古風な唄は殆んど殘つてゐません。又、田植唄とか、麥搗唄とか、極つてゐないで何と云ふこともなしに、唄はれる俗謠は、各地何れにもあります。書物の上に殘つてゐる唄には、古韻掬すべきものがありますけれど、其等は大方滅びた俗謠です此處に抜かうと思ふのも其一つです、柳亭種彦の著はした『柳亭記』と云ふ書物の中に載つてゐるのですがそれは、田植唄ばかりでなく、田植うたと題した一つの文章です、作者は我國淨瑠璃の元祖小野於通ださうで、京都の知恩院の寶物になつてゐるとしてありました、短い文章ですから、左に其全文を掲げます。

田植うた

苗代にかゝり、早苗をひきて、篠簀にならふ禾擔おさしてになひつゝ、田づらにゆきてくばりいだす早乙女のうけとりて、植る田歌ぞおもしろき。雨降ねども日でり笠、雨ふる時はひぢ笠や、かつぐ袖笠いとせはし、世わたる業とすげの笠、すそは田水におりひたり、ぬれにぞぬるゝばかりなる、歌は國によりことばは所によるとかや、近江の國風に

　雨は降ともなよ、いそ／＼、簑笠もなよ、いそいそ、いはぬなよ、戀し君にだにあふといふならばいそ／＼、手に取る早苗もすててゆかまし、いそいそ、穗に穗かさなれ、いそ／＼、目出度しく千歳樂や萬歲樂。

とうたうて田うゑわたし、よろこぶとかや、丹波の國風の歌に

　春の頃より、我はやに通ふとのでの、あれとなよ人に忍べば隱し隱してかたらめよ

など、さてうゑわたして、あがるとき、手ごとに持ちたる早苗うちふりて

　早苗もおくてもしげるくら田に榮えて、秋のみのりは穗に穗なびきて、心のまゝにをさめて、つくもかさねて、一粒や萬倍、二粒や萬倍

日はてりにてらして、あつさはたへがたきに、蛭といふ蟲の田の中にありて、人の足にとりつき、血をすひくらふ、その形、覆盆子の如くあかくなりて、簑毛の如く見ゆるなり、このくるしみのなかよりもおもしろき歌うたふこと、籠の鳥のいろ音おもしろく、さへづるにたとふべし、あまりに、ことのくるしきに、歌になぐさむらん

　春の小田に生し蝌蚪そだちあがりて、ながき草葉になかくれそよ、蛇のはむかもしらぬ草葉にかくれぞよ

などうたひつれて田草を取るもくるしや、麥の穗をこきしき、むしろへいれ、わかき女房あまたいでたるが、かしらのうへうつくしう、赤き前垂紐ながく

唐棹といふものにて、歌を合せてこれをうつ所もあり。

君を待つ夜は夏の夜なれど、いとゞねられもせぬはものうし、いよ、あけかねて。

たれのとのでは、やれ目出度いとので、松の緑の末ながく、いよ、さかえひさしや、いよ、ひさしかれ。

など歌ひつれたる聲うるはしうして、歌の言葉は、あづま歌にて、ひなびたりければ、催馬樂にもあらで、又おもしろし、麥のつき臼といふものにつれて臼つき歌をうたふてつくも又をかし。

我は田面の夏草なれや、いよ、人にひかれて、又すてらるゝ、いよ、すてらるゝ

さて又これを箕といふものにいれて、風にまかせて糠を飛ばせ、麥ほしのむしろにいれて、日に干す、さしもいとなみはくるしけれど、俵に入れてつみたるは、いとにぎやかにおぼゆ。

飛驒の山奥

今でも飛驒の山奥へ行けば、電氣や、瓦斯の燈光は知りますまい、況して之は人文未だ開けぬ頃の事で、蠟燭を知らなかつたからとて、さまで不思議はないやうなものの、現代では、何んな山奥へ行つたからとて蠟燭を知らぬ人はありますまい『塵塚談』と云ふ書に其事が書いてありますから、今左に抄出して、何百年前かの地方の有樣を想像する材料に供しませう。

飛驒國田畑、殊の外少き深山あり、六七月迄も村々に雪あり、酷暑の節も、朝夕に綿入を着す、甚だ寒國なり。稻をうゑるに、實りあしき故に、田に稗をつくり、常に農民の食物、蕨の根を堀りて食とす。また栗の木などの寄生木を採りて、其汁を煎じ食す予此山中に宿す、夜中蠟燭をともし、髮月代を召仕に申付る時、その所の男女、これを見て奇怪の事と思へる有樣にて、殿あれ大根に火をともし、頭ゝ面にするとて甚だ笑ふ。二三十人も立寄り、けしから

ぬ事のやうに之を見る、男女の形狀分ちがたく、和國の容とは見えず、甚だ邊鄙なり。此邊人死する時は、名主年寄にて之を引導し、葬送すると云へり。總て此の國、甚だ下品にして、六月土用中にも、二三度宛は雪ふる事あり、仍て田畑にうゑ付て、久しく有る物は作る事なしと云へり。

京都風

『見た京物語』と云ふ冊子には、京都の風俗に關したことばかり書いてありまして、興味のある書物ですが昔と今とは、風俗も異つては居りませうけれど、比較的保守主義な京都ですから、未だ昔風の殘つて居る所もあらうと思ひます、兎に角、其書から二三項拔いてみませう。

○風ずくなし、雨まつすぐに降る。

○雷はたびく鳴る、時雨の景色は江戸に勝れり、月と時雨、たちまちにかはる、山近ければなり。

○鮪をはつのみ、葱を一文字といふ。

○朝より晝過ぎまでは、人氣靜かなり、猿の眼の光る頃より甚だ元氣よし。

○紺の足袋、甚だ賤しむ、をどりにばかり用ゆ。

○鰶は善き肴に用ゆ、蛤甚だ尊む、鱧第一に遣ふ

○人形屋には總じて大きなる人形あり、いづかたも神功皇后、竹内宿禰あり、これ看板なり。

○鞍馬は然にあらねども、大原は山道せまく、大原女の馬を牽き、京へ商ひに出かゝりたる所へ行きかかりなどすると、一騎立の道ゆゑ困る、是は九折の山道なればなり、馬足もつるゝゆゑ暫くよどむ。

○思ふに京は、石地、小砂利のみ多く、土氣少し、故に人、綺麗なり、女などに古昔より美人多きは、國に油氣なく、綺麗なる故なるべし、魚などうまからず、生る草なども細かにして、唐繪の如く綺麗なり、どくだみ藪からうじなど云へるもの、けがにも生えず。

○六分女、四分男たるべし、夜も若き女獨り歩く、男女連立ちて歩くを少しも惡口いふものなし

大阪風

『浪華の風』と云ふ冊子は、『見た京物語』と一對のやうな書物です、大阪の風俗を書いたもので　著者は舊幕時代、大阪の町奉行をしたことのある人だけに、觀察も市井の一般に渉り、なか〳〵面白い、今日の大阪に適するか何うかは知りませぬが、二三節を抄出して見ませう。

○諺に、京の着倒れ、江戸の食ひ倒れといふ如く、浪華の地も京師と同樣に、衣類をば殊に貯はふる風俗なり。身上相應のものは姑く置て論せず、裏屋住にて僅に夫婦暮しのものにても、衣服は分に過ぎて貯へたり。日々の盜難訴へにても右樣夫婦暮らしにて、日雇稼ぎなどの貧窮ものといへども、衣類の五六品位は盜み取らるゝこと平常のことなり、これ江戸にて、裏屋住の其日暮しのものなどには、決してあるまじきことなり。

○劇場は殊の外繁昌する土地柄なり、是一體の風俗淫風なるゆゑか、劇場は自ら繁昌と、劇場繁昌するに依りては、淫風もいよ〳〵盛んなるべき理りにて歎はしきことなり。劇場見物に出る婦女子の樣子なども、江戸とは大いに相違して、狂言を見物するにはあらで、俳優の人品を見物し、且銘々の粧ひし姿を俳優どもに見せ示すの心得なり、それ故に身上相應のものは劇場見物一日の内に、凡そ衣服を改めること三四度に及び、甚だしきものは、一幕毎に着替するに到るといふ、淺ましき風俗といふべし。

○衣服も中より末のものは、子供など都て緋の木綿を用ゆるもの多し、木綿地合よろしく、殊に京染故に色合宜しく、縮緬と見紛ふなり。中形ものなど、都て之を板じめと唱ふ、板にてしめ染る故此名あり江戸にては板じめといへば、人々縮緬の事の樣に覺え居るもの多し。

○茄子は長茄子の方多し。尤常の茄子も有れども、風味は同樣にして優劣なし、いづれも色合等江戸よりはあしき方にて、漬物などにしても美ならず。



色彩的區分したる大阪市の婦人

みどり女

▲全體の色調

大阪の婦人は、コヽ五六年の間に風俗其他總ての方面に於て、著しく變つてまゐりました。藝妓風が粹だと云つて、藝妓風を眞似る素人があるかと思ひますと素人風が上品だと云つて、態と素人風を氣取る藝妓があると云ふ風で、兩者の風俗は近頃特に目立つて接近して參りました。以前は大阪固有の風俗は無暗と尙んだものですが、今日ではモウ唯々流行に後れまい後れまいと思つて居る人が、澤山にあると見えまして、兎角派手に流れた南方面の婦人も、地味な上品なのを喜んだ船場邊の婦人も、いつの間にか殆んど同じやうな流行の型に囚はれて了ひました。それに大阪は、東京と比べますと、何事でも一般に流行するやうですから、東京の如く、山の手の女と下町の女と云ふ風に、嚴然たる區別を立てて觀察することは、却々難かしう御座います。今年は絞りの浴衣が大流行で、品物は高いにしても廉いにしても、兎に角一般の婦人が、絞りの浴衣で無いと夜が明けないやうに思つて居るから、可笑しいぢやありませんか。固より是も東京の流行を眞似たのでせうが、此樣にして大阪固有の風俗、否大阪の各方面（例へば船場、島の內、上町等の如き）固有の風俗が、段々と葬られて行くのです。

　それから世間では、大阪の婦人と芝居とは附物のやうに思はれて居りますが、是も今日では果敢無い過去の夢となつて、殊に若い婦人は餘り芝居其他活動寫眞

などの興行物を観に行きません。音曲ではヷヰオリンや、お琴が全盛時代で、三味線は下品だと云つて追々下火になり、琵琶は東京程ではありませんが、以前よりは少しばかり流行つてまゐりました。又生花よりは茶の湯を學ぶ婦人が殖えて來たさうで御座います。

▲船場

現在の大阪婦人の狀態は大略只今申しました通りで、市内各方面に於ける婦人の特徴とて、別に取立てて申上るやうなことも御座いませんが、精細に觀察致しますと、又夫々狹い意味の地方的色彩が出て來るものです。

船場は、東横堀川と西横堀川、土佐堀川と長堀川とに取圍まれた土地で、大阪第一等の目貫の場所、船場を知らなければ共に大阪を語ることは出來ないと云ふ程ですから、生粋の江戸ッ兒の代表者が神田ッ兒なら生粋の贅六の代表者は船場ッ兒位のところです。それ故船場方面は、大阪の中でも一番保守的で、五六年前迄は至つて地味な方でした。今日は相愛高等女學校も出來、女子音樂學校も出來て、當世流行のハイカラ風が大分輸入されましたやうで、從來深窓の奧深く閉籠つて、生花や茶の湯に餘念が無かつた高島田のトーサン(孃樣)達も、不知不識の間に廂を突出して蝦茶の袴星が何うの、菫が何うのと幾分か近代的の空氣に觸れたやうなことを仰るやうになりました。それに此方面は比較的中流社會の生活をして居る舊家が多いので、衣裳でも、髮飾でも相當立派なものを着けて居りますが何うしても、親御達が舊弊で、所謂大阪の商人氣質に囚はれて居られる故でせうか、幾ら流行物を着けて居ても、柄や、色合が何處となく地味に出來て居ります。併し地味は地味に違ひありませんが、起居擧動が優雅で奧床しく、少しも下品なところの無いのは、船場婦人の特長と申しても差支へないと思ひます。唯溫和過ぎて柔弱な、どつちかと申せば氣慨の無い、融通の利かぬやうなところが、チヨイ／＼と見受けられるのが璧に瑕とでも申しませうか。それから他で見られ

ないのは、家に居る時でも、又何んな粗末な帶でも、チヤンと行儀好くお太鼓に結んで居て、場末のやうに餘り前掛の立派なのを用ゐないことです。縱令用ゐましても前掛をした儘、客に接するのを失禮だとして御座いますから、客に接する場合は、一寸横の方へ摘み上げることにして居ります、肌は一體に美しい方で上品な美人が多いやうに思はれますが、生花のお稽古に行くのに、丁稚さんを伴に連れて得々として居るなどは我々婦人の眼から觀まして、餘り見つとも好いことでは御座いません。

行事は年々に廢れるばかりですが、只今殘つて居るものでは、毎年十二月十三日に、音曲や生花等のお師匠さんの家へ鏡餅を持つてまゐる位なもので御座います。言葉は純粹の大阪辯です。

▲島の内

島の内は粹中の粹です。「京で生れて大阪で育ち今ぢや南地で褄を取る」と云ふ南地は、此島の内にゐるのですが、あの地味な、高尚な船場のスグ南に隣合つて居ながら、萬事が彼とは正反對 派手で、婀娜ツぽいのが、島の内婦人の特色で御座います。何と申しても大阪第一流の名妓の根據地ですもの、ソハ〳〵として迷ひ易い若い婦人達が、默々の裡に彼等の爲に感化されるのは當然ぢやありませんか。

島の内の婦人には、市内各方面の婦人に比べて確かに婀娜ツぽいところが御座います。ですから三味線の如きも却々盛んに流行つて居りますし、舞踊は大抵幼さい頃から仕込んでありますから、自然と身體の科白が宜しう御座います。そして髮の結樣からお化粧に至る迄、黑人そツくり。此頃は例の流行日傘を翳して空氣草履を穿き、シヤナリ〳〵と歩いて居るのを能く見掛けますが船場の婦人が牡丹なら此は可憐なる野菊の花で御座いましよう。

▲福島

福島方面は四五年前迄は、荒野原同然の見る影も無

い田舍で御座いましたが、近年殊に彼の大火以來長足の進步大發展で、昨今は見違へるばかり賑やかになりました。けれども斯う云ふ新市街の常とて、土着の人は少なく、地方の人が入り代り立ち代り入り込んで來らるゝと云ふ風ですから、福島方面には純粹の大阪風俗などは固より見られませぬし、言葉でも東京辯もあれば大阪辯もあり、ズー〳〵辯もあれば九州辯もあつて、隨分紛らはしい方で御座いますが、大阪の婦人中最も當世婦人を代表して居るのは此福島方面の婦人です。何處かの雜誌に大阪の女の廂は東京よりも短いと云ふやうなことが載つて居りましたけれど、此方面では既婚未婚を問はず、廂は思ひ切つて突き出したのが流行つて居ります。總てがハイカラな女學生スタイルで、怪しげな女迄が此スタイルを氣取つて居る位です着物や帶でも派手な大柄を好むやうですけれど、島の內のやうに粹な所はありません。リボンなんかでも眞赤のが歡迎されて居ります。ヴヰオリンも可なり流行つて居る方ですが、ミシン縫の手內職の流行は大したもので、相當な家の奧樣までが、遊んで居るのは勿體無いと云つて、此內職をして居られます。

此方面で特に目立つのは、上品な婦人は大層上品で下品な婦人は又特別に下品で御座います。婦人の立話の流行ることゝ申しましたら、殆んど他に其類が無いかも知れません。

▲江戶堀

江戶堀京町堀の方面は、船場と福島との中間に位して居ると申して宜しいでせう。船場のやうに地味で無く、又福島のやうに派手ではありません、それかと申して固より島の內のやうな婀娜ッぽいところなどは少しも御座いません。爾う流行にも後れず、飛び離れた派手な風もせず、併しマダ何處かに舊弊な大阪風が殘つて居るのは、此方面の婦人です。

ヴヰオリンやお琴は、近頃大分に流行つてまゐりました。中流社會では生花よりも茶の湯の方が盛んなやうで御座います。

▲上町

上町とは松屋町、谷町、上本町一帶の土地を總稱して申すのですが、此方面には淸水谷高等女學校、大阪府女子師範學校、ウヰルミナ女學校、一寸離れて模範女學校として名高い夕陽丘高等女學校などが御座いますけれど、其割には當世風のハイカラ婦人は見當りません。女學生スタイルと申しましても、所謂大阪風の女學生スタイルで、好く申しますと質朴な方、惡く申しますと田舍染た方ですが、土地が土地ですから斯う成つて了ふのかも知れません。髮と云ひ、着物と云ひ下駄と云ひ、總てが田舍風に出來て居りますから、從つて此方面の風俗は、何うしても堂々たる大都會の婦人の風俗とは思はれない位です、けれども婦人が獨立自營の念に富んで居るのは、誇るべき此方面の特色でしよう、長所でしよう。

それから是非書いて置かなければならないのは此方面の若い婦人は、往來の若い婦人を指して、口穢く品許することです。同じ場末でも福島あたりではコンナことは御座いませんが、此方面では十三四の女生徒でも、大きな聲で他人の惡口を云つて平氣で居りますのは、誠に見苦しいもので御座います。然し時勢に後れて居るだけ將來が樂しみでしよう。

▲難波

難波方面は、有名な道頓堀や、千日前を控へて居ります上に、難波新地のやうな遊廓が御座いますから、安藝妓かと思はれさうな曖昧な風が流行つて居ります同じ派手でも安ツぽく、化粧もどッちかと申せば少しコッテリした方で、長の低い太つた婦人が多う御座います。

千日前の劍舞師や壯士俳優に、肩入して欺されるのは、難波の婦人に限つて居るとのことですが、それも其筈でせう。此方面の婦人は、小學校も碌に卒業しないやうな者が其大部分を占めて居るのですから、無理も御座いません。少し容色の好い娘は、藝娼妓に賣つ

て家計の補助にしようと云ふやうな親が少なくありませんから、細民の割には三味線や、舞踊を能く習はせて居ります。芝居や、活動寫眞等の興行熱は盛んな方で、俗謠などは却々巧いものですが、少し下流社會の方へまゐりますと、女か男か區別のつかない印袢纏の婦人が、家長權を握つて居て、夫を支配して居るなどは珍らしくありません。生花や茶の湯を行る者がありましても、永續はしないさうで、田舍染たところは上町方面に似て更に彼よりも酷いでせう。それから着物は木綿でも前掛は一寸ピか〱と輝るやうな物を用ゐる習慣があるやうです。

全體難波は其區域に於ける市民分布の上から觀ましても、極下等な生活階級に屬して居ますから、從つて斯う云ふ惡風化を受けるのも、子女其ものゝ罪でなく、寧ろ親の罪でございます。否え、もつと強い意味で申せば其雰圍氣の罪でございます。

大阪のあらゆる婦人の中で、私は、最も刺戟性の強烈な、チヤーミングな併しウヰークな眼を有つて居る難波の婦人を美しいと思ひます。

神戸

羅漢柏



湊川の舊河口の直ぐ東は川崎造船所の占領する所となり、其れから鐵道の區域となつてゐる、其の邊から今の辨天濱までのところは高濱と云つて、故老の言に依ると、三十餘年前は一面の葦原で、灘六鄕の酒造りの爲め、丹波邊から出て來る杜氏の者共が、葦間に船をつけ苫がけで冬籠りをしたものださうな、今は一帶埋立地になつて鐵道工場の煤煙が漲り、重苦しい鎚の音が海まで響く、鐵道棧橋にはトロックで送る石炭を積込む仲仕共が、ヤレコラドッコヲシヨなどと唄ふ聲高らかに聞え、時々ドドドドと音をさせてゐる。

舊御用邸のところを辨天濱に出で、海岸通にかゝつて來ると、郵船會社支店、水上警察、取引所、商船會社支店、製茶檢查所など云ふものが竝んでゐる、街に

は製茶入りの角張つた和箱を山のやうに積むだのや、鐵の輪をはち切るやうに卷いた綿などの荷車があとへあとへ來る、自轉車が飛ぶ俥が通る、取引所から何だかわめきながら小僧が駈け出す、風も無いのに白い埃のあがるのが肉眼にも見える、何ともわけのわからない臭氣が磯臭い香など一緒に打ち雜つて來る、やつとの思ひでこの中を通りぬけて米利堅波止場まで來るともと居留地の區域になる、一列の腕車が並んでゐる、そこいらの車夫は洋人相手であるから自然の必要上英語や獨逸語の少しはやる、中には咬ぢりさしではあるが五六ヶ國の語に通じてゐると云ふ學者さへある。

其處から海岸に沿うて內外共有運動場がある、芝生が青羅紗を布いたやうに美しい、ベンチに腰かけて顧ると、花隈城址の高臺に聳えた港務局の時球が恰度下りるところだ、正午の信號を待つてゐた船では時鐘を打つ號笛を鳴らす、港內は一しきり騷然となつた中には港に最後の「左樣なら」をして、ゆつたりと男らしい雄姿を動かして出る大船もある、呼吸を忙しげにさせつゝ箭のやうに來て、トンと波止につけた綺麗なランチから、薄紅色のスカートを取つて紳士に助けられつゝ、ひらりと輕ろく上つて行く泰西の美人もある軍艦商船の檣や舳に揭げた旗など、どれが何國のか——分らない位だ、ステームボートからは引つきり無しに氣たたましき叫びを出すのが銳く耳を貫くやうだ。

矢張り高濱と云ふところが、今稅關の額になつてゐる小野濱と云ふところが、元生田川の河口に當る一漁村だつたと云ふ事である、其の邊から東に當る敏馬の浦など云ふところも、萬葉などの歌枕だつたが、葦は刈られ漁火は消え今は圓い白い石油タンクが並んでゐるばかり。

元居留地は異人屋敷と云つて、昔しから名所のやうに云はれたもので、恐らく神戶の特色であらう、今でも道が綺麗で、鐵柵をめぐらし、煉瓦の甃を敷いた庭に、夾竹桃や薔薇や、其他色いろの草花など植ゑないところはない、常春藤の纏うた石造の家もある、領事館には色鮮やかな、ユニオンジヤックや三色旗が青い室に映じて美くしい。

此の邊よく、ブロンドの髮、葡萄眼を有してゐる護謨人形のやうな子供を乳母俥に乘せ、日本的英語と西洋的日本語とを交ぜ〳〵に何か呟やきつゝ運動場さして曳いて行く、白いエプロン掛けの肥つたメードに會ふ、時々は紅木綿をグル〳〵頭に卷いた黑ん坊が守り

してゐるのもある。嘗つて棕櫚の花が食み出されたやうに咲いてゐる園に枇杷の實つて居るのを見付け出し素早やく飛び込んで平氣で盜み喰ひをしてゐる黒ん坊を見て畫のやうに感じた事があつた。

白い上着に黒ズボンと云つたコック風の男が、バスケットを肩に通るのも見受ける、角帶に澤山鍵をガチヤ／＼させて一種妙な腰付で忙しく行く商館番頭にも會ふ、煉瓦疊の路に花莚の屑などの零れてゐる、倉庫ばかりの町にかゝると、何だか莫伽にガヤ／＼と歌聲話聲がする、立佇まると變に芳ばしい香ひがする、其の聲や香ひは暗き金網を洩れて來るのである、そこに近寄るとうす暗い中に大勢の人間が頻りに茶を焙じてゐる、多くは女だが中に男もゐる、實に大仕掛なものだ、一寸外から覗いてさへ、ムーッとする位だもの、この厚い壁に圍まれた中のものはどうだらう、これがこの世からの焦熱地獄と云はるゝ茶庫なるもので、卒倒する者さへあるさうだ、しかし職工共はそんな事平氣で饒舌りつ歌ひつゝやつてゐるものが、さながらヤケに悶えてゐるやうである、こんなにして生活してゐるものの數は隨分多いもので、早朝若くは夕刻姉樣冠りに、草履穿き、そして土瓶を提げた女がウヨ／＼として見える、それがこの茶庫稼の女工である。

三宮附近から鐵道線路を渡つて生田神社あたりを、黒縮緬の羽織にふうわり風を膨らませて、ゾベラ／＼歩るく、藝妓にしては野暮な、無論淑女ではないと云つた一種得體の知れぬ風俗の女がある、それが所謂洋妾なるもので、開港以來の副產になつてゐるやうである。

元町の東部、榮町へ脱ける一寸僅かではあるが、恐ろしく道の狹い、そして穢ない一區劃がある、それが南京町と云ふ支那街で、黒光りのした柱には例の赤で格言のやうな事も書いてあれば、何々洋行などと貼つた商店もある、其處で豚肉も賣る、唐筆も賣る、支那料理もある、いろ／＼な食料品には支那蜜柑や白菜や赤茄だの珍らしいものや甘いものがあつて、又廉いので、わざ／＼此處まで用達に來るものもあるが、何しろ穢ない、一寸足を踏み込んでさへ豚臭く、蒜臭く六神丸臭い、支那人先生平氣で入口のところの卓に凭つて大きな丼から長い箸で何か滅茶々々に喰つてゐる。濃い脂肪の臭い巷に漂うて、此處だけ空氣が沈澱してゐるやう、一種、異つた色彩と音調とが、通る人を刺戟する。

東京近縣の女の特色

遊蝶花

◎東京近縣と云へば、先づ神奈川、群馬、埼玉、栃木千葉の諸縣ではあるが、今近縣と云ふのは、正確な意味で無く、唯だ東京附近の諸國と云ふ位な事である。便宜上、東京以西の神奈川縣方面を西の人と呼び、以南の群馬埼玉等を南の人と稱し、以北の栃木千葉地方の人を北の人ととなへて置かう。

◎扨て幾多妙齡の婦人が、職を求める爲や、又は修學の爲に上京するが、其の都會に步を入れる最初の關門たる各停車場のプラットホームを出て來る婦人を觀察すると。

◎西の口——新橋——に降りて來る婦人は、あまり恥しさうな風が見え無い。都會を恐れて居ない樣だ、惡く云ふとシヤア〳〵して居るが、其代り如才なささうだ。云ふ迄もなく近縣の人許りではないだらうけれど

◎北口——上野——に降りる婦人は、概して文化未だ普からずと云ふ樣な容姿をして、何處と無く世間慣れぬ怖々した恥しさうな容子がある。然し二三年も經て東京の風に慣れたら仲々さうでもあるまい。

◎南の口——新宿及び飯田町——から這入る婦人は、北口と同じく、恥しさうではあるけれど、一瞥した處ではきかぬ氣らしく、何處と云ふのでは無いが態度に圭角がある、大きな荷物を持つたまゝ、停車場からいきなり電車に乘ると云ふ風で、地方人らしい樣子を見せない。

◎西の人の瀟洒たるに反し、北の人は質樸である、流行物などは、少くも半期づつ遲れて居る、南の人の流行——髮飾りから縞柄など——に對する考へは、比較的淡白である。

◎容貌の上からは、北も南も西も、東京近所は特筆大書する樣な特徵は無い、いづれも平凡な顏である、が南の人は「最も誤解されたる東京式」で、北の人は「吾れ關せず焉的」で、西の人は「尤もらしい」顏をして居る

◎概して云へば、南の人は面長で、色は割合に白いのが多く、北は圓顏で血色はいゝが、黑味を帶びたのが多い。人によると南の奥の方は美人系に屬して居るから、美人が多いと云ふけれど美人系は逸て居る、然し北や西よりは美人が多いとは云ふものの、溫味のある美人は少い。

◎感情の上から考へると、南の人は險しく、西の人はおだやかで、北の人は緩い。

◎南の人は、見かけた處は強さうで、深く突込むと案外弱い、併し情の高調に達した場合になると、刄物でも振り廻し兼ねない、つまり感情の波の高低が甚しいので、それに比して、北の人は富士の裾野を行く樣に段々に情が高まつて行く、然しどこに深い所が在るかわからない、要領を得た樣で要領を得ないのであるけれども、仲々執着に深い、西の人は春の海の洋々として居る樣であるけれど、とり止めがない、觸れた樣な觸れない樣な極めて平凡な婦人が多い。

◎北南西と區別して見ると、先づ一面の事實は傳へ得らるゝが、北の海岸と、西の海岸とは似た處が多い、之は地理の上で海岸と云ふ共有物があるからであるが近縣の海岸の婦人は萬事に同化力が強い、感化し易い又避暑地としての海岸の女は、性質も容姿も東京とあまり變らない、南の人は感染し難い、底意地の惡い傾がある。元より多少教育のある婦人を云ふので、無教育な女は、いづくいづれの處でも凡て平凡である、房州女と云へば尻の輕いのを意味するけれど、必ずしも房州女のみでなく、海岸の女は凡て輕い樣である。

◎西の方で山に近くない方の婦人は女權が強い。南の方から北の方にかけて、蠶の盛な地方では女權が頗る盛である、下等な女は機械工場へ行くし、家で仕事をするものなどは、細い絹物を取りあつかふので、水仕事をすると手が荒れて絹がいぢれないと云ふので、主人公自ら釜の下に火を燃すと云ふ風がある、從つて、女子が多くの金を取るだけ權利も多いわけで、大きく云へば地方經濟は女子の織手にあるのだから、自然に威張るやうになる、奥武藏から足利地方に旅行して著しく眼に附くのはこの風である、之に反して常陸平原に旅すると、自然がパツ〃になつて居るせいか、非常に人なつこく感ずる、紫の筑波山を見ながら、若い婦人と話しをして居ると旅の苦を忘れる。

◎總じて東京近縣から傑出した婦人は出ない、今迄にない。今でも聞かないで之は都會に近いので東京の最もよくない、表面ばかりを模倣る爲であらう。

◎以上は吾人一個の考へではない、多くの人の語る處を綜合して、其要を摘むだのである、東京附近のローカルカラーと云ふやうなものも、交通機關の發達すればする程、薄くなつて行つて、單に東京の模倣と云ふに止まるやうになるであらう。

都會より地方へ

長曾我部菊子

青山の靜にたそがれてゆく町を、湖畔の女と、私といつも並んで、無言つて、將來のことをさま〴〵に胸に描いて、歩いてゐたのが、頓て、右と、左に別れて湖畔の女は西の郊外に。私は北の郊外に。

たゞさへ薄暗く佗しく、心の塞がる梅雨の天に、許多の煙突が林立して、蛇のとぐろを卷くやうに、のたうちまはる黒い煙が數十條、天をかき濁して、夜も晝も暗澹としてすゝけて行く煤煙の都はづれ、職工のちまた。河畔の家に住んで、私ももう二月餘となりました。

けれども、白日の間は、その疾い月日の惜しい悔みも何もそれほど突きつめて思ひませぬ。たゞ、仕事を濟してから、假の宿に立歸らうとする路々、ふとふりかへつて黄昏れてゆく暗い武藏野の北の空……夕燒の眞紅、あでやかに照り榮ゆる西の空、雜木林のかなたの上に、またも、五月雨れようとする雨雲を見て、望郷の涙!たまらず、なつて、ぽろ〳〵泣きながら、しみじみ、悲觀しては、わづかに、歸つてからの讀書になぐさめてゐます。

ああ、入京の際は、氣がはつてゐた。少しもうなだれたことがなかつたに、何として、此頃のこの不甲斐なさ……はしたないと思つても忍びられて、書けませぬ。おさつし下さい。私は弱い心の女になりたくないこのごろのこのげつたりしてゐる姿、いつまでもではない、必然ない。どうぞ、むちうち下さるな。今しばらく……。

私の近況ははなしづらいので、この手紙には何か外の事を書きませう、私が地方を出てからの所感を述べませう。其中でも、地方にゐて心に映してゐた地方とかうして都に一歩をふみ入れてのちに四顧つてみる地方と、そこによほど、ちがつた色彩を、私の腦裏にそめてゐる。それを申上げたいと思ひます。

私は思ひます。……私が田舍にゐた時は、私の心は白玉のやうに美しかつたと思ひます。錦のやうにあでやかであつた。水のやうに澄んでゐた。青葉のやうに清爽しかつたと思ひます。私は、私自身の心の過去の夢幻的美を思うて、可惜貴重な寶玉を、泥土に任した

殘念な感じが、此頃するのです。

ああ、國にゐた時は、いかに人間の溫情、人間の貴さ、血汐の紅さを信じきつてゐたでせう。私は世の中に極めて暗い極めて危い、極めて苦痛な、きはめて冷酷な、流れのあるのを聞いてはゐて、知つてはゐて、しかも解してはゐなかつたほんとうに、私は、地方にゐたとき、青い草の葉と、野生の花の花瓣でもつて綴つた假面を被つてゐたのです單純ではあつたが純潔であつた。

退歩の不安はたえず胸に充ちても、餘裕は常に無邪氣な空想にともなつてゐて、私の夢は圓滿であつた。



ああ、其れが一つの意地のため、都へ、都へと、あこがれ、風を聞いては思ひ、行く雲によせては思ひ、水の音に醉うても思ひ思ひ思うて、やうやう久戀の都にはいつたまで……ああ、それまでの私の二十有餘の星霜は、私一生の樂園でありました。

地方にゐたとき、私は來る日も來る日もつまらないとばかりで倦怠いてしまつて、青々した杉の森も、ふはりとういてゐる白い雲も何もかも、けだるさうで、眠たさうで、荒みきつて、つまらなくつて、こんな不動の山、こんな、おどまつた弱々した田園の空氣の中を如何し

て、向後十年また三十年すごしては行けよう、私がまし、妻となり、母となり子を生んで女並のみちをゆくべきならば、あの欠伸をしてゐる白い雲も、あの、ねぼけた顔をしてゐる山も、何も何も、どうであらうと交渉はない……。けれども私は……。

一の意地を思ふ時、憤は、熱い涙と沸き出て、泣けて泣けて、何でもかでも老人じみたおんぼりとした地方……張合のない、囚房のやうに事の起らぬ、力のない地方、いざ出ようと火のやうに胸をもやして、躍起するに足る時機をまちあはしてゐました。

欠伸をしてゐる白い雲、寢惚け顔をしてゐる青い山そこに黄ばんだにぶい眼をしてよろ／＼してゐる粘液質の人……ああ僞らず此は私が都をしらぬ時の地方の感想でありました。

それが都にすんでわづか二月、二月の間に地方に對する感想は根底から相違しました。私は、二月前までも、人と話しをするときに、熱心に聞きもし語りもしたのに、いくたびか都の人に、表面美しく、たばかられ、たばかられて來て、まだ二月といふに、私は、心からの話、心からの聲、心からの情が出なくなりました。いつからともなく、私も心を二重につかひわける都の人に似つつあるぢやないでせうか。

都にはただ、孔雀のやうに綺麗な羽毛を展開て、これ見よがしに驕つて歩く浮薄な女と、ぱか／＼した色彩をもつた俗惡な西洋建の商店と、人をあごで使はうとする、絹帽のひよろひよろした紳士達ばかりです。つまらないと私は思ひはじめてゐます。思ふと同時に、私はまたなにかに憧憬れはじめました、今は戀でもない、都でもない。何か自覺ることはまだ出來ないが、心が又もわく／＼して、何か所據を探すのです。

ああ、私はどうしてこんな放縱な心をもちましたらうか。たゞ一の意地、それが私の生涯に、血汁を焦す燒印を捺しました。

欠伸をしてはゐなかつた白雲のいき／＼した勢力、ねぼけてはゐなかつた山の沈靜な態度、鈍かつた地方の人の心の純潔を思ふと、崇さにたへませぬ。私は日ましに都の濁つた空氣から透して見て、はじめて田園の清淨、田園の快樂を感じました。地方にゐられる、あなたは、田園の女王！丘の草をしいて、自然に向つてはれやかに歌をお讀みなさるでしよう。

ああ、私は心が二重に迷ひます、女としては、私は

田園に歸居して、花と草と丘と木立と、それらの側に平和に安靜に一人の侶と手をつないで一生の旅を終りたい。誤解して下さいますな、私は、心底には、家の女となつて、女らしき女として、兒女の母、一家の主宰者となりたい願が切でございます。變生女子の群に入りたくありません、私は放浪の生活したくありません。

それぢや田園に歸らうか!!

歸らうかとおもふと胸がとどろいて歸るまい、都は私の試練石だ、歸るまいと固くなるのです。ふだんの矛盾!!大なる矛盾の道をあるいてゐる私……

それでゐて、弱い者の結末は取りたくありませぬ。

私は私が踏んで來た徑路をあなたに味はれる時、身の置場もなく、羞恥を感じます。私の足跡はしらべないで下さい。あなたにはあなたの道が丘をこえて林をこえて、美しい野の水のほとりにあるですもの、實に邪は熱情をつくして友を得る處ではない。戀しても相擁くべきところではありませぬ。

語をよせたい、地方の方に。あなた方は覆面してゐるから見えなさらない。しかし、私のことばを信じて下さい、あなたの周圍は、高尚と、純潔と、無邪氣と光明とにみちみちてゐる。その野生の花と、青葉とのベールをお脱ぎなさるな。ああ、美しさ聖さ、あなたは田園の女王、かしらには簾潔の花冠、手には熱情の紅い花束をもつて。どうぞ。永久に然う在つて下さい野の道から動かないで下さい。

二月の間ばかりで、何の價値もある事は申上られませぬ、あたひあるものを得るには、多くの多くの時間を要しませうに。

五年以前

山田くに子

八月の鋭い日の光は、中庭の深い木立ちをこぼれて水の反射の象の樣に、開放げた書院の上に動いて居た表通りは人足が途絶えて、たゞ〳〵強い日の光が一パイに射しつめて恐ろしい程であつた。二三軒さきの氷水屋から、ガッシユ〳〵と氷を削る音が、至つて單調に此光ばかりの晝の中にやゝしばし響いたが、やがてそれもやんで了つた。おばあ樣は團扇の手を休めて眼

を閉ぢたやう、あたりが餘り森として來たので、今まで裁縫して居たのがやるせない様に物悲しくなつて、アヽ〳〵と其まゝ向ふへ投げ出すと、新しい紺飛白の匂ひがそこらに動いた。其まゝ横になつて見る共なく瞳を上に付けると、空は不思議な程濃青に澄み切つて動かぬ厳めしさを示して居る、柔かさうな梢の繊葉が音もなく時々ゆら〳〵ゆれて、靜かな事、靜かな事、自分はぼんやり「神」と言ふ様な事を高い所に思つて居た、虻が一疋ぶーんと羽根を鳴らして行つた……と「郵便」とだるさうな聲がして、サラリと物の音がする、……とはね起きて急いで表の椽に出てゆくと、脚夫の白い帽子がチラリと行き過ぎた。乾き切つた椽には封書が一つ聲もなく投げ出されてある、それを取り上げて裏を見る……東京市〇〇〇××××もとの所へ歸つて、靜かに封を切ると、ソヨリッと風が吹いた。何事もなく、しばらくは白い白い巻紙に若々しい字が綴つてある、それを繰る音ばかり、サワ〳〵とあたりに響いて居た。然し其れを讀む若い女、都に憧憬て居る自分の胸には、夏の海の様な波が騒いで居た。

十分の後には、書院の上に硯箱が運ばれる、巻紙は木の間をもれて來る日の光を受けて、淡青く透きとほる様であつた。周圍は相變らず靜かである。

……………………

ほんとうに田舎に居ては新らしい本の名も知らずさればまして讀む事も出來ません、都會生活をうかゞふ毎に私の心は矢もたてもたまらずなりますが祖母を思へば……あゝ老いたる祖母を思へば……

こんな事を書く所までゆくと、汗がしつぼり顔だの脊だのへ湧いてゐた。

參ります、參ります、きつときつと、行かないでは居られません、あゝ都會！都會、都會けれどいましばしは……あゝ……あゝ……

……………………

書いても書いても書き切れぬのをやつと止めて、青い封筒へ入れた。東京市〇〇と宛名を書き乍ら、華やかに動いて居る、都會を思つて手さきがふるへた。それを持つて一寸衣服のみだれをなほして裏に出る下駄の音が靜かなあたりに耳だつて聞えた。胡瓜の花の黄色いのに埃りが積つて汚いのを右に、細い畑道をぬけて、やゝ廣い裏道へ出る。洋傘をパッと開くと、オリーブの色が鮮やかに、熱い日光に輝いた。

もつ〳〵と樹立の緑が、雲の様に山から山に重なつてゐる、深い深い緑の國、緑の山にとりかこまれて

西へ出るにも、東へ走るにも、此山を越えて、彼の山を越えて遠く〳〵行かなければならない。と今更らしくぐるりと取り圍まれた山々を見ると、白い雲が綿の樣に彼所此所の山の根から湧き上つて……小さい川を渡つて、左へ曲ると、だら〳〵坂に成つて居る、其所を下りると友の町の通り、右側に小さい郵便局がある。若い局員たちは晝の人なきつれ〳〵に米いりをふるまはれて、其れでお茶を飲んで居た所であつた。突然若い女が入つて行つたのできまりが惡かつたと見えて、お互に袖を引張つたり、可笑しくも無いのに笑つたりした。手紙を投函して元來た道を家にと歸り乍ら胸の中では頻にさつき來た手紙の文句を繰り返して見た。「あなたはもう地方で熟すべき所まで熟して了つた」と書いてあつた。「此上は新らしい修養が必要だ、新らしい修養をするにはどうしても地方に居てはだめだ」と書いてあつた。それから都會生活の文字に傳へがたき味ひ、「來たりて見よ」と言ふより外に説明のしようがない生活だ。と書いてあつた。……行きたい行きたいと好奇心は先づ胸をそゝつた。東京で新らしい修養をしたら一かどの者には必ずなれよう……と藝術家と言ふ名が星か何ぞの樣に美しく思はれた。考へ考へ歸つて來る裏道、隣りの家の畑に草夾の紅の花が燒き付く樣に咲いて居た。

「どこへ行つて來た」「郵便だしに」「マア此暑いに、こゝへ來てお茶でも飲め」とおばあ樣が呼ぶ、行つて見ると妹が學校から歸つて來て居た、妹はお茶うけのふ饅頭を續け樣に喰べ乍ら、學校で有つた其日の面白い話をする、「湖水へ連れて行つたは好いが先生が游げないもんだで生徒を後ろから押しちやあそれ游げそれ游げつて……」と耐らない程笑つて話すので可笑しくなつてアハヽヽと笑ふと、妹もアハヽヽと笑ふ、アハヽハアハヽヽと二人でころげて笑ふと、おばあ樣も釣られてアヽヽと笑ひ乍ら「何がそんなに可笑しいだか」と言つたので又アハヽヽと笑つて了つた。然しかうして笑つて居る間も、都、修養、藝術と言ふ樣な文字はかき消されぬ鮮かさに、胸にあり〳〵と刻ざまれて居た。甲斐絹の行商らしいのが帽子を後に被つて、白い扇を用ひ乍ら行き過ぎた、あと蝶々が二疋もれもつれて向ひの家の屋根までも舞ひ上つたと、左にそれて私の家の方に來たらしかつたが、それ切り往還へは姿を見せなかつた、時計は五時をうつた。日足が斜に長く奧座敷の疊を越えて、煤ぽい襖の仙人に射して居た

「あんまり好いお照りだつたで、今夜は必夕立があるぞよ、乾し物を早くよせておけ」とおばあ様は注意した。どれしよ、と立つて裏口で空を見ると白い雲が薄くかゝつて居る。日光の力も餘程減じて。

かう言ふ樣な日を送つて居たのも、もう五年の昔となつた。日頃は昨日の樣に思つて居たが、ふと時につけ深く思ひ出すたびに、其遠く〱成つたのに驚く。

弱ければ一人にたびし野の道を我から捨てて街道を行く

待ちしゆゑ美しきゆゑ二十ゆゑ此寂しさになみだながるゝ

ある時は針投げすててひたすらに都を思ふ我少女なり

さま〲の女の道を思ひみてせぐりなくなり我てゝろから

はたちともなれば我身にさま〲の捕手ぞ來る女捕るとて

秋あはれやがて死にゆくさま〲の心の如く蜻蛉の飛ぶ

九重の朝顔

盛夏の頃

聖上陛下には、平常よりも三十分程早く、御寢殿を出でさせられ、先づ御風呂を召し給ひ、御少憩の後、時には御廊下先きより、庭下駄を召して、御苑内を逍遙あらせ給ふ。御苑内には、千代を經し常磐木多く、花卉の類は、四季それ〲の盆栽を、園丁より仕丁に、仕丁より内舍人に致し、内舍人之を御苑の内に配置して、聖覽に供し奉るなり。今は恰も、朝顔の目覺むるばかり美しきが咲き出でゝ、朝なく〱の御心を慰め參らせつゝあり。他の盆栽は、内舍人若くは仕丁に於て、日日、手入れをなすに引換へ、此朝顔のみは、女官自から手入れを奉仕し、陛下の出御なき前、甲斐々々しくも、羅綾の裾を端折りつゝ、花を檢し、葉に水を注ぎ、又た、御覽後の花を摘み取り、蔓の伸るを防ぎて、翌朝の花を促し、かくて幾朝となく、上覽に供へたる後、蕾少なになりたるは、園丁に返へし、又新らしきを差出さしむるなりとぞ。



富山と岡山の女

反魂丹と吉備團子の産地

下枝子

富山

◎美人系に近いとも受取れぬ

本場美人の産地と、音に名高い越後をつい鼻の先きにひかへて居ながら、僅か一國やそこいらの違ひで、何故斯う富山は女が醜いのか、今こそ新潟縣越後の國、富山縣越中の國と、強て別々に云ひもすれ、昔は越後越中おしなべて、越路と云つたもの。みゆき降る越路少女とか何とか、こちらの女は美人と相場がきまつて居て、それも賤しい百姓や素町人共が定めたのぢやない。美しい京の上﨟達にとりまかれ、其方にかけては目の肥えたお公卿衆が、古今集など立派な歌の御本でちやんと證明してらつしやるんだもの。どうしたつて富山は美人系でなくちやならない筈だが、さてどうしたものか、見る程の女、出逢ふ程の女、皆なお出額の頬骨の尖つた、口の大きい、腮骨が恐しく突出た、重箱面ばつかり、それでも雪國だけに、色は白いだらうと思召すでせうが、どうして、色が白けりや七難かくす、少しは見増しだらうけれ共、年中日本海から吹いて來る酷い南風にいぢめられてる故爲かして、褐色がかつた額には、おまけに深い皺の波さへ刻まれて居る老人は勿論、若い女がさうなんだから堪らない。肩の怒つた、おしなべて大柄な、顔立から體格から、どうもアイヌの種族が殘つて居て、それが段々進化して今日に至つたのぢやないかしら、などとこんな事も思はせる、娘でも細君でも一體に横肥りがして居る。肥つて居ると云ふと、曲線美を直ぐ連想して來さうだが、併し、十一月から翌年四月迄、半年間を雪に閉込められて、運動不足の結果、ぶよ〳〵肥りに血肥つたので引締つた處と云つては些少もないから、その見つとも

ない事と云つたらない、その上、嫌に下あがりの調子で方言澤山な言葉が、一層不快を感ぜしめる、わけても耳ざはりなのは、さうけ、さうけと、他國者には舌の先きに思ひ入れ力を入れて、口をへの字にし、咽喉の奥から引張り出すやうにでもしない事には、中々眞似も出來ないやうな言葉を會話中、思ひ掛けもないところへ、ちよい〳〵はさまれる。それを聞くと如何な美人の口から出たのでも、餘り好い氣持ちはしないまして況んやなのだから、全く嫌んなつちまう。

だから花柳界の女にしても、土地產の者に見られたものはない、あれは乙だとか如何とか、少しでも騷がれるやうなのは、きまつて大阪あたりから流れて來たもので、それでも東京の津之上藝者位がせい〴〵だ。

だが一寸と二時間ばかり汽車に乘つて高岡へ出るともう女の顏が違ふ、姿がやさしい、加賀の國高岡市と斷る迄もない、高岡が富山と同じ越中でない事は、皆樣先刻御承知の事と思ふ。加賀は又古來美人系として知られて居る。つまり越後直江津、加賀高岡、此兩端で嚴しく美人系は抑へられて居るものらしい。

◎女學生を尊敬せぬ

いや單に美人系ばかりぢやない、あらゆる文明が皆な此處で抑へられて居る。早い話が越中第一の首都たる富山に女學校が出來たのはつい此頃の事で、ものの十年前、官吏等の細君が女學校出だと聞くと、土地の古老で相當に物の解つた筈の人でさへ、何と云ふお轉婆だ、學校の教員にでもないのか知ら、女の學問はいらん事だと顏をしかめたもんだ。一體昔から女子の教育は等閑にしられて、士族の娘でさへ、女大學女今川位もあぶなつかしいと云つた有樣であつた、今では多少女子教育と云ふ事が稱へられては居るが、それでも高等女學校を全部卒業して家庭に入る人は極少數で大抵はもう二年三年位でよして直ぐお嫁入りだ。最後迄殘つて卒業する者は、容姿が惡いとか、不具者とか、又は親を養ふ義務のあるものとか、さうしたものに限られてると云つても好い狀態で、いつ迄も學校通ひする者は、土地の人からは餘りよくは云はれない。

◎凡てが保守的

一體に保守主義で、東京女學生のやうなハイカラは見ようとて見られないのは勿論、木綿衣服の筒袖に、海老茶の色の褪せた袴を穿き、なりふりに頓着なしの

通學姿は、綺麗ぢやないが、奥床しい感がしないでもない。

だが、其趣味はと云つたら、お話にならん下級な者で、雑誌は師範學校高等女學校の女生間に、やつと少女界少女世界の類が極めて少々讀まれて居る位、女子文壇や女學世界の如きは、主に東京だの他國から入り込んで居る官吏とか、お醫者樣とか辯護士とか、さうした階級の若奥樣の間に愛讀されて居るばかり。女學校卒業後は師範と云はず、高女と云はず、大抵小學校敎員を勤め、餘暇にはお琴のお稽古お花のお稽古と、そんな事にばかり憂身をやつし、本でも讀んで樂まうとか、進んで高師入學試驗に應じて見ようとか云ふ者は、先づ〳〵一人だつてないと云ても差支あるまい。

氣質はと云ふとやさしい方で、萬事うちわに、其上例の賣藥行商の本場丈けに、一文の錢を百にでも割つて使ひたいと云つた氣風、それは着て居る衣服を見ても解る、單衣だと云ふのに、袖口は勿論、衿には黑い毛繻子の上衿を掛け、裾にしづを取つた具合、打見にはどうしたつて袷としか見えない。お尻をはし折つたのを見て、オヤ〳〵單衣なんだよと驚ろかされる。だから世帯持ちは、よし容姿が醜くたつて何だつて、世話女房には富山女が第一と推稱したいが、困つた事には富山女はどうも貞操の觀念が薄い。

岡　山

◎落ち損なつた洗髪

『中國者は兎角陰險でいけない。』

これはよく聞く言葉だが、實際東北の人達の、何處か斯樣間が拔けて居はしないかと思はれる程おつとりして質朴で人の好いのと反對に、中國者と來たら、ずるい程はしつこくて、小才の利く代りに人が惡い。そして竹を割つたやうな、さば〳〵と氣持ちよい關東人に比べると、如何にも陰險でネチ〳〵と氣持ちの惡い事といつたらない。

だがその中國者の中でも、縣々國々で幾らか人氣も違ひ、ネチ〳〵の度も違ふ。山陰道と山陽道と、氣候風土の關係から云つても、是非違はなければならんのは勿論だが、私にはそんな小六かしい事は解らない。からして此處では只、同じ陰險な中國者の中でも、とりわけネチ〳〵と、垢の落ちそくなつた洗髪とでも云つたやうな、備前は岡山の御婦人達を紹介して見ようなら、

◎額の生際は岩藤式

備前をんなに疊表は備後——とこんな俗謠もあるけれど、瓜實顏の元來が長いところへ持つて來て、梅幸式の長顎で、そのくせ額はせゝつこましく、馬鹿に濃い富士額が、小額なしにくつきりと、殊更めかしく、宛らとつてつけでもしたかのやうに生えてる具合、何だか芝居で見る千代萩の八汐か、鏡山の岩藤を聯想しなければ居られんやうな美人が多くて、其上、をかやまををきやあまと發音し、それですから、わたくしがと云つた風に、言葉の終りの方へ馬鹿に力を入れて、相手の頭をウンと壓へつけないでは置きませんと云つた調子の、いやな言葉癖で話しかけられるんだから堪らない、一體姿はやさしい、所謂小股の切れ上つたと云つたのが多く、後から見ると惚れ〲する程美しいのもあるが、顏を見て、幸にその顏がよかつたとしても、口を利かれると、それがお世辭であらうとなからうと、所詮は不快な感じがしずには居ない。

だがせめて、見かけによらない、顏は強いが、言葉は重いが、氣質がやさしくつて、さば〱して居るとでも云ふのなら格別、けちで妬み深くつて、怨みつぽい。陰險だと云はれて居る同じ中國人同志でさへも、岡山女は陰險だ人氣が惡いと、內々恐ろしがつて居る位。處で、教育も中國第一と云はれる位普及して、女學校などもずつと早くから建設され、中々小怜悧だから、よし腹の立つ事があつたにしても、相手の前で容易に怒つて見せたりなんぞ、そんな事はけがにもしない、ちやんと根に持つて腹に含んで居て、いつかは屹度恨をかへす、いや好い復仇の機會はないかと、絕へず相手のすきをねらつて居る。

◎一片の炭一切の澤庵も忽にしない

其代り經濟の上手な事と云つたら、それこそ先天的なのかも知れない、第一おいしいものをたべたがらない、其日〱の食事をつめて、どんな儉約をしても、月々屹度幾らかの貯金はおこたらずする。其癖良人の體面を重ずる故爲かして、私の家庭では朝も晩もおこうこのお茶漬で濟しときますなんぞと、そんな亭主に赤耻をかゝすやうな事は、決して人前に云はない。それどころか却つて三度の朝夕鯛の刺身だの、ビーフステーキだの贅澤な御馳走ばかり食べてるやうな事を云

つたり、でなければ暗に自分の家は美食家だと思はせるやうな話をして、お客が來れば壽司もおごる、やれしるこだ、アイスクリームだ、サイダーぬけ、シトロンもあつた筈だと、それは〱大變な優待。岡山をんなの仲間同志では、ナアニ驚くもんか位に内幕を見すかすかも知れないが、他國者は一寸と度膽を拔かれて恐縮して了ふ。

萬事勝手廻りによく氣がついて、一片の炭一切れの澤庵もゆるがせにはしない。主婦たるものの心掛けとして誠に結構至極な事である。まして儉約に儉約して殘した金を貯金する、何とも稱讃の言葉もない、誰だつて感心する。

◎へそくり金の要る原因

だが折角こんなに讃めて來て、私は又候惡い事をすゝつぱぬかなければならぬ。土地が土地だけに恨れやしないかと、少々不氣味だけれ共、仕方がない、事實だ、岡山の御婦人連を紹介する以上、どうしたつて書かなければならぬ。

と云ふのは別でもない、折角家内中良人の口までつめて一生懸命儉約して貯めた金を、岡山をんなはどうするか。

みんな呉服屋へ拂つて了ふので、食べるものを食べないでも、美しい着物が着たい、善い帶がしめたい、指環も欲しい、金鎖も欲しい、何故と云つて、食事は三度三度人前でする譯ぢやなし、食べて了へば、どんなに贅澤な金のかゝつたものでも、たゞ消えて失くなつて了ふ、引代へて衣服はと云ふと、人中で立派な華を咲かせる、其上、一度買つて置けば、大切に手置をよくすると一生あるんだもの、それに又、美しい衣服を着て立派な身なりをして居れば、馬追にも衣裳で、自然形も整ひ、人の思はくも違ふ譯合といふので。

それが段々昂じて來ると、單に儉約して貯めた金で買つた丈では如何して滿足が出來やしない、どうしても餘分に金が必要になつて來る。

併し岡山女は亭主にねだつて何も彼もすつくり其世話を待たねばならんのは心外だ、殘念と云つてゐる。だから一通りねだりはするが、其餘は皆な魚肉でも野菜でも、菓子でも何でも日常現金で買ふ程の物はすべて一錢でも二錢でも、亭主に内證で頭をはね、盛んにへそくる。これは裏店の女房連がするばかりぢやない。地位ある立派な人がするのだから驚く。



農村の處女が最も活動する田植時

伊豆　ゆくの

何處を見ても新綠の氣、滿ち渡つて奔放な夏が來た。私は思はずあゝ自由、我々農民等の活動すべき夏が來たと叫んだ、身も心も勇む折柄、父より今日は田へ出て見てはどうかとの事、此頃の引籠りにあきて外面を眺めたくて困つて居たところであるから、二つ返事して母樣と下女と私の三人で苗取りにゆく。實に心が晴々する、畔を三人して步むと微風が頰のあたりすうつと通ふ、今年の立札は生木の匂ひも身にしむ樣な眞白な板が畔に立ててある、苗代共同地と大きく書いて、下に細かく當番人毛老由衛門と記してある。私等のも此の田にあると聞た、鯨二尺位の幅に長く〱野の女神の帶を敷いたのかと思はるゝ苗が幾條も植ゑられてある、私等は端から取り初める、私は馴れないで下手だけれど母樣の上手な事、兩方の手で少し取つたかと思ふと、親指に藁を掛けてくる〱と束ねる、漸く眞似て上手になると下女に負けまいと側見もしないでやつた、突然下女が耳元で「降り出しました」と云ふ、母も頭を上げて「あゝ遂と東が暗くなつた、これはとても止むまい」と云ふ、蛙が一齊に啼き出した、降つたと云つても日取がきめてあるのに止める譯にもゆかず、又取り初める、歸りには雨の雫に全身濡れてしまふ。家へきて菅笠を取ると晴々する上から壓されて前髮が毛肌にあたつて痛かつた。「行野が初めて出たのによう心棒だつたのう」と祖母さんは退屈さうに皆のお晝にするのを待つて居た。

午後は晴れ。「田植ゑ忙しお泣きぢやないよ早稻も晩稻も坊の稻」と彼方に鈴振るかと思ふ樣な美音を發して聞ゆる歌の主は「女よいのは新家の咲ちやん歌でよ

いのがお新ちやん」と、村の人々に唄はるゝ其のお新ちやんである。涼しい聲は岩間を走るせゝらぎの音と共に微風に送られて、苗の上を向ふの山の麓まで流れる、方々から、も一つお新ちやんと頼まれてる、お新ちやんの田に出た日は若い男など落付かない。

側には小供が三人可愛いお尻を遠慮なく端折つて、大人の眞似しては畔の端を捏ねて、四角に土を高くして田の形を作つて各自に「叔母さん己にも苗おをくれよう」と少しづゝ貰つて四角な小さい田に植ゑる、私等も小さい時はよく家の田の端に作つたものだ、其れがよく付いて實を結ぶものである、幼い昔がしみ〴〵なつかしかつた。小供は田植があきると魚釣りを初める。背負ふた赤兒はすや〳〵と仰向いて居る、小供はそれを邪魔さうに手も掛けないで金だらひを持つて陸持ち役をして居る、外の二人は傍で摘つて居る、雨位には恐れない、それ又泥鰌が居たとて嬉々として陸持ちを呼ぶ。私等も五人で大分植ゑた、ともすると私は畔を歩きたがる、折角塗つた畔を一人で破して惡い事をして居る。若い叔母さんは「五月女の畔荒し」とはその事よ、と笑つて居られる、叔母さんは中々面白い事を云ふ。「早乙女が子の泣く方へ植ゑてゆく、の發句と先刻新ちやんの唄つた歌と對照して見るとよく形が似て居るのね叔母さん」「さうね一つ唄つてごらんなさい」などからかはれた、植ゑ終つたので名殘惜しかつたが歌の聲を後に夕方早く歸る、お蔭樣でさん〴〵蟆子に足を喰はれた。

丁度今は麥をこく時なので田へ出ない日は麥こぎをする、麥藁が出ると面白い、色々工夫しては小さい籠や螢を入れる籠を作る、小さい籠は桑畑へ行つては桑の實を取つて入れる物、螢籠も器用に作ると立派になる、女の子は是を持つて夕方から小川の邊に出て螢を呼んで居る。

此の山里は戸數僅に三十三軒、浮世の荒波はどこをと云つた風、農民共はこの靜かな村に暢氣なものである。今日も修善寺の牛舍から宅への使が來て門に自轉車を置くと、是は近年この土地開けて以來、自轉車なるものの初めての御入來、通る人々は珍らしげに鈴を鳴らして見たり車輪を撫でて見たり、それはそれは御機嫌である。「何？自轉車つて云ふものだ、己初めて見たゞ、フム一人で走れば錢入らなくていゝな」斯樣な問答は半時間程も門外に繰り返された。子供など手を打つて喜んで居る。

二三日前から割合に人の往來が烈しい、と云ふのは精々と働いた養蠶の賜物が出來たので、繭買ひが二十人程入り込んで居る、私の家も今日賣つた、私等が田から歸ると、繭を持ち出さうとして居る所であつた。

養鷄や牛乳でまだ收入の道がある私の家は、雌鷄が三羽あつて毎日一つづゝ卵を生む、けれども賣らないで多く食用にする牛乳も買はないで間に合ふ、二頭の牝牛は代る代る犢牛を生むので牛乳も飮める、此の外使ひ用の馬一頭、是等の世話をするのは一寸面倒であるが、お乳を搾る時と、肥えたる春駒に菜の畑道を乘り歩む時とは愉快である。

伯耆

文子

田植前の一週間程、田舍娘に、忙しい折はありますまい。先づ、田植着といつて筒袖の單衣を、新らしく調製するんです。そして、襷や、腰帶なども必ず新らしいのに仕かへ、帶のはぎの三尺も、其年に流行するメリンス友禪の新柄を、つけるのですから、ほんとうに田舍娘の年に一度の仕事着の仕かへ時なんです。それ、まあ、田舍娘の田植に對する念は、上流の方の夜會か、はた、宴遊會かにも相當するでせう。誰れ誰れの帶の模樣は、よかつた。××の田植姿が可愛らしかつた。○○の顏の白いのが、目立つた。△△の聲が美しかつたなど、種々な評判が、立つのです。

時には、彼女らの運命迄も、支配することが、あるんですから、學なき、何らの信念もなき、淡い虛榮に憧がれて居る處女なれば、迷ふのも無理はないです。去年は、お松さんが、村一番の美人の、仕事しの、評判を得て、田地の三町もある家に、嫁いだなど彼女らは堪へず羨んで居るのです。

いよ〳〵、田植ゐとなると、五六人位團體を作つて早乙女となり、村中の家に、やとはれるのです。朝なんか、暗い中に、ちやんとお化粧すまし、白い手拭を眞深かに、額の見えない位に被り、上からは、光澤やかな、銀杏返しや、桃割れの赤いてがらさへ、可愛く見せ、白いものを、塗つた美しい〳〵顏は、もう、もう、歡喜に滿ち〳〵て居るんです。そして、歌つて働いて、朝を忘却れる長き日を、短しと過すのです。夕べになると、朝の美しい面影は失せて、白い顏の、所所に泥さへついて居るのです。けれど唄聲のみは、いつも野の、小川の樣に、淸く澄んで居ます。

かくて、一週間位は、前後も覺えず、働くのですが、

いざ村中の、田植ゑがすんだとなると、直ぐに村中が五日間位、代滿休み（田植のすんだ祝）と、いつて、老いも、若きも肩を休めるのです。

此の時が、村娘の、一番たのしい、うれしい、時です。田植ゑの疲れを、疲れとも思はず、早乙女して、まうけた賃錢を以て、小さい虚榮を、滿足させに、程近い、町にすぐ買ひ物に出るのです。そして、流行の浴衣など、思ひ〲の品を、買つて歸り、盆踊りの、お稽古など、道角の藥師樣の、お堂なんかで、キヤツ、キヤツさわぎまはるのです。

近江

鈴蘭

農家の夫人の最も美しく見える時は、春酣の花祭に裝を凝らした時でもなく、盂蘭盆の涼み祭の夜の踊り姿でもない、吁々それは僅か十五日か二十日程の間の……田植時のみなので有る、此の時に田に居る女の人達を見ると、何うしてかうも美しい人許なんだらうと羨ましく成つてくる。紅いメリンスで絎けた十字襷、白布の手甲脚袢は裾短かに着た紺の着物に能く映り、輕く被つた手拭の上には白く晒した竹の皮で作つた田植笠をかぶり、そして青春の燃ゆる情にも似た勢の良い若苗を左手に持つて、豐ぷりと引き入れた田の水に其の清楚なる姿をうつして、無心に苗を植ゑて居る所は、眞實に懷かしいとも嬉しいとも云ふ事の出來ぬ快感を覺える。そして水から手を離してほつと一息したと云つた樣な時の……其美しい事と云つたら……下向く加減が少し許り貌に潮がさして有つて、農閑な時に見るより、ずつと色白く、顏性もよく見える、斯の清らかな美しさを見ると、指に輝くリングの花を欺く此のパラソルも打放つて、白の手甲、田植笠に換へ度いと思ふ、然してその澄みきつたよく通る聲で調子をそろへて、田植歌を唄ふを同性の私等でさへ恍惚となつて終ふのだもの、田の牛に耕かせて居る若い人が此の異性の優さしい美しい聲に氣をとられて、手綱ゆるして牛に一二町も逃げられたと云ふ話を聞くのも道理だと思ふ。

嗚呼田植時の美しい女の人よ――いつまで〲も今の如く淸く然して美しくて在れ!!

めでた〲の若松さまよ
　枝も榮える葉もしげる
親子妻とも田を植ゑ終ひ
　神に千歳のたねを待つ



本州南北兩端より

薩摩の南より

みゆき

夏は開け放しの座敷　雨戸は閉めぬ里　士族の權威
お薩や栗が常食　女でも酒を飲む　婦人は能く働く
物賣も多くは女　婚期は遲い　祖先の墓地を清む

御聞知の通り此様な暑い處でせう、何處家へ參りましても押入は決して御座いません、壁を用ゐて有るのも床の間位なもので冬は襖障子を閉てしめて寒冷を防ぎ、夏は全部開け放つて三間でも四間でもぶつ通しですの、でも又左様でもしなくつちや眞夏の眞晝時、仰げば空には夕立の雲さへ動かず、伏せば下行く小川の水の流も涸れむ許りの時抔全くやりきれませんよ、夫れにおどろ〳〵と鳴る神の音がして篠つく許りの暴風雨の日でゝもなくつちや夏冬共雨戸は閉めませんのよでも不思議と盗難なんて一寸も聞きません。田舍は皆此様な物でせうけれど、こゝは又全くの天下泰平、太古の俤があります。元々薩摩の武士は鹿兒島を除くの外屯田兵制度でして百二の都城に配置されました、而して廢藩の際に土地を賜はられましたから士族は大低地主で御座います。夫れで只今でも昔の様に士族の威光が盛でして、それは男尊女卑官吏崇拜でしてよ。從つて平民は一八十なんて云はれて氣の毒な程頭が上りません。鳥渡子供が遊び同志で口論をして、而して士族の子が泣いてでも家へ歸りませう?、平民の子に負けるなんてつて勵ますんですつて。士と申ましても中には憐憫な程零落した方も御座いましてよ。でね當村ぢや何宅へ伺ひましても、茶の間と申す様な處が御座いません。殿方は御主人始め坊つ様迄お座敷住居、御婦人は奥様嬢様御老母様でも臺所にお住居が代々の習慣らしいんですよ。御親類や御近所の方が被入つても女の方などはお臺所で應對ですよ。御飯もお臺所で召上ります。田舍の割に朝寢の土地でして朝餐は八九時お晝は二三時、晩餐は九、十時頃ですの。三度々々お薩や栗を御飯に交ぜて……其れが常食ですの。殿方は勿論御婦人でも大抵の方はダレヤメと稱して音に名高き諸燒酒をきこしめします。其又お盃が小いのですよ、左様ね、一寸婦人持の時計位の大きさよ。熱い國

程強いお酒を頂くのですつてね。當村のお燒酎も強う御座いますが又皆樣もお好物でして可愛いおけしの孃樣でもお盃に二つ位は平氣よ、私試して見たんですもの何の村でも御幣擔の二人や三人は有る者ですけれど當村は全體つてもよいんですよ。未だ舊曆を守てましてね、六ヶ敷い方になりますと酉とか丑とか申ましてお洗濯や買物に迄日を選びます。洗濯の盥、洗面の盥物乾竿等も男女別々に使用致します。まあ丸で風俗を書いてしまひましてよ、御免遊ばせ。そこで女の方は大抵良家の方でも帶を用ゐません、おはしをりの儘向三軒兩隣――と申ても一寸間が有ます――近所近邊親戚位の訪問は致しますのよ、最も冠婚葬祭の大禮等には帶も用ひます。赤ん坊は生後半ヶ年位迄は懷へ入れては往來を歩きます。但し是は當村より又山懷の人が主に致します。

男尊女卑から來た譯でせうか。一般に婦人が能く勞働致します。四季折々の野菜は勿論、春夏秋と三度の養蠶、鷄が居るでせう、豚が居でせう、馬も居るでせう、犬も猫も――。夫れに植付の田の草の、出水の、ひでりの、刈入の、稻こきのとまあ九分九厘迄は奥樣がお世話なさるんですもの、本當に年が年中休みつてが有ませんわ、賣物に歩くのも殆ど女許りですよ。で、私の事ですから「何がお娛樂？お希望？」と誰樣にでも伺ひましてよ、能くね他處ではお年召した方等は京見物なんて仰るでせう？、私もね、兩鬢白う霜置いたお隱居樣方が打連れて頃は陽春三月洛東の花に醉ふ……、まあ〳〵夫れが何處の山奥何處の里でも上、中流社會の唯一の希望でもあり娛樂でもあり又誇でもあると信じて居りましたに、是は又、「吳服屋も出來たし下駄屋も新築たし此村も大層な文明樣、お甘味物を食べ絹絲の着物を着さへすれば、あ此上に何の希望が有ませう」と十中の九答は左樣ですの、お年若の方で鹿兒島の縣立私立の學校卒業の方は十が十迄村立小學の教員を遊ばします、一般に婚期は遲う御座いまして三十位で初婚の方も多う御座います。下流の子女は鹿兒島や都の城地方へ出奉公をして嫁入仕度を致します。

墓參は能く致しましてよ。白、紫、紅、黄、色さま〴〵の花を手折つて墓前に供しますが何處のお墓もそれは清潔に掃除されて居ります。雨が降つても日が輝いても、冬の夕も、夏の日も、毎日〳〵必ず一回は墓前を掃除して禮拜を怠りません、夫れが貴女六七十のお老婆樣許ぢや御座いませんのよ、四つ五つの小孃樣から

婚期の孃樣迄、でも殿方の被入つたのは見た事は御座いません。此樣に祖先の墓所を清潔にする村、否婦人は此村を置いて何處の里に求められませうか。げに優しい美しい心情では御座いませんか。薩摩の言葉は訛が多いつて聞いてましたが、實際で御座います、調子があれなんでせう、參つた當座は全く弱らされましてよ。でも翫味致しますと皆大和言葉の轉化したのですから優しいしほらしい雅なんですよ。鳥渡人樣を訪問致しませう、其樣な場合には「お見上申さう」と聲諸共敷臺へ手を付いて頭を下げるんでせう、お髪は椿油で漆黒で房々してるんでせう、流行とか何とか騒いでる私達迄全く純化されてしまつて暫時は此世を忘れてしまひますよ。まあ一度此私共の閑居へ被入て御覽遊ばせ、此處許りは昔乍らに澄める月影を拜まれましてよ。

北見(宗谷岬の附近)より

静波

近年の大漁　好い着物も年に一二度　鰊場の働き
帶を締めない風習　漬物のお茶菓子　四、五、六月の活動
働く時の服粧　たて網とさし網　隨分つらい仕事

▲妙子樣、喜んで下さい、當地は近年にない大漁でございました。

▲それはもう土地の狹いことは申すまでもございませんから、一寸派手な服粧をしても、紅粉や白粉をつけても、直ぐ人の眼について笑はれます。

▲不漁の時はお祭もありませんから、折角樂んで持つてゐる一枚二枚の着物が、簞笥の番で終ふのですもの、若い娘さん達もかわいさうよ。好い着物といつた處が年に二三度も着れば手一杯でせうよ。

▲娘さん達は鰊場で働いて、着物を拵へるのが一番樂みですつて、今年は大漁でございましたから、近年にない好景氣でございました、女でも大抵二十圓以上働いた人が少くないのです、私でさへも九圓も稼ぎましたもの。

▲平素は上流から下流まで、女はみんな筒袖を着る所よ。

▲一家の主婦でも帶を締めない風習で、前掛に細紐がけで、平氣で町を歩いてゐるの、歩く度にむくらむくらとお尻の動くのが見えるので、隨分をかしいのよ。

▲おかみさん達が集ると、漬物か、馬鈴薯をお茶菓子にして、そして人の惡口や着物のお話などして大騒

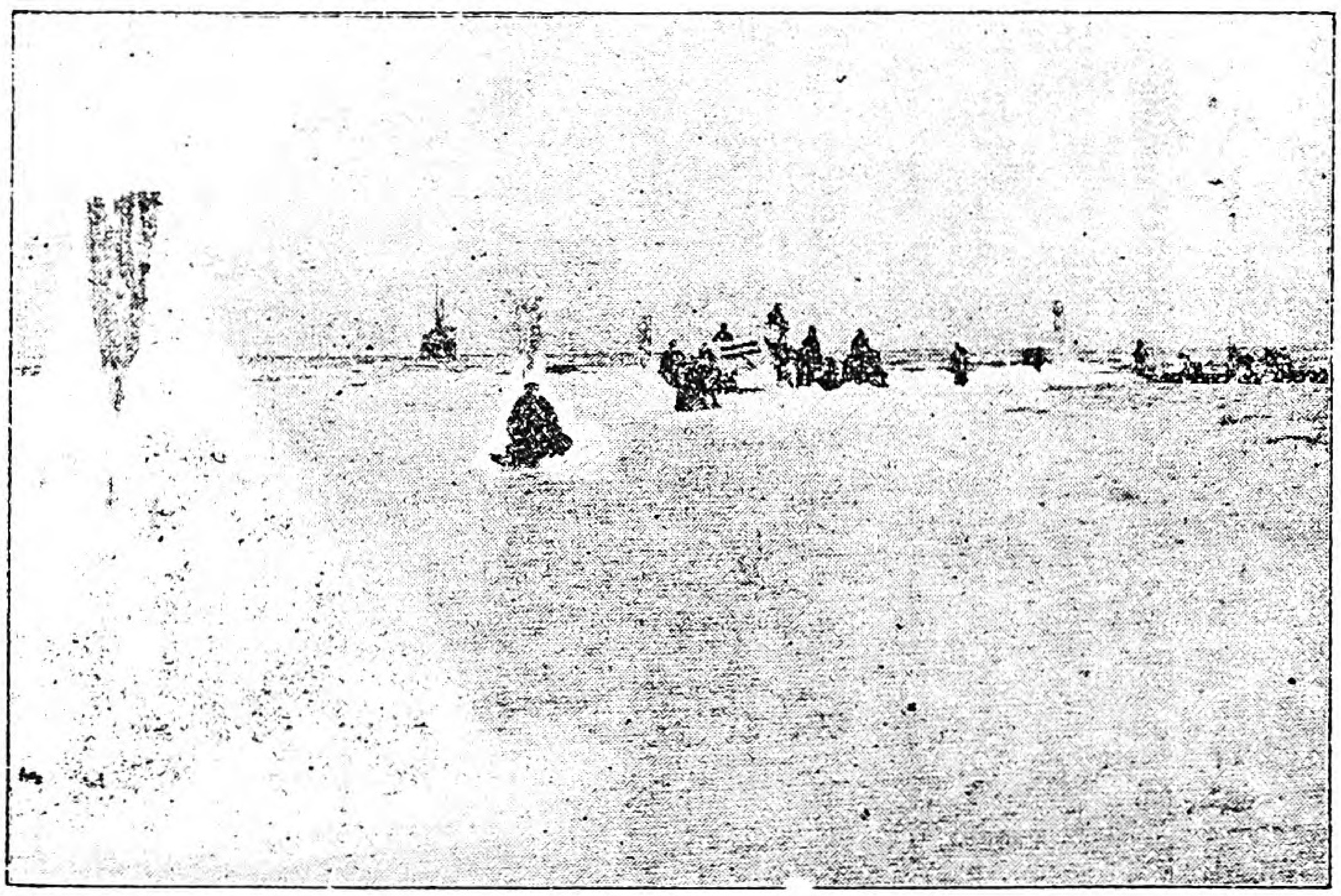
ぎして居りますの、冬になると猶此風習が盛んになりますの、別に娯樂と云つてないからでせうね。

▲當地の人は大抵、四、五、六と三ヶ月の間に冬の生活費を取るのです、其間、鰊場に働きに行くのです。

▲働きといふのは、朝早く起きて、鰊の澤山取れた家を探し歩くのです、宜い工合に見つかれば其處で使つて貰ふことになり、一日働くのです、御飯は日に四度食べます。

▲働く時は、先づ股引を穿いて寒い處でございますから綿入の二枚も着込んで、上へ襤褸を被るのです而して頭上には三角の帽子(大抵風呂敷の古いので拵へる)を被り、手には指丈け出る指物をはめるのです、私も斯云ふ恰好で働きました、感心でせう。

▲鰊場は差網と建網との二つあつて、建網の方は、沖から汲んで來た鰊を、もつこうといふ物へ少しづゝ入れて、岡へ運ぶのです。



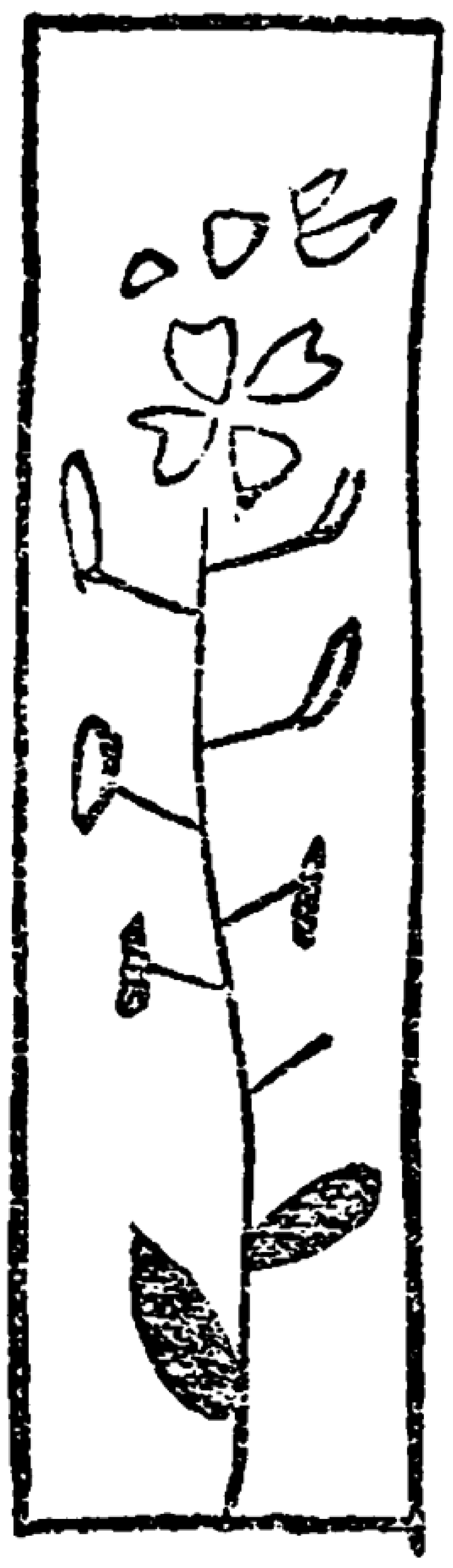
樺太眞岡港冬期郵便物其他陸上げの光景

▲鰊を入る建物はなか〳〵大きいのですよ、大きい建物になると十間に七間位の面積があります。

▲差網といふのは小前の者がやるのですから、矢張仕事もこまかうございますよ、網にかゝつて居る鰊をはづしたり、それを運んだりするのですが、建網に使はれるより、きたなくて、疲勞も酷うございます。

▲私の働いた時は、鰊が大漁で人が足りない位でしたから、人が引張り合ひになつた位でした、私は四日ばかり行きました。

▲初めの日なんぞは、歸つて來ると身體が痛くて、一歩も歩かれない、此時許りは成程お金は取り難いものだと沁々感じました、何しろ隨分困難な、えらい仕事ですよ。今考へると能く働いたと思ひます。



橇の旅日記

静江

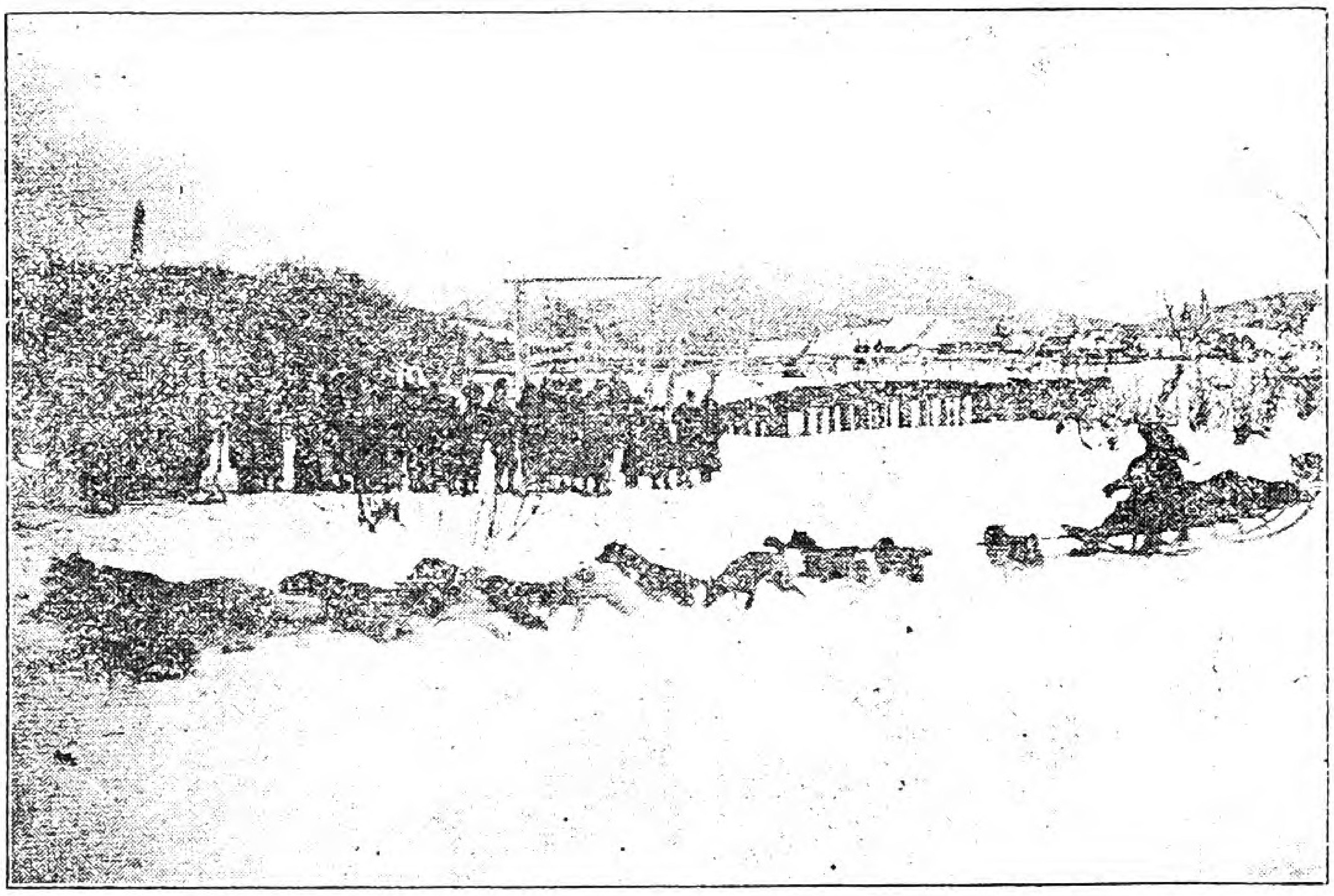
二月二日晴れたれど風白き日　支度調へて三人北行の途に上る。豐原を離れたのは九時だつた、橇の進むに從ひ邊の風光も珍らしく寒さも忘れて眺めてゐた。毎日窓から仰いだ鈴谷山脈は敷香街道に沿うて右手を走つて居る。十二時ベレニヤスキー着、此處でお晝すませ再び橇に乘る。是から以北の道は平生人馬の交通の爲め一間位踏み固めてある許り、外は三四尺位の積雪で到底歩ゆむ事は出來ない。而も馬橇等がゆき遇ふ時は一方は雪の中に避けねばならぬ。幾度か此麽事に遇うて橇を下り車を引き出す不便を忍んで午後四時頃ボリショイタコイに着き、驛遞に入る。今日の旅行は八里だと云ふ。

三日午前九時出發　十一時ガルギノスコイ着四十分の後再び出發、橇は全く道を離れて内淵川の氷上を通つた爲め樂だつたけれど一里餘迂路となつた。内淵川の履氷は既に二三日前から初まつてゐた。通過の時厚く結氷した上に天候のため更に氷の上を流れた水が凍つてゐて、其れは橇の重みで上部の氷だけ破れる事があると其度水の中に落ちるのでないかと云うて、大きな聲たてて笑はれば。一時十分ドブキー着、午食、二時發、ドブキーアイの間は全く海に沿うて雪の上をゆき路にはよらなかつた。路の左は鬱蒼たる落葉松の密林で更に遠くは急傾斜の低連山が一帶に眼界を限つてゐる。日沒頃アイ着、驛遞の主人は木村愛吉といふ土人でアイヌ間の名望家、手厚い歡待を受けた、僅か十戶許りの土人部落だけれど暖い人の心が嬉しい。

四日午前七時出發　十一時ヲダサン着、零時半同地發、午後四時シラヽカ着驛遞に投宿し豐原に打電する東海岸の都だけに郵便局があり、支廳の出張所がある。此處に白河萌澗と云ふ土人がゐる、此の邊土人の酋長だと云ふ。

五日午前八時三十分シラヽカ發　今日は西行して等等力峠を横る日、犬橇の犬は數をまして十三疋とされた。マヌイ迄は海岸を走つたが此處からは低連山の麓

と海岸の間の小路をゆくので、氷塊岩石等の爲め幾度か橇をとめた。やがて二里許りマヌイ川の氷の上を行き再び河に沿うて斷崖の樣な坂路を上り下りする。此の峠は樺太島の一番幅の狹い處だと聞いた。そして其の名が私等には懷しく響く去る三十七八年の戰爭の時父樣の士官學校時代からの親友である等等力の小父樣の中隊が此の處でめざましい森林戰を遊した、父樣は地圖を膝に目を瞑つて默想して居らるゝ、この木、この石——頂上から左折して急な西方の山腹を斜行して下る。馬橇に比らべて犬橇は恐ろしくもあるが又興味も深い路と云ふ路犬の走れる處ならどこへでも行く、坂路等は馳け下りると云ふより跳び降りると云ふ方が適當と思ふ、堅くつかまつて居ないとふり落されて終ひさうだ、御者のアイヌはどんな路でも平然と構へてトロトロと妙な節で犬を上手に御



樺太の犬橇

してゐる。下り切つてからは九春内川の氷上を勢よく走らして三時半九春内着、大樺旅館に入る。

六日滯在　豐原に打電する。此の街は西海岸の一小都で舊市街の北方の丘上に新市街が設計されてある冬期三箇月は結氷の爲めさびれるけれど其他は可成に船の出入もあると云ふ、郵便局があり支廳の出張所があり望みを屬されてゐる。

七日午前八時四十分發　馬橇にて十一時半イベケレシルン着、ここでお晝をすます、是からトマリオロに至る間は海岸に沿ふた小みちで通過は樂だつたが時々岩などの妨げがあつた。夏期は全く山越えでなければ通れない。冬期は履氷の便があるけれど其すら時として風の工合で海岸を離れる事がある、其麼時は全く路が無いと同じに成つて仕舞ふとの話、トマリオロを過ぎて日沒後チーカペシポ岬に着く

此の時許りは全く泣きたかつた。夕闇迫る海に向うて聳えたつた斷崖を仰いで、此の弱い足に越えられ樣かと悲しかつた。斷崖の中腹の一尺五寸位の幅の道を父樣私母樣の順でこえた。橇は解き放して運んだ。ウッスに着いたのが午後七時三十分　漁場に一夜を明す。

八日午前八時三十分ウッス發　カモイナイボ迄は馬橇を使用したけれど其れからチーカイナイボの間は橇をすてて海氷の上を徒歩で渡る。晴れてはゐるが風は針で刺す樣な痛さを覺える。再び橇でノダアンにゆきおひるの後馬を代へて二時半發　四時十五分北ノトロ岬に着いた、此の邊泥炭が多く土人の燃料となるのださうだ。

驛遞に休んで夕食の支度を待つ間、一人外に出て靜かな夕を沁々と味ふた。驛遞の外人家は一軒もない、海岸に沿うて走つてゐた低連山は遠く一二里に距たりて、見渡す限り果も知らず廣い平原は橇の影さへ見當らないで何處迄も續いてゐる。海水の凍結したものは幾度か波の爲に破壞され又凍つて、幾條となく帶の樣な氷丘（砂丘に對して）を形作つて海岸に並行して連つてゐる。更に遠く海面を見れば海水の樣なものの動くのを望み得られるけれど、果して波か氷かよくは分らない。

時計を探れば四時卅五分をさしてゐる。落つるに近い日は蒼い氷丘を七色に染め、遠く浪か氷かと見定め兼ねたあたり只眩ゆく輝いてゐる、あらゆる色、あらゆる光は西の空に集められた　金色に輝く鱗の如き雲翼の形せる雲。

云ひ表す術の無いサブライムの念は胸に充ちて、人の終焉の場にあるものの如く詞なく落ち行く日と仰いで堅く組み合せた手に熱い涙のふりかゝるのを覺えた何と云はん此の夕、此の時に、只願ふは默して高く大なる自然の前にひれ伏さん事のみ。

悠々として日月經過す乾坤吾を包み吾を被へども吾自然を忘る。自然の悠々無窮の不思議を忘るるの吾は神明を忘る。紛々として到る處に心靈の束縛を受く（歎かざるの記）

日全く落ち盡して名殘の光尚天の一方に輝く。

聲なき聲を深く胸に刻んで步をかへした時、連山の頂き遙かの處に美しい星がまたゝいて居た　恐らく此時私の瞳にも同じ輝きがあつたらう。

五時再び橇に乘つて驛遞を後にして眞岡に向ふ、ラクマカの街に到る迄殆ど一語も語らず澄み切つた空を

仰いで、眼はあくまで鋭き北極光を吸うてゐた。ラクマカで出迎の橇に遇うて午後十一時眞岡百足屋旅館に疲勞し切つた身體を横たへた、今日の旅行は十八里。

九日、滯在。當地は西海岸一の繁華な街、樺太唯一の不凍港で可成に賑うてゐた。午後繪端書を求めに街に出る、豐原へ打電。

十日、午前九時眞岡出發、熊笹峠をこえて零時五分逢坂着、其れからルータカ河に沿うて新道を走る、淸水の西一里許りの處からは新道もつきてやがて榊原峠の嶮にかゝる。路は漸く狹く傾斜も急に成つたので、橇は人の歩ゆむ位の速度で徐行させる、兩側は鬱蒼としたとゞ松の密樹林で日の光もさへぎられて濕氣を含んだ心地の惡るい風が吹く、西洋の物語にある地下國に行く途の樣だ。父樣はしきりに青や赤や鉛筆の線を地圖のあちこちに記して被居る。午後六時十分大曲着、直ちに驛遞に入る。

十一日、午前八時大曲を發し十一時三十分瀧澤着、午後零時三十分こゝを立つ。路は昨日と大差なく次第に豐原に近づくに從つて平らかになり、人の往來も多くなつた。午後四時三十分街の入口に着いた。華やかな灯かげ並ぶ街に入つた時、誰の顏にも喜びの色が動いた。夕靄の中に淡く鈴谷の峰々が浮んでゐる美しい宵だつた、宿舍に着いたのが五時少し過ぐる頃。

久しぶりに客間のペーチカの側に集つて、疲れた身體をソーファに投げかけた時母さまと見かはして不知不識ほゝゑんだ、家をすて母を離れて愛の住家を尋ねに旅立つた子が慰めを得ずに再び林檎の樹の下の家に歸つた、兩の腕を開いて母の首を抱いた心――其れにも似た淡い〳〵思が胸に溢れる――。

幸枝さまへ（從姉）

出立の際には何かと御世話樣に成りまして有難う存じました。直ぐにも御禮申上ねばなりませんのを遂お親しいのに馴れて今日迄失禮申上げました。途中繪端書にも申上げた通り、松島等廻りましたので遂々小樽出帆は二日の午後二時になりました。處が御承知の弱虫で初めの内こそ輪なげのお仲間も致しましたが其中に危しく成つて、あわてゝベットに入りました限り、何か食はんか、甲板を歩かんかと父に言はれても頭横に振る許りで、時々恐る〳〵船室の窓からのぞくのが漸々でした。林檎はよう戴きましたが御飯は一粒も――〇〇聯隊長の小父樣等弱蟲つていじめて許り被居

のですもの。明けの日は海上で天長節を迎へました。九時頃誰れか島影が見えると云ふのを聞いた時さすが胸がをどりました。小窓から右が中知床左が西のトロ岬と敎へられて譯もなく胸さわぎしてゐる中、丁度十一時大泊灣に投錨致し私等は運輸部のランチで上陸しました。〇〇の小父樣等は直ぐ豐原にお立ちでしたが私等は荷の都合で一泊、翌四日朝七時の汽車に乘りました是が又玩具の樣な單線の小さな汽車で豐原迄四時間とは益々驚きました。八時頃から雪になりまして馬の方も案じられましたが幸何事も無く私等より二時許り遲れてつきました。途中ホムトーカの停車場で十三位の露國の少女のパンを賣るのを見ました。涼しい眼の美しい子でしたが聲が淋しくて――。濕みを帶びた美しい輝きのある瞳、今も目に浮びます。驛名等はお話しに成りません、フタラヤパーチとかミツクヨフカ等密獵とでも書くのでせうよ大方、ホムトーカ僞か知りませんが。豐原では運輸部の打電で出迎の方が澤山いらして下さいましたが誰方が誰方やら御挨拶もそこ〳〵に司令部からの馬車で官舍に向ひました、內地で佐官位の人が馬車を乘り廻したら大騷ぎですが其處ぃ新開地で、御者は默つて本通りを走らせるんですもの、今考へるとをかしくて堪りませんの。官舍の門にはもう職名迄ある名札が下がつて居て、誰方とかの御世話下さつた下女が待つて居ました。父は直ぐ司令官の御邸へ上つて私等は三時頃屆いた荷の始末、全く綿の樣に成りました。後五日許り荷片附で費しました、何と云つても五十幾個の包ですもの。漸々其が濟むと今度は小樽で買ひ込んだ野菜類の荷がついて又一騷ぎキヤベツが幾貫目、玉ねぎが幾俵まるで八百屋の樣、冬籠の支度がすむと翌日から御禮の訪問です。天王子かぶをお盆にのせて「初めまして」なんて振つてゐますわ、內地ではとても考へつかぬ事でせう。街の方はまだ一度しか參りませんが新市街なので東西何條とか云ふ京都式です。お寒さと云つたら僞の樣、一昨日は父がひげを氷らせ昨夕は入浴の時私が髮の毛がぬれてゐたと見えて洗つてゐる中に凍つて終ひました。馬も氷上蹄鐵をうつてゐます。東北人と新潟縣人が多く人氣は餘り感心出來ません。母は物價が高いとこぼして居ます、今の處玉子は一個九錢ですもの。每朝內地の半分位の新聞を配つて七拾錢だ相です其他は餘り私に關係しない事ですから――。奧樣方大分歌留多を遊す由お正月には盛にする心算です。でも父等い仲間な

らどうせドタンドタンとすゝはき宜ろしくで、人のはねた札まで拾ひてんで札を送る御連中でせう。何にしてもまた詳しい事はいづれ筆を改めて申上げます、兎に角恐ろしく軍人の巾のきく處です。まだ澤山ありますから其中お話しを凍らせて小包で送りますから、例のお炬燵の中でソロ〳〵解し乍らおきゝ下さい。船の方が間がありませんので叔母樣に別にかきませんが何卒あなたからよろしく願ひます。

駿州小山より

さくら

一體私は都會と云ふ物を好きませんの、ホヽヽヽ、藪から棒に此樣な事云つてゐでも今日は地方の婦人の威張れる日なんですものだから暫く御腹が立つても我慢遊して、先の借越しもありますからねホヽヽヽ何故と云つたら何も左うむづかしい理窟なんかあるんぢやありませんわ、生と奮鬪する人の子の物凄いわめきより、可愛い鳥のさへづりの方がいゝぢやありませんか、いら〳〵した烈しい色彩よりも、紫匂ふ芙蓉の峰や、綠に霞む箱根の連山を眺めた方が如何に尊く且美しいでしよう、淋しくとも人の心は暖かですよ、平凡な此里にも、燃ゆる樣な赤い花が開きますわ、あら自慢ぢやないんですよ、ほんとの事ですわ、慾目ならば臍の緒落した西の舊都をほめませう、人となつた東の空を慕ひませう、だけど〳〵あゝ矢張此所が好う御座いますわ、靜かな平和な山間に憂へず思はず蝶に夢み鳥と歌つて暮せば事は足ります、私は此まゝ死んでもかまひません、なんて云ふと、中には希望も空想もない、眠つた樣な女だらうと思召す方があるかも知れませんが、私にだつて希望もあれば空想もあります、意地もあれば張もあります、人も認め自分も認めてる私は變人ですが、變人でも二十才の女には二十才だけの考へがあります、御話しませうか、でも云つたつて詰りませんわね、人の空想なんか有難く拜聽して下さる方もありますまいから、たゞね華やかな交際場裏につきまとふ煩はしさや、榮華の巷に人知れぬ苦痛のあるのは世の習ひですもの、私は好んで其苦痛を味ひたくはありませんの、だから私は自分の情の流れに從うて靜かに綺麗な其住家をさがしあてたのでした、私は永遠に此所を離れようとは思ひません、假令餘義なくはなれるとしても煤煙の都へは立ち寄りたく思ひません

諸國通信

肥前、松浦より

朝露

此麼山の中の事ですから、空氣と水の清いのは、實に何とも云はれぬ有難さを感じますけれど、一體が不便で單調で、都で育つた私には、日々の暮しに實際どれ丈け困難するかも、知れません。

何と云つても店と云へば例の田舍に特有の、小間物、荒物、呉服物、所謂何でも御座れの萬屋ですね、其がたつた一軒とは、實に憐れな有樣ですわ。其で何か一寸した絹物、器具などになると、直ぐ三里許りの山越をして××に出るか海を渡つて△△にゆくか、しなければなりません。住なれた土地とは云へ此邊の人の一向不便とも感じないらしいのは、實以て驚くの外ありません。

私が始めて此土地をふんだのは、一昨年の暮、夫に連れられて歸省した時でした。恰度其時、遂此四町許離れたお寺の側の、黑神樣とかの祭禮で若い男女も、澤山集つて居りました。角刈頭にメンネルシャツの襟をピンと立てて、得意に成つてる青年もあれば、くどくどしい赤色メリンスの帶の下を、五寸許りもぶらぶらさせて、喜んで居る處女？も居る。左樣した中に、スラリとして島御召のコート姿の私が現れた時、彼等は一樣に好奇の眼を見開いて、囁き合つて居りました。

御笑なさいますな、私も此コートを着た時丈は、大根の干ぼしでも宜しい、デブデブと横肥りにならなかつた事を感謝します。おほゝゝ話がとんだ方にそれましたが、全く其位な田舍なのですよ。

其時は一週餘日の滯在、昨年の夏は一月も居りましたらうか、三度病を得て、夫と別れ友と離れて、平和な里に歸つてから、早一月にみたんとして居ります。

山の美！水の美！天然自然のうるはしさは、拙い筆では盡し切れぬ程で、新綠の若葉に燃ゆる森の木立、幾重となく續いた連山の氣高い姿、裏山の雜木林には小鳥が樂しく囀り、斜に低く横はつた岡の牧場からは、眠さうな牛のぼうと唸る聲も聞かれます。雜木林の下のニユツと突出た、大きな岩の側の小岩には、白百合

の花が、朝々淸い露を含んで、俯向加減に咲て居ます。都に生れて都に育つて、海より外に知らなかつた私が、所もあらうに此麽山の中の人とならうとは、夢にも思ひませんでしたものを、如何した運命の神の御導でせうか、自分乍ら不思議でなりません。魂去つての淋しきむくろは、眼下に靑田を見下して、遠く〳〵山又山の其間に靜に眠るので御座いませう。

只今は田植前で、母家では大忙がしの最中です。××から連れて來た女中も、私の事から母家の手傳、仲々忙しさうに立働らいて居ります。

田山樣の言と思ひますが、人間が生きてる効などといふ中は、未だ趣味感情などで小さく縛られて生存して居るので、現實に觸れて居ないと云ふものだと、さすれば矢張私も未だ現實に觸れて居ないのでせう。

一體此邊の人は、金錢以外に貴いものはないと思つてる樣に見えます。之は最近の實例ですが、逐先達つて此下の方で、病氣は左程でも成かつたそうですが、營養不良の爲に、あたら三十を一期として、黃泉の客となつた嫁さんがありました。其家なども村では指折の中なので、何の卵の三つ四つミルクの二三合も毎日食べさせられぬ事はないのですが、漸く藥丈け仕方なしに飮ませて居たそうで。人間の命が貴いのか、金が貴いのか、非文明な田舍の人には困ると、新代の教育を受けられた、醫學士の君は歎息して居られました。

御醫者樣と云へば、此近處では其方が一人、夫の友人で絕えず私も御世話に成るものですから、種々な事を聞きますが、此上の方に在る石山、即ち炭礦ですね、其處の人達に成ると、四五十圓も藥代を借りて、一向拂はないそうです。其だからと云つて泣く樣にして賴むのを藥をやらぬわけにもゆかず、實に閉口だと話されました。其も貧民で拂ふ金がないならば兎に角、咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝ、快くなれば酒を飮む氣はあつても、命を助けられた藥價を拂ふ金はないのです。其點になると、田舍の人は正直で、今年出來なければ來年と云ふ樣に、一度は屹度持て來るそうです。

道と云へば山の中、病家を一軒歩くのに二時間は掛からうと云ふ所…此麽山の中の醫師たる者亦難い哉です。迚も外から來て開業などしては勤まる者ではありません。其方も他所に出たい〳〵と云つて居れますが、何分獨子なので、御兩親の御免しが出ない想です。

學校といへば寺小屋式の小さな尋常小學校が一つ、高等になると、此下の方に約一里許りもゆかねば成り

ませんｏ高等教育を受けたる者は、夫が一番の先輩で、其醫學士の君と、も一人高等工業出身の人只其丈けなのです。女學校を卒業した者は此土地の者には一人もありません。又以て如何に田舍であるかが分りませう。

其で私が雜誌でも讀んで居ると、御勉强ですねと、云ひます。思はず苦笑を禁じ得ない時がありますよ。

郵便は一日一回、二里許下の郵便局から配達されます。電報爲替皆其所まで參るので、不便極りなしです。新聞許りで手紙のない時は、二日も三日もためて一時に以て來ます。腹は立つても、餘り道が遠いので、其ヨボ〳〵した配達のぢいさんの顏を見ると、小言を云ふわけにも參りません。

其外餘り變つた事もありませんが、挨拶の口上の長いこと、實に閉口します。さらぬだに女學生流の手取早く云つてのける私ですもの……「今日はよかお天氣で御座います。段々有難う申上まする―」と一種奇妙なふしを付けてやり出されると、ウンザリして仕舞つて無言のまゝで、御辭儀の十度も仕樣と云ふもの、全く馬鹿つ叮嚀なのですよ。

其からも一つの奇風は、病氣見舞などに、手土産を持て來た人には、朝であらうが晩であらうが、必ず酒と御飯を出す事に極つて居ます。其ですから一人が歸つてやつと落付いたと思ふと、又外の人が來る、又出すと云つた風で、其手の入る事〳〵。何だつて此麽馬鹿らしい習慣を付つたのだらうと驚ろいて仕舞ます。

然し土地の人は、一體に正直で質朴で、純然たる、日本古來の田舍人の樣を能く現はして居ります。禮儀なども至つて正しい樣です。

湧き出づる清水に口そゝぎて、薄霞んだ空、新綠の森を眺め乍ら、傾斜した崖の下の、赤だの紫だのの花の中を分け入つて、靜に歌思ふには良い所ですけれど、都に住んで海になれた私には、あまりに淋しい單調な處です。昨年の夏の大洗の海の景色！靜に薄るゝ夕陽を見つゝ、二人手を取つて海門橋に立つた時の心持は如何しても忘るゝ事は出來ません。那珂川の汽笛は、今もなつて居りませう。果てしも知らぬ太平洋の海の色。かすかに響く巖入寺の入相の鐘！再び……再び……

……なつかしい橋の上に立つ事が出來るでせうか。

海山遠く三百里。語るに友なく、見るにものなく、うつとりの夢見る樣なまなざしして、夕の緣に胸をかかゆる、病める友を忘れ給ふな。折々は都の消息、細細と御洩らし下さいませ。

××町より

さむしろ

幸子様に。

将來、有望な都市となるべき、茲○○町には、四尋常〔1.□□、2.▲▲、3.×+、4.、、〕と、一高等〔○○〕がございますので、總計六十人餘りの教師が居られます。内女教師が二十名許り。それが大部分〔男女共〕去る二月二十八日聯合職員會幷に親睦會が開かれました。私がヒヨツとでる欠伸を噛み殺しました數は、約三十、「増俸して頂けませんよ」と、泰子様につゝかれて、ヤツと辛棒致しました。次が食會、オホヽヽ。お笑ひ下さいますな、いづても同じ秋の夕ぐれつて申す處でございますもの。會費は大枚十二錢〔酒菓子代〕其他は各自で馳走のもち寄りでございましたので、お互、交換致しましたの。

「一體、○○町の女教師はハイカツて被居るわ」とは、私が母校の一般練習などに參りました時よく、承はりますから、好機逸すべからずと、粹中の粹、即ち女教師中の女教師〔師範出身、本科講習科〕の、ハイカラ振りを。

瀧子様〔□□校　三十四五、本科〕

私の郷里から一里許り田舍の方で、養姉の親友、かつは高等科四年間教はりました先生のお仲好でございましたので、〔尋常二年のお芥子で居ります頃から、被居いますのに一度だつて教はりません〕大變なついて居りました。あつさりして、で親切で人望もおありでございますのに、何故か、何處へも、お嫁になりませんので分りもしない癖に、「何故だらう」なんて生意氣な事申して居りました。口惡な兄は、「ナニ鬼瓦が、チツトはお面相にも相談すればいゝのに、百圓取が聞いて呆れるわ、ウフ、、」つて憎らしい。エ、鬼瓦?、あなたもお察しの惡いこと、そのせいか、私共の先生が、中學の圖畫の先生へお嫁になつた時、確か、笑つて被居つたさうでございますのに、間もなく、何處かの小學校の先生にいらつしやいました。他人の私共でさへ、聞き辛い様なお話を承はつて居りましたが、『人の噂も七十五日』とか後には怪みも致しませんでした。氣の早い人は、「御姙娠の様だ」とさへ申して居りましたのに、一年經つか、たゝない翌年の夏、旦那様はつひお亡なりなさいました。エ、肺だつたさうで…

隨分方々にで奉職なさいましたお可哀想な方。お顏色が惡く、癖のあるお髪を引きつめた束髪に遊ばして、今日も、茶がゝつた新お召のお被布を召して被居いま

す。御馳走は、お芋と銀杏のきんとんと、せいでのお煮つけ。

エ、御再縁なさいますかつて?、サアネー、いらつしやるとか、いらつしやらないとか二説がありますので……。

静樣(二十八九位、本科)

お名前によく似た方で、××校の校長の奥樣、縣内ではございますが、餘程遠うございますので、アクセントがお違ひでございます。四つと今年の一月半頃お生れなすつた孃ちやんのお母樣です。その筒袖姿を見ましては、お氣の毒な樣で、「よくあれでおつとめ遊ばすことね、でも家庭の樂しみがおありでせうか」と申して、泰子樣に、「まあ失禮な」と笑はれました。

巻鮨をお重一つに。私共と御同校。

信子樣(□□校)

確か二十五で被居いませう。泰子樣の兄樣の奥樣。

私と御同郷で、殊に亡くなりました姉の御親友でございましたので、尋常科でゝも高等科でゝも可愛がつて戴きましたせいか、お懷かしくつて、お姿を見ますと亡くなつた姉の事を思ひ出して、そゞろに其在世のをりの事をしのびます。よくお話下さいましてね、「あんな事もあつた、こんな事もあつた」と、御自分の事かの樣に泣いて下さいますので、嬉しうございます。

お優しくつておとなしい方です。今年の一月二十五日で滿一つにおなりの坊ちやんの、お可愛いこと、子好きの私は、却つて泣かす樣でございます。「行きますとね、祖父祖母夫婦の四人で夢中になつてゐるから可笑しい」とは泰子樣の仰ること。

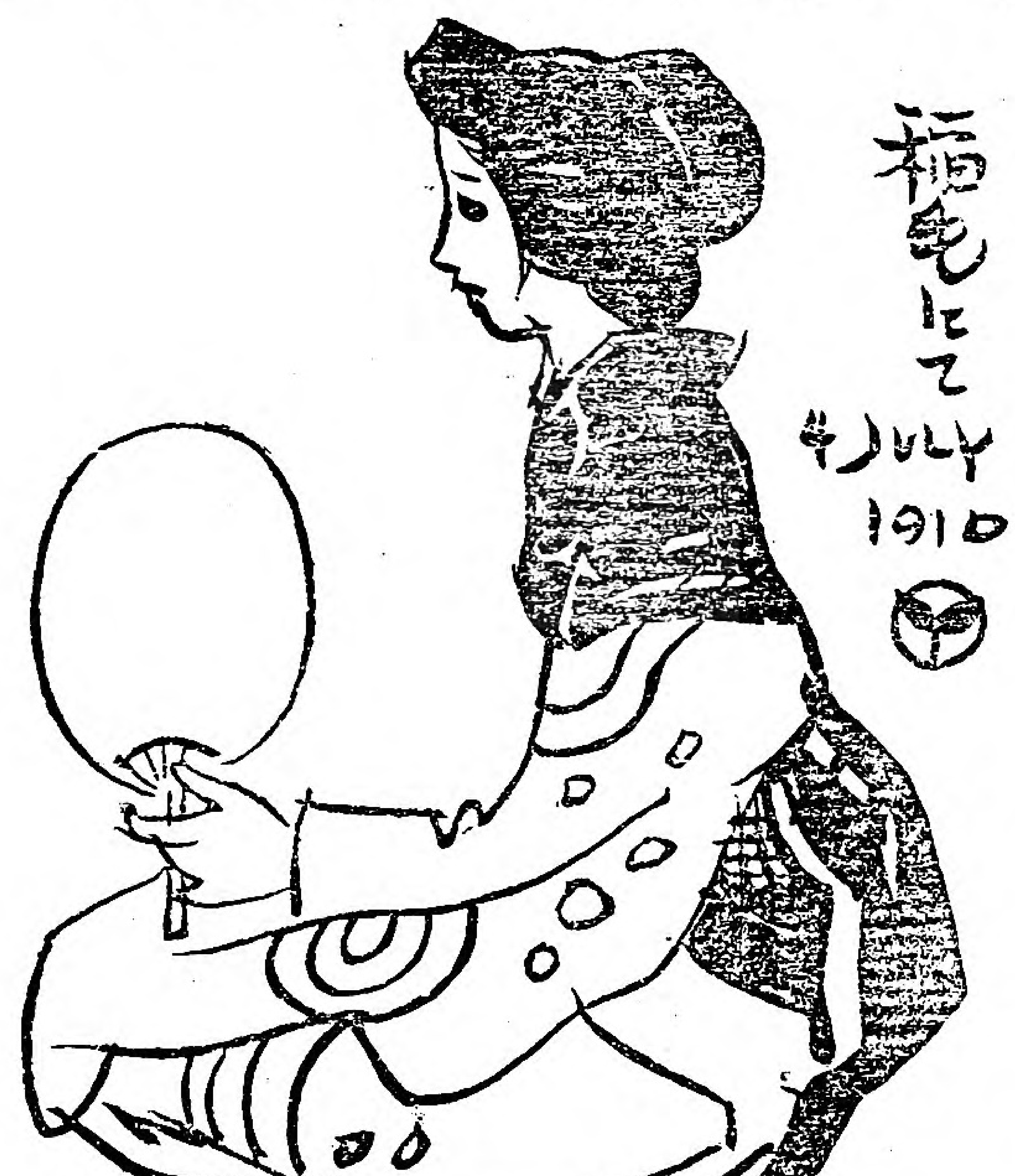
よく／＼御縁があると見えまして、私は旦那樣、信子樣、泰子樣のお蔭で、只今の境遇になりました。澁いお召のお羽織でした、ご馳走は、鯛のお刺身と卵の厚燒それと蒸菓子でございました。

泰子樣(○○校　本科　二十四)

人つてものは、交際致しませんと分らないもので、私は此校に參ります迄、意地の惡い、利己主義の方と許り存じて居ましたのに、それは／＼で親切で私の樣な不恙者を妹の樣に可愛がつて下さいます。

美しいお髮を大きく、しかも上品な廂に遊ばして(襟足がお美しいのですよ)、澁い色の、でゞ縞の派手な銘仙のお羽織に、古代紫の和製カシメヤのお袴、私は覺えず、うつとり見とれて、「嫌だ」と叩かれました。愛嬌のある中に、何處か犯し難い威がありますし、それ

に何事にでも注意の行き届く方だものですから、嫁に婿にの申込の多いこと（師出だとお侮り下さいますな）、近頃迄、私の羨望の的になつて被居いました。けども、一昨年の夏、氣管支をお病ひ遊ばしたのを、お美しい方だけに、「肺だ、結核だ」との噂とりぐなのを、お聞きなすつたと見えまして、「弱い母をもつ子、弱い妻を持つ夫の不幸はまあどんなでせう。確とした證明の出來る迄は」と、飛び立つ程の御良緣を、惜氣もなくお捨て遊ばすので、理想が高いの、尊大だ事のつて評判は致し方がでざいません。それで居て、私の事になりますと、そりやあ可笑しい程お世話して下さいまして「貴方さへ、良いお家に嫁つしやれば、私はもう」つていふ調子ですもの。それにこの私を、すらつとして居る事の、目が愛らしい事の、口元が好きとか、鼻が高いとか、あなたのお婚禮の時の美しさつたら」なんか、穴に入りたい樣な事許り仰います。つまり、私の知己なのでございますわね。オホヽヽ、私が緣づきます時も、此方と藤子樣と鶴子樣（お二人とも□□町に奉職してお出での）だけが、紋服だの帶だのよりも、



私が「人樣のお言葉に、空と海とには、橋はかけられますまいけれども、其の外の事はして出來ぬ事はないと存じます。私は、最後の勝利者となりたいと思ひます」と申しました時、「それでこそ」と賞めて下すつた方、此點からも私には唯一の知己なのでございます。斷つておきます、私と同樣、お被布をお好きになりません。エ何故かつて、それは申しますまい。お察しもつきませうから。

立派な折詰に、お手製のカステーラでございました。

麓樣（二十四××校、本科）

お被布連中といへば有名なものでございます。そして其お一人と申しましたら、大抵お察しもつきませうと存じます。昨年のおしつめにお被布が出來ましてからは、出るにも入るにもお被布姿でございました。それがどうお考へなすつたものか、今日は、あまりと申せば……。去年お宅へ伺ひました時、寢巻だといつて召してゐらつしやつた、地の縞のほのかに見ゆる木綿の形付模様、それの模様の糊のはげた所もあり、しかも、何日たゝまれたものかと思はるゝお羽織でしたのには、少なからず寒心致しました。

まだ兄が獨身で居ります頃の事でございました。いつお伺ひしましても、お母樣がよく「兄樣は何處へお勤めになりますか、月給は、奥樣は」とのお言葉には第三者の私でさへも眞赤になりたい位で、思召があると見てとりましたから、ソッと兄の心をひくつもりで(實は皆のまへで)申しますと、「いゝな、月俸十八圓の妻君、あの容貌で、あの姿で、それもいゝが、あの亂杭齒のお母さんから食はれはすまいか、アハヽヽ」つて、憎らしい、人の氣も知らないで、茶かしてしまひますもの、處が、兄が先程姉を迎へますと共に、何度參りましても、兄樣のにの字も出なくなりましたのでございますよ。後に「御理想を」と聞きますとね、「小學教師はいや、月收三十圓以上の官吏に」ときゝましたから、三十に足らぬ端た金を、有がたさうに戴いてゐる兄の事、申し上げなくつてよかつたと、胸を撫でました。

書物なぞは、目の傍にもつて被居らないと見えませんが、秋の夕まぐれ、窓に凭れて被居るのを見て、笑ひながら話していつた職工や、學校の歸り路に、愛想よく會釋したハイカラのお顔はよく見えましたとかなので、私は其お目のよいのに感じてゐる一人でございます、この方の御親友は、

幾子樣(□□校講習科　二十五)

私の郷里から、半里許りの田舍の豪家のお孃樣。只今自炊して被居います。何處へ被居るのでも、大抵お二人で、お被布に白のハイカッたショールでございます。兄が「お前の鼻と幾子さんのとを、てね合せてつけたらどうだらう」つて申しますから「痛いのですもの」つて申して笑はれました。今日は午後だからでございませう。谷間に雪が少し消え殘つて居りました。オヤ又。お分りでございませうにねえ。

「あれで、なか〱理想が高いんですよ」と、さも

吃驚した様に或人が申して居りましたが、高岡へ嫁ります前祝ひに皆様をお招き致しました時、△△町にゐらつしやる菊子様は、「もつと、御理想がお高いのかと思つてゐましたのに」と仰いましたから、「私は良二の二十八圓にも、雇にも嫁きません。只其精神に」と申しましたら、「人を馬鹿にして」と、ぢきお歸り遊ばしたのに、お二人共、喜んで下さいますので、内々知己を得たと思うてをりましたら、私の黒縮緬に若竹の雨褄模様二枚襲と、金絲銀絲で古代模様を織り出した繻珍の帶、白地に赤で撫子を大きく染め出した長襦袢、先方から頂いた葡萄色羽二重に菊の兩褄の二枚襲、黒地に鶴の唐織の帶、紅匹田の長襦袢を見て、「どれ位かゝりましたか」と仰つた事と、「お約束の事は宜しう」と仰つたので、「エ」と申しますと「ホラ例の縁談のでと」、「ソウお望みは」と申しますと、「何處でも……」と仰つたのとには、力が落ちました。

お二人共お芝居が好きで、殊に此頃の様に、十錢均一、十五錢均一を何座でも實行致しますせいか、お激しい様でございますよ。

御馳走はお申合せと見えまして、午蒡だの、蓮根だの、干鱈だの、にんじんだの、大根だののお煮〆に、五目御飯でございました。

雪子様（二十一二　講習科　□□校）

校長様の姪御でゝもございますせいか、校長様のお孃様との評判がございます。イエ無邪氣なので、お可愛がられ遊ばすからですの。色のお白いのに、烏の濡羽見た様なお髪を、器用に廂に遊ばしてね、派手な矢絣のお羽織に、よく似たお召物がよくはえました。無邪氣でビロード表の草履と、護謨裏の私のと履きかへて、素知らぬ振したりなさる處は、どうしても十八九としか思へません。お美しい方ですの。

ご馳走は、信子様のと大差はございません。

富子（私　二十三　〇〇校）

本科出身では一番妹でございます。其上、生れつき、子供々々してゐますので、年ばかり二十三でも、まだ、二十位にして見えませんさうですの。「何故でございませうねえ。もつと重みがなくつては」と申しますと、夫も、「實際、お前は師範出の様ぢやあないよ、僕なんぞそんなものの方が結句好い」つて、恰でお朋友か、兄妹かの様に、私の飯事の相手して呉れますの。ですが、これでも、先きはどうなるか知れませんものね。

一麓様と、幾子様は、あれぢやあ、きつと、ミスの部だらうよ」と、例の兄が申しますから、「それぢやあ、私は」とたづねますと、「まあ多分嫁くだらうな」つて。「そんな明瞭しない事ぢやあ」と申しましたからか、「屹度嫁くと證明する」とかう申します。「何日頃」ときゝますと、「其時が來れば」と申しますし、「什麽家」つて申しましてもこれも「其時分る」つて、大した豫言者でございませう。處がこうして私は高岡へ參りましたもの。そりやあよく當ります事よ。もし御依頼者でもございますなら、お取次致しますから御遠慮なく……、オホヽヽ。「エ、惡口申しますからつて、否もうそんな事はお請合致します。今ぢやあ兄にも姉がついて居りますもの、今日此頃は、もう〳〵眞面目くさつてね、それは可笑しい位でございますよ。

それでも時には申したいと見えましてね、私はいつも槍玉にあげられますのよ。私も其昔、有名の女武者でありましたゞけに、隨分、反抗して居りますが、ぢき旗色が惡くなりますの。夫といふ援軍を頼みに思つて居りますのに、憎らしいぢやあありませんか、兄の手前が恥かしいと見えまして、應援所か裏切り致しますのよ。オホヽヽ。でも今の内が花なのでございませうねえ。果物と手製のビスケット、それと鯛のスチユウでございました。幾子様は、雙子のお被布、私は上下とも少し派手な、大島でございました。

備中より

篠田繁子

緑の新葉茂りあうて、眞白き花の盛り、清く涼しく透き入る様な美き香漂ふ夏蜜柑畑の垣根に立つた、苦悶に疲れて疲れ果てた私の魂は此香ばしき空氣にふれて輕くいやされて來る、ふと心づいて見ると、春の彼岸過ぎであつた、あの冬籠りの爲め一々覆はれてあつた菰を悉く取り去られたる時の目覺ましき光景、端から端は霞んで見ゆる此廣い蜜柑畑は、一面黄金の玉に埋れて、あつと驚く許りであつたものが、此頃となつては皆新葉に包まれて、下よりすかして見ねば知れない様になつて居る。私は此所を西にまがつて石許りころんだ山と山との間の細道に這入つて一段と高き廣き所の林檎林にと來た、こゝには蜜柑の葉よりは稍鈍き色をなした葉が茂りあうて、枝には小さな青いつるつるとした小さな實がついて居る、林檎よく早く大きくうまくなつてくれと囁いて、木と木との間をくゞつて見る、あな、厭よく、顔や前髪には一ぱい蜘蛛

の巣がかゝるではないか、私はつとぬけて此所より稍高き所の四方見晴らしのよい草原に出た、柔らかい青草の上に心よく座した、見渡す山畑は一面眞白く除蟲菊の咲盛りで何と云うてよいか只私の心はしーんと涼しく〳〵感じたのである、わらび取りに來て眺めた時は何所の畑も皆よもぎの樣であつたものが、かくも美しく咲いて居るのだもの、どうして驚かずに居られよう。

除蟲菊は此村の名產で農夫等は多くの收穫を得ると云つて大に他村に誇として居るのである、今も白き菊畑には人が花をつんで居る樣に見ゆる、おゝ其花摘み時には他村より多くの臨時雇人が入り込んで來ると云ふ、今も畑に花摘む人は大方其雇人であらう、男も居るが女が多い、殊に娘が一ばん多いと聞く、去年の此頃であつた、あの幼い娘さんは何故こんな仕事しに來るのですかと或る人に尋ねたら、彼等は皆僅の金を貰つて着物を買ふのだ、其を何よりの樂みとして來るのだと聞かせた。

夕暮となつてきた、私は長く座つて居た青草の上をつと立つた、こゝを西に折れて、白い袋を着てる桃畑の所を南へ〳〵と出て四道の所に出た、こゝは野良がへりの人が賑はしく通る路である、私はこの側のくねり松の根に腰を下した、野良歸りの人を見ようと思つてである、暫くすると歸つて來るわ〳〵、男の人は皆大きな籠に白い菊の花を一ぱい入れて、ギチ〳〵と棒をしなはして、かついで歸る、後から雇人であらう、娘たちが歸るわ三人四人、皆紺絣の着物に赤いたすきをかけ、紅の多く這入つたメレンスの帶をキチンとお太鼓に〆め、紺の手甲は赤い紐でくゝつて居る、白い手拭の間からはチラ〳〵白いリボンが見えて居る指先や白キヤラコの前掛は菊の花粉がついたのであらう、黄色に染つて居る、彼等はドロンとした眼を皆私にそゝいだ、へんな顏して通り過ぎた、又ふりかへつては何か囁いてる、私は厭になつた。

和泉の南より

金田代志子

「行たら見て來い水間のお清、眉毛丈でも千兩する」「美い娘見たけりやお清を見やれ、外に美い娘はありやしまい。」と云ふ俗唄やら、其の他、種々の事を聞いて、水間寺に近い或る茶店を出た。

昔は女人禁制だつた、犬鳴山、昔眞清と云ふ强力が一夜の間に切り開いたと云ふ眞淸峠を左に見て、豐太

閤がお手植の無葉櫻のある日根神社に參詣し、蟻通へ着いたのが最今や三時半頃でした、蟻通にはね、そらよく修身のお話に聞きましやう。昔老人捨てる頃、一人の孝行な子が親を捨るが心苦しくて、かくして置いたところ、或る時、時の天子樣がほらの貝を出して此の貝へ絲を通せと仰有たが、誰一人も通す者が無かつた、其の時蟻の足に絲を結付けて貝の底に砂糖を付け蟻を其の中に入れて貝に絲を通したと云ふので、老人が許されたと云ふお話で。其緣起のある社でありますの、其の側には、紀の貫之の古蹟もありますよ。

其村でお蜜柑を買はうと思つて一軒の小店へ這入ると、旅商人二人が休んで居る、側のかまどで妻君が柴を燻べて居る、古い長火鉢には主人がもたれて何か歌つて居る、私は邪宗門の柑子と云ふ詩が此麽處を歌つたのだな、と思ひました、詩ですか、詩は一寸、二三句覺えてゐます。

女主人は柴折り燻べ、自在鍵低くすべらし
鍋かけぬ。赤ら顏して旅語る商人二人。
傍より笑みて靜かに籠なる木の實撰りつゝ
家の子は卓に並べぬ、その中に柑子の匂。
又思ふ柑子の店の愛想よき肥滿たる主婦
あるは又顏もかなしき亭主の流す新內
暮れて行く紅き夜の灯に蒸し薰る物の香のなか
夕餉時、街に入り來る旅人がわかき步を。

お蜜柑は五錢で十個呉れました。其の家で暫く休まして頂きまして、丁度馬車が通り合はせましたから其れに乘り、壇右衛門(橘)や六郞(淡輪)の石碑、明治大橋、小橋は窓から眺めて、信達で下り、林昌寺の山へ登つたのが早や五時を過ぎて居ました。二人が木の根に腰を下ろして神戸大阪などの沖合の汽船や、靜な、ちぬの浦に浮かんだ帆船など見て休む事一時間ばかり、太陽も淡輪の沖あたり淡路島へ落ちかけました

伊豫の松山より

よしゑ

おひる前稽古に外へ出た、日曜なので同じやうな、伊豫絣を着た腕白盛りの子供が、とんぼあみや棒切れで、濠の中をかき交せたり、赤錆が湧いて、勢の宜い夏草にうづもれかけて居る電車のレール(去年から路ばたに放り出してあるのに電車は中々つきさうにもない)を宜いおもちやにして、わい〳〵さわいで遊んで居る、ズトン〳〵と練兵場の銃の音が、絶間なしに、

にごつた重い色の空にひゞく、ガラリ〳〵鼻緒のゆるい足駄を引きずる音、ビユーと幾臺もの自轉車が風を切つて行く、樣々の物賣る呼び聲、その中をゴム輪の音靜かに、純白の上着に小形のゴールドウオツチを乳の上に輝した赤ら顏の西洋婦人が、えらさうにして過ぎる、Aさんだつた、傘を傾けて、禮をして笑ふ、田舍に似合ず此處には西洋人が多く集まる、氣候と景色が宜いのださうな、漫遊中の華美な風の夫婦づれが、濠端を注目の焼點にして散歩して居るなどは度々見ることだ。

あの日露戰爭の時に、收容されて來た捕虜は實に汚かつた、今でも寶連時の横町を通ると、鐘樓の二階の椽に、仰向けになつてゴロ〳〵晝寢をむさぼつて居ただらしの無い風を思ひ出して、一種不快の感におそはれる。

お濠端に沿うて東へまがると、お城山の頂きの天主閣が仰げる、鬱々と高く茂つた青葉の上に、白く冷く何事かを暗示するが如く、幾百年の風雨にさらされて立つて居るのだ。

あゝ、古城！、冷かな色、冷かな建物だ、昔の何をか語る、うすづく夕日に白い壁がボーと櫻色する時、月の夜にいよゝ冷くふるへるやうに見える時、ある強い默示をあたへられる、四萬？市民が朝晩仰いで、（お城山は松山の中央に陣取つて居る）それから受ける無形の感化は決して少くは無いだらう。

私はいつも、この美しいお城山があるのに、如何して白いサラ〳〵と澄んで流れる水！川が一つも無いだらうと物足らなく、不平ながらにも思ふ、この松山にこんな感を抱くのは私一人だらうか。

喜多川へまがるとお濠端とはちがひ大分どよめいて居る、物商ふ家ばかりだ、向ふから來た、重さうに荷をかついだ青物屋が、少し前で後ろのかごの紐を切らして、てんびん棒を投げ出して、人や車が早くふまない内にと、大きいかごへ筍も南瓜も、十六豆もごつちや交ぜに拾ひ込んで居る、やせた五十程の男だ。

忽然、前のうどん屋ののれんをくゞつて出た赤てがらが「おいさん、何まきよるのぞな」とあびせた、こちらの餅屋にたすきがけで何して居た女が、ふと頭をもたげて「おいさん、棟上げしよるんかな」とひやかした、おいさんたるもの怒ることも出來ず、變な笑ひ方をして居る。

野道へ出た、清いさわやかな空氣を、十分に吸うて

石ころ道をたどつた。

松山の繁華の中心は、火事がもえうつるやうに北から南へ進んで行つた、今も南へ延びようとして居る、その昔榮えた、北の方の町に生れて、十八年を家並の低い陰氣なさびれた町に送つて來た私は、外へ出ればきつと、遠廻りして、野道を行くと云つたやうな調子で、人口四萬餘を有する小都市もほんとに知らない、此頃旅から來た人に、官衙の在所や町の名をきくやうなあべこべをして居る、詩に歌に才のある方を一人、連れて來てこの松山を見せたいと思ふ。

常陸下館より

木村那賀子

戸數僅かに三千、町の廣さ約一里方と云ふ小都會ですが、東京と云ふ大都會に近い故か、髮の結方から着物の着方、何事も總べて東京に眞似て、なか／＼野暮ではありません。けれども昨年東京で流行つた物は今年と云ふ風に順々におくれて行きます。

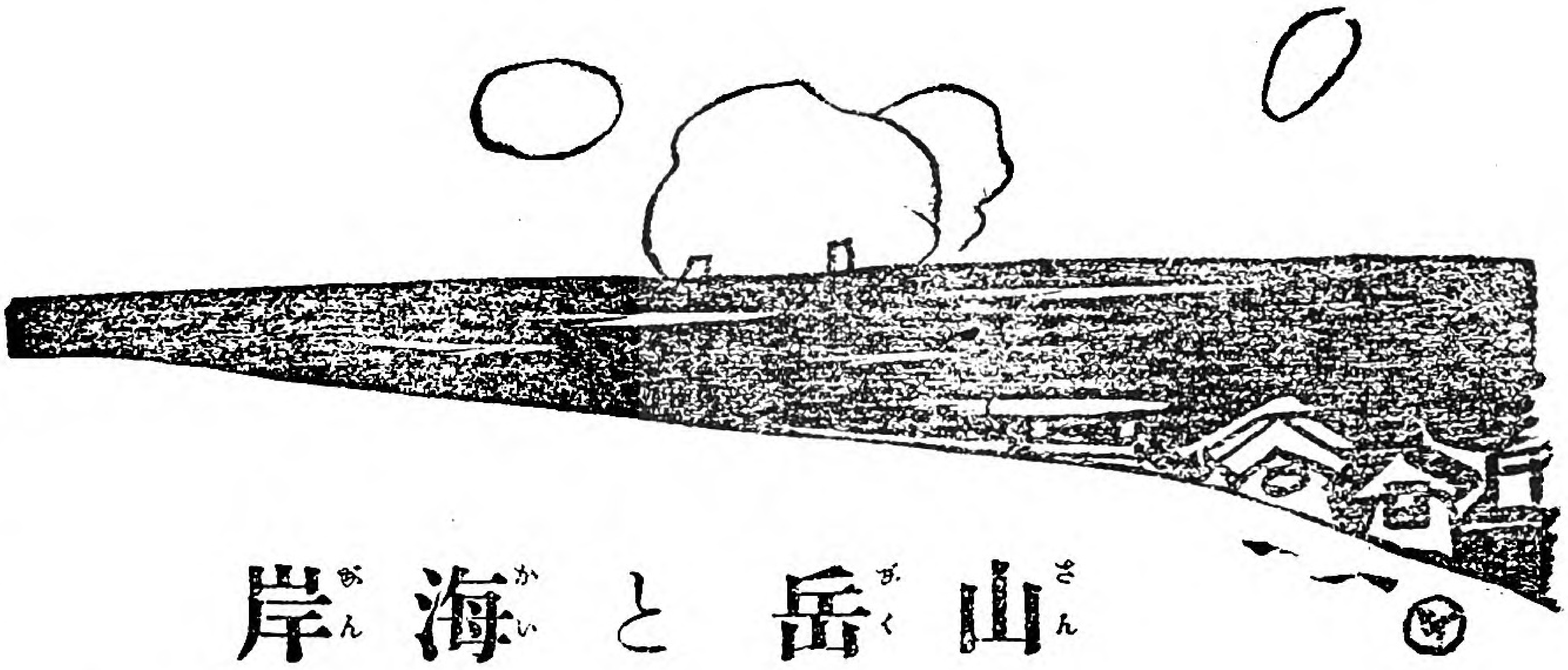
只今髮は廂三分日本髮七分です。廂は丸たぼのずつと上の方へ、日本髮もたぼを長く出して、上へ結ふのが流行ります。リボンや簪等の飾りはありませんお化粧も夜化粧たけで、それも極く薄く、着物は衿をつめて着ます、粋がりのお茶屋の姉さんや藝妓さん等迄つめ衿で、ハイカツて居ります。

教育は決して解放的ではありません小學校を卒へると女學校へは入る者が一分で、あとは皆お嫁に行く迄お縫物に通ふのが一般ですが、近頃は途中で退いて、東京へ見習ひに行く者が多く、中流では、我も我もと上京熱に浮かされてゐます。これも處女に對する束縛が、あまりに極端に走つて居るので、女子自身が解放されようと努めてゐる結果かと思ひます。

上流の（わけて連代の大家）方は、お縫物に通ふか、お花、お琴習ひに姿を見せる位ゐで、其他は戸外へも出ません。

上京した方も多くは、二年位ゐで歸鄉して、土地の近くへお嫁入りします、中には東京で戀の成功者として家庭を作る方もありますが、之等は極く小數に過ぎないのです、町は狹ふございますが、近在の範圍が廣ふでございますので、町中にある十有餘軒のお縫物やお弟子達も、其大半は在の方が占めてゐます。

昨年迄は町立裁縫女學校として裁縫を專門にしてゐたのが、本年は技藝學校と成り、新に教師を雇うて五月から開校されました。



熱海

章子

箱根から吹下す風は野百合の花をめぐつて沖の潮にくゞるのである。

今は八月盛夏である。冬くれば峰に雪をふらすといふ箱根疾風も夏はなつかしきものゝ一つであつた。

くるめく樣な音に古い顏をして水車が苦痛をうたつてゐる。葭の葉は青い夢のおのゝきをみせて、川沿の空氣の中に冷たい囁言をこぼした。

古い誇をもつともみえる杉並木の側で、馬の汗を落す爺さんの顏がしみじみ優しくみえてなつかしかつた。蒸さるゝ樣な湯氣がたつ、馬毛は狐色に光澤をもつて來た。

暗がはびてる——不規律な不淨な川沿空地を、何かの黴菌におそはるゝ心地で馬道へ出たそして右へ。新開の田舍町を步む心地で居酒や、黃な顏した婆さんの坐つてゐる雜菓子や、色彩のどく〳〵しい毛絲をかゝげた店、暗いしもたや、それらの前を通つて、葉櫻しげる小學校から、やゝくらい御用地の黒塀の横に沿うてあるいた。

灯がかん〳〵ともつて兩側の魚屋はさながら、光と暗とのもつれであつた、横はつた灰色の夏鰹は今沖より上られて光にねむつてゐる。緊張した腹をさされて暗紅の血がジリ〳〵と流れる、生々しい臭が嗅覺を刺戟する。とやがて大樽の中へ

互にかさなり合て氷の中にねむるのである。

（汽船が來たぞ！）眞くろの影がとんできた。（良！良やーい）お神さんが紙ふだをつけ乍らよぶ、（そけりやに誰か居るづら！）手傳のお神さんがふりむく（いゝわしが行く！）若い女が男とたるをかつぎだす。ボボボーと汽船がなつた。小田原行である。

何とはなしに私もあるきだした。古びた假店に葡萄の紫と玉子の白色が淋しさうに光にぬれてゐる。酒やはひかりがまばゆかつた、臺を陣どる子供連中が、穴のあく程顔を眺め頭をみ衣物をみる、と隅の方で、（ハイカラ頭にリボンをさして）とやりだした一寸てはい顔をしてみたので尾の方が蚊のなく樣になつて、臺の下へ顔をかくして仕舞つた、皆がドッと笑ふ。

△△樓の二階の青白い女の顔と、いぎたない裏の流の際にいつもよく紅薔薇が血を吸はれた樣にしほれてゐるのとを思ひ比べ乍らぞつとして板橋を渡つた。

電燈の割合に多い通りを月光の顫ふ樣に、人の暗影が入みだれて、果物店の樣々な色彩が生きてゐた。

四角へ出た時床屋の電燈が、周圍の玻璃扉に強くかがやいて白波の樣にゆるゝ服が夢の樣であつた。

瞬間何處からともなく、樟の強香と溫泉香と潮の香ともつれもつれて、軟き唇の顫ふ樣に我頬にせまつて又にげ去つた。

たゞれた赫日が西へ落ちんとする時早くも、海の藻風をかぎ乍ら夕食ををへて、もう寢るのみだと心の靜まつた時、ぶらく\と逍遙ひいでて磯に立つ時どんなになつかしからう——今宵もふらく\と家をとび出した。築かれし崖の落る處、ちらぼへるまろ石より出でて斜に太き赤松の幹によらうか、それとも潮に洗れたる大石小石の上に横たはらうかと思つたが、つい內儀の心よき世辭にひかれて涼臺へ腰を下した。

月は出てゐた。黃金色の浪は白銀色に變らんとしてゐた、月が高くなるのだ。

糸川べり松の曲木のある處、多少の空地を利用してこゝは船作場となつてある、新らしきかんなくづの間に、青き草はのぞいてゐる、ぐるりはずつと狐色の笹がてひである、冷たい。

荒果てた其隅三角形の地を海水浴客めがけて、萩園の氷店が南向に据ゑられた。私は今向合ひに三尺巾の砂道をへだてて河原の上の涼臺に腰を下してゐる。

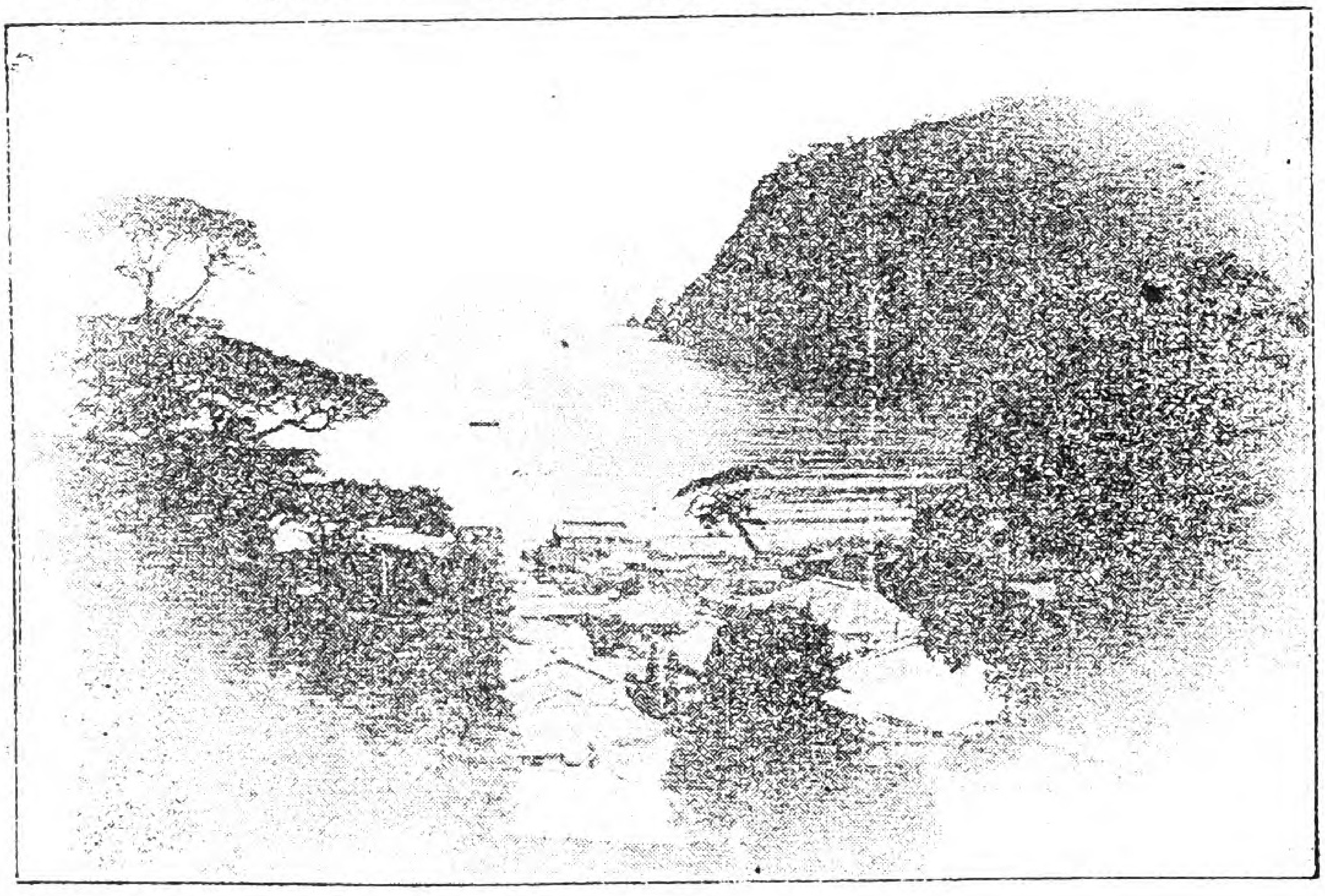
御あづきと印された赤い紙角燈には既に灯がはいつた、好い色だ夢の樣な心地で唯ゐる。

葡萄の皿がくもつてみえる。細き芋の幷びが冷たさうに、あせばんで形がくづれてある。海の上は今夜もひどい北風がふいてゐる、霧の様に潮が煙る、浴衣がしつとりと重い。

マッチをいれた瞬間盛に燃えついた、鉋屑のうづ高きは、海砂の上ぶす〳〵とくすぶり初める、青白き煙は橋上の白き人をかすめて北へ北へと流れる。

山麓の湯の煙は純白の色重く、蒼暗き山頂へ連ならんとしてたえて居る。二階三階きそうて高き旅館の室室には電燈の華やかなるがともされてある。障子が白く人影はなつかしき山麓のいでゆの里よと、自分は高く叫んだ。

楯なる山はもう既に暗を流して太古の靜けさに、眠りつ〵ある。寺の灯で〵もあらう微に微に日金山の下にまた〵く、けれと、ともすれば暗き山林に我瞳より奪れる。



熱海の全景

西の高嶺より南に突出でた魚見岬、岬は高くして黒い。斜に頂に昇る山道は一線唯白く顫える様にも見える、何れ伊豆は石道！灯は頂にもくゆつてゐる。

南の岬より北のとがりへ走る中空に、また〵く星、夕には萬星の先を制し朝、美し雲に消さる、いたき光だといつも眺めやる。

――人は集つてきた、脛あらはなる山の爺、煙をいたづらにふかしては人にふくくせある男、新婚旅行とも思はる〵若き二つの影は幾組かたえずさまよふ、美しき人である、華やかなる衣、光る指輪を月に背けて髪にあぐる風情、水あり山ある南のよき國によき人のそゞろありきはふさはしいと思つた。

いづれともなく顫を帯びた聲に獨唱がおてる、丈高き露人の砂上にうつる其で〵もあらうか。

談笑の聲のみたけなはに夜はふけてゆく。月は無言のまゝのぼつてゆくのである。

房州の渚

白百合

深緑の磯馴松を覆うて白い雲の峰がわく。

海はゆつたりねむい〳〵調べを地の底の底でしらべて、都會の生活に勞れ切つた人を、平安な懷に抱かうとするやう、潮の香、紫金色の水。物音といつても力強い海鳴り許り、鹽分を含んだ海風が遠くから吹いてくる。

二人は松林の緑の影鮮やかな草にすわつた。

一高の艇庫の上の旗がゆる〳〵皺をきざむ。

右と左から回線をゑがいて海を抱いた兩岬は蒼く遠のく程紫に霞んで、充分日光を吸收した緑の息はゆら〳〵と遠く鏡が浦の水面をぼかしてゐる。

滿枝さんは眼を細くして芝生に後ざまに手をついた。爪先下りの白い砂の微細な粒が一々日光を反射して七彩の光がモーッと濱からもえてゐる。白い貝、紫の貝、皆視覺をにぶらせる程かゞやいて、浪に打上げられた藻が小石にかぢりついて焦げたやう、ちゞれてゐる。

砂の上には汐にさらされた黒い自慢の白線帽が十人餘、なめらかに輝く皮膚をやくやうな日に曝して横になつたり、足をのばしたり、砂に字をかきながら話にふけつてゐる。

水際の櫓にも一群のぼつて、

緑もぞしき柏葉の……………

何かたゝきながら歌つてゐる。力のこもつた男性的の聲が空漠な空氣に振動してより大きく聞える。

淺い松林の中にはめくら縞の若い女が松葉かきをしてゐる。木も水の光線が青くかゞやいて何となく美しい。新建の貸別莊からは紙風琴の音が日まはりやコスモスの花をゆるがせて輕く漂うてくる。

ひるねの夢なかばで置去りにされた露さんが、鍔廣の海水帽に日をさけて、松林だしの白くギラ〳〵する道をかけてくる。

露さん……………ハーイー。

海の音と合さつてベースでもきくやうに心地よい。岸邊には白波雪とくだけて滔漾する。つり船が沖の島影へとかくれる。

船着場よりに今地曳が引かれてゐる。
ジャノゴ〱のかけ聲がいさましく響いて、鰭からしたゝる鹽の香もあざやかな魚が潑溂と目に浮かぶ。沖から小山のやうな蒼浪が一つ岸へとよせてくる。
水に浮んだ十四五の海水帽は今にものまれてしまひさう。目路はるかな洲の岬方面にポッツリと黒煙が見え出した。
汽船！汽船！とさけびながら八つ許の男の子が松原からかけ出た。つゞいて三十近い母親も出て、
アレでお父樣がゐらつしやいますのよ。サア勇さん船場までいそいでね。
母子は砂路を船場の方へとかけてゆく。
汽船は見てゐるうちに大きくなつて、やがて壓へつけられたやうなにぶい汽笛をならし始めた。
私達三人は反對に港川の方へと小さい足あとを砂につけてゆく。
松原の日蔭はやつと尺許り出來た。
日の目も透さないやうな中は、露草や濱なでしこ、をみなへし、いろ〱の花が一面に彩どつて、その下から蟲の細い弱い音がふるえるやうにかすかに聞える。
何處か斯う古城にでも來たやう。しめつた土の香もさまよつてゐる。
足元にあつた貝がらをひろつて草むらに投げた。
蟲の音はハタととまつて…………暫らくすると怯えたやうなこゑしてまた鳴き出した。
此度は砂丘を下つて浪打際に下りた。
一浪くると足あとは綺麗になくなつて殘つた水がスーッと砂にしみる。
港川はもう眼の前にせまつた。
るり色の空をかぎるのは鋸山。近く那古の觀音堂が青葉の中に丹塗の社をほの見せて、一帶は濃い綠に塗りつぶされてゐる。
川口の洲の上にはヂリ〱する日に、何魚か腹をかへして落ちてゐる。そのまはりに烏が五羽許、恐れ氣もなくよつてつゝついてゐる。
シーッと手をふつておどした。
にくらしい程烏は落ち着いて險惡な腐れかゝつたやうな眼してヂッと見てゐる。
たまらなくなつたと見えて露さんは貝を投げた。
當らない。烏は一寸羽ばたきして汚ないものに蠅のつくやうにまたよつて來た。そうしてのろふやうないや

な聲してなきながらあかず肉をつゝついてゐる。
何だかおそろしくなつてしまつた。
足早に川にそうてゆくと、川の水と海の水とは互に嚙み合つて怒號してゐる。
潮にのせられた海草は青々と氣持よく水に漂うて貝がらも小石もうるんで光つてゐる。
川中では靜かに投網をうつてゐる。
黒い網がパッと日に光つて廣く水面に投げられると、水銀色の波紋は朽ちた杭の根元へとよせて消える。
川上の橋はクッキリ水に半圓をゑがいて、絶えずその影が流れながら畫かれる。
橋の上には釣がへりの子供が欄干によつてヂーッと見下してゐる。
網はしづかにしぼられた。小魚が十尾許銀鱗をかがやかせて網目にくつついてゐる。
滿枝さんはグッと手をのべてハンカチを濡した。薄皮の皮膚がポーッと紅潮して美しい。ツーラインの方々はホワイトローズの君と呼んでゐらつしやる。
美しい美しい方。
松林の中には畫板が見える。長髮の男がパレットをにぎつてゐる。
見たい〳〵。繪になつた浦の景色か、川口か。私達はたぢろいでとう〳〵はなれて何氣なく通つてしまつた。
足元にさいてゐた乳色の釣鐘草!! 長髮の人!!!
松林を通りに出ると、せゝつこましく郵便配達夫が走つてゆく。
長髮の畫家は唖者であつた。

越後の海

優梨子

波の音が聞える、明け方の靜かな波の音が、――。
私は堪らなくなつて又今朝も、赤い緒の新らしい宿の草履を、履いたまゝ、平目の蒲鉾燒く店の前を通つて、小砂利で辷るだら〳〵坂を下りた。
靜かだと思つた波の音は酷く荒い。ぼーつと霞んだ沖に、小さな帆を掛けた鯛釣る舟が、幾つとも無く見える。――恁麼朝、波の荒い朝に漁れる鯛は味が、好いと、昨朝漁夫が云つた――。
佐渡行の大きな汽船が、凝と發船時間の來るのを待つて居る。
私は波打ち際に立つた。――ぼんやり沖を眺めて居

ては、大きな波に幾度か草履を濡らされて懲りながらもまた——。

　桶の樣な浮が幾つも沖に浮いて、網引く綱が幾筋か岸に横たはつて居るけれども、未だ網引く女は一人も見えない。

　いくらか沖が晴れて來た。私は蹲んで海の面を透して見た。佐渡の山が幽かにぼーつと見えた。

　靜かな朝の海邊！私は高い波の音を聞きながら、只恍惚と沖を眺めて居た。と私の眼は後から輕く抑へられた。香代さんだ、小さな柔かい手だものと思つて、抑へられたまゝ默つて笑つて居ると、



「いくら山國育ちだからつて、貴女見た樣に海が戀しくても困るぢやありませんか」と眼から離した手で私の肩を搖つて、笑ひながら云ふ。

　私は未だ何とも云はないで只笑つて居た。

「又今朝も私を置き去りにして酷いのネ、私の跫音なんか一寸もお耳に這入らなかつたでせう」

「だつて此波音ですもの」

と反抗しようと思つた。けれども「えゝ一寸も」と折れて出た、香代さんは笑つて居る。私も莞爾した。

　ボーッと汽笛が鳴つた。二人はつと其方を見た。

小さい艀が幾つか汽船から離れると、黒い濃い煙りを吐いて靜かに出て行つた。

「今朝もまた鱚位ゐだらうよ」

「鱚でも好いやネ、不漁でなけりや」怎麽事を聲高に話しながら、盲目縞の筒袖袢纏に絞りの腰卷掛けた。網引く女が、幾人も後ろ坂を下りて來た。眞黒な顔に目許り光つて見える漁夫も交つて居た。そしてそれが二つの綱に別れると、

「さあ好いかなア」と、目の光る男が云つた。

「よしきた」と皆が聲を合せた。

節廻しの緩やかな網引きの歌を歌ひながら、靜かに靜かに引き始めた。

私達は、海草の散ばつて居る綺麗な小砂利の上を急いで、すぐ傍へ行つて見た。

「もうどの位ゐ經つたら上りませう」と、私は傍に居た、紺絣の着物を端折りして、子供を脊負つて居る女に聞いて見た。

「二時間經つたら上りますア」と其女はお齒黒の剝げた齒を見せて斯う云つた。そして私達の處をさう強くも無く眤と見て居たが、

「私、貴女方を昨朝も見ましたゞが、何處から來なすたネ」と聞いた。長野からと私が云ふと、

「左樣かネ、それぢや海が珍らしからうネ」と怎んな粗雜な言ひ方をしたけれども、さう嫌な感じがしない。

「越後の女は皆よく働きなさるのネ」と私も無雜作に云つた。

「そして皆聲が好くて美貌ネ」と、私の後に居た香代さんが、突然斯う云ひ足した。

「皆さうとも定つて居ませんやネ、私等見た樣な者もありますだで、アハヽヽヽ」と無遠慮に笑つた。

「昨晩ネ、加島樓で名物の「やらしやれ踊り」とか云ふのを見ましたの、なか〳〵踊りも聲も好くて喫驚しましたよ、とても長野の藝妓なんか跣ですわ」と香代さんは實際感心して斯う云つた。

「世辭云つて居なさるわネ、まア加島樓は一番別嬪が大勢居ますで、少しやすまあネ」と賞められて何となく嬉しさうな色が見えた。

私は默つて沖を眺めた、網引きの歌が、絶えず緩く聞える。

話好きの香代さんは其女と熱心に話し始めた。

船から下した許りの、目の生々した鱗の紅い美しい

大鯛が、四五十錢位ゐだつて云はれて、香代さんは喫驚して居る。

五智の五佛樣へお詣りに行つたかと其女が聞けば、「私達は未だ佛樣には少し御緣が遠いから、お詣りする分まで和倉樓で遊んで來ましたよ」なんて云つて居る。

「善光寺樣のお膝元に居なすても、矢張り若い娘さん達は如來樣に無沙汰と見えますだネ」と其女は笑つた。

私は二人の話を聞かうとするでも無く只ぼんやり聞きながら、和倉樓の高い椽先から見下した夕暮の海！金色の波目眩く漂よはせて、燃える樣な初夏の夕日が今日の終りを告げる樣に、靜かに極靜かに日本海の眞中へ沈むのを、憧憬の瞳を大きく開いて、昵と何時までも〱見入つて居た五智の海！。穩やかに凪いだ青い青い海の果に、すつきりと見える佐渡の山、暑い砂地に腹這ひになつて居た濱の子が、黑い健康さうな體軀をざぶん〱と勢よく飛び込ませる鄕津の濱邊！。それからそれと思ひ出して恍惚した。今日の夕日は鯨波で……と思ふと嬉しさに胸が踊る。

「優梨さん」と後から呼ばれた振り向くと、先刻の女はもう居なかつた。

「そろ〱歸りませうよ」と香代さんは私の袖を引いた。「何ぞお先へ」と莞爾して云ふと「まア酷い」と私の脊を叩いた。

浮が大變近くなつた。それでも網引く女は急がない、矢張り緩やかな調子で歌ひながら、靜かに引いて居る。

二人の漁夫は網を上げる爲に海へ這入つた。

大きな網の中に、綺麗な小魚がピチ〱跳ねて、小さい蟹が網目から這ひ出す樣、見たい、早く見たい！、私は瞬もしないで浮の近くなるの見詰めた。香代さんも仕方無しに見て居る。

すーつと大きな鳶が舞ひ下りて來て、又すぐ舞ひ上つて行つた。

秩父

葭子

四月一日の朝である。荷車が來て荷物は積みだされた。待つてゐる間もなく俥屋が來た。私は柳行李と弟は祖母さんと二臺に乘つて十年住みなれた、生れ故鄕にまさる地を去るのである。町をはづれて幾度ふり返つたらう、もう家も森も見えないでとある家の後にあ

つた高い杉の木だけうす紫の霞の中に紀念碑のやうに見えるばかりだ、麥畑と桑原とが盡きてまるい小さい松が一二本位しか生えてゐない禿山が幾つも見えてきた、太い繩を渡したやうな道が鮮かにわかるのもある。轍が砂利にきしる音がして廣い河原に出た。雨がふりさへすればすぐ大水が出るけれど、常時は一滴もない河だから運動會などするのによいところである。よくつばなをぬきにきたり、月見草や河原なでしこなど取りにきたことがある、又ある年の初秋大水の出た時水を見にきて、淺いところへ入いつて遊んだが、足がすべつてあぶなく溺れ死ぬところを、居合せた砂利運に抱き出して貰つて、友だちの襦袢を借りて着て、紺絣の單衣を絞つたことなどあつた。そんな追憶と、あたりに舞ひあがる雲雀の歌の愛らしさと、ひろ野をわたる風の頰ずりとに殆ど夢心地になつてしまつた。河原から木下路に入る境に、小川が一筋、河原とは關係のないといふ形に流れてゐる。俥屋の足が冷たさうにぬれて青々とした芹が摘む人もないのか澤山あつた。そろ／＼町ではあまり見慣れなかつた麥藁屋根がふぞろひに並びはじめた、蕊の目だつ八重紅梅がところどころに咲いてゐる。竹藪の下のじく／＼したところに椿の散つてゐる、日蔭になつて衿元が冷い鶯が晴れやかに鳴く、畑、林、又畑、大道小道と名も知らぬ里をめぐつて、淋しい××町の中頃で下車りた。「今までの三里は樂だつたがこれからの三里は苦しいのだよ」と祖母さんがおつしやる。少し早いがそこでお晝食をすまして、急ぐなといはれながら弟と二人は先にたつて、町の家並びのとぎれたところへ出て、あらと驚いた。青空を切つて落したやうに靜かな水の色、大きい黒い岩が向ふ岸にあるのが、島のやうに見えて、畫にかいた海のやうな景色、「荒川だよ」と私は弟に繰返して言つた。低い長い、板のがた／＼する假橋を渡ると橋代をとる小さい家がある。私が三人分三錢拂つてあげたのだ。臺所で火をかん／＼起して串へさした香魚を燒いてゐた。通り過ぎてから祖母さんが、「あれをお土産にしたいものだ」といはれた。菫や蒲公英のこぼれ咲いてる美しい道が、そろ／＼上下水平に曲りはじめた。だん／＼登らなければならない。兩方からは木々の若枝が蔽ひかぶさつて少し怖いやうな氣がしてきた。男といつては十二になる弟だけだもの、でもまさかまひる中で何の事もある筈はないと思つて、弟とじようだんをいひながら登つて頂上の松の木のそばま

できた。そこでひと休した、空もろくに見えない、一點の紅ゐもない。ただ重い冷やかな綠色の空氣が汗ばんだ肌に觸れるだけ、瀧のやうな音が聞えるけれど見えない。いつまでも休んで居られないので足をうつした。

下りに向つて他の山がよく見えてきた。山の中途に傾斜した四角な桑畑があるのに驚く。あんなところへどうして摘みに行くのかしらと思ふ、懷しかつた溪流も跨がなければならなくなつた。一軒二軒づつ家も見えはじめた。ああもうぢき父と母と妹の待つてゐる家に行かれると思つたら、自分がだん／＼山の中へ押し込まれて行くのも忘れて嬉しかつた。

澤邊に下りて汗になつて顏を洗つて髮をなでつけた。そして馬力の通る道に出て、岩にせかれる音のはげしい川に添うた十年の昔の記憶の少しも役にたたない村へ入つたのである。おばあさんの方がちやんと覺えてゐらつしやるらしい（私は小供だつたのだから當然のことだけれど）どこが誰の家やらちつとも分らない。お島さんの家位覺えてゐさうなものだといはれる、あの大仲よしのお島さんと今日逢へるのだ、お島さんの家へ行つて每日遊んだ面白さは十年の間忘れることは出來なかつたのである。どんなになつたら私より一つ年が上だつたと思ひながら土橋を渡つた。橋のそばに苫小屋があつて中に色の白い娘がくた／＼にした楮をさらしてゐた、私もよく見るさきでもよく見た。ふと人聲に驚いて仰ぐと、高みの石垣のところに、お父樣のお姿（これはお早かつた）ともう足の痛いのなど忘れて一息に家まで。

お母樣が水をとつて下さつたのを、私だけは裡の澤へ行つて足を洗つた、水の清さ苔の香のしめやかさ、山吹はまだ咲いてゐないが、白い木苺の花が一重山吹のやうな形に咲いて、瀧壺のやうな水に映つてゐる、昔蟹をとつたことを又思ひ出した。

家へ上つて久しぶりで家內中そろつて話した。「あの小屋に居たお島さんを見たかえ」といはれて、あれがとびつくりした。夜お島さんのところで今晩お湯をたてたから是非おばあさんと私とに來てくれといつてきて下さつたから、挨拶ながら行く、みんな機嫌よくあしらつてくれた。少し話すと昔の溫情が湧いてくる、けどお島さんはお辭儀しただけ、そのお母さんがお茶を入れて下さる。妹さんと弟さんとはうす暗い板の間で、楮の皮剝をしてゐなさる。圍爐裡へたくさん薪を

くべて草餅を燒いて出してくれた。流のそばの水瓶に樋の水が落ちる音がして、その後ろで、梟が鳴いてゐた。短くお湯に入つてあがつた、提灯をつけて出ると、外はどつちを見ても山ばかり、大きな穴へ入つたやうな氣がする、天が狹くなつて星の數まで減つたやうに思はれる、今朝出た町はどつちの方か、それもたしかにわからない、明日の朝どの山から日が昇るかしら。耳をはなれぬ水の音は何を語つてゐるであらう。

高尾

筆子

「入らつしやい、お掛けなさいまし」女中の浮調子を聞きながら、或る茶屋へづいと通る。

高尾の山は麓まで綠色だ。「あの山へ上るんです」と數夫さんは、母と私に指さしていざ御案内といふ見得だが、先刻豊田から八王子道を間違つて、草いきれのする、日陰のない妙な細道を引廻した、甚だ心許ない案内者「數さん、お山で迷兒にされちや困るよ」と母が微笑む、「何有、伯母さん大丈夫です」と麥藁帽子をぐいと上て、額の汗を拭く、所へお誂の御飯が來た。講中の納手拭や御神燈がぶら下つた店先は、入れ替り立ち替り客が來る、葡萄棚の蔭に尨犬が舌を出して寢てゐる、御山の方から清凉な風が吹く。

行衣を着た一連が、鬚の長い先達と共に、チリン〳〵鈴を振つて通る、實體らしい二人連や、俠な內儀さんを中に上機嫌な旦那樣、お婆さんの一行、まだ〳〵色色な人が行く「今日はお登りの方が多う御座いますよ」と帳場の女房が云つた。

小橋を渡つて右が蛇瀧道、此方が本道、登り一里で至つて樂だと敎はつて、いよ〳〵登山の途につく。成程登りは苦しくない。爪先上りの赤土だ、流石に老杉鬱蒼として、幽かに水のせゝらぎが聞え、何となく心が引締る。枝と枝の間から、青い空が覗く、ふわふわとした白い雲が見えるが、鳥渡氣になる雲足だ。けれ共此樣な快晴な日だもの、私達の勇氣はいよ〳〵昂進する、母はといふと洋傘を杖に確乎したもので、すたく〳〵と登る。暫らくたつと數夫さんが見えなくなつた「おやッ」ときよろ〳〵見廻したが、居ない、少しばかり心細くなりかけたら、偶乎上の崖に現はれ樣、此方を向いて手招ぎしてゐる。

一町毎に一合目二合目と朱の這入つた石が立つてゐ

る。麓の方から、チリン〳〵「六根清淨々々」と大勢の聲が聞え出した。私達はもう餘程登つた。偶と廣い見晴らしがある「一休みしやう」と母の主唱で其處の大きな石へ腰を掛けた　向ふから背負子に青物をつけた老爺さんが、にて〳〵遣つて來て、「御參詣でがすかね」と馴れ〳〵しい「お山のは中々あらたかで御座いますよ、はい」一傍へ自分も腰を下して、臭い煙草をふかし初めた、母は此坊へ行くといふ老爺を相手に話してる内、私は數夫さんとはるかに見下すと、暗綠色の杉や檜の梢から一段下は一面の薄綠。

何だか空が曇つて來た、淺川だらうと思つた邊は糢糊として、淡々しい雲が一ぱい廣がつた。

俄雨だ、ざあ〳〵篠を突くやう。辛うじて掛茶屋まで全速力で飛び込むと、先客の幾組もが詰込んで居て、「や、どうも驚きましたな」

「雨が降るとは思ひませんでしたね、どうです降るわ降るわ」

「お婆さんもつと此方へお出なさいよ、しぶきが掛りますよ」

「はい〳〵、何てお天氣だらうね、御免なさいよ、やれやれ六根 清 淨々々々々」

こんな會話が雜然として響く。西の方は墨の樣な入道雲だ。澁茶一ぱいでほつと息を吐く、「痛快々々」數夫さんは嬉がつて叫ぶ、母と私は袂の雫をしぼつてると、妙な男を見付けた。

行衣の腰へ鋭い鎌を差して、三十三二位の色の黒い眼の凄い惡感情を催させる顏付だ、而して甲高なアクセントで、「奈何です皆さん、當山は中々廣大です、俺は一日斯うして修繕して居ますがな、どうして〳〵この鎌一挺ぢや遣切れませんや」きよろりと瞳を動かしたが唐突に「や大變！斯うしちや居られないぞ、一つこれから瀧の水を見廻つて來なくちや」と大慌てで飛び出した、銀の針金の樣な雨が横なぐりに男を打つ、ざツ、ざツ、と樹木に注ぐ。

「何だらう彼男は」

「左樣さ……」

「何、お前さん氣違ひでさあ」

と聞いて私は冷やりとした。男はのそ〳〵と蛇瀧道へ下りて行つた。當山の瀧は氣違ひに浴せて、半僧坊の御利益に依つて全快を祈るといふ事だ。

扨晴れ間を待つて、急な石段を上つて奥の院に詣でた、流石に神秘の影が宿る、郷里を離れて無人聲、清嵐

梢を鳴らすといふ其趣があつた。全く石屏の苔滑らかに、古代の面影を存して居る。更に本社に來ると、石の玉垣に圍まれ立派な普譜、此傍で當山の杉箸や繪葉書を賣る。

「見晴臺へ登りますか」と數夫さんが聞く、母は疲れたと云ふので、私だけ一緒に頂上へ登りかけた。頂上は木もない、禿山で、もう此邊から土は岩の樣に固結して居る「奈何だい、隨分非道い所だらう、確乎摑つてお出で」がさく熊笹の繁みを分けて行くと、俄然雨だ、又してもどしや降りで、ひゆッと風が吹いて來た、「あッ」とはづみを喰つて、私は數夫さんと手を放した、身體が飛ばされ相だ、洋傘なんか差せるものぢやない、眼もあけらいないくらゐ私は其處で行惱んだ、「おーい」向ふで呼ぶのは數夫さんだ、ざゝゝ、ざッと雨のしぶき、「美波さーん」「數夫さーん」助け船といふ體で私は半泣きの聲を上た、やつと數夫さんと一緒になつて、引返したら、母は濡れるのも構はず心配相なお顏で立つて居られた。

降つたり晴れたり、氣の揉めるお天氣だ、雨の爲に這々の體で下山したが途中琵琶の瀧を見るさゝやかな行場の彼方に濛々と霧を降らして、小さな瀧だが烈しい勢だ、突出した岩にぶつかり、ぱッと白泡が散る、そゞろに肌寒さを感じた時、「御覽」と母が袖を引く、と、瀧壺に頭が浮んでる、「六根清淨……」終は瀧の音に消されたが何やら呪文を唱へて居た、行場から出て瀧壺へ飛込む人は、皆合掌瞑目する、頭上からざーと落下する水勢、全く此世以外の境界だ。

「奈何です」と數夫さん。

「まあ、本當に凄いわね」

「恐ろしいぢやないか」

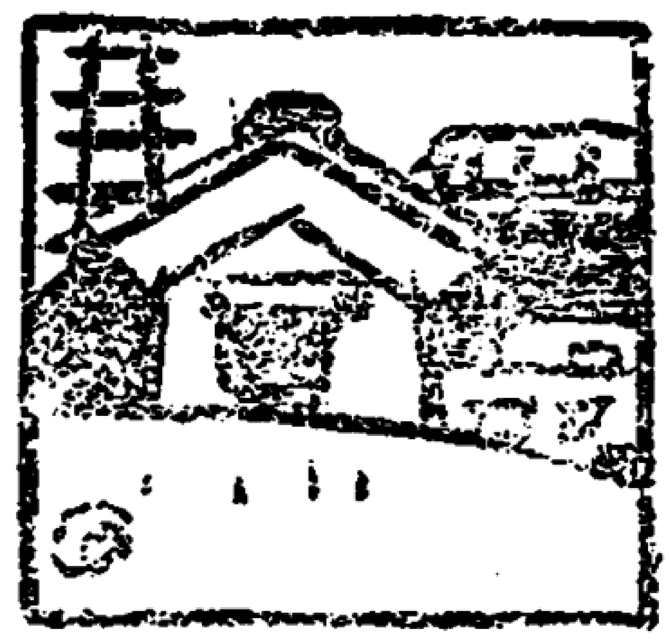
三人共暫らく飛沫をあびて立ち盡した。

又々空が怪しいので辷る樣に、險しい間道を下つた。とう／＼と瀧の響がだん／＼幽かになる、中腹の谷まは濁水が激しく流れる。

赤土のはねだらけで漸く下山し終つたら、憎らしい、カッと日光が輝いた、拭つた樣な蒼い空。

「あらッ」息を吐いで仰けば、翠黛の山は悠然と後に聳え、麓一面露の玉、「自然の美」と思はず叫ばしめた。三人で橋を渡ると、一時蟬の聲が降る樣に聞えるのであつた。

さらば高尾の山、都から最も近い西の山よ、とこしへに綠なれ。



活動と
静寂と

地方の現在



石油の噴出

早蕨

噴上る石油、天に冲す

鑿井場の雜然たる音響と、發動機の震動とに、家の前も、後も、包圍されて居るので、戸障子迄が始終異樣の音律に微動して居る。―― 炎天の午下り、曇日、抔は此等不調和のものさわがしきどよめき――疲勞たらしい鑛夫等の呻の聲――一種の惡感を興さしめる。

俄然、ド、ドウーン、と地鳴がしてもの凄いとゞろき自分は無意識に戸外へ飛び出した。たつみ藏の後方に當る森の上からムラムラと煙が舞ひあがる――、石油坑破裂？、火事？、火事？、絶叫しながらも、好奇心に驅られて裏木戸を開いて街道へ出た。

チリンチリン引つ切り無しに自轉車のベルがなる。スーッと自働車が奔る。ピーッと汽笛一聲、轟々と響のこして汽車――岩越線――は行つた。

石油の惡臭、ペチを燃やす油煙の惡臭は惡どく胸を突く。

スター式の車の囘轉に耳はガンガン鳴る。

人が出るわ出るわ、秋葉山上より、麓をめぐる川一筋さしはさんで、此邊一帶に密接してる鑿井、あつちの井小屋からも、こつちの井小屋からも、鬨の聲をあげる。わめく。騒々しい。杉の並木の繁みに太陽をさけて私はみて居る、面白い。××合資會社所有の第一號井が噴油したのだ。煙と見たのは石油の噴きあぐるしぶきだ。十五吋の井口から幾十丈高く噴きあぐるのだからたまらない。

未曾有の壯觀、壯觀、北越の花とうたはるゝ柄目木油田地。

幸ひしぶきは風向に川の方へシユツ、シユツ、と音を立てゝめに飛散する。たちまちに黑うだく／＼と石油は水面に浮く——流れる——七月の日光に七彩の虹と映じて、ゆるう、うね／＼と——

全身油をあびた技師、鑛夫等は周章狼狽眼許りくろくろ光らせて、噴油口より油槽へ鐵管を通はせる。タンクより舟へ通はせる。大車輪に働いて居る。

漸くの事鐵管をさし終へた。

滾々と盡くるも知らず凄い勢力に自噴する石油はドーッ、ドーッ、と五千石入油槽へ落つる音——舟へ落る音——、群集の人々は口々に「一晝夜で千五百石自噴だらう？」「二千石噴くだらう？」。

我利にすばやき野心家は慾望のひとみを輝かして、僅の隙地をねらふ。權利を爭ふ。ひしめく光景は宛ら戰場だ。

石油の香、夜の風に漂ふ

無數の煙突からだく／＼と煤煙は灰色の空に消えて了ふ。西の一天は山の端の森にかぎられて、落日の後の雲は薄くぼかした紅を流して居る。水色の雲の窓の星！、地の電氣！、點々たる火影は川浪にくだけて——。

夕食時、一しきり靜寂たる鑛場も夜業交代の汽笛が鳴ると共に、また夜の活動が開始されるのである。

日本石油會社、寶田石油會社、明治石油會社、愛志組、泉組、北越組、其他各々組の印半纒を着た鑿井鑛夫等はぞろ／＼と、上の方からも、下の方からも出て鑛場々々へちらばつた。

煮賣茶屋に腰掛けて居た女、太皷のやうな大きいお腹をかゝへて出て來た。と又同じ位の若い女が一人「ヨウおかねさ、お腹の主は誰？ホ、、、」皮肉つた笑ひをした。「いゝお世話さま」一人はつんとする。と又後から古洋服の男が追ひついた「ホウおきくさ、おかねさどてだい」「十一時迄の夜業にさ」「エライ大奮發だの北越組のが自噴しさうだとさ、そしたら作治さから賞與金の分前をどつさりねだつてやるがいゝ」輕くおかねといふ女の背をうつた「馬鹿にばつかしてるがんだ」女はぶり／＼する。チリンと自轉車のベルがなる。男も女も驚いたやうに右に左に別かれた。上總堀式の井小屋へ、轉木堀式の井小屋へ。

艶めいた女の聲がして、料理屋から出て來た醉漢が三五人、千鳥足ふみつゝ壺坂をうなるのもある。「柄月

木は全くゼロの井戸ちや無いからね「雖然、君、斯う亂掘されては石油地の定命も早く縮まつて了ふ理由だね」と別の五分刈頭のが「實際ですな、七間八間置きに櫓を密接されては。少なくとも三十間置位の距離を嚴重に制限すべしだね」合槌を打つて、旺んに殖える新らしい櫓をにらめ、憤慨してゆくのもある。非番の鑛夫らしいのが後からあとからと續いて來る。茶屋床屋の店前にぶら下つて居る志村演劇のビラ紙を皆一樣にみてゆく。新盛座へゆく連中であらう。

さつと涼風が吹く、石油の香、草いきれの香がもくもくと一きはつよく漂ふ。

パッパッと蒸氣釜から吐き出す湯氣は闇に包まれるにつれて白う、宛ら茫々たる霧の海のやうに見える。ガラ、ガラ、ギー、ギー、ドー、ドウと機械の運轉は烈しくなる。

楊梅の里の樹上生活

吉田紫花

駒子樣、待ちに待ちたる楊梅は今日明日が全盛期に御座候、私、毎日樹上生活に奮闘いたし居り候、幸御ひまならば、二三日にても共に樹上生活如何に候や、花にも増して盛短かき楊梅の命に候へば早速御入來の程待ち奉り候、匆々

こんな端書を朝受け取つた其日の夕方には私は早櫛淵の伯母の家に座つて居つたのでございます。

櫛淵は徳島縣下でも屈指の楊梅の産地でございますが、澤山出る許りでなく、味に於ても他に讓りません、それで中流以上の家には數十本の楊梅を持つてゐますが、少ない家の人々は「りんどり」といふのに雇れて行きます。それは各々の採つた升數に準じて賃錢を貰うので、澤山楊梅のある家になると數十人の「りんどり」を雇つて、一日に五六石位採り納めるさうでございます、採つた楊梅は前々は家毎に手足の立つ者が賣りに出たのでございましたが、次第に組合とか會社などが出來て、近年では箱詰にして大阪神戸あたり迄も汽船で運ばれる樣になつてゐます。

此の楊梅の熟る期節といふのが、六月中旬から七月中旬に亙るので、丁度梅雨と同期に當りますが、雨が降るからとて採り後れたら一日の間に山眞黑に實が落ちて、土にまみれて潰れて仕舞ひますから、雨を冒して採りますので、中には足を辷らしたりなどして

千尋の谷底で頭を碎いて絶命する事もございます。死に至らぬ迄も足を折るとか、股を突き貫く位の怪我はまゝでございますが、それは無理をするからで、無理さへしなかつたら實に樂しい仕事でございます。

此の期間が村の一番賑はしい時期で、殊に日曜などには學校の生徒などが友の家の山へ招待されて來て一日山で騷いでゐますし、道々には新らしい籠に楊梅を入れたのを提げた人達が往來して、里の空氣がさながら活躍してゐます。

私の伯母の家などは楊梅の少ない分でございますが、それでも二三人の女を雇つて居りました、端書を呉れた從姉は私の參つたのを非常に喜んで、「金色夜叉のお宮さへ富山の生活も貫一と共にであつてこそと悔んだでありませんか、樹上生活が樂しいつたつて貴女が來なけりやつまらんと思つたのになどいつて、自分が採つた楊梅を進めて呉れるやら、從姉と揃ひの襷を呉れるやらでございましたが、其日はもう間がなかつたので私は山へ行きませんでした。翌日は從姉といつしよに未だ薄暗い内から靄を分けて裏の山へ出かけました。

髮は引つ詰の束髮にして手拭を冠つて、襷をかけて首には一升程入る小取籠といふのをかけてゐます、その籠に一ぱいになつたら他の大きな籠に移すので、ずつと高い所へ上つてゐる時には其の籠を緒で吊り下げて移すのでございますが、姉などは面白い程巧者でございます、姉は兼ねて評判の楊梅採の敏腕家で、お箸程の細さの所へでも平氣で上つて、猿の樣にヒラリヒラリと枝を渡る其の身輕ろさ。從つて採る楊梅も玉がよろしい、私などの樣に裾めぐらを這ひまはつて採つたものなど一所にも置けません、然し私は今までいつの年も、食べに上つて見る許りで、職業的にはとつた事がないので、今年はどれ丈とれるかと精力試驗のつもりで懸つてゐるのでございますが、瘦せ我慢な許りで餘り枝の先の方へ行くと足がブル〳〵〳〵振つて止らない、「姉さん妾足が振ふ」と云ふと「蟹ぢやナ」つて笑ふ「振ふまいと力めば力む程反つて自分手に振ひ落ちさうになります、それに最一つ百足がいつどこに輪になつてゐるか知れんといふ事、其癖山の百足ですから七寸程もございます。萬一それが居つた時にはどんなにするのか姉に尋ねると「楊梅の枝ではねたら落る」なんて無造作に云ひます。足の振ふのはつい馴れて來るさうで、それは馴れさうにも思ふが、百足許り

は親密になれさうにもない、然し私は下の方を這ひ廻る蟹は蟹でも全くの蟹ではない、蟹に羽が生えた樣な怪物ですからどんな活動するかも知れません。

トんどり達は明日からこゝで採る筈になつてゐるので、今日は他で採つてゐます、私が少し油斷した間に姉は早一ぱい移した樣子に驚いて、私は大急ぎで採り初めました。

四方八方どこを見ても楊梅の木には白い手拭の頭が突き出てて枝がうよ〳〵と動いて、どこからともなく話し聲と笑ひ聲が交り合つて聞えて、何となく豐かな響が山から流れて里一面に廣がつてゐます。無言のままで採つてゐると神經が過敏になつて、今私が採つてゐる此の楊梅はどんな人達に食べられるだらうと思つたのが始めで、それからそれと色々な事を思つて行く。

午食迄に私が丁度六ばい、姉が一斗餘も採つた、それを二人で擔いで歸ると伯母などは私を蟹かと思つたのにつて不思議がつた、食事がすむと直又籠を擔いで行つて前の木に這ひ上ると、朝上つた丈で早餘程馴れて來た、食事は間に二度歸るので、次の食事迄にも又朝位採れた、明日から白楊梅を姉と二人で採らねばならんので、今日中に此木を少しでもといふのでもう日が暮れてゐるのに薄明りに透して採つてゐたが終には實やら葉やら見わけが付かん樣になつたので、漸う山からさぐり下りて歸ると、皆が暗いのにマア〳〵梟みたいなんて笑ひました。早速湯に入つて夕飯すむと直ぐ寢ましたが、暫はまだ木の上に居る樣に體がゆら〳〵する樣で、閉ぢた目先きには繁り合た楊梅の葉がチラ〳〵して美しい實がまざ〳〵となつてゐる樣で眠れませんでした。

翌日はあひにく曇つて苦しい程蒸せ暑うございましたが、間もなく山も崩れる程の大夕立が來ました。急いで木から下る間さへない、下りたとて歸る間もない、どうでも濡れるのは逃れん、幸降る許りで鳴りも光りもしないので、それに直ぐ晴れる事も見え透いてゐるので、膽を据えて葉の繁みへ籠つて凌いでゐると、手拭はベツタリ頰にからみ付て、顏から雫が落ちるし、木の股の間は谷川の樣に水が流れ出すので心細うなつて「姉さん」と聲をかけて見ると「エーこゝよ」と上の方で返事をする、「もう體が流れる樣な」と云うと、「もう直止むわ、流れていつたつて山の上よ沈む事ないわ、なんてゐつてゐる内にいつの間にか雲尻が切れ

て直ぐ後から早日が照り出して葉末の露がキラ〳〵光つてゐる。

濡れた着物を午食まで辛棒して歸ると、火を澤山入れた火鉢に大籠を伏せて衣類を乾すべく用意してあつたので、直ぐ着換へて食事がすむと、今日は夕立に交ぜられた取り返しといふので、直に山へ走りました。晝から來る筈であつたりんどり三人は、軈下の木へ來ましたが、お常はんといふのが二十位で、後は二人共四十に近いおたきさんにおまさはんといふ後家さんでございます。

美しい雨後の新天地、殊に高い樹上に立つて見渡す眺の美しさ、四千萬石を實らすべく、新らしい初夏の大氣を吸收してゐる若い稻葉は、洗つた樣な新しい緑に燃えて、紫色に默した樣な向ふの山からは、ゆるやかな調子の歌聲が聞えて來る、と誘れた樣にこちらの山でも歌ひ出す。

（酒に醉たくアー——五勺の酒に——、
　飲ぬ五勺の——酒に醉たよエ——）

憧る樣な歌の聲、のぞいて見たか編笠の一寸お顏が見て見たい程でございます、下の木の三人は來ると直ぐもう何か喋舌續けて、若いお常はんは始終笑ひ通してゐる、「どうせお常はん達ア楊梅で儲けたのは皆着物や帶になるのだらう羨ましいナ」と後家さんの聲、「エーエー帶にも着物にもなつて皆他所の簞笥には入りますのホツホヽヽ」「あんな事云ふたつてほんまよ、なアおまさはん年寄は着物買うのでなし今年は楊梅がすんだら二人が市の芝居でも見に行きまへんか」「そらよろしいナほんまにな？」「エーほんまよ思ひ切つて見て來まへんか」など云つてゐる、氣が晴れやかであつた故か晝の收穫は存外多かつた。

夕方もう仕舞ふと皆が云つてゐる時、楊梅を擔いだ人が下の道を向から來たが私達のゐる下まで來ると、「おたきさんもう仕舞わんかい、今日は日が惡いでないかえ」と大きな聲で云つて行きかける、「庄はん日が惡いつてどうぞしたで——」「どうぞつて怪我の話聞かんのかえ」、「エツ怪我、誰が——」「向ひ山の林の嫁はんが今のさき落ちて痺腹突き貫いて蟲の息ぢやつて市の病院へ今擔で行つた所よ」と一息に云ひ切る高い調子が木魂して頭にしみ込む「マアあぶない事ぢやナ知らんというて、今の事で」「オイ今よ、夕立の後だらう、こんな日は早う仕舞ふに限る」と云ひ棄てゝ走る。不意の話に私 は只皆の云ふ事を聞てゐる許りであつ

た、姉も默つて考へ込んでゐる樣子、下の三人は後でも、口々に「林の嫁はんつて今年嫁たんだらうナ」、「エー今年の正月よ、拍子の惡い人ぢやナ嫁る匆々可愛想に若いのだらうナ」、「二十ぢやてあの嫁はん學校大分いた人ぢやつて云うのに場所へ嫁とつたら今日の事もないのになア」、「そうよ、こんな鄕中へ死に來た樣なもんぢや、癒りやエーがな、やれ〳〵恐ろしやな身がぞく〳〵する、どれ仕舞はう〳〵」と皆一しよに下る、私達もついて下りて歸つて見ると、家でももう其話をした居たが、其怪我の原因を、姑との不和といふ意味で村中噂してゐるさうであるが、それは人が好い加減な事を云ふので、怪我は矢つ張り怪我だと姉も云ひました。

次の日は珍らしい日本晴れ、今日こそ活動の日と勇み返つて朝の間にはじめて八升、狂氣の樣に喜こんで午食に飛んで歸りますと、思ひがけなく宅から父が來て居りました。大方私が蟹の癖にどんなにしてゐるかと心配して來られたのだらうと思つたので、直ぐ自分がとつて來た楊梅を器に盛つて、父の傍へ持つて行くと、意外にも父は次の樣な事を云ひました。

「昨日郡視學樣から一寸來て吳れといふ使が來たのでいつて見ると、此頃學校の職員が缺員で困つてゐるから、お前に手傳つて吳れないかといふ事であつたので、兎に角、當人の意見によつて返事するといつて歸つたのだが、承知なら明日郡役所へ出頭して吳れといはれたので今日わざ〳〵來た」

と斯うであつた、私は事の意外と餘りに急激なのとに只あきれて仕舞つて、それこそ蟹の樣に目許りパチパチさせてゐると、傍から伯母が、氣保養になつて好いわお行き、楊梅採るとの違うて怪我する心配もなしといつて勸めて吳れる、然し私は自分の學力では敎鞭を持つことは重過ぎるし、それにまだ十九といふ若かい體でと思ひましたが、皆に勸められて見ると、力のない丈けに叉反つて及ぶ限に盡して見ようといふ希望が急に湧いたので、兎に角奉職する事に決心しました。

何といふ急激しい電光の樣な運命でございませう、たつた今まで楊梅の事より他には何の思ひもなかつた胸は、急に五色の綾絲搔き亂した樣になりました。

明日からは樂しんでゐた大きな團子楊梅といふのを採る筈であつたのに、電光の樣に急激しい運命の車は私をかきのせて、此の樂しい懷かしい楊梅の里から奪うて行くのでございます、午食から一人で籠を持つて

出て行く従姉の後影を見ると、來た時には宮の想ひにくらべてまで喜こんで呉れた姉に失意させるのが愁くて、こんな事になるのであればなまじ來なければよかつたのに、とさへ思ひました。

姉は私が歸る迄には一度歸つて來るといひましたけれど、私は存外早く仕度が出來たので一寸山へ走つて行きますと、マアくといつて姉は急いで下りかけるので私は無理に止めて「妾も傍まで行きませんけれどこゝから姉さん左様なら」と下から挨拶すると「それなら妾も上からぢやけれど、こゝから左様なら、もう氣儘には來られんな、日曜には來なさいよ」「エー有難う、それならもう歸ります、左様なら、姉さん落ちん様によ」と葉の隙間から顔をのぞくと、楊梅の葉越しに笑顔がうなづく「左様なら……」又斯う云うて私は山を走り下りましたが、振り返る度に白い姉の顔が枝の間からいつまでも見て居りました。

善光寺

ゆり子

軒先の電燈が未だぼんやり點いて居る朝の大通は、場末の町と同じ様に靜かである。鐘鑄川の水音が涼しさうに聞える。未だ大抵の店は起きない。そつと歩いても、下駄や草履の音が遠くまで響く。

五明館は今朝も賑やかだ。此頃は毎日の様に善光寺參詣の講中が來て、何處の旅館も賑やかである。「大阪萬人講中」と紫地のメリンスに白く染め抜いた旗を先に、皆揃ひの花簪を小さな丸髷や、白い切り下げ髪にさして、ぞろくと出て來た。未だ三階や四階の欄干あたりに、ぐづくして居る者もある。大概の人は皆羽織を着て居る。單衣羽織や半コート許りで無いところを見れば、信州は寒いから、と云ふ御用心からだらうと思つて、自分が此間越後へ行く時、海邊は朝晩が涼しいからと云はれて、ネルに羽織を持つて行つたら皆白地を着て居たので、とんだ草臥れ儲けした事を思ひ出して可笑しくなつた。

大門町の四ッ角、交番の不寢番の巡査が眠むさうな顔して居る右側に「大谷派本願寺御門跡臺下御親教、七月一日市内明行寺に於て」と新らしい立札がしてあつた。講中の人は皆口々にそれを讀んで居る。

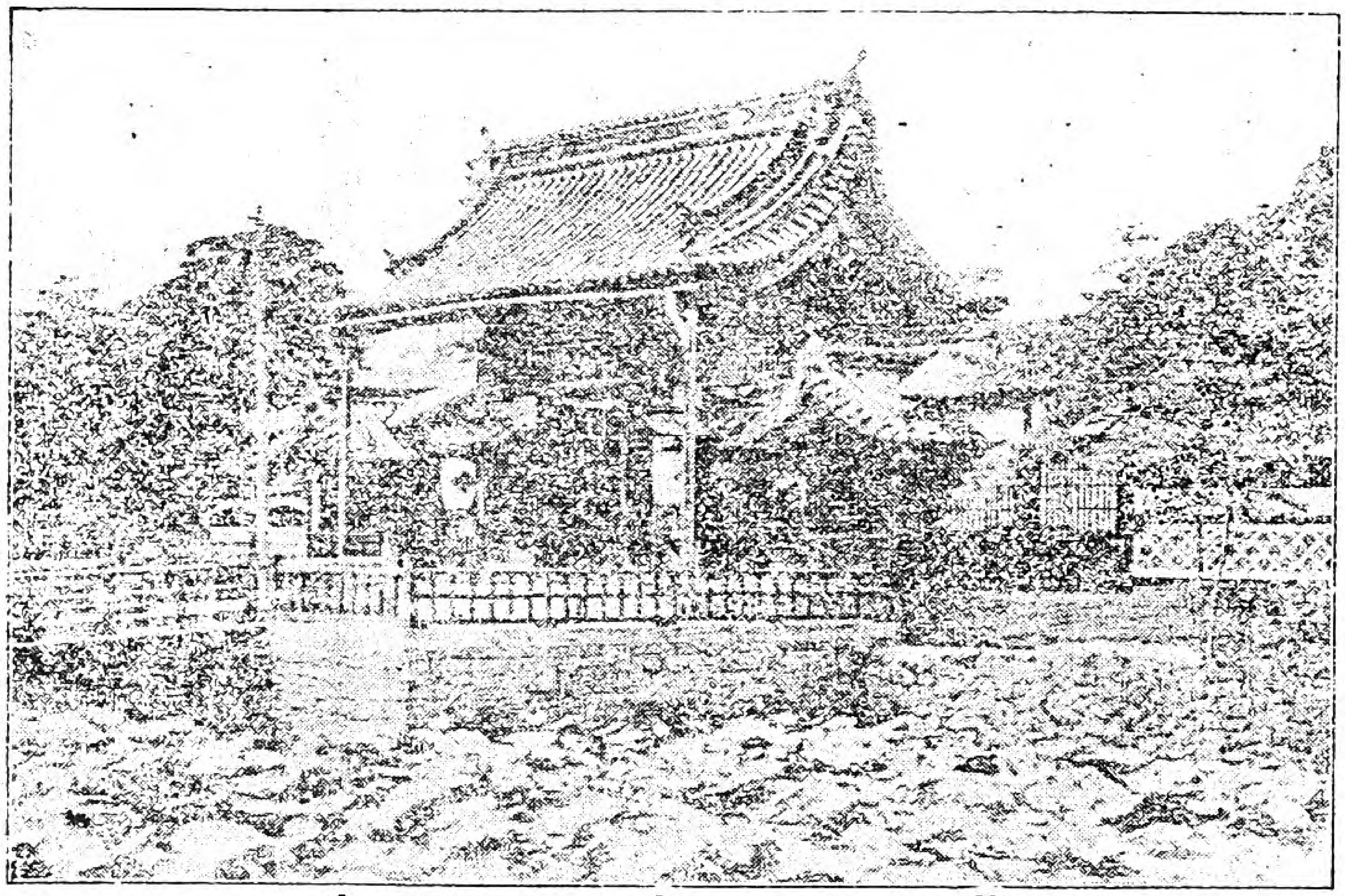
元善町の敷石を行くとすぐ左手に、淡紅に白の横線を入れた綺麗な壁が見える。

「是が大本願寺樣やさうですよ」と敎へ合つて皆其方を見た。そして先々代のお上人樣は今大阪に被在るが元皇族の御身分だが、今のお上人樣はそれは〳〵お綺麗な方ださうだの、と彼方でも此方でもがやがやと云つて居る。

間も無く本堂へ朝のお勤めに上られると見えて、塵一つない玄關に、ずらりとお履物が列んで居る葵と桐の定紋附いた紫の幕が、きゆつと緋の房で上げられて、御門までの長い敷石には、綺麗に水が打つてある。

講中の人達は、お上人樣のお出掛けを拜むのだと云つて門の兩側に列んだ。紫の御法衣氣高く、幾人かのお供を連れられて、さし掛けられたお日傘の下を靜かに御門を出られる神々しいお姿が、皆の目にはどんなに床しく寫る事だらう。

大本願――私の家ではお屋敷と云ふ――私には色々幼ない思出があるので、此前を通ると何とも云はれない懷しい樣な思ひが胸に湧く。



善光寺

舊二王門跡のアーク燈の下に、火取蟲が一杯吾から我身を燒いて哀れに死んで居る、昨晩の夜店の名殘りが、植木の落葉に殘れて、カンテラから黑い油煙の立つ夜の植木店が思はれた。

堂庭の店は皆起きて、敷石へ水など蒔いて居る。ずらりと列んで居るのは小間物店許り、よくまア是で……と何時も私は恁麼餘計な事を心配して居る。

大勸進の蓮池は未だ蕾も出ない花の咲く頃だと、ポンと花開く其音が聞きたさに、未だ明けきらぬ頃から橋の上に立つ人も見えるけれども今は淋しい。

初夏の空氣を思ふ樣吸つた樣な綠の色濃い松の一枝が、す―つと延びて蓮池の水に浸つて居る。逆さに寫つた橋、古い大きな門、それを小

さな龜が、浮き立つては波うたせる。此靜かな池の面から通りの向ふ側へ眼を上げると、誰の瞳にも寂しい影が寫る、破壞！打ち壞された家の跡！昨日まで「牛に引かれて善光寺詣り」の繪圖賣つて、平和に其日を過して居た幾軒の店は、くだらなく横たはつて居る、古い柱や、缺けた瓦の散ばつた跡と變つて居る。

　駒入橋上は本堂境内として家屋取拂ひの問題が出た時、繪圖賣る店は哀願し、反抗したとやら。寂しい……。二階の無い——昔は二王門上の家は皆二階が造れなかつたと云ふ——小さい家、繪圖とお珠數許り列べてあつた暗い店が眼に浮ぶ。早く植込みになつて、其面影が忘れたい。

　大きなお手洗ひの向ふに、長い柄の柄杓を傍に置いて、笑ふと目尻に皺のよりさうな婆さんが、香をして居る。諸方から奉納られた手拭の、古いのや新らしいのが、朝の風に搖いで居る。

　五地藏の前、三王門下の兩側には、花やが、初夏の美しい草花を列べて置く。私は何時もお詣りの行きがけに花を買つては叱られる。

　三王門の鳩はクークー鳴いて、豆賣婆さんの頭や肩の上へ載つて居る。豆をやると誰の手の上へでも載つて食べる。如是姫の噴水が、涼しさうに飛沫を飛ばせて居る。手に持つた赤い珠の電氣は、もう消て居た。

　疊の敷かつた本堂の階段の上り口は汚ない。履物を脫いで上れば足が汚れるし、持つて這入れば堂番の爺さんが大きな聲して「傘や履物は置いて來て下さい！」時によれば「皆樣は下駄を持つて家へ這入りますか」なんて皮肉も云ふ。カラコロと下駄の音が、大伽藍に響いた一昨年迄の本堂が私は懷しい。

　あゝ長い間よく此前を通つた。本堂の前へ來ると只無意識に頭を下げて「是よりかるかや往生寺へ六丁」と赤く鑿り拔いた道しるべを毎日讀んでは通學つた。

それでも堂内へは年に數へる程すら這入らない。

　脊中に一杯桑を脊負つた二人の女が城山の方から來た。本堂の前で丁寧にお詣りして「什麼してあゝたーいくらたーだか、私が何だ云つたつて聞かねーんで御はすもの」「それはまア困りなさりやすな」と前の話の續きらしい事を云ひながら、辨天坂の方へ行つた。二人の眼はどんよりして居た。昨晩屹度眠らなかつたのだらう。近在は此二三日が、蠶で一番忙がしい時だつて、

　昨日安茂里から用達に來た爺さんが云つた。

本堂の中は暗い。香の薰りが一杯に漂よつて、御燈

しのゆらぎが神々しく見える。大勸進のお勤めが始まつて木魚の音や鐘の音が堂内に響く。皆　一心にお詣りして居る。

　珊瑚珠の可愛いお數珠を懷に入れたまゝ、目も鼻も無くなつたおびんづる樣のつる〳〵した顔や、薄暗い中に大きな目許り光らせて、ウンと睨みつけて居る閻魔樣などをぼんやり見て居ては、

「一寸伺ひますが長者拗りの柱と云ひますのは、どれでせうか」「まア此立派な額！何處から奉納つたんで御ざいます？」なんて遠國の人に聞かれて「さうで御座いますネ……」と云つたきり閉口する事が度々ある。長野の若い女は皆斯うらしい。

　本堂の傍を通つて紀念公園の方へ行く紅い帶や、ふつくりした束髮の後姿が見える。舊公園の大きな松三幸橋、共進會跡の廣々した朝の城山が背景となつて居て酷く美しく見える。

　すーつと何處までも廣い善光寺平を、白く取りまいた犀川と千曲川、ぼーつと霞んだ川中島の古戰場、それを涼しい信濃櫻の葉影から見下す紀念公園を思ふと、若い女の足は本堂の階段を上らないで、知らず其方へ向いて行く。私も矢張り………。

越後甚句

木村みしま子

月のない、星の美しい晩である、サラ〳〵と音立てて青稻の面をふく涼しい風に、派出な浴衣の袖をふくらませて、母、叔父、妹、私と四人、賑やかさうな太鼓の音に誘はれて、藥師の森の盆踊り見に出かけた。

　デコボコの澤山ある細い田甫道を通り拔けて、大道へ出ると、行く人、歸る人、流石に今宵は賑やかだ。「木村」と大きく書いた提灯を持つた妹は、叔父と並んで話しながら行く、其後から私は、ひたと母に寄り添ふやうにして靜かに歩るいた。

「踊り見で御座んすか」と挨拶しながら、是も見に行くらしい子を負つた女が幾人か私達を追ひ越して行つた。若い男女は、火事場の樣な、森の明るみの中から聞える、甚句を歌ふ聲や、張りきつた太鼓を破れよとばかり、濤々と打ち鳴らす其ひゞきに、もう、胸の血を波立たせて、被つた新らしい手拭を、抑へながら我れ先きにと走つて行く。

　其嬉しさうな後姿をじつと見送つた時、私の眞の眞の心は呟やいた、「羨ましい、村の少しばかりの、家

裕によつて、あの樂しみを知らぬ私共は、氣の毒なものぢやなからうか」、すると「あゝお前は墮落して居る、そんなぢや、立派な家に生れて立派な教育を受けた價値はちつとも無いではないか、あはれなるお前よ」と教科書や修身の先生によつて、眞の心に上塗された或ものが叱つた。我が心の大部を占めてるはかない虛榮は、はかない加勢をした、「羨まなくともいゝ、お前の境遇と、お前の家の財産とは彼等の羨望の的となつて居るぢやないか」と、それでも私は、なんとなく物足りなかつた。あゝ……處女心の動搖よ……

踊りは今が眞最中らしく、杉の伐株のたくさんある、東の隅だけを殘して、廣がれるだけ廣がつて、大きな輪をつくつて踊つて居る。

眞中の櫓の上には、威勢のいゝ向ふ鉢巻の若衆が六人、三つの太皷を代る代る汗をしぼつて、打つて居る、數知れぬ、赤い提灯、細長い燈籠は、何十本となく木と木に張られた、細繩に釣り下げられて、恥かしい程明るい。私は大きな杉の木の蔭に隱れる樣にして、踊り狂ふ人達をみて居た。

女が男のなりをしたの、男が女の風をしたの、シヤツ一枚の身輕さに、踊るといふよりはねまはると云つたが適當のもの、この暑いに御苦勞にも、紋付の重ね着して殊更、品をつくつて、居るものなど、もう仕たい三昧の有樣である。

十三から二十位までの娘は、云ひ合はしたやうに赤い着物に水色の襷をふつさりと懸けて、色んな色の紙花を附けた、編笠を被つて、優しい聲を張り上て、甚句を歌つてる。今宵の踊りにこの着物を着んが爲に彼女等は餘所で見る目も氣の毒な程、苦心する。

早く買ひ得たものは誇りをもつて今日の日を待つ、不幸にして買ひ得ぬ者は、淺ましくも、踊りの夜に雨降らん事を、ひそかに希ふといふ、……あゝ汚れなき自然の中に育てられた田舍處女も、矢張一個のあはれなる少さい女性であつた。

この色々のなりをした男、女、大人、小供が皆同じい歌を歌つて同じくをどる「をどらーばー」と一人が歌ひ出すと、皆はそれを次いで「品よーくをどれー、品さーよーけーればーなんでもー嫁にーとーるー」ゆつたりと而かも陽氣な調子である、其終りの「とーるー」と長く引いた、餘韻がすーと消える時、ポンと皆が手を拍つ、男の聲、女の聲の不調和に聞えたあとから、きちりと合つた、この手をうつ音をきくと、胸がすつ

きりする、目覺る樣な友禪模樣の着物を着たのが十人ばかり揃つて、私達の前へ來た時「てらー町のもんだぜ、衣裳みれや分らあなー」後の方で誰やら自慢さうに云つてた。其あとからお酒に醉つてぐでん〳〵になつた爺さんが皺枯れ聲で調子はづれの歌を歌ながら、踊つてる。「呑めやーかーぶれーやー一寸さーきあーやーみだー、下戶の建てーたーるー倉はーなーいー」ホヽ、酒好きだけに、大變な事いふと、皆は笑つた。若い男の中には、聞くも厭な歌を平氣で歌つてるものもあるが、娘はさすがにそんな事はなかつた。

「來いと云ふたとて行かりやうか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上」始終聞いては居るが、いつきいても厭味のない好きな歌だ。

「彼の娘どこの娘だわしもみて笑ふた、わしもみてなす笑うてなす」叔父はふふーと笑つた、私もくすぐられる樣な氣がして苦笑した。

何心なくふと振り向くと、知らない女が五六人、私をじろ〳〵みて何かさゝやいてた。

厭な氣がして、つと妹の手をとつて、それとなく其眼から免れて薄暗い隅の伐株に腰かけた、そして歡樂の極に達して、性もなく踊つてる若い人のかゞやく顏をみてゐた。

どこからともなく、更けた夜の冷たい大氣が胸に泌みた時、私も歡樂の夢から醒めた。そしてなんとはなしに淋しい〳〵心になつた、あらゆる意味から彼女等を羨ましいとつく〴〵思つた。

鳥取より　はる子

二人の妹と母と私との半巾、襦袢の衿などとり交せて五十ばかりも千代川に洗ひに出た、千代川の水は白いものを洗ふには大變いゝ、石鹼はなくとも自然におちる、今日から鮎釣りを許されるので辨當持ちで出てゐたものが澤山あつた、三寸ばかりの鮎は私の洗濯してゐる足下を、十、二十、列をつくつてすい〳〵とんでゐた、灰色に近い白い腹をした小さい鳥は千鳥だとか私ははじめて知つた、東伯の新田さん、野坂さんからきいたとてはじめて御葉書下さつた、槇村には昨日坊ちやんが出來たそーだ、をぢ樣のよろこびが思はれる。(六月一日晴、南風烈し)

夜半よりの風やみて鈍色の雲が低うたれてゐた、氣

味の悪い空！といふまもなく、大粒の雨は、パラ〳〵と降り出した、これで幾分、桑の泥が落ちたらう、河原に出て蠶豆をとつて來て晝飯の惣菜にした、風呂に入つてから浴衣にきかへて試驗場にいちごをかひに行つた。（六月二日雨後晴）

母は河原の桑畑に桑を洗ひに出た、芽の出はじめに洪水の出た時は、芽の出に格別の害もなかつたが、殆ど出揃つてからのはずゐぶんな害をした、私と河原番の娘二人とが二十日もかゝつて枝についた塵埃はおとしたが、葉の一枚〳〵についてゐる泥はどうとも仕樣がなかつた、父は百貫に近い損害だと云つた、學校に出てゐた間は、豐年でも凶年でも、御飯を喰べる事が出來ぬといふ事もなかつたし、學校を退る心配もなかつたので、別段に何とも思はなかつた、反つて水の中を歩くのがうれしくて少し位、洪水が出ればいゝ、位な考へでゐたのだが、自身手を下ろして桑の世話でもしてみると、浴衣一枚買つて貰へないにしても一貫でも多くとりたい、といふやうな氣もちになる、十錢の相場にしても、百貫なら十圓だ、とこんな事まで考へるから可笑しい、境遇が教へたか、時の力か。

夕ぐれ、靜さんが遊びにいらしたので、一緒に花園に立つて盛りのスヰートピーを、さん〴〵自慢して、謹聽料に紫と白とまぜて花束を作つてあげた。いゝ匂だと、よろこんでお歸りになつた、美人草、小櫻、貝がら草、石竹、撫子など今が盛りだ、麝香撫子は二年目でないと咲かぬのださうな、夜雨先生にまねて馬鹿の花といつてはゐたのだが、來年になつたら、なつかしの花と云はう、美女櫻も二つ三つ咲きかけてゐる、百合の蕾は皆で四十三あつた、學校で出た年から拵へた、この花園もだいぶん花園らしうなつた、眞白の洋裝をして花束を作つて停車場に賣りに出ようかなぞいつて笑つた、スヰートピイは花言葉で、「心こまかき快樂」といふのである。（五日曇雨）

村上……母の實家……で蠶が上簇るから、手傳に來て呉れといつて來たので、私が行つた、框付十匁、莚數にして百五十ばかりを、二重になつたお祖母さんと、養蠶ははじめてだといふ叔母さんと、二人でなすつたのだ、成績は兎も角上簇までになすつたのは豪いといはねばならぬ、下女のお熊とお柳は競爭でうたひながら上簇蠶を選つてゐた、俗謡にもいゝのがある、なつかしい氣もちのひしと胸に湧いたのもあつた、一日立ちづくめなので下腹が張つて苦しい、二時から四時まで、

交替で眠つた、△樣から手紙が來たがよむまがなかつた。(七日晴)

四時から叔母樣と起きて、叔父樣とおばあ樣にかはり叔母樣はよくゐ眠りをなさる、慣れぬ仕事に連日の勞れで無理もないと、成るべく音をさせぬやう、覺まさぬやうに見ぬ振りをしてゐた、十時頃田中の叔母樣が、いらしたので、かはつて歸宅た、午後梅酒を少しばかり作つた、中學の紀念文庫から、バイロンのマゼッパをかりた。(八日曇)

午前は河原に桑こきに出た、今川、吉村、太田、三家分で引きくるめて二十貫餘を、河原番の娘二人と、その母と私と四人でこいた、一貫につきこき代二錢だといふ、私も平均で十錢がとこ、かせいだのだ、桑の實が眞黑に熟れてゐる、二人の娘は猿のやうに木に登つて口の端を、濃紫にそめながら食つてゐる、私も下枝を引きよせて、二つ三つたべてゐると、休息で同じく實をたべてゐた下男が「眞黑い便が出ますぜ」といつたので、氣味がわるくなつてよした。それでも幼時桑實で髭をかいたりして遊んだ事を思ひ出して、たまらなくなつかしく指先でつまんでつぶしては、汁を出してみた、明日は舊節句なので、午後は笹卷をした、農事試驗場からいちごを五百目貰つたので、いちご酒を作つた、後は煮つめて砂糖をいれて、ジヤムにしておいた。(十日晴)

昨夜は十時ごろから、齒が痛きかけて、夜中、しつきりなしに痛いてゐたので、夜のあけるをまちかけて竹内に行つた、何時行つてみても、澤山行つてゐる、今日も六人待つた。(十三日晴)

九時に竹内から歸つた、特命檢閱使が歸られたとかで盛裝した貴婦人の、俥をつらねてゆくにあつた、三澤さんは注意したけどわからなかつた。(十五日晴)

大雨のためか誰も來てゐなかつたので八時すぎには歸つた、歸りに今町で永江さんに逢つた、勞れ切つたやうな色をして、すゝまぬらしい足を引きずるやうにしてゐらした、「補習科になつたら、もう通學するのがいやになつた。」と仰有る。

「おそい事はありませんか」と云つたけど「今から行つたつて遲刻は知れてゐますもの」としばらく、立ちばなしした、河原に水がつきさうだと河原番の娘が云つて來たので、父も母も私も下女も下男も惣出で、片付けに出る、母と私とは蠶豆を刈つてもち出した、ヒタ／＼と足元まで來たと思ふと、ゴーッと一時に腰の

あたりまで、おしよせた時は、恐ろしかつた、水の中をガハく歩いて、豆だけはもち出した、河原番の家で御飯を炊かせてたべて、またしばらく豆の仕末をして、私と母とは歸る、他のものは切つぱなしにしてある、柳や竹を仕末するとて腰のあたりまで水につかりながら働いてゐた、父と信治は舟で、流れ出るものを止めるのに忙しかつた、河原番のものも、惣出で何彼と手傳つてゐる。

病後の父の體に、さはらねばいゝがと、はなしながら私等は歸つた、今日の河原番の家で喰べた漬物の味は、一生忘れられないだらうと思つた、私は今まで、てんないゝ味の漬ものをたべた事がない、勞れたとて夜は皆が湯に入るとねむつた。（十六日雨）

丹波大江山の麓より

野の花

『昔丹波の大江山』と童謠にも歌はれた、その大江山の麓から、都會の皆様が夢にも御存知ない生活の一斑をお話し申しませう。

西も東も南も北も山又山ばかり、どちらへ出るにも峠越に曲つた狹い道を上下せねばなりません。帯一筋燐寸一箱買ふにも、四里の道を往復せねばならんのです、よその土地には汽車や電話や電氣燈や、所謂文明の利益とやらいふものが、あると云ふ事を聞いて居りますけれども、人里離れた此山里の人の頭には、左樣なものの名を聞いたばかりで、一向想像もつかぬのであります。此の村の人に京へいつた人、大阪を見た者と尋ねたならば十人が十人まで「知りません」と答へるでありませう。

小學校の先生は、よく都會の談話をせられました。駐在所の巡査さんには、町の警察とかのお話をも聞きました。而し皆目都會といふものの觀念がない私等には何の興味も起りませんでした。

まだ歩行も出來ない内から、母樣の背におはれて、山へも行き、畑へも出た私は、八つの歲、村の小學校へはいりましてそれから四年の間、一人前の敎育を受けました、お笑ひ下さいますな。此の村で四年の間滿足に小學校へ通學つたものは數へる程しかないのですもの。

十二歲の春、學校を出て十八の今年まで、まる六年の間、家庭にをつて農業ばかりしてゐます。それはも

う都會にゐなさる皆樣の御存知ないつらい事が澤山御座います。

私だつて女ですもの、よい着物もほしければ美味ものも食べたうでございます、それに二度とない青春の時代を名もない里の少女で過してしまふのが何ぼう口惜しうございますやら。

而しこれも運命です、山の中に生れて、山の中で成長して、山の中で死んでしまふ、誠につまらんもののやうでありますけれども、別に不平をとなへる者もなく生きて行くのが妙ではありませんか？そこには又言ふに言はれぬ慰藉がひそんでゐるのでありませう。

私はこれから、平凡な田舍少女の生活の一斑を書きつゞけて見ます、「つまらぬ話を」と仰せられるでせうけれども僞りのない實際でございますからお聞き下さいませ。



○春　麥がだん〱伸びて來まして暖かい風がそよそよと吹いてきます、三月から四月にかけて皆樣はお花見や何やとお出でになりますけれども、田舍少女のかなしさには毎日鍬を肩に田へ出ねばなりません、片山里の春、それはもう靜かなものでございます。峯々にはまだ殘んの雪がございますのに、梅や櫻や躑躅や、すべての花が、ぱつと一時に咲いて來ます。それが散るか散らぬかに早や、山々は若葉の匂いが高うなつて、やがて夏の境に入るのであります。山里の春はこのやうに短かうで

ざいますが、私等の仕事は中々多いのであります。晴れた日は前申しました様に麥の中耕やら草ひきやら、雨が降る日には、家にゐて家内中のものの衣服や何かとやがてくる夏の準備に急ぐのであります、このやうにして靜かな春も唯一日として遊ぶことが出來ないのであります。

○夏　櫻の花が散つて、峰々に青葉若葉の薫りが高うなつて來ますと、蠶の掃立をします。それから五月雨の期に入る迄、三十幾日の間、それは忙はしい蠶の世話、滿足に夜も眠らず働きづめでございます。身體は綿の樣につかれて來ます、それでも、成績のよしあしは一つに私等の肩に掛つてゐるのであると思ふと、知らず〳〵働けます。蠶が一人前飼へぬと、嫁入りも出來ないといふ始末でございますもの。一ヶ月餘の養蠶期がすむと、間もなく田植の準備にかゝらねばなりません。降りつゞく五月雨の中に、重たい蓑笠に身をかためて、手も足も泥にまみれて働くときには、つく〴〵百姓がいやになります、それでも秋の黄金色な稻の結實を思ひ出しますと、その苦しみもいつの間にか忘れてしまひます。田植がすんで梅雨が晴れて、さて暑さは日に〳〵加はつて來ます、稻は一尺二尺と伸びてきます、此の間に田の草を除るのです、玉の樣な汗は衣をとほして顔に流れ落ちます、手の指の爪は毎日の草とりに磨滅つてしまつて血汐がでてきます。水は湯の樣に沸え立つてゐます、石灰の香が鼻をつんざくやう、それに太陽はぎら〳〵照つて、皮膚は赤銅を火にあぶつたやうになります、かやうなとき、女の命！美といふやうな點がどこに認められませう。

○秋　櫨の葉が紅葉して夕日に照る時分、空は一面鏡のやう、しかし山里の眺めはまことに小さいものです。細長い山と山との狹間の左右に家が二三軒づゝ建つてゐます。その中央に溪があつて狹い道がその溪に沿うて上へ上へとついてゐます。

その上、山も圓い山で、木も雜木が多く、田といふても掌のやうなものばかり、すべてが小さくて平凡を極めてゐます。田舍の秋は美はしいであらうと仰せられませうけれども、どうして、下手な庭師が作つた箱庭のやうな此の天地、皆樣がお想ひなさるやうな美はしいものではありません。それでも田の稻が色つき始め、山の柿の實に霜が降る頃になりますと、山々の落葉樹が一時に紅葉して、麓には桔梗や女郎花や萩などが露にうるほひ、いろ〳〵の蟲が悲い聲で歌ひます。

このはなやかな景色もほんの夢の間、やがて落葉に時雨がそゝぐやうになつて、冬の季に入るのであります。山里の秋は春と同じやうに誠に短いものであります、その短かい間にも農家のする仕事は非常に多くでざいます、稲の收穫から、麥や大根の種蒔きまで、年によると稲刈のまだすぎない中から、早や雪が降り出して大層困ることがでざいます。而し秋は農家の最も樂しい時、收穫といふ仕事が大部分を占めてゐることとて、仕事の苦しみもそれだけ感じないのであります。

○冬　雪が降ります、十一月の初から翌年の三月まで。道もうまつて家の軒までもつもります、それに北風が激しく吹きます、日本海へは山一重隔ててゐるばかりですもの、一尺先も見えぬ吹雪となることがたびたびでざいます。こんな寒い日、皆樣が火桶を引きよせて冬籠りしてゐらつしやる時、私達山里の少女はどうして暮してゐるでしやうか？——それは全く都會の皆樣が夢にも御存知ない事だらうと思ひます。私等は秋の收穫をすましますと、もう雪で外へは出られません、それで多くは他鄕へ出稼に出ます、多くは寒天製造所に雇はれて、手も凍るやうな寒さを凌いで、翌春の二月、僅かばかりの給金を貰つて歸てくるのです、ほんとに僅少です、唯冬の間口を糊して來るといふに過ぎませんけれども、このやうにして、五年六年つゞけてゐる間には、嫁入りの帶の一筋も買ひ得るやうになるのです。それを唯一の樂しみとして、まだ十五や六のかよわい女の身で、遠い所へ出稼ぎに行のです。又家に殘つてゐるものは、どうして冬籠りするかと申しますると、それはみじめなものでございます。低い萱葺の家の中央に、大きな爐をきつて、夜晝なしに松の木を焚いて、その側で煙で顏をくすべながら、絲をつむぐのです。つむいだ絲はすぐ機に織ります、長い冬の間、私等はこのやうなことを繰りかへしてゐるにすぎないのです。この間に一年中の家族の衣服を織つて縫うてしまふのです、雪の晴間には山へ薪を採りに出掛けることもございます、又炭燒に行くこともございますけれども、それは僅かな日數です、十一月から翌年の三月の始めまで、全く家にばかり冬籠りしてゐるのでございます。

昔の俗謠に

丹波雪國つもらぬさきに
　　つれてお出やれ薄雪に

と云つたのもほんとうでございます。

伊勢女

露木雅子

等しく神風の吹き通ふ伊勢の國で生長した女性でも其の南部と北部と僅か二十里程の差が、各々人情、趣味、言語、擧動等の上にそれ〴〵南勢と北勢との異なつた所を現はして居るのが、吾々伊勢女にも一寸面白く感じらる。概して南の方の婦人は北部のよりはるかに靜かな性格を備へて居て、何となう床しい節がある北勢の女は何方かと云へばお轉婆であるが其代りに南勢の女よりも活動的であるから商家の主婦等には極めて適當であると思ふ。自分が此春伊勢參宮をして山田に泊つた時最初一寸氣付いたのは宿屋の女中とは云ひながら何となう物ごしの落ち付いて、言葉づかひの美い事であつた、其れから二見の女夫岩を拜みに行つた時、其邊一帶に並んでる土產物を賣る店の先きで精限り黃色い聲を張り上げて、「伊勢みやげ、二見の貝細工はいかゞでございますな……」「なんぞ入りませんか」と軒每に競つて通り行く人々の袖をとらへん許りの熱心を充分顏に出して呼んで居る女の中には、未だ初々しい赤の手柄もあれば、小意氣な櫛卷だの、銀杏返しだの樣々あつたが、何れも〳〵美人の要素をそなへて居る事である、どうして斯樣に美くしい人許りなのか知らとつぶやいたら同行の人の曰く「そりや山田女に津男」と云ひますもの。まこと南勢の津、山田の兩市の女は一般に美しい。其の顏立は大方面長で色が白くつて肌は五十鈴川の水で洗ひ淸めた樣に眞から綺麗である。先づ伊勢の女を代表して居る所の山田の婦人は其のしとやかなる點に於て、他國の人にほこるべきであらう。彼の旅館の女中にても一かど良家の小間使位の品がある。然し中肉中脊の好い姿をわざとかゞみ心地に、いやに高いお太鼓を脊負つてるのはちと考へ直して欲しいと思つた。「伊勢女」と云へばすぐに思ひ起こすお杉お玉の手踊りは、今も觀世物小屋の中で一錢づゝの見料をとつて見せて居る。相の山の中程の坂に可なり大きな小屋をかけて、餘り好もしくない人相の四十女が「へー名物のお杉お玉の……」と呼び立ててる、中では十六七を頭に十二三位の娘が三人（四人か）何れも世紀後れのめりんす友禪に黑襦子の衿をかけて、眞赤な前だれに手拭を一寸さげて、小高い所で三味をひくと一樣に踊りかけるのである。只物數寄の心が先きになつてあまり歌の文句は聞かれなかつたが

今でもあの「島さん、紺さん……」云々の邊りで三人が小手招ぎをする風情が中々忘られないほどである。勿論舞の上手と云ふではなし、決してほめられた姿でもないが、昔乍らの面かげを偲び得られる事の嬉しさに此れも伊勢子が自慢の一つにかき加へて。其れに此の小屋は天井に赤の幕を張つて其から日光をとるので、白粉を濃くぬつた少女等の顔にほんのりとした色が映つて、何とも云へぬあでやかさであつた。嘗ては京都の有樂座、本郷座邊りへも足をむけた事のある同行のハイカラさんも中々感じ入つて居られた。

北勢の四日市と云へば、新らしく開けつゝある貿易港、其所にすむ男子は皆平民主義の商人風。其れにつれそうて行くべき筈の婦人なれば、大抵世話女房風の女が多く、實務になれた商家の女房は自分一人の口過ぎ位は、充分やゝ通すから、餘り女の意氣でみがつよいので、男性的女性といふ樣な嫌な性格の女も少くない。いつか三四郎を讀んだ時、名古屋の宿やで三四郎と一つ臥戸でねた女に別れるとき、強い事をいはれて魂消た樣な事が書いてあつたが、あれも此邊の女の一面を寫して居る。一體南勢の女は京都風をよろこぶのに、北勢、まづ桑名、四日市地方では、東京風、名古屋風を好んでまねて居る程故、自然其の間に差がなければならぬ理由。されど女學生は誠に從順である。外見も内情も眞面目で、實力もあるとかで能く上京する人達が可成の成績を擧げて歸へるのを見ても解る。文學の方面は未だ中々開けて居ないやうに思はれる。女學校も市立が一つある丈けで、極規則的に敎育されてるから感情の自由もくゝられて居る有樣だから、和歌も袖ひちて式のがほめられて居るらしく、小說は無名の人のでも何でもござれで單によむばかりで、味ふ程の力もありや無しや、中には才色兼備の天晴清少納言の末汲みし樣の女性も見ゆれど、惜しいかな、杓子定規の敎育に心なくもまげられて光りも闇にかくれて、遂には凡人の仲間入りをして了ふ者も少からぬとか、半年ほど居られたさる文學專攻の女先生が語られた。六月の文壇誌上にて與謝野晶子先生の御親切な御文字を拜讀して思はず快哉を叫んだ。あゝ先生のありがたい御志をよくかみわけて都の風に吹かれる心の女が一人でもふえれば其丈わが國の女は開けた智惠を得て彌々大きくえらくなるのであるが、私は常に此邊の女があまり社會を知らないのに眉をひそめて居る。勿論追々に開けてゆくでせうけれど――。

山形地方

霞子

米澤地方から山形地方は一帶に養蠶地なので畑の大部分は桑が植ゑつけられてありました、米澤糸織や長井紬などは主なる産物ださうです、で同じ山形縣下でも米澤山形地方の風俗と、日本海に近い庄内地方とは絶對に風俗が異て居ます。米澤から山形にかけては、女が何れも俗に「モンペー」と云ふ袴のヒダのない、裾の細くなつてる物をはき男と同じ樣に手拭で頰かぶりをして居るのですから、なれぬ目には一寸男女の見別を附けかぬる位です。これに筒袖を着た所などは戊辰戰爭時代の「ツッポーダンブクロ」とでも云ひたい樣で、餘り形の宜い物でもありません、そして脊には簑に網を掛けた樣な物を着、頭には「い」と云ふ物で編だ小さい笠を頂き、大方男女同姿です、此樣な風俗になつてるのも雪國で、風の烈しいところから、昔工夫せられた物が、今になるまで傳つて居るのでしやうけれど、或はアイヌの風俗が遺つたものだらうと思はれます。其證據には昔住居とした穴居のあとや、アイヌ風俗に見る「アッシ」や、藁靴等何れもそつくり其まゝ今當地に見られるのです。此地方の女の大體の方針は、昔の風を守り女は家を治むるを以て足れりと考がへて居るらしいので、暇さへあれば機織や、糸取りを熱心に致して居ますが、又時に依つては農業もなか〳〵盛んにやります。

次に庄内方面は、米澤や山形とはまるで異り、前記の樣な「モンペー」等は一切用ゐず、雪も海岸だけに山形等に比しては至つて少ないのですが、それでも東京等にくらべては、かなり多い方です。此地方の女は又一層家事を治むると云ふ方に傾むき、仕事は中々精出して居ます、商家では妻が熱心に客をそらさぬ樣に務めてゐるし、濱邊では魚賣をする女もあると云ふ風です、もつとも魚賣等致すのは、漁家の妻だらうと思ますが、何にしても一般にブラ〳〵遊んでる女はないと申てよいでしやう。次に私の觀察した女の風采を申て見ませう、俗に越後地方は美人系の中だらうと思ます、庄内もたしかに美人系と聞いてましたが、山形米澤等にも美人がないと申すのではありませんが、庄内に比べると稍々おとるやうに思ます、もつとも私は大體の事を申のですから、或は異つてるかも知れませんが第一に色が白くて、丸顔が多い樣です、第二にせいが

高く中肉なので、總體の釣合が宜く、一般に體格は宜い樣です。そして米澤や山形の女より、たしかに親切の樣ですけれど、其かはり中々人になづかぬと云ふ樣な樣が見えます、言葉は一寸聞いても宜く聞き取れませんが、「二ッ三ッ書いて見ませう。「ヤモケタチヤ」(ビツクリシタ)「イワネモンダヂエ」(イワヌモノデス)「イタイッチや」(イタイデスヨ)と言つた樣なものです、誠に觀察が淺いので充分の事をかくことが出來ませんから

最後に庄内の歌を一つ書いて筆を擱きませう……

庄内の酒田言葉は。何ボゼッテイ、オボケタチヤー、おめさんマタそんなことイワネモンダヂエ、ハゲンチ、アンサン、マタネ、キモケタチヤ、そんなことイフテト、がゞチヤンニゴヂラレル。(サノサ節)

鳥海山の峰高し伏て眺むる最上川日本海には眞帆片帆實に優美な酒田町(ラッパ節)

岐阜

葛の葉

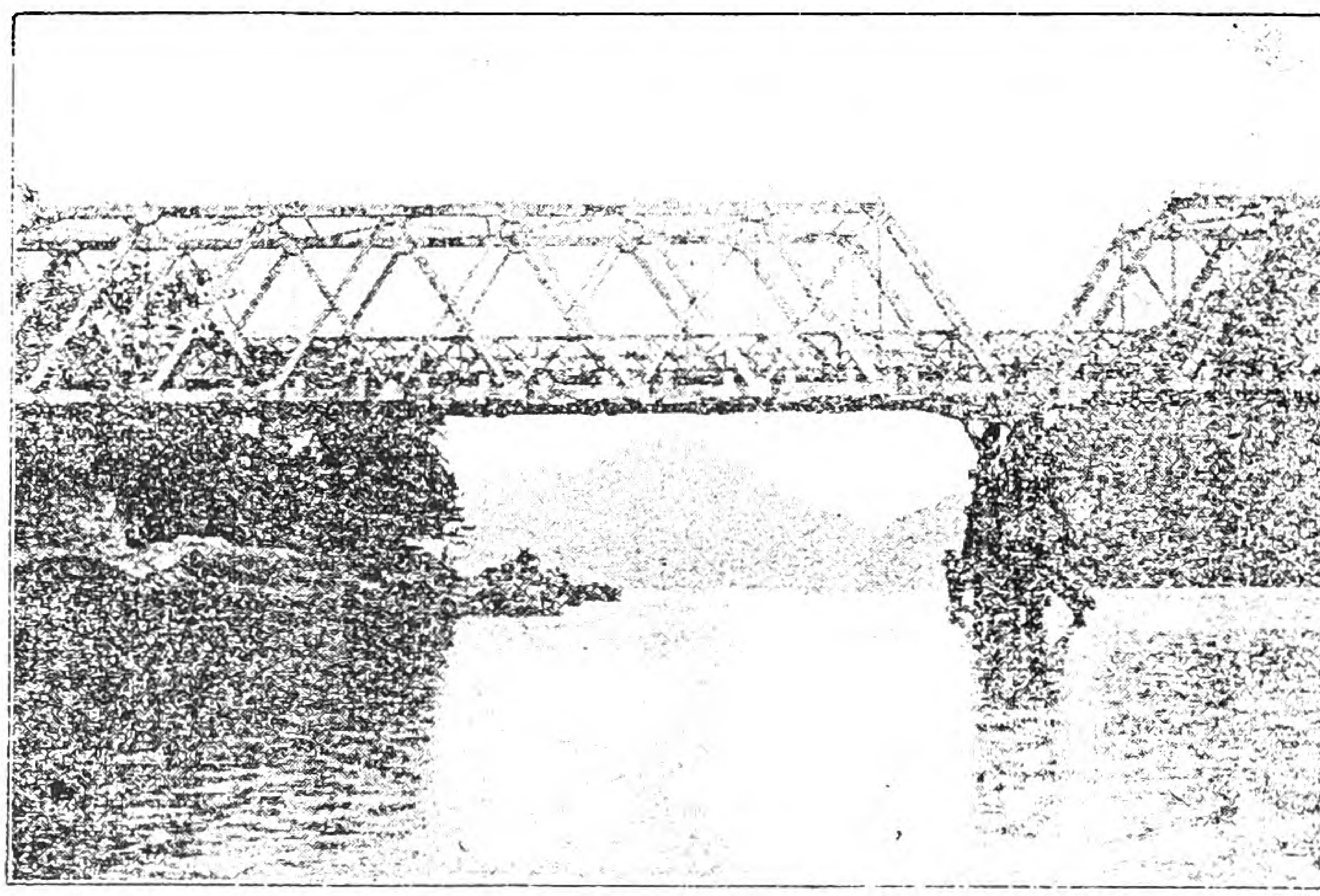
電車の無い岐阜、瓦斯の引けてない岐阜、高等學校の無い岐阜、護謨輪の俥を珍らしがる岐阜、勿論だらしの無い事おびたゞしい、こんな處に私が望んで滿足する樣な、見榮話榮のする而もすつきりした美人が、どこにうろついて居るものかと思ふと急に少々泣いてみたい樣な氣がする。街並の人等は店番でもして居ながら一寸みてみぬ振りをし乍ら、今通つた人の着物がどうの帶の結目がよかつたとか、いゝ形の髮だつたとか、甚だしいのになると髮の生際までとやこういひ出す、誠に以て、善惡おかまへなしにうはさをする、況て婚約でもとゝのつた人を見たら一分もすかさない、其眼敏さはむしろ不思議な位である、總て岐阜の婦人はお尻も大きいがそれよりは、他人のあら探す眼の方がよう發達して居る、道なぞ往き交ふにも不知の若い女同士すりあひでもし樣ものなら、兩方がおとらず横眼で相手のてつぺんから足のつま先までぢろりと、五六間離れると兩人が振り返つて視線のぶつかりあひを演ずる、そしてそんな事更に覺之れ無くといつた樣な心持ちで裁縫學校や乃至は私立學校へお通ひ遊ばす御令孃樣達でも、時にはあられもないお口揃へで、先生や御師匠樣の惡口を仰有るが、中にはおやさしい方の無いでも無いけれど、たまには筋入のお袴はいた方でも、美くしいで誰さんは、何やら先生の何やらだなん

て、それでも東京を戀しがつて〳〵ねえ母様、お父様に願つて頂戴な私立派に仕上げてお目にかけますから東京へ行く事を、話の末にはどなたもこれで持ちきつてらつしやるらしい、けれども東京は無垢の少女や妹を出す處でないと心配のあまり、卒業後だつてお花やお茶乃至はお琴のお稽古位に止まつて、上京熱を治さうともして呉れぬ親が多い、こうなると二三上京した人、上京すると定めた方などを羨敷がる、それはそれは大したもの、私だつて二度や三度は上京熱を病んだ事もあるんですから全くの事です。上野を南の方に繪がいたり、三越を北の方に繪がいたり、とんでもない西洋婦人と手をとりあつて話し乍ら、日比谷公園を散歩する夢などにあこがれて、はては石にしがみついて袂をかんだり、遂には兩親の無情をかこち出し、のぼせた頭で夢二樣のピストルを先づ誰が胸にむけたまふ、父と答へて君は泣くかな、こんな歌を胸に抱きしめて讀み返し〳〵嗚呼よくいつてある！私の現今だわ切に思ふ人の無いにも限りませぬ、大方あるでせう、だつて……

言語づかひ

岐阜でも司町や八つ寺町乃至は梅ヶ枝町あたりの、奥様呼はり、孃様呼はりにせられてゐらつしやる方等は田舍から上京して三年位使慣れたといふ人位の東京辯で振り舞しなさる、が此町へ轉居して間の無い女は追々覺えるのですからちつとは違ふでせうけれど、女學生には女學生言葉、一種前者と少しはちがふ。又其邊たる東京言葉ですが、これ等は敎師その人が東京で何年間かきたへ上げたといふを、直接に移すのですからどち等が、とつめれば先師〳〵たるより後者の方が聞きいゝ樣に思ひますが、總體街に棲んで店先に頰杖ついてでもないでせうが、人を澤山使ひ、大勢の客を相手にしつけとる家の人等は、東京辯でも京都辯でも仲々巧者に使ひわけるのです、これ等は直接其土地々の人について毎日きゝこむからだらうと思ひます、末廣町の一部や高岩町あたりの料理屋や藝者屋の多い處は、いゝ眞似でもないですけれど、名古屋言葉が盛んに使用れるのです、そして赤門をくゞつた大學校ぢやありませんよ、大富町や花吹町都會の婦人でみました惡く言や『美くしい動物園』あたりの女も矢張り名古屋言葉で、わしようあした寫眞うつすわいも、そうかいそんならわしもつれて行つて頂戴てな話ぶりですし、

嚴しい家のお孃樣なぞは祖先傳來の岐阜辯に今の時代をねり込んだ樣な、すつきり可愛い口を利く人もありますから、一概には言へませんが、織工女、絲ひき工女などになると隨分口汚ない物言ひをするんですおたかさ、おまへ朝から何本ひいたや、とか、昨夜おまつさの情夫が垣根から飛びてみやがつてなあ旦那にさ、ど都合わるみつかつて叱られやがつたがをかしてくどえいきびぢやと思つたわ。こういふ談話振りですし機織工女などになると殆ど絲とり工女と相似よりでして、かどに檽格子にもたれ家の樣子を菊の花ーあなんて節つけて、あゝー、ちやんこ〱とか機機織ならがた〱〱やつてるんです、それで一寸在鄕ぢや、お前ない、岐阜には氷を水から造り上げてない、車でお前、澤山つひきだいて、そらお前、暖い湯氣のほつぽとたつやつを、近かつたら足でも洗ひに行くけれど、お前、だあく〱流いてまふせ、ほーんそうかえん、わしやまんだ其んなとこしらんがえ、そらお前いゝ事しやしやつたない、婆樣はえん、あいてゝぢやに寄つちよくれや。と返詞をする樣なわけですが、これは岐阜の東在で、西は本庄村、南は加納町、越えて六條や宇佐村では、又言葉がかはります、が北では長良天神、アクセント迄ちがふ樣です、が純粹の岐阜辯は殆んど忘られて居ますけれども、あつて使ふなら、私昨日お母について金華山へ登つてなも、序に名和昆蟲研究所へもいつてきたわ。これにませ物をして今猶使つてる人もあります。



美濃長良川の鐵橋

裏日本の一漁村

文子

▲海一面の篝火

此御來屋町と申す土地は、裏

日本のしかも町とは名のみの一漁村で、京阪地方との交通も、海路境から舞鶴へ渡るか、さもなくば作州津山迄二十八里の山越しをせねばならず、それも冬は海荒れ山は雪深く、何れにしても交通はなか〳〵困難の土地とて総萬事後れがちの有樣です。一寸した日用品迄も、米子からとりよせねばならぬといふ、誠に不自由な土地で御座います。人家は五百軒ばかりありまして、北日本海に對し、伯耆富士といはるゝ大山は南にそびえ、隱岐島は海上遙かに空と水との間にほの見え一帶の白砂青松、山陰の天の橋立ともいはれる弓が濱（一名夜見が濱）は、西北の方美保灣をへだてゝ繪のやうに浮び出でた景色はえもいはれぬ眺めで御座いますまた七八月頃になりますと、美保の關の燈臺の火のきらめく頃から、いかつり舟の彼方彼方にかゞり火をたき始め、夜の十時十一時頃には、海一面かゞり火の光りとなり、實によい見もので御座います。もと此町は元弘の昔、後醍醐天皇樣が隱岐國からひそかにお逃れ出でになりました時始めて御上陸遊ばした土地とて、御着船所御腰掛の岩などの舊蹟もあり、また名和長年をまつれる名和神社も當町内にありますので、夏期は鳥取松江あたりからも、海水浴を兼ねての參詣者も少なからぬ樣に見うけます。

▲人力車を馬が引く　私どもが當地へ參りましたのは、四月の始めで四十曲りといはれる山を越しました、其前日岡山の旅舘では、はや蚊帳をつりましたのに、峠はまだ積雪五尺ばかりも殘り居り、其處だけは人力車もかよはず、あるかせられました。其外は人力車の前に馬をつけ、向ふはちまきの馬子が、馬の口をとりてかけ出し、二人一疋で一臺の車を引く有樣、まるでポンチ繪のやうで、乘つてゐる自分ながらをかしく、きまり惡く、人も居らぬあたりがかへり見られました。其夜は山の中の村で一泊、翌日午前に米子へ着、米子から汽車で當地へ着いたしました。何分一日半も人力車にのり通しました事とて、體のいたさ……それでもかやうな旅は生れて始めて、後々迄も話のたねと笑ひました事で御座います。

▲冬は眠れる町　氣候は東京とたいして變りもありませんが、雨の多いには閉口致します。十一月末から二月頃迄は大かた毎日雨と雪との降りつゞけ、晴天は珍らしいことで、土地の人は此中を毛布をかぶつてあるき、傘をさす人などは甚だ稀で御座います。それで冬分は、こたつにのみ引き籠つてゐるのが、くせに

なるせいでせうか、土地の人は袷時分になつても、まだ〳〵こたつにあたり居り、蚊屋とこたつの入れちがひの有樣、宿屋でも間毎にこたつが備へられ、夜は皆こたつにやすむといふ有樣には驚きました。かく雨と雪とで眠つたやうな町も、四月中頃名和神社社道の櫻の咲く頃から、そろ〳〵覺め初め勢ひづき、汽車の割引もあり、芝居も始まりますので、白いもののむら消えした顏に、赤いかんざしなどをさした娘や、花嫁御がわらじばきで赤毛布や青毛布にくるまつて出かけて參り、なか〳〵賑ひます。

▲風儀が不良　學校は尋常高等の小學校一つ御座います、尋常へは皆參りますが高等となると、すつかり減りまして、殊に女子は、尙さら少くなるやうで、高等女學校へと志して他地方へと出る者は、ほんの一人か二人有るか無しの有樣です。當地は養蠶はなかなか盛んな土地で養蠶せぬ家は實に稀で、此時分には町内の男女は勿論、近在からも養蠶の手傳ひにやとはれて參り、これがすむと女たちは絲とりにまたやとはれますので、下女には誠に不自由いたします。それに何分漁場の事とて、隨分風儀がわるく、大抵の家の娘は夜になると化粧して家を出かけ、一つ家に集り、そこへ若い男もより合つて夜をあかし、其中には幾組もの野合が行はれ、從ていろ〳〵と罪惡も行はれますとかで、此點は隨分ひどい土地と思はれます。此樣な有樣なので、此土地で舊家とか富豪とかいはれる家では、女房や娘はめつたに外へは出さず、年に一度の名和神社のお祭りとか、お花見、折々の芝居見物くらゐの外は姿を見せず。お正月とて別に年禮に往來する樣子も見ません（當地方は今に舊曆でして居ります一體今年から太陽曆にする筈なのですが長年の習慣でなか〳〵改めにくい樣に見えます）

▲青天井で芝居見物　娛樂としては活動寫眞やいなかまはりの芝居が折々參る位のもので、芝居と申しても、東京のやうに小屋の中で見物するのでは御座いませんの、舞臺だけは造りつけて屋根もありますが、見物人の處には屋根などはなく、青天井の下にむしろを敷いて、其上に座つて見物いたしますので、もし中途で雨でも降り出さうものなら大さわぎ、芝居も中止といふ有樣、狂言はどの一座が來ても大てい定まつて鏡山仙臺萩酒屋二十四孝忠臣藏などを毎夜とりかへて見せます。綿入のかさねにうちかけを着たお姫樣が出て來るかと思へば、浴衣がけの侍が出て來たり、東京

などではとても見られぬ俄式のおもしろさ(?)も御座います。お盆には男が女の風をしたり、何かいろ〳〵異つた姿をした男女が集つて、盆をどりを致します。以前はなか〳〵盛んにいたしましたさうで御座いますが、近頃は警察からやかましう御座いますので、かくれ〳〵て踊つて居りますが、それでも時によると明け方迄もをどつてゐる事も御座います。

▲物價は安い　物價はすべておやすい樣で、殊にお肴は此地でとれますので、東京から參りたては驚くばかりお安う思ひました。しかし鯛がとれ出したら、毎日たひばかり、いかがとれ始めると、またいかばかりと云ふ樣に、片よるには閉口いたします。呉服屋は當地に二軒御座いまして、皆京阪地方から仕入れて參るださうで、柄の思はしいの無いは勿論ながら、おねだんも東京などとは、どうしても一割はおたかいやうに思ひます。

▲結婚と葬式　當地方の結婚式は、式の前に婿入りとて婿が嫁の家へ參りて、酒肴の饗應になり、それが歸つてから嫁方の荷物を出し、嫁が出かけますので嫁が先方へ着くはどうしても早くて夜の十時過ぎになるとの事で、それから夜通し夜が明けても戸を閉ぢ、あかりをつけたまゝお客をおもてなしするとの事で御座います。またお葬式は、大てい早朝か、日のくれぐれに行はれるさうで、有明月の影うす暗い明け方や、入日の名殘りの消えかゝつた夕方に、今お葬式が出るといふ鐘の音をよく聞きますが、どんな風やらまだ一度も見た事は御座いません。

まだ〳〵申上度い事はたくさん有りますけれど、あんまり長くなりましたから、後は此次に。さらば。

積んだ荷物は米と酒

（陸前石巻の女）

眞野圓葉

川岸の女

縣下第二の都會と云はれる石巻町、地理書には良港を有し商業盛なりと書いてある、が文明とは頗る緣遠い東北の地の一隅を占むる所の一小港にすぎぬ、けれども北上川には千石船が澤山出入する、山に登つて見ると帆檣が林の如く屋根より高くスイ〳〵と立つてゐる何處を際涯とも知れぬ太平洋上には眞帆片帆があちこちに浮んで躍る白波の上を低くかもめがとぶ、一船は

ちやんてろでも炭薪や積まぬ積んだ荷物は米と酒」と云ふ俗歌はよく當港を歌つたもので船に住む人は皆これを口にするのである。山は高い、天も地も巨人の吐いた一息にボーッと白く包まれた中に、薄紫の山がぼんやり浮き出して、新しい生氣に滿ちた藍色の水が悠悠と流るゝ朝や、沈まんとする陽の光り強く黄金色を水面に射返す夕には、美しい女達が——粋な銀杏返しや品のよい高島田や若々しい丸まげの女達がはでな着物を裾長に着て、よく少さい兒の手をひいたりして、別に用事あるでもなく、只ぶら〳〵と住吉神社社前の木立の間をぬうて歩いてゐたり、或は河畔に立つて夢見る樣な目で水を見たりしてゐる、東京ならば下町なのであらう此方面には商家が多い、川岸の女は概してあでやかな涼しい女である。

野良の女

動かぬ水を淺く湛へた稻田や、眞青な麥畑や、久圓寺のこんもりした森やを遙かに遠巻にして、綠や紫の山々がズラリと聳えてゐる、山根の茶畑は丈けを揃へて美はしく野には繋がぬ馬がのそり〳〵と歩き廻つて草かる童が午睡の夢もまどかである、草鞋脚胖に身を固め鋤鍬を肩にして妙齡の女が野良に働く、茶摘み桑採りは赤い襷かけた娘の仕事である、是等の女は己が仕事以外の社會の事は一切知らぬ、また知らうともせぬ、朝は太陽の上らぬうち夕は星の出るまで、たゞもう田や畑に働かねばならぬものと思ひ込んで、二度とない若い年を野良に獻げて忠實に働く、夕露やゝに立ち罩むる頃女は帶の如く流るゝ小川で馬に足を洗つてやつて手綱牽きつゝ「西は追分東は關所、もはや我家も近くなる」など追分の一つも歌ひながら、家路に急ぐ頰被りの中から出る聲は空にまでも響くやうに涼しく美くしい、「ハイ〳〵〳〵ッ」と云ふ拍子取りが蹄の音によく調和して、聲はだん〳〵遙けくなつて行く斯くして彼等は一日の勞を慰めるので、併し家に歸つても夜は二分ランプの下で藁を打つたり繩をなつたり更くるまで夜業をする、朝にはそれを町に賣りに來る彼等の思想は全く世間とかけはなれてゐて一生土臭くなつて生活してゐる、東都の女のやうな華やかさは到底望むべくもあらずで、愛嬌などは藥にしたくも無い然し質朴な親切心は底深く潜んでゐて顏に出さぬ、それでも例のズウ〳〵辯で「アスビサゴザエン、オチヤコノマエン」なんて云うてゐる、單純で露骨で別に特

長がない、そのかはり野良の女が歌ふ時、何とも云へぬ美しい音量に富んだ聲を出す。

女學生

當地では巡査樣と教員樣が上なく尊敬される。隨つて其妻君や娘の勢力は大したもの、到る處「奥樣〱お姉樣」と敬はれる。女學校は只一つ近頃やつと建設された、名づけて實業女學校と呼ぶ。大抵中流から上の家の子女が通つてゐるが、川を越えた又は山を越えた他村からも通學してゐる、少數な女學生だけに彼等は非常の誇りを持つてゐて自負心が中々強い、此少數の女學生はたま〱東京あたりから避暑などに來る女學生を見ると、すぐ其スタイルを眞似る。リボンの色や髪の巻き方などは雜誌の繪を見てさへまねる、殊に教員樣が東都の學校から出てゐる方々なので、多くの娘達の目をひく、女學生の流行の源泉は多くはこゝらあたりから起る、そして只一つある女學校の生徒丈けに、彼等は此開けない未だ舊式な思想に囚はれてる頑迷な人の多い地に於て、成るたけ特種の風姿をしようとしてゐるらしい。とにかく當地も海老茶や紫紺の袴をはいた文明の卵を見るやうになつたのは何よりである。また百姓の娘でも養蠶休みや稻刈り休みには裁縫を稽古させられる、百姓の娘が娘らしい姿をするのは實際こうした時ばかりで、新らしい手織木綿に赤い帶しめた娘達が、向ふの山根からも此方の森かげからも三々伍々縫ひ物の包みをこわきに抱へて田圃道を歩いて來る、其姿を見ると何となく可憐である。流行語としては女學生間には「振つてる」一般には「ハイカラ」と此二つがよく用ゐられる。振つてるには興味があるハイカラに至つては實に耳ざはり、嫌な言語だ、昔風の人は少しでも當世風をした娘を見ると、何でもかでもハイカラ、ハイカラと云ふ、こんな人を輕蔑した時に應用される語など早くなくなつて了ひばいゝと思ふ。

月夜、北上川の印象

月の出る夜は北上川の水がどこまで深いかわからぬ程物凄く光つて、上つ面には細かい波をサラ〱と銀に碎く、烏帽子岩のほとりには幾つも〱渦を巻いてゴゴーッゴゴーッと云ふ龍のうなりのやうな音のみが夜の靜けさを破つて月見る人の心膽を冷たくする。晝なれば對岸の砂原に躍る鮭のこけ青く光るのや、網引く漁夫の赤黒い體などが遙かに見ゆるのであるけれど

も、夜は如何に月がよくつても、どこまでが水でどこが岸だか砂原だか明瞭とは見えぬ。それ程此川が大きいのである、橋上に立つてチラ〱瞬く兩岸の燈火を辿つて遙かの暗い沖の方を見れば、かもめはとばず白帆はどこへやら、たゞ川口の竿燈ばかり微かに赤く萬象を淩いで遠く浪の音と近く橋の欄干にもたれて私語く男女の聲とが、絶え〲に耳に入る、小島の松の枝の水につかりさうに自然にうねり〱ねつた姿が鮮明に目にうつる、竿燈の立つてる先をグルッとまはると向ふは黄金花咲く金華山の沖、名は優しいけれどもこゝでは毎年多くの難船がある。恐ろしい處だ、そして又親潮の寒流が流れてゐるので、暗い沖を眺めると此親潮の流のどんなに暗い色をしてゐるかを思はずにはゐられぬのである。世間は宵のうちから靜まり返つてそれでも時折どこからか、遠い笑い聲が風に送られて來ては水にとける、廣い空には月が一つ薄黒い雲の間から微かな笑ひをもらしてゐる。

浪花節語り

馥子

何時迄始めないのであらう、來てから彼此一時間以上になる。正面に張つた赤地に白く西洋軒彌治右衛門と染め拔いた長幕も、大石良雄の畫像も百遍許り見て了つた。刻一刻と盛になるは語る聲、笑ふ聲、子供の泣く聲、其れを宥す聲等である。見渡せば喫煙のけむり薄りと棚引き、彼處此處に其の本家たる火が光々見える。

何時の間にやら座敷が一杯となつて了つた。炭酸瓦斯の爲に頭が重い、雨戸の隙より泰山木の香がプーンと訪づれた。

軈て隣室より、ピーンピン〱と夢の樣な三味の音が洩れ初めた、スルとハタとガヤ〱てふ話聲が絶える、最うだなと思ふと、一體浪花節とは甚麽ものか？早く聞き度い、聞き度いと心の中で急つた。

五分許りで机を前に現れたは、杓子顔の猪頸な、跛の嫌らしい男、「御贔負に願升」とギックリ頭を下げたのには呆れて了つた。年の頃は三十四五、派手な絣の着物に細い縞の白地のクシヤ〱した袴を穿ち、扇子を持つて居る「何を申升ても稽古中でムいまするから惡い所も御在いませうが、何卒其處は御聞き逃し下さい升て御贔負に願ます」又頭をギックリ下げた。

吁、藝人？藝人とは皆此の樣であらうか、無暗矢鱈

に「御贔負」許りを並べ立てる、贔負され度いなら先づ己の藝力を増すにつとめよ。

語り物は昨夜の續きなので能くわならかいが、信濃姥捨山の邊に起つた昔語りで、或る武士の子息が過つて家老の母堂を殺し、手討にされるを覺悟で其の邸に詫びに行き、其の雄々しき心に感心されて殺す眞似許りをして一週間の後に歸宅を許されたと云ふ筋である此の男、話の所は頭を横にして眞赤になつてきばり乍ら語る、節の所は、ずつと反、咽喉をペコ〳〵させ乍らまるで繰の臺詞の樣な聲でうたふ。稽古中との前置もあるが是れではなか〳〵贔負にされさうもない。

其の次ぎに出たは、繪で見た男、幽靈よろしくと云ふ樣な髮の、齒の極めて皓い、黒木綿紋付を着た袴は先の男のらしい、可成脹れた若い男であつた。

餘程鍛錬した者と見えて少しも嫌味がない、是も昨夜の續きである、其の筋は、父母が惡人の爲に殺されたので殘つた二人の小娘等が亡父の知人なる劍客の方に身を寄せ、男子も及ばぬ位な腕前になつてから、師の注意により男裝して諸國を廻り廻つて、越前の福井に着き、此の地で浪人の妻となつた、少しも音づれなかつた姉に遇ひ、義兄の知己なる俠客の世話になつて敵を探して居るうちに、早くも知りつけた敵は、血氣盛りの弟子供百人を連れて俠客の邸を夜に乘じて圍んで了つた、之限で殘は明日と止めた。一寸殘り惜しい感もした。

そろ〳〵眠い、人が出て來た樣だ、無論子供許ぢやない、大丸髷小丸髷四五所で頭を上げたり下げたりして居る、餘り見好い物ではない、男子は比較的やらない樣だ。

「御茶菓子は如何で御座りやす」と云ふ金切聲が後の方で聞こえるので、振りむいて見たら、例の美人さんである、結び立てであらう髮はぴか〳〵する。此の種の處で物を食ふは私は嫌ひだ。

今度は出方が遲いと思うて居ると、先の幽靈さんが赤い座蒲團を持つて來て、椅子の上に置く、其れからコップの中の物を換へ等をした。あゝ此度は頭だなと一人合點して居たら、果して彌治右衞門なる男。

髮は、右衞門一派の切り下げである、甚麼心で此の樣な眞似をして居るだらう？色の白いそして富士額な一寸女形の男。毛蟲の樣な口髯は反つ齒と相竢て見苦しい、年の頃は四十許り、茶縞の着物に茶縞の袴、黒紋付の羽織と云ふ扮裝である。暫の間口をモグ〳〵さ

せ乍ら、聽衆を見渡し、軈て語り出したは、四十七士の中の赤埴源藏。

　義士の事は改めて本は讀まぬが大方は知つて居る、だから珍しく響かないは無論である。源藏が酩酊して嘔吐をした儘路傍に寢て居たら、赤や黒、白、等の大小の犬が來て口の邊や衿のあたりをペロ〳〵と嘗めたに到つては、多くの人がドッと笑つたが、私は不快で堪まらなかつた。

　赤穗の浪士が吉良の邸に切込んで主君の恨を晴したと云ふ事を朝まだきに聞いた、兄の伊左衞門、源藏が其の中に在るや否やを仲間に見にやる處迄で、一息休んで演じますと節面白う云ふて引き込む。拍手喝采程近くなつた雷鳴の樣である。

　流石は少さくとも頭は頭、頗ぶる上手である、然し辯は好くない、「お兄上」と云ふ所が「上」と聞こえる。

　不圖、時計の十一時半を報ずるを聞く、餘り面白くもないし時も過ぎたので一所に行つた人方に失禮して外に出た、最うきまり相なのに、下駄屋の春さんが黒入らしい黄色の聲を出して頻に客を呼んで居る。

　アヽ矢張讀賣新聞の田狸さんの御説の如く、浪花節道鼓吹に過ぎぬ、どうして又彼等右衞門や丸が武士道等を鼓吹する事が出來樣ぞ。

　床屋の表迄來たら、十人許りの男の黒影が寄り集まつて盛に何か語つて居る、急いで通る私を見て、「誰だらう誰だらう」と口每に云ふ。

　其の中の小尻の輕い一人の男、何時の間にやら走つて來たが後より私の袖を強く引き「誰だ〳〵」と云ふので「誰でも構はん何をする」と一喝し乍ら、袖を振り取ると脆くも彼方に轉ぶ樣に逃げて了つた。「誰だらう」と云ふ聲が又起る、其の中の或る者が「アア河倉の冬サ」と云へば三人許りの聲で「ナアーンだ彼のサンヂヤラお多福」と罵つた。

　サンヂヤラお多福でも何お多福でも彼等の世話になる者ぢやないから何等痛痒は感じない、今大切の修養時代なる彼等がいくら今業平の樣だとても、下らない談をし乍ら夜遊びをしたり剩さへ通行の婦女子に暴行を加へる、思へば、生意氣な談ではあるが、田舍の前途寒心に堪へぬ。

　城内小路に入れば、夜も更けたので、いよ〳〵別天地、蛙の聲は遠く、近く、人聲絶え、闃として物かなしいと云ふより、何か身に泌む一種沈靜の感想が襲うて來る。

山城富士の北の麓

木の花

▲茶畠の收入　何からお話し致しませう産物とては炭と茶、今はお茶時すゐな茶摘み唄はきかれます。お茶は第二でございます。百五十軒程の里七十軒程は皆お茶をなさいます。平均で申しましたら一軒で二十本價は十五圓から二十圓位でございます。（時の相場にも依りますけれど、）煎茶の方でございます、色は大層好うございます。澤山なさるお家は百本以上一畠で五六十本も出來る、大きな畠がございます。こんな小さな里に茶問屋の三軒とは奮つて居ります。「お茶のあるときや山田は都……」なんてお茶摘み子の唄お察し下さいませ。

▲十五萬本の炭　それから炭の方で厶いますが里の産物では第一、冬から春へかけての燒き高十五萬本、價は百本が三十圓から、お安いとこで二十圓十八九圓で厶います、この位燒きましても木の生長度合とは同じださうでございます。何分面積の大部分は山でございますもの。（千七百町歩）これも大抵の家はお燒きになります、各自の山木で。まあ冬の天地は煙でございます、どこの谷へ這入りましても炭燒く釜の三つや四つはございますもの。一釜で百本出る釜は大きいのでございます、五六十本七八十本位で一年には少くとも千本千二百本位は燒けます、ざふさなしに。釜の數は百以上でござあすなあ、などと爺樣は笑顔でございます。遠い山で一里近くは眼と鼻の御近所、朝早くから夕は暮近く迄、これはお百姓樣の冬仕事でございます勞働だけが取得でございます、とはちとみじめでございます。その裏面は幸福の涙でございませう。

さてこれを持ち運びますのには、牛の背でございます、おいねでございます、おいねと申しましたら、誠に憐れでございます、勞働社會の婦女子、お百姓の女子が、四五本づゝを背にして運び出すのでございますもの……、一俵の賃錢高くて、三錢五厘四錢、一里半ほどの道を往復二回して五十錢、早く儲けになります、これは樂だと申して居られますけど外目はどうもお氣の毒な樣に思へて……、こんなことを思ふお人はどこ……に、金の世の中活動せねばなりませんわねホヽ、峠の二つ位越すのは何でもありませんわね、けども私は手ぶらでもつらい思ひが致しますのよ——。夜は俵編み（つかれた體軀をもつて、）一つが價の高いときで

まあ〱、一錢五厘二錢。一夜ではさやうでございます、子供を寢かしまして、十俵から十三俵でございます。どうも芒からうてく〱なりません、お湯入らないうちは……と、疲れきつた眼で笑つて居られます。お働きになることはなか〱でございます。つひ私らの身の上が恥かしくて……。

▲溪流で育つた山葵　　それから山葵でございますが、ほんの少なでございます、猿岩山葵といつて名高いものでございます、がやつと小指位の大さ、其角樣の「泥龜の腕と思へば土わさび」も、聯想されます谷川の清い〱岩間で生長致しますのでございますから、辛味さは又格別でございます、三四月の頃、葉莖花のお漬物をなさいますが、其風味の優つて居ることは山葵その物より、尚よいやうに思ひます。お鼻を抱へて、閉だ口も開きますほど、ヒリツ……と、涙が零れます。都會のお人に進らせたうでございます、鯛鮨などの御馳走を、召上つて被居るお方に……。

▲澤山の化石　　もと〱は海でございましたのでせうか、貝の化石が澤山でございますのよ、大きな岩になつて彼處にも此處にも、名もしらぬ貝珍らしい貝が澤山接合してゐます、大きな貝、小さな貝が……。ホヽホ私どもが説明致しませいでも御存じですわね。方方の小學校からは標本に致しますのでございますから送つて下さいませとか、理科學の標本屋からは澤山送つて下さいましたら他の標本と取換へますといつて求めにこられます。立派なのはお床の間の置物、大層綺麗でございます。文鎭などに致して居ます私は小さなのを。木の葉石もございますが化石よりは餘程少うございます。鮮やかに木の葉の形狀が伺はれます。この樣に質のうるはしい澤山の化石はありますまい。又石灰石もございます、灰屋の二軒とはちと……。處かはれば品かはるとか申しますのね、あゝ山の形態、鳥の聲――。山城富士の北の麓でございます。

▲蛭と材木　　それから面白いのは、否恐ろしいのでございます。すぐ谷の蛭、杉檜が鬱々と生ひ茂つてゐてひるでもうす暗うございます、その木の葉の上に止つてゐて下を人でも何でも、通りましたなら、その臭で落ちます、身體へでも止りましたものなら、うんと清い血汐を、吸ふのださうでございます。まるで熱帶へでもいつたやうでございますこと、うかく〱歩けないさうでございますわ、しめやかに雨そぼる日などはよけいださうでございます。」田圃にゐる蛭よりは、

よほど小さいさうです。こんなよけいなことを申しまして……。

あら炭などの事ばかし申しまして材木のことは申しませんでしたね、何しろ山奥でございますから、材木そのまゝで賣出すことは不可能でず、この里にとつては一大難關の峠がございますもの、運賃その外などは他に大影響を及ぼします、それでございますから、板にこなして賣出します、で競爭めきたことは出來ません、峠々とは里人の大こぼし、やはりおいねで……。

學校増築、お宮樣の拜殿新築などの材料は、仲々見事なものでございます。

寂しい心

磯のや

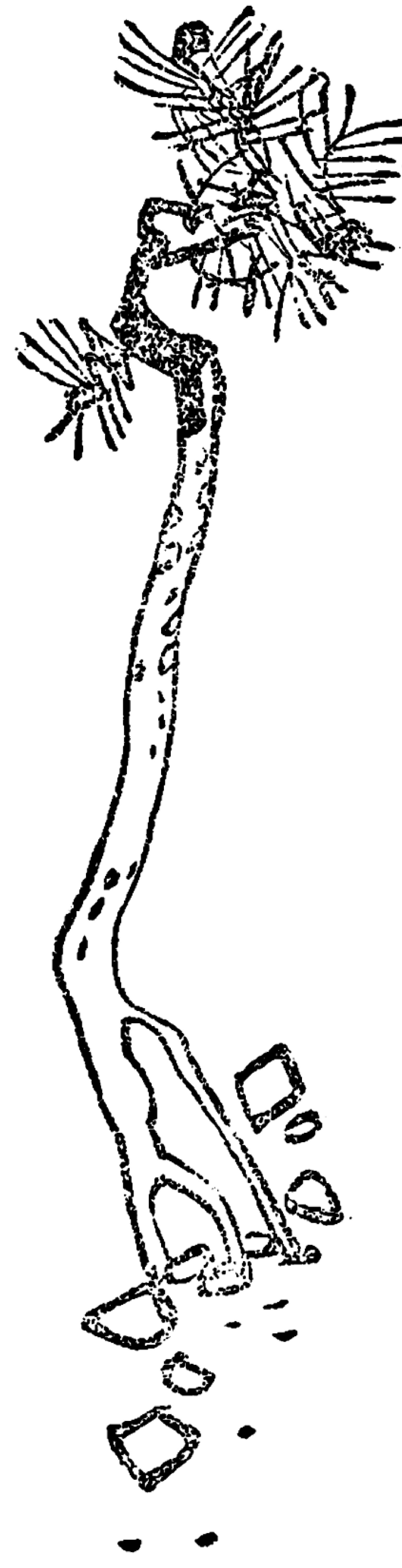
任せらるゝまゝに、海邊の任地に三年を暮した妾は、母の愛に飢えた心を文學に倚つて補つて來た、老いたのか、衰へたのか、此上進んで最高の學校に學んで、定つた時間に定つたものをつめ込みたい心なんか全く失せては了つたが、しかし讀む事の多きに從つて、了解の度も深くなるにつれ、帝都を戀ふ心は一日一日にまさつて來た。

矢張手當り次第に、讀んで讀んで讀み耽つた、頭を抑へる人もなし、缺點を指摘して呉れる人もなし、妾の性格は、自分の行爲のやるがまゝに、感情の走るがまゝに、習慣づけられて來ては、保守三百餘年の太平に馴れた、人文の發達に千歩も後れたのも、自覺せぬ人の集合だ土地のならはしに、何として同化し得よう。涙もろいくせに怒りつぽい、非常にへんくつな空想家になり了せた。

同窓會雑誌をいくら繰つても、新派和歌なんか半首もない、寄稿してと頼まれても、頭を横に振り通した、文壇になんか出す人は五本の指の半ばにもなるまい、妾はいつもかくれて出す、級友が集合つても、漱石先生のお作を云々する方が一人もない、家事に追はれて許ゐて貴女なんか羨ましいとは、お世辭のやうに皆さんが仰る、何が良いものですかつまりませんわと、脇向いて苦笑して了ふ、女は御飯焚いて、洗濯して、掃いて拭いて、床をしく者と甘んじて、夢の覺めない皆さんが却て幸福よと心の中に叫んで、淋しい思を胸にかゝへて歸つては、もう二度と出やしないと、一人で力んでも何にもならないけれど。

人と接して甚だしい懸隔を其間に感ずる毎に、妾の空想は深くなる。

都會に憧憬れつゝある若き女の叫び



私の淋しい心を察して下さい

良人は妻の上京熱を滿足させんが爲に心を傷けて重患に罹り、妻は損じたる良人の愛情を取返しかねて、淋しさに泣く荒涼たる新家庭

北斗星

おなつかしい御玉章嬉しく〳〵拜しました、ありがたう、あまり永らく御目にかゝらないので眞におなつかしいのよ、お目にかゝりたい〳〵と云つて居る中に段々と時は流れて、あゝ若かりし春は過ぎ去りました。

夢の樣に去りました。わびしい悲しい音をたてて。悲しい、眞に悲しい、今から考へて見れば、さながら遠い野を越え森をこえて吹く風の樣にも思はれる。なづかしい、何うかして再び一年前に返つて見たいと思ふが、あゝ然し……もはや華やかな青春に一歩一歩遠ざかるのだと思ふと止め度もなく涙が流れます。何も彼も運命の神の[illegible]配をうけなければならない弱き人の子の、ましてや名もよわき女性の身。K樣、私は貴女が羨ましい、もう貴女の樣な溫[illegible]い血潮は、私の身内に通つてゐませんもの。冷たい風が吹いて居ます。秋！、あゝ淋しい悲しい華やかな時代に生きたい。しかしもう秋ぞ、心の秋だ、K樣、あはれな妹と

も思つて若く生かして下さいな、いつ迄も〳〵……ね、いつまでも。自分といふものの影をかすかになりと認めて居る間は、まだ呼びもどす事もできますが、影を認めない迄に消え去つた此身。あゝ泣いたつて、笑つたつてもう遅い、……夢みる如く華やける活ける生の頁を葬つて、次第に暗きに進む此身は！、つひには……あゝ我世の春は暮れた。悲しい風が吹く、わびしい悲しい音をたてて。

　K様、消え失せた魂の、私に華やかな盛儀とはあんまりひどいわ、隔てのない貴女、殊には妹の樣に親しくして下さる貴女に知らさなかつたのは眞にわるい、あやまりますわ、許して下さい。しかし云ふべき樣もなかつたのですもの、祝ふなんか云つて下さると、何うして好いか困りますわ。今度の結婚の話は昨年の五月の頃からきまつてゐたのですが、私はあまり好まないのでした。何故かつて、……そりや私だつて人間ですもの、一度は空想にもあこがれてゐましたもの、成しとげがたいあてなき望みとはいへ、あこがれの夢を追ひつゝ希望の岸をめざしてゐましたもの、その希望は……くりかへしませんわ今更に、K様貴女はよつく御存じですわね、一日泣いて聞いて下さつたことなんだから。今となつて自分ながらかくあさましく變り果てようとは夢にも思つてゐませんでした。低い理想と笑ふ人はありませう、自分も笑ひます、……然しK様、先方は再三再四兩親に望んで來たんですもの、その熱心には兩親がもうすつかり感心してしまつて、以前とかはつて日毎夜毎に進めるんですもの。いかに荒びし心とはいへ、なほ木石にあらぬ私は、つひ〳〵兩方の其熱情に動かされて、弱きは女の身です、父母の爲すが儘にまかせました。かくて農家には最も忙しい五月、苗の植付時私は此國田の人となりました。これと共に望んでくれた其人はかねての目的（都會生活の基礎を作る爲。元は私から出た事、結婚の話のまとまつた時、こんな土臭い田舍に一生を果たすのは厭だから都會へ出よう、家には弟もあることだから。これが聞き入れられないのなら此度の話は御免だ、と云ふ條件を出したの、でつまりは私のバニティから起つた事なんですの）に向つて勉むべく東都をさして進みました。金澤を出發たのはこの月の十日でしたの。十二日に着京たとの知らせを得ましてからは今も直ぐ出京して來いとの知らせが來ないかと、首を長くして一日千秋と待つて居ります矢先、何の知らせもせずに突然十

九日の黄昏頃ひよつくり歸つて參りましたの、女中の知らせに驚いて半信半疑に驅け出した私に、突然肩に手を置いて僅かに身を支へた其人は、紛れもない十日の朝早く快活な笑聲を殘して金澤を出發たその人ですもの、出立た當時の面影は何處へやら、まるで別人の樣に否、二三年も病つて居た人の樣に色蒼ざめて瘠せ細つて居るんですもの、僅か八日許の間にこれだけ變るには餘程わるかつたに違ひないと思ひまして、何う遊ばして！と幾度尋ねてもちつとも返辭いたしませんの、すぐ床に臥せらせまして醫者を迎へましたが、醫者が歸ります時別室へ私だけ呼びまして、非常に重い肺炎です、と云はれた時の私の胸の中、お察し下さい K 樣。病は大分前からきざして居たのでしたのを、結婚やら何やら雜多な事の爲に忘れるともなく忘れて手當をいたしませんでしたのに、東京へ參つて夜もろくに眠ずに東西と驅けまはつてゐたため、遂々こんな事になつて漸と歸つて參りました次第なの。あゝK樣私は何といふおそろしい人間でせう、身分のバニティの爲に大切な國田家の主人、一生を守つてくれる夫をこんな身にしたんですもの、どんなに詫びたつて追付きやしませんもの、で此上は自分の身を殺してでも夫をやしませんもの、

の病はなほして見せるといきまいて、心の限り力の限りにつとめました。その甲斐か此頃は非常によくなつて今では庭園を朝に夕に散歩もする樣になりましたが、K樣、又辛いことがおきて來ましたの。それは病中からてのかた私には何にも申してくれませんの、そして時々は非道い事を云ひますの、四五日前にも珍らしく尾山神社へ行かうと申しますから、あの澤山の石段をお上りなさるのは不可ますまい、と止めますと、何好からうがわるからうが汝の知つた事ぢやないと申してずんずん出てしまふんですもの、何故あんなに情ないことを云ふのかと悲しくなつて自分の室へはいつて机の前へ、ぺたりと座つて見ましたが、あの石段が心がゝりで、私も續いて出ましたの、お宮の前まで來て見ますと、もう姿が見えませんの、いそいで境内に來て見廻しますと、例の四高の運動場を見おろす小さな山ね、あの山に居るんでせう、驅ける樣にして其處へ參りますと、いきなり、何しに來たっと云んふです もの、私、お疲れ遊ばして又お氣分がおわるくなりはしないかと心配で出て參りましたの、と申しますと、何も汝などに心配して貰はなくつて可い、と申しますから、貴郎私に何かお氣に入らない事が御座んすの？

ございましたら何程でも有仰つて下さい、私お心にかなふ迄お詫もいたしませうし謹みもいたしますから、と云ひますと、フンお氣に入らない事ばかりだよ、いやだつたら實家へ行くが好いぢやないか、と云たきりぷいと石から腰あげて、すた〳〵行つてしまふのでせう。私追ひ縋つてと存じましたが、四高の生徒が五六人來ましたので、左の道から下りてまるで無意識に宅へ歸りましたの。暫くすると夫も戻つて參りましたが自分の室へはいつたきり寢てしまつて、いくら起してもおきませんの。それから今日迄一つ家に在りながら何一つ話し合ひませんの。これもみんな私の到らないからだと思へば、自分の身の恨めしくまた殘念で仕方ありませんのよ。全く私何うしたら好いんでせう。貴女だからこんな話も打ちあけてするのですがおさつし下さいK樣。こんな事にならうとは神ならぬ身の知るによしなく、浮世とはいへどまこと世はまゝならぬものです。宿世定まる縁なら、たゞ拙かりし假の世の神のなすがまゝと、我からむりにあきらめて、やがては夫の心の和ぐ其日も。と、はかない月日を送つてゐます。K樣、お察し下さい、みなさけ厚い貴女と信じて、こんな愚痴も申しますのよ、ほんとに貴女ばかりよ、級友はどんな事を云つて居らしつて?、折々はきかせて下さいな。

K樣、何卒、はかなき妹とも思つて下さつたら行末ながくお見捨てなく雁の便をお願ひしますわ。これのみがお願ひよ、みすてずにね、ほんとにお願ひしますわ。お目にかゝつていろ〳〵とお話もいたし度ですが、今日此頃の梅雨に泥つた道のわるさ。今少し日和よくなれば又お邪魔にあがりますわ。御免下さいね、面白くない事ばかりおきかせして。

では時節柄おからだおいとひ遊ばして下さい。してお母樣、お兄樣によろしく何卒。

行きたい〳〵と思ふ一念

桃の花

「行きますわ、きつと〳〵行きますわ、夏迄にはね、誰が馬鹿らしい此樣田舎に居てくれたつて居りはしないわ、此夏にはきつと新橋で御目にかゝりませう」「えゝきつと入らつしやい、きつとね、待つてますわ」此樣云つて桂樣と棧橋で別れた、私は感覺を失ふ迄に熱して居た、體は汗でびつしよりになつて居た、眼も血走つて潤んだ、私は桂樣に別れるのが惜しくて泣き

はしない、桂樣の甲板に立つた雄々しい希望の光に滿ち〱た美しい瞳をみた時、私の胸には嫉妬羨望の念が湧いた、同年で同じ日の下に生れて父母に優しく送られて出て行く友を見た時、私の父母の餘りの無情に獨り涙が出た、「聞きはしない私を埋れ木にせうとする酷な父母の何處に服從の義務がある」此樣思つて何故か熱い涙がこぼれた。次第〱に、棧橋を遠ざかつて行く船の甲板に何時迄も〱立つて居る桂樣を見た時次第に冷靜になつて來た私の頭には「若い華やかな年を暗い地に葬らむとせる弱き子よ」と嘲笑つて居る樣で耐らなくなつた、其動きもしない立つた姿、振るハンカチさへ私には馬鹿にされてる樣に思はれた。然して「フッ」と聲に出して嘲笑つてみた、がそれが又人を嘲笑つてるのか自分を嘲笑つてるのか解らなかつた、馬鹿だ、自分は馬鹿なんだ。あゝいやな日、友は都へ自分は一人此淋しい土佐の荒野に。

夕飯も食べずに考へた、然して決心した、父樣に云つて見樣、聽かれうと、肯かれまいとかまやしない、赦されなかつたらそれ迄、私も亦最後の手段を取るのだ、何樣しても友等の上京を眺めて一人殘されるのは、何樣しても〱若い私には出來ない、夜、「父樣少しお願が御座いますが」と、恐る〱と云い度いが實は何とも無かつた、否ならば否で私にも考がある位に思つて父の横顏を見詰めて居た。「フンお願又東京行きかな、此樣田舍に居ても馬鹿が東京迄行つて一體何樣すると云ふのだ、それよりも田舍で教師でもして職業にありつく運動費の百圓も拵へてから上京さ、」冷やかに笑つて書いてる物から目も離さない、私は堅くなつて疊へ吸付いた樣にして居たが、其冷靜な顏をみるとたゞもう耐らなくなつて、プイと立上つた。ドン〱音して二階を馳上つて燈も付けず眞暗い部屋で机に倚つて泣いた、都會は此憧がれて居る哀な子のあるのも知らず華やかに笑ひ賑つて居るであらう、あゝ都よ、東京よ。

あゝ强烈な刺激の中に生きたい、自分よりも幾層倍も上段を歩いて居る、遙に仰ぐ樣な人の中に生きたい、私の周圍は皆私同等、或は以下だ、此樣中に居て何の得る處がある？心には嘲笑ながら互に煽て合うて、一日〱と馬鹿になつて行きよるではないか、眼はどんよりした色の黃色唇の厚い口の大きい粘液質の人等の中に居て、自分は一體何樣するのだらう、次第に彈力

の無い鈍い女になつてゆくのだ、あゝ觸れて眞赤な血の溢れる樣な友が欲しい。醉ふやうな事を云ふ人と語りたい、あゝK樣よ、都よ。

覺るとすぐ待ちかまへて居たと云ふ樣に「あゝ此樣しちやあ居られない」と、もうすぐ浮ぶ、そして體がキッとなる、ほんとにグッ〳〵しちやあ居られない、十八の日が一體何程ある？、遂々半年は平々凡々に過ぎたがせめて〳〵殘る半年だけは十八らしい若い華やかに賑やかな印象を殘したい、噫自分は此樣しちや居れない、行く〳〵行くのだ都へ、貯金の通帳のある處も知つて居る、實印のある處も。體が熱して胸は騒ぎ出た。都にはK樣が居る、戀しい〳〵K樣は都に働いて居られる、あゝ戀しい都よ。東京よ、K樣!!!

Mから端書が來た、文學談を聞かしてやらうとの事又雜誌の受讀位のものだらう、謹聽してれば可い氣になつて。隅へ小く「Yは實に不實なる人間に候、種々の惡き噂を聞申し候。」馬鹿らしい、Mはきつと Yと私と關係でもある位に思つてるだらう、さうたやすく捕へられる樣な女ではありません。誰もK樣の事は知らない、私は何だか其れを知らしてやりたい樣にも思ふ。

ね、K樣、十八といふ華やかな明るい生氣に滿ちた年は何時、あゝ何時再び廻つて來るでせう、それを其華やかな十八の年を濕つぽい此山間で暮すべき運命に捕へられた、此私の若い心をお察し下さいませ、弱い美しい生優しい友等は「神聖な田舍で教育事業とはお羨ましい、眞面目に成功なさい」と云つてくれます。もう此樣言葉は聞くのもつらい。せめてK樣だけはもつと〳〵強い御言葉を下さいませ、叱つて下さい。諷して下さい私の心の中を沸えくり返さす樣な御言葉を下さいませ。あゝ六月三日でした。暗い中に一つの行李と共に家を出て、車夫に堀詰ッ！と呶鳴られて初めて夢から覺めた樣に、愕然としたもんです外に印象はありません、まだ明け切らぬ町々の電氣の光が、薄白う夢の樣に不調和な色に照して居ました。

電車は伊野行と棧橋行と西東に並んで居ました、私はウロ〳〵と血眼になつて氣狂の樣に棧橋行の電車の箱を覗いて立つて居ました、頭はボーッと熱して一切無意識でした、此電車に足を掛け樣とした時、「伊野行は彼車ですよ、もう出ます、」前の車夫の聲に、それでもすご〳〵引き返しました、やがては都へと行くべき明き華やかな車を捨てゝ、寂しい田舍行の車に乘つた

のです。私にはなぜ、此樣馬鹿にした樣な辭令を灰にして棧橋行の電車に乘るだけの勇氣が無つたでせう、親も故郷も此若い前に何がいりませう、都には貴方も居つしやる、貴方が居つしやる、あゝ戀しいK樣!!。あゝ十八の運命は此處で極りました、何故彼の時棧橋行に乘なかつたらう、とそれを思つては、たゞもう死ぬのが幾程、優つて居ますでせう。右は都を戀ふる田舍少女の一寸手帳に記して置いた物ですが、せめて之だけでも御覽下すつてお察し下さいませ、今の苦しい私の心は今暫く御待ち下さいませ。何れ申上ませう。

擂鉢の底のやうな土地より華やかなる生活を慕ふ

上田けん

犇と打ち並んだ山々が、幾重にも續つて、宛然華やかな文明の色彩や、音響の、此村に浸入するのを塞き止めてゐる樣に思はれる。……何方を向いても山……此大きい擂鉢の底で、千人に足りない田舍者が、死灰の樣な生活を營んでゐるのです、巓で楕圓に劃られた空の色の、灰色の日が多いのも、私の心柄ばかりではありません。

　私が此村の小學校を卒て、此補習科へ通學つてゐます頃、……さうです……今から三年以前十七歲の時、學校へ東京から小西と稱ふ、若い唱歌の專科敎員が來ました、藝術家らしい蒼白い細面に、鼻は名工の刻んだ歐羅巴人の其れを見る樣で、優柔しい大きい眼に得ならぬ愛嬌は何時か、雜誌の口繪で見たバイロン酷似の容貌!! 都會仕立てのシックリと身に適ふた洋服、都會で鍛鍊された應接振り……若い男といへば、上部だけイヤに長くした頭髮を、額口へだらりと垂れ、卑猥なことを、女の前で臆面も無く言ふ土臭い村の若い衆を見馴れた私達は、丁度名も無い雜草の中に、一輪の、水際立つた百合の花を發見けた樣に、皆驚嘆と憧憬の眼を瞶りました。補習科へ來てゐる女達の中、突然小西さんに出遇つた時、ハッと顏を赤くする方が尠なくはありませんでした、音樂家に適合はしい、指の纖細くて美くしいこと……小西さんの前では、赤膨れの田舍女の手なんぞ耻かしくて出せやしない……學藝會や父兄會の時、其美くしい手で奏でられるオルガンの、人の感情をそゝる樣なメロデイが、幽寂な此村の空氣

を傳うて、恍惚となつて聽衆の耳へ溶け込んで行く時、若い女達は、まあ、どんなに心を掻き亂されたことでしたらう。

　翌年の夏、螢狩の歸りに私は小西さんから優しい言葉を受けました、其時私は此村第一の果報物だと思ひました。「余は御身を愛す」此一句を異性の口から聞いた時、其男の階級、風采とには沒交渉で、女は言ひ知れぬ誇と歡樂を感ずるのです、殊に戀しいと思つてゐる男の口から、數多い競爭者の中から拔きんでられて、愛の告白を受けたのですもの。

　其夜から、私の心はもう、小西さんの所有でした。そして男の甘い言葉に醉ふた私の胸には、始終歡樂の波が打ち騷いでゐました。併し此歡樂は儚い、眞に儚い、一時の夢に過ぎなかつたのです。

　私は此村でこそ優秀れた容色の一人でしたが、都會の女を見馴れたる小西さんの眼には、巧妙な園藝家の手に成つた花壇の菊の前に、力なく咲いた野菊の樣なまことに見すぼらしいものであつたのでしよう。

　で、小西さんは、私には無斷で……勿論、其れに對して不平がましい事を言ふ權利は、私には無いのですけれどもう……去年の年末、都會へ歸つてお終ひになりました。聞けば彼地に、兼て言ひ交した方があつて、其方が女學校を卒業なすたからださうです。心にもない戀の甘い囁やきに、單純な乙女の心に、散々物を思はせた罪深い仕打ちよ、と、一時は沸き返る樣であつた胸の悩みも、偉大なる時の力は、何時の間にやら打ち消して終つた、今日此頃は一途に都會生活に憧れてゐます……。浮薄だとは思ひながらも、一度觸れた都會人の優しさ、床しさは、土臭い田舍男の比ではありません………。

「私は何故こんな田舍に生れたのでしよう？

灰色の空、打ち續つた山。……都會の人達は稀の休暇か何かに、繁劇な市街を見てゐた眼で見るから、其處に變化があり、單調が破れて好いので、「此んな處に住んで見たい」なぞと仰やるのですが、明け暮れ同じ山、同じ森、同じ人を見て、同じことを繰り返して、何の面白いことがありましようぞ、四季に景趣が變るといつても、色彩に少し變化があるばかり、それは、もう、些少いなもの、走馬燈の樣に、日毎變化のある都會には及びもないことです、此村の無興い證據には、都會から來る人達が「美しい自然」などと言つて喜ぶのは束の間で、三日目の晩には、もう、寂しさに堪へか

ねて行李を括つてゐます。
どうせ何時かは、冷たい闇黒い墓の下に、朽ち埋もれて終はなければならぬ人の身、緑の黒髪や男を魅する雪の肌は、決して永久の誇ではないのです、二十五歳後の女の容色は、もう、男の心を動かし、牽きつける上に何等の權威もありません、十六七から二十四歳まで、此短かい女盛りを……華やかな都會で、興じ暮してこそ榮ある可き人生の春を……日毎、文明の華やかさから遠ざかつて行く、此單調な草深い田舍で、土臭い人達に圍繞されて、暮らして終ふのは實に堪へ難い苦痛です……私は生存ながら葬られる樣に思ひます。
併し、私の親達は、祖先傳來の土地を賣り拂つて、都會生活に移る樣な人ではなし、私獨り親を捨て家を捨てて都會へ飛び出して見たところが、生活費の出處が無ければ又親の許へ歸つて來なければならないのでしよう……。
あゝ、胸がイラ〳〵するッ……
都會よ、都會よ、霞の朝、木枯しの夕、こんな切ない憧れを抱いて、私は……此摺鉢の底で生涯、老い朽ちて終はなければならない運命なのでしようか。

嚴格に過ぎたる家庭

白露子

私は告白します、日頃の不平を、嚴格なる家庭に生活しつゝある私は、如何に自由と云ふことにあこがれて居るでせうか、束縛と云ふことに如何に悶えて居るでせうか？、皆樣何卒聞いて下さい、一體私の父は昔人間で極々の嚴格な性であります「何故お父樣はこんなに嚴格なんだらう、も少しは自由の行動をあたへて下さつてもよささうなもの」と不平の涙に人知れず、袖をしぼりました事は幾度あるでせう。
私の父も丁度其祖母の樣です、例へば、あまり退屈ですから、門に出て四方八方の景色など見てゐますと、「女が何と云ふことか、ブラ〳〵して……早く仕事をしなさい」としかるのですもの、何と云ふ喧ましいお父樣だらう、折角野や山の自然の風景を見て、退屈をまぎらさうとしてるのに、と心ではさけんでも口では「はい」と答へて、座について仕事をするのです。
又、今日は何處の緣日で賑やつてるさうだとか、今夜は何座で活動寫眞があるさうだから、見に行きたいとか云ひましたら「若い女がさう何處へでも行きたがる

ものではない、女は女らしくしてゐなさい」と直樣お目玉頂戴、或は從兄が遊びに來ましてお話しどもしてゐますと「お前は仕事はないのか、あるなら早くしなさい」と云ふのですよ、そして從兄が歸りました後で若い女が男とお話しするとは不都合だ、若し人が見て變と思はれたら何うする、たとへ親族の者でも他人は知らないから「昔から男女七歲にして席を同じうせずとある」以後は決してお話しなどすることは出來ない、としかるのですよ、それも他人とでも親しげに話しするのなら、やかましく云はれたつて仕方はありませんけれど、從兄ぢやありませんか、從兄とたとへ親しく話したつて何うありませう、人は關係を知らなかつたつていゝぢやありませんか、又男女七歲にして席を同じうせずとは昔の事です、この二十世紀の世の中に、そんな世間せまい事を云つてごらんなさい、途中で親類の男の人に會つてもお話しすることも出來ません、皆樣だつて若い男の方とお話しをなさらぬと云ふことがありますまい、又物見遊山に行きたいとお思ひなさらぬ方もありますまい、斯う思ふのは若き女の通例だと、私は思ひます、よく女子文壇などで見ますが、お從兄さん方とわやく半分にせりあつたり、或はお友達連で今日は何處に遊びに行たとか、誰さんを訪問したとか仰しやるところを、如何に羨やましく拜見するでせう、私などはとても〱如何に久しく逢はない友達だつて、自分から訪問するどころか、ものの二三丁もはなれた友の宅にだつて、十日たつが一月經たうが、自分から尋ねると云ふことは決して出來ません。ですから手紙などで無事の通信を二三度もつゞけて致さうものなら、何して始終手紙のやりとりをする人だらう、さう女子がむやみに手紙の往復をするものではない」と小言をいはれます。

こんな風ですから從兄が遊びに來ましても、父の居る時は成丈話をせぬ樣にして居ります、友人から手紙が來ましても、なるたけかくす樣なくせになりました、いえこれは自然さうなるのですもの、又餘程の用事がありませねば、滅多に外出したことはありません、ですから自づと世事にうとくなりまして、何處に何事があるやら、足元の事すら知りません、從兄が遊びに來まして、何處には怎麽ことがありますね、と云ひますから、あらさうですかと云ひますと、所謂燈臺元暗しですね。とよく笑はれます。

又お湯に行きますにしても、お繼母樣、お湯に行て來

ていゝですか、と尋ねますと「え、お湯にですか……
……行つてらつしやればいゝぢやありませんか」と心の中では何うしてお湯に行く人だらう、と云はぬばかりの模樣がすぐ顏色に見えます、それも毎日行くのなら――ですけれど、さうぢやありません、隔日に行くのですが、兩親は何だか惡いところにでも行くかの樣に、快く承知してくれませんです、私は其顏色を見るのが、何よりつらくてなりませんので、三日でも四日でも行きません、もふやりきれなくなつて、お繼母樣……お湯に行ていゝですかと、朝から思ひ立つたことでも、午後になつてやつとのことで云ひ出す位ゐであります、いえ時には明日にしよう〳〵で又二三日も云ひ出しきらぬこともあります。

ことに甚だしいのは、先月でしたつけ、父が私を呼びますので、何事かと思つて行きましたら、「此度誰某を養子に貰ふやうに相談をしてをるから、さう思うてゐなさい」と云ふぢやありませんか、嗚――、其時の私の失望は什麼でしたらう、さながら死の宣告を受けた樣な心地がいたしました、おそらく顏色も變つてゐたでせう、私は泣きました、父を恨らんで――、あんまりではありませんか、いくら平凡な私でも二十五と云へば一人前の女ですもの、ことに新時代の空氣を吸うて來まして、青春の血にあこがれて居る私、いくらか理想も持つてゐますわ、如何に親だからつて萬事を束縛した上に壓制的に、服從させようとは無理ではありませんか、私は父に對する反抗心で、何卒此緣談が成功せぬ樣にと神樣に祈りました、あらお笑ひ下さいますなまつたくです、それですから希望通り不成功に終りました。

私はかく萬事を束縛され、壓制的にされまして、何して平氣で居られませう、たとへ表面には平氣を裝うてゐましても、心の不平は日一日と增すばかりであります、何うかして此嚴格なる束縛、壓制からのがれて一日も早く自由の世に出たいとあせつて居るのです、然しあせれば、あせるだけ束縛は嚴になるですから、實に〳〵不平でなりません、不平を云ふ私が無理でせうか、皆樣だつて斯萬事を束縛され、且つ壓制的にされたら、不自由を感ぜられると共に、必ず不平の心が起るでせう――、與謝野晶子先生は

「父兄が自分の娘や妹を信用しないのも甚だしいと思ひます。親が猜疑の目で娘を見ると云ふ程苛酷な事はありません」と云はれたではありませんか、私は

實に然うだと思ひます、私の親は猜疑の目で私の一擧一動を見てゐます。又、「父兄は娘の希望に反對しない方が思ひやりのある仕打でせう」とも云はれました、私の親は私の希望を一つとして聞き入れてはくれません實に嚴格否頑固の極です、皆樣昔の人は皆斯うなんでせうか？。

船中より身を投げんとして果さゞりし其後の私

汀　女

大學病院を出ましたのは去年の秋十一月でした、それも人樣のやうに全治退院なら嬉しいのですけれど、私のは醫者の手ばかりでは治らぬので轉地、殊に海濱がよいと先生が仰被られましたので、無理な退院致しまして、骸骨のやうに瘦せ衰へた身を俥に乘せて停車場へ參りました時などは、人の雜沓で眼が眩みさうで御座いました、美しい人やハイカラな人が澤山に居ますのに、人は皆私の蒼い顏や、瘦せた姿に視線を注ぐのですもの、悲しいやら情ないやうで隱れるやうにお父樣の蔭に許り腰を下して居りました。汽車の中は二等でしたから、私等父子の外に軍人將校が兩三名乘つて居りましたきりで嬉しう御座いました。病院を出る時、熱は三十八度程も有ましたけれど、何の事もなく大阪へ着ました、是から福良通ひの汽船に乘りました。處が——處が、餘り蒼い顏してるので船員が、診斷書が無ければと理屈がましい事を言ふので、父は當惑して居りました、病勞れて居りましても、口はきけるものですから私はそこを旨く切ぬけました。船は餘り大きくないので、私の乘つて居る一等室は、甲板上の船長室に續いて居りました、ですから室を出ると一眸千里の青海原、時は夜の十一時頃で御座いましたらう、空は黑い幕を下界に垂れ、シヨボ〳〵と時雨て來ましたので甲板上には私の外に人は居りません。ふと室内を覗いて見ましたら、父は晝の中のお心使ひにお勞れなさつたか、スヤ〳〵とよくお寢つてなさるので、靜かに扉を閉めて「お父樣御免」と双手を合はせて伏拜みました、そして今ぞそと身を投げ樣と致しました、すると俄かに後に人の跫音、驚いて何氣なく裝ほひ暗ながら其人を見ると、同鄉の人では有ませんか、私は顏をそむけましたが彼方は早くもそれと悟つて「あなた、みぎはさんでは有ませんか」、と聲かけられては默

つても居られず、オヤと驚いた態を見せましたら「雨が降つてるでは有ませんか、どうかなさつたのですか」「いえどうも致しませんけれど少し頭痛が致しますので」こんな事言つてる内「そこに居るのか」とお父様が出て參りましたので、止を得ず室内へは入りましたが、彼の男は父に何か告げてる樣な氣がしてなりませんでした。

淑子樣、なぜ私はこんなに死を急ぐかとお思ひ遊はすでせう、それはかうなのです、病院を出ます前に○○先生が、公衆の爲め公衆の爲めと被仰つて、私を嫌が應でも暗い寂しい室へ移さうとなさるのですもの、悲しくて悲しくて一晝夜を泣いて〳〵明しました。看護婦が深切に言つて呉ましたが、私の血を吐く思ひを慰めるに足ら無かつたです。いくら公衆の爲めと云つても、私はあんな獄屋のやうな絞首臺に乘るやうな事はいやだ〳〵と思ひましたから、是迄深切にして頂いた先生や、看護婦の仰せに背いて、泣いて〳〵病院の門を出る時の私の顏を鏡に寫したら、どんなに寂しかつたでせう。胸はどんなにか苦しう御座いましたか、それや是やを船中で夜の更け行くと共につく〴〵思ひ出されて、公衆の爲めならば何處の果迄行つたつて同じ事だから、餘り多くの人に排斥されぬ内死たい、嗚呼戀も望みも絶えはてた今、死ぬのは易い、只お父樣の老先見屆けもせず死ぬのは不孝では無いかとも思ひましたが、こんな體では長く活きる程餘計に御苦勞かける許りと思ひましたからなのです、あの時折角の覺悟を遂げ無かつた私は、その後此處の療養地に來て、美しき自然の山水、清き濱風に浴し、病も一日〳〵と癒え行き、今では健康時と少しも異りません程になりました。

淑子さん、小島でもあなどれませんよ、電信電話の便も御座いますし、冬は暖かく、夏は涼しく、其上お魚が澤山で、物價は安いから生活がしやすう御座います、殊に此處は一寸洒落た町で御座いまして、海濱の事ですから、是から夏になりますと、他地方から澤山海水浴に被入るさうで御座います。此夏は一度被入い、と申上たいですけれど私の現在は今尚寂しい思ひが絶えぬのです、自分にはもう何とも御座いませんのに、心のひがみか、此頃先生が聽診器のゴム管を少し長くなさつた樣に思はれ升の、何でもない樣な事乍ら私には又涙の種となるのです、此方へ轉地してから赤線以上熱の昇つた事は御座いませず、咳嗽も出なければ咯

痰も出ませんのに――でも矢つ張りあの笛音とか云ふのが聽診の際、先生のお耳に聞えるのでせうか、では二年でも三年でもこうしてお父樣と二人家族に離れて淋しう暮さねばならぬのだらうか、いやさうでない、二年三年の辛抱ならする、して治るならする、けれども五年十年も經つて治ら無かつたらどうしよう、その間のお父樣の御苦勞はどれ程だらう、それよりか早く死たい、彼の世には母樣も居る姉樣も居る、先年逝かれた友の榮樣や菊枝樣が被居る、あゝ私は死なう―と幾度も思ひますが父の監視がきびしいので、少しの隙も御座いませんの――

此間從兄弟が中央幼年を卒業致しましたので、父は叔父に代つて式に加はる爲め、東上致しましたの、そして序だから日光へも行つて來ると被仰るので、私もとお供を願つたが叶はず、只今は乳母と二人、雨の夜や風の晩などの淋しい時に、人事そしるより外に何も知らぬ乳母は、亡きお繼母樣が私にそつけなくなさつた事をそろ〳〵話しかけ升。其度に私は、死を急ぐ身ですから、世に亡き人の事をそしるな、此世にどんな罪惡を犯した人でも、既に佛となつた以上は何の罪、科、もない、まして私には養育の恩ある人なれば、今後夢にもそんな事は言つて吳るな、とたしなめて、そして筆子の小說の話、殊に戶田信一が自殺する迄の煩悶などを細密に話してやり升。

東上した父は未だ歸りません、兩三日前に茲の佗住ゐに花が咲きましたが、すぐ散つてしまひました、女はとかく虛榮な者と日頃兄樣が被仰るので父は私の心を慰める爲めでせう、不意に三越から書留で小包が二個舞込んで來ましたの、開いて見升と意氣な帶地が二本、單地が二反と、クリーム色のシルケツトのショールやら、色々とは入つて居りましたが、嬉しいと思つたのも瞬間で、すぐ又寂しい思ひが胸に滿ちて來るのです。で單地一反を姉樣に、ショールは妹に、私が亡くなつた後で紀念になる樣にと早速送りましたら、乳母はまあなぜです折角のお父樣のお志を、置てお置きになつたら丁度お祭に間に逢ひ升のに、と惜しさうに言ふも理と存じました。

然し青春の若き血汐は既に枯れはてて、色も香もうつろひ果てしまふた今、虛榮も何も御座いません。身を飾つて何しませう、紅白粉を何しませう、たとひ病は癒えましても、一度人に與へられた胸の痛傷は長久に癒ゆる時が有ませんから――



炎熱

越後 齋川幸子

○許されぬ日は蟲程の小さなるものにて泣かん御通路に

○胸の井のいのちのつるべ君來ては間なくひまなくあやつるうれひ

○御息はかほる朝風さと吹けば胸の小草はみなよみがへる

○新らしき天地をしもみいでつゝそこにあるごと二人相住む

○黒髪は人をば招くものなるか丈けゆくまゝに戀まさりゆく

○ぬれし目とほゝゑめる目とはたとあふこのひときのうつくしきかな

○夜は更けぬ血潮ながるゝあたゝかき枕をいまだ君は持て來ず

名古屋 原田琴子

○おごそかに神よん受けしての外に心を持たば君を思はむ

○わが心少しは人につれなかれかく思ひつゝ秋風を吸ふ

○神代よりもののあはれをしみぐと思ひつゞくや白百合の花

羽前 伊達まつ子

○すてしまゝすてられしまゝなげかひもなくかくてありてのさびしさよ

○世の常のをみなのごとく一人の君を守れるこのさびしさよ

○何事もなくおだやかにうつくしき少女となりて足らひぬわが世



はかりえぬ君が心を守り居るこのかなしさよこのさびしさよ

○

われもまた女なりけりあゝつひにさびしきものの一人なりけり

○　飛驒　眞砂子

戀すれば心あだかも七ッ子のそれにも似たるねたみ言いふ

○

身をてぞるこの熱き血をしづめむは神の力も少し足らざり

○

御命は乞ひまつらねど相共に死なば心の安からましを

○

善惡のそはともかくもくらがりを歩むに慣れしこのごろのわれ

○　府下　三ヶ島葭子

紅苺樺色苺くちびるに色でのみするわれならなくに

○

舞扇しづかにたゝむさまに似て夕ぐれしぼむ紅芙蓉かな

○　伊賀　山村龍子

君にあくあぢきなき日に逢はむさき生命にあきて我は死になむ

○

何となく面はづかしき心地しぬ此頃兄と街を歩みて

○

何時きゆるさだめは知らず戀心わくがまゝにも此日まで來し

○

我おろか神を忘れてさばきをば物いふ人にもとめむとしぬ

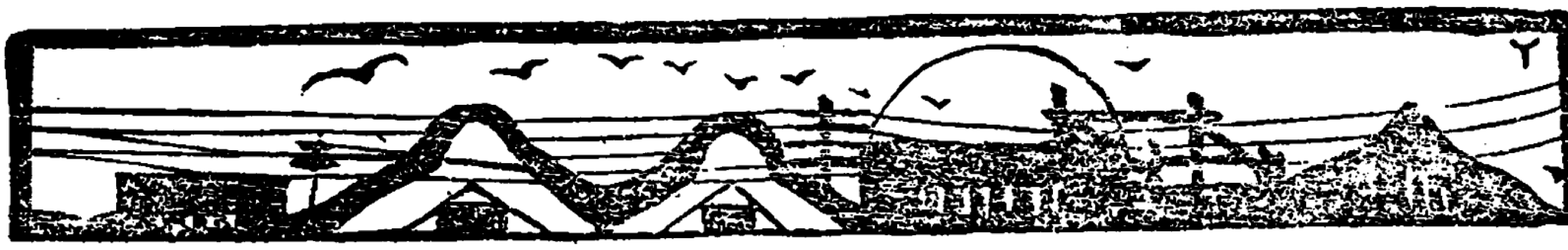
○

つくろはむ力もなくて此二人破れし戀をたゞに歎ける

○　麻布　美耶子

狂へりと思ひても猶すてかねて悶へける子よあはれなるかな

○



花の色も星の光も何かせむ若きにまさる誇なければ

○此若き誇りの永久に盡きざらば死を喚ぶ少女あらざらましを

大阪　春の日

○情知らぬ戀知らぬ子は北海の離れ小島に流すがよけれ

○淋しさや夕日うするゝ竹えんの端にまろびし卵の二つ

○ゆきずりにふと見かはしのこひながらつかの間ながら胸ふさがるゝ

大阪　福井まさで

○あせばみし額にかゝる黒かみのやゝ亂れしをよしとおもひぬ

○椅子にゐて物縫ふ君が白き頰を斜に見つゝひるねせしかな

○赤き絲水色の絲ひざに置きまりつくらゐしをとめなりしか

○見ざる日のむなしく歸るさびしさをおもひて今日も行きなやむかな

火の雫

丹波　ひかる子

○さびしき日只一たいにうす濁る海のほかには何物も見ず

○かなしみの消えゆくまでは霧こめし山にのぼりて泣かんと思ふ

飛驒　つゆ草

○かの男やみぬときけばしかすがにたひらかならず灰色の空

○わが運命うらなふ如く小さき石まろびてぞゆくくづれ山ざか

○燒山の石に雨ふる夕べなりむかしの人のそゞろ戀しき

和泉　金田代志子

○我は今夢より醒めぬ君をのみ思ひ居たりしうら若き日の

○愛も又戀も悶えもなべてみなうら若き日の僞なりき

○枝と枝青葉と青葉かさなりて君のこもれる家はかくれぬ

麻布　葉隱れ花

○むつかしく結びしみ口見まもりていかにとくべき謎としも知らず

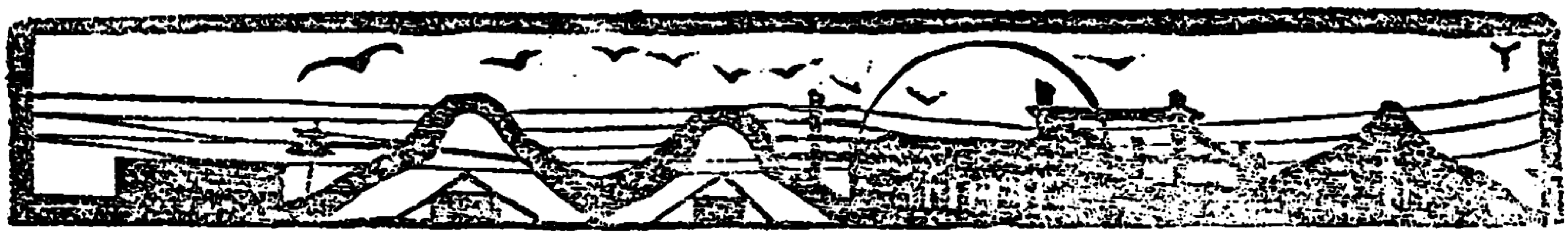
○處女てふ誇りのみ云ふ我とらへつや失せたりと憎きこと云ふ



○
あきたらぬ君の心よ君故に死なむ心も冷えむとすらむ
三重縣　ふみ子
○
わがむねに何のたねまき培はゞやさしきうたの芽をやふくべき
○
御寺に供養の日なりわれ召ずと御使來る二人の童
○
初夏や尾張より來し絹賣のかこち語りを聞く三人かな
岐阜市　蔦の葉
○
もの忘れようずる我も五百人の友の居住ひ皆知りてあり
○
小雨ふる宵なり今日は何事か物忘れせしさびしみのわく
丹後　伊志子
○
おだやかに鐘ひゞき來る梅雨晴れの夕月の野に黄なる花つむ
○
いと切になやみ疲れて寐し宵の夢うちやぶれなくほとゝぎす
石川　むらさき女
○
そばの花馬鈴薯などにまじりゐてさつきの空に白くさきいづ
○
豆のはな青き葉うらに悲しくもさきいでにけり照る日あざやか
○
白壁の土藏の裏に金鳳華まづしくさきぬ梅雨はじまる日
信濃　矢﨑俊子
○
まはり椽みがき柱に青々と水たるごと青葉うつりぬ
○
草花をそと髪の毛にさしやれば君はそのまゝ家へかへりぬ
○
驚きや君にすはれしいだかれし初めの夢の心の迷ひ
豐後　吉良靜子
○
つくしがた千鳥なく夜は扉によりてはてなき海を見るが悲しき
○
戀ふとにはあらねどなどか男の子らのつよき性をばえむとし思ふ

煉瓦のくづれ

○
強してふ男の子の誇とらへつゝ我はほこらんと思ふ日もあり
廣島市　紅花
○
若き日のありのすさびを君故に只一人にしさゝげけるかな
福島　木下春子
○
なにごとも思はずありしいにしへの日など思ひて戀手紙かく
○
小さなる悲しみ一つわきいでぬ夕となればなみだながれて
長野縣　原芳江
○
霧かはた小雨か知らずしめ〴〵と木草にみちぬ朝の淋しみ
○
石垣の壞えかゝりたる間より白き木の根のあらはれてゐぬ
屋根の草
○
五月雨や白き器にびはの實といちごは盛れど待つ人もなし
○
くりの花甘き香りの涼風とともに入り來る室に髮すく
伊豫　名なし草
○
包みたりし紙に殘れる新らしき呉服の香をばなほなつかしむ
○
美くしき女の家のすきまより若き男ののぞきては居ぬ
石川縣　葉末女
○
過去といふ懐しき日にけふも亦暮れて編まるるいかにせばよき
○
命をも捧げんと云ふ君達をともに容るるに我はかよわし
陸前　浮草子
○



忙しく衣縫ふゆびのそれよりも猶いそがしき君思ふ胸

○

たゞなはる青垣山の遠ち方の雪をかづける栗駒が嶽

○ 豐後 冬野花子

白く浮く參穗の畑とさ綠の林と心さまよひてある

○ 丹後 壺内文子

夜といふくらがりの世に安らひの胸を求むる哀れの少女

○

大いなる坂越えざれば郷里にゆき得ぬ里へ嫁ぎ來しかな

○

あまりにも安らかなりし日なる故君が心を足らなく思ひぬ

○ 日本橋 松岡千代子

夕つゝは君が瞳と思はれて心ゆく迄向ひてありぬ

○ 長野縣 玉川星子

わが眼西の雲みる君が眼はこの天地の中になに見る

○ 佐久 艮

甘かりし日などを思ひいたづらに愛子を抱きて晝の夢見ぬ

○ 土佐 五百藏はつ子

我胸の花は萎れぬ君と云ふ美しの蝶來ずなりてより

○ 京都 太田きみ

おぼろ月君が御ひざに額ふせて心行くまゝなきて見たけれ

○

わが願ひ小鳥となりて君が窓に啼かむ歌はむかつ隱れなむ

○ 常陸 古島花子

夕まぐれさびしき濱の砂の上に妹すゝめてお手玉をとる

○ 阿波 迷草

さりげなく眉筆おきてかよわくも吐息をつけば鏡くもれり

○ 會津 靜香

秘めおきし古るきうれひを思ひ出で新しき夜の月を仰ぎぬ

○ 長野 あや子

さりげなく語りつ笑みつさりげなく別れし胸のこのさびしさよ

○ 京都市 町田てるよ

風薫る都大路を畑の女の釣忍草召せ花菖蒲召せ

○ 常陸 木村那賀子

些かの悲しみに泣く十八の少女の胸を君はしらなく

○ 丹後 秋江

さめしひは柱にもたれ茫としてすぎしひの事くり返し見る

○ 京都 要司村福子

甘き言聞くたび胸の安からぬ我より外の人にも云ふやと

○ 靜岡縣 壽賀

世もすても家をも身をも君故に女の誇も皆すてはてむ

○ 奈良縣 中富よしみ

ほとゝぎす古城のあとの假小屋に都の人は泊りてありぬ

○ 長野縣 淺田千代子

君がため母をいつはる苦しさもなるれば安きことと思ひぬ

○ 和歌山 小谷清子

晝はひるはた夜るはよるたゞ君を思ひて我れはああ疲れたり

○ 伯耆 新田文子

我が戀と赤き花とを比べ見ればいづれいづれと定め難きかな

○ 熊本 青葉

二年を一人泣きたる我戀をかたる日もなく君は嫁ぎぬ

○ 山城 木の花

彼思ふ如くはたして我思ふ河原撫子咲くときはきぬ

○ 羽前 いそのや

しづやかに語り給ふがあきたらず男の子はつよくものをのたまへ

○ 京都市 目黒須美禮

君戀ひて泣きぬ雨の夜寐覺してねられぬまゝを文にしてけり

○ 福岡市 建部艮久子

女てふよわき名をもて生れ來しこのみ此髮うらみてなきぬ

○ 近江 鈴蘭

若き日よはた若人よ永久に華やかなれと神にいのらん

短夜や
眼たまはる
白拍子

盡日望雲心不繫　有時見月夜方閑

言葉多く
早瓜くるゝ
女かな

朝霧

吉田紫花

朝起きて何心なく窓の戸を開けた私は、早隣にお茶を沸す煙かと思つたら深い〳〵霧であつた好奇な心が動いて、直ぐ外へ出て見ると、此あたりでは珍らしい程の深い霧で、前の田の稲が僅に青く見えるだけで、空も山も家も木も何にも見えぬ。何にも見えぬ靜かな中をギイーと田に水を入れる音が遠方でしてゐる、霧!、霧、夏の朝には何といふ相應しい名のそして相應しい現象であらう、暫くこんな世界に居たい、夏の晝はあまり明かに物が見え過ぎる、此のもうろうとして向ふは何にも見えぬ霧の中が好い、こんな事を思ひ乍ら私は知らず〳〵の内に裏の野道を歩いてゐた、どこ迄行つたとて霧の深さは同じであるけれど、何故か向ふの方?、そう霧の奥といふ所が懐かしくて、そこへ行けば美しい花でも咲いてゐる様な、懐かしい人が待つてゐる様な氣がして、魅られた様に只霧の奥へ奥へ歩いていつの間にか山の麓まで來て了つた然しそこは矢つ張り霧の奥ではなかつた、そして體はもうしと〳〵としめつて居た。

白い山青い山

吉澤辰美

桑つむ手をやめて四方の山を眺めた、色々の形した、白い山と青い山がぐるりと南信の地をかこんで居る、雪多き故常に白き兎のをると云ふ八伏山も、もう青色して東の方には白い山が見えない、八伏より少し北に一きは高く青い山が誇腰と烏帽子山だ。西方に富士の形した青い山が有明山、裾には今なほ、古き猿が住むと聞く、有明山の左右には多くの名知らぬ白い山がつらなつて居るけれどいづれも灰色の雪のために其峰をかくされて居る。高い松の上に一きは白いのが乗鞍山、一番近く見えるのが城山、城山につゞいて幾つかの小さな山、あの山こえて向うは北信の地、なつかしい北信の山。

山の香

あらゝぎ

山は日が陰つてゐた。強い勾配は一面に灌木が若葉して、眞赤な燃えるやうな山つゝじがそこゝに咲いてゐる。その灌木の隙間を縫ひ、つゝじを縫うて、下の方にゐる妹や他の人達の白い手拭を彼ぶつた姿が餘りに小さく思はれて見える。先刻から隣の山あたりで鶯が鳴いてゐるが、蕨をみつけては折りながらまた鳴く、その間がもどかしいやうで。

眼の下には新緑の市街が、あざやかな日光を受けて長く横たはつてゐる。ひし〳〵と隙もなく家が詰めて白堊がちら〳〵目を射る、ところどころに杉のかたまりが立つてゐる、なかでも一際長い列をなしてゐるのはお鹽屋の森である。あの森のかげの家まで、これから歸つてゆくのである。

背には蕨の包みを負つて、躑躅の花を手に、山を下りかけると、かたへの、闇い杉林のなかで、梟の聲が寂しく聞えた。

灯

川岸てる子

淡い夕月の光が溶ける様に湖上を流れて、葭の葉や蒲の穂にザッザッと嵐が渡る、私は白い砂の上を歩きながら物を思つた、草履を透して砂の冷たさが心地よう足の裏に泌みてくる。遙か遠い岸に赤い灯が三つ並んで低く點つて居る、日が暮れると共に三つながら寂しく點るのだが、嵐の音が途絶えて葭切が夜更けを告げて啼く頃となると右の灯から順々に消えて行く、左の灯が消える時はもう東雲にほんのりと明の色が動いて居る、私はいつも彼の赤い灯を眺め

ると何となく懷しくなる、然し未だ何の灯であるのか知らない。

月夜

篠原繁子

雨はすつくりと晴れ渡つた夜である、みづ〳〵しい大空には幾萬と輝く星の中に、只一つ十六夜の月が我物顏に誇つて居る、しつとりと濕れた身に月光をあびながら庭木は皆のび〳〵と息を吐いて居る、枝と枝との間にかゝる大きな蜘蛛の巣には、一面に白露をやどして居る、美しい、すかして見る、白絽の幕を張つて居る樣だ、そよりと風が來た、ほろ〳〵と葉毎から雫が落ちた、螢籠のわきに三つ並んで下るしのぶも與ありげに搖れた、私の心も自然と搖れた、月は依然として照つて居る。

夕立

中島鈴子

大空は低うなつて、古綿をチ切つた樣な灰色の雲が一所になつて、はげしう東北の空へ動いて行く。

急に四邊は暗くなつた、東山だけはハツキリ近ふ見える。

白い煙の樣な雲が、山にかゝると、ポツリ、ポツリと大きな雨が數へる樣に降て來る、とスーと圓形をして消える、一時にざつと降つて來ると東山は見えなくなつた。道には河の樣に水が流れる。ピカッと光つた、室の一方に一線を畫いて、鮮かに。

天然の蝶

金田代志子

青嵐の涼しい夏の日、古釣瓶の濡縄床しき井戸端に優しく咲けるかきつばたを眺めて居ると、何處からか一匹の胡蝶が飛んで來た。柳の若芽の樣な、緑水晶の樣に透明た羽の、小さな優しい、名も知らぬ蝶が、私の胸の處へ――。何處から來たのだらう？と思つて彼方此方と見廻した。すゝけた草屋根、蒸熱い壁、青いのが少ない泥田、只小川の岸の若柳と、遠くに見ゆる濃緑の森と、――然し其處でも、こんな美しい蝶が生れまい。きつと夏姫樣が、彼の清水湧き出づる晝の森と、月景涼しい夜の磯に、天然の力を與へて涼風と共に生きさせ給ひし者であらうと、私は早速喜んで螢籠の中へ入れた。そして何か名を付けようと思案の上、柳の若芽の樣な、羽の涼しさうに透明つた、而も夏姫樣が天然に生ませ給ひし蝶なればと名ふだに墨も黑黑『夏蝶』と書き染めた。――然して永遠に私が此を忘れぬ爲に、雅號を『夏蝶』と呼ぶ事にした。

垣根の外

木村那賀子

小說に飽いて障子を開けた。陰欝な五月雨は相變らず、しと〳〵と靜かに降つておる。眞珠の如うな雫が、繁り合つてる緑葉の上を、ツルリと辷つては落ち、辷つては落ちしておる。若葉の香りをまぜた柔かい風が流れ込む。黑塀にそうた新築最中の高い土藏の上屋根の土樋から落ちる雨だれが、自然の音樂を奏しておる。眞ン向ふの杉の生垣の傍を人が通る。女か、男か、と思つて伸び上つて見たけれど見えぬ。机の上へのつて見た。お納戸色蛇の目傘を七分ざしに、黑襦子と、白地の友禪模樣の晝夜帶を、お下げに引きかけただけ見えた、と思ふ間に、お隣りの青桐の大木に隱れた。直ぐ後から學生が二人行く、中學の章のついた學帽、紺絣りの單衣、黑の兵古帶後ろで結むで、シブ蛇の目を相傘『彼奴かえ……馬鹿ッ……戀かえ……熱烈さ……レタ……スタイル……うわは……うわは……チエースト』太い錆びた聲、忽ち例の大木に姿と聲と一緒に消えた。後は又淋しくなつた、雨の音、雨の風、袖が濕るやうに思はれたので、障子を締めた、さても雨はいつ霽れるのであらう。

朝霧や
杭打つ音
丁々たり

故郷有母秋風涙　旅館無人暮雨魂

四五人に
月落ちかゝる
踊かな

雜録

槍ケ岳の下より

昨日松本發、島々に一泊、本日上高地温泉にまゐり候、明日槍ケ岳を再び登りて、北アルプスを北へ〳〵と縦走、飛驒高山に出づべく候（七月二十五日、信州南安曇郡上高地温泉にて小島烏水）

松島より

東北地方をめぐり居り候、夏の旅はいやなものに候（七月二十七日、松島にて、大下藤次郎）

富士より

けふは斯ういふスタイルにて二合二勺まで、それより徒歩にて只今五合五勺に着、綿入に羽織にて慄え居り候、海見え、山見え、雲見え、天見ゆる山、但し足の下に候（七月二十九日、富士山七合五勺にて、山田くに子）

其二

先生、たゞぼうぜんと此峰に立つて居るのがなげかはしう御座います（七月三十日、富士山頂上にて、山田くに子）

○有珠山の噴火　北海道膽振國有珠山は七月中旬より鳴動數百回、煙を吐き、火を噴き、砂を噴き、大活動をつゞけてゐる、大森博士は出張踏査をした、此上の大爆發はなからうと云ふことである。

○この花會の富士登山　女子の富士登山團體たるこの花會では、前月二十九日東京出發、無事富士登山の目的を果した、同行者約二十名、山田[illegible]子も其一行に加つた、因に云ふ、女子商業の生徒數名も前月富士に登山した。

○朝顏の花　入谷、向島と東京の朝顏園に年々に增加して來る、朝顏も田舍の朝顏と、都會の朝顏とは違ふ、やはり田舍の朝顏は神が作り、都會の朝顏は人が作るのであらう。田舍の朝顏は延びて次第に任せてあるが、都會の朝顏は延ばさないで、早く變り咲きの花でも咲かさうとして多くの人工を加へる。

○エンゼル香油　エンゼル香油は藥學博士田原良純氏を初め高山博士、三山博士、清浦子爵などが無害有効の證明を與へられたものです、何んな縮れ毛でも自然になほり、赤毛は次第に黒くなり、毛髪を潤澤ならしむ、新たに發明された專賣特許の香油ですから毛髪を愛する婦人方は試みて御覽なさい

編輯通信

『地方の婦人』批評を募る

都會の婦人の例に倣ひ、此の「地方の婦人」の批評を諸嬢に願ひます、都會の婦人から見ると又自ら異つた特色が表はれてゐます、原稿は二十四字詰、六十行内外、締切は本月三十一日、十月號の新論文欄に發表、天地人の三位に送賞いたします。

本號の賞に就いて

投稿全部を掲載したるものには、賞を送ります投稿の一部を拔萃したるものは賞なし、創作中の和歌は齋川幸子、原田琴子、伊達まつ子の三君に輕賞を送ります、小品文の中では吉田さんに差上ます、一等二等の區別をつけることは甚だ困難でもあり、今回の投稿は殊に優劣が少く略ぼ同じ位の作が多いやうですから、賞を都會の婦人の時に準じ、成るべく公平に送ります、九月下旬に發送します。

本年最終の増刊

次の増刊は「今の婦人」と決定いたしました、全體は「若き婦人」にならひます、一層新しい材料と、讀みごたへのある文章とが欲しいものです皆さんも一つ腕によりをかけて奮發して下さい、詳しいことは別項の廣告を御覽下さい。

誌友の寫眞

近來誌友の寫眞を送る方が少くなりましたが、口繪の一部は諸嬢の爲に割くことを惜まないのですから、御遠慮なく皆さんは送つて下さい、景色、風俗等の分は本欄にも多く挿入しますから、送つて下さい、乞返送とお書きの寫眞は凡てお返し申します。

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以内、散文は同字詰三十行以内、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以内、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る
▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）
▲甲種（短篇小說、散文）天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。
▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）天賞金貳圓。地賞金七拾錢。人賞金四拾錢。
▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。
◉各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具、日用具等凡て物品にて贈呈す。壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す
◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	…郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	前金四拾三錢五厘	…同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	前金八拾四錢	…同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	前金壹圓五拾六錢	…同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	…郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	前金三拾八錢	…同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	前金七拾二錢	…同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部――十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	…郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	前金壹圓二拾二錢	…同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	前金貳圓二拾八錢	…同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增、收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に
上等	一頁廿五圓	半頁……	比し無類の割安
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉強社

明治四十三年八月 八 日印刷
明治四十三年八月 十 日發行

本號に限り 定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本魁
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約大捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十三年八月八日印刷納本

女子文壇

第六年第十一號（八月十日第三増刊）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可